山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第139集

大　月　遺　跡

―県立都留高等学校体育館建設に伴う発掘調査―

1997．3

山梨県教育委員会

大　月　遺　跡

― 県立都留高等学校体育館建設に伴う発掘調査 ―

1997．3

山梨県教育委員会

序

本報告書は、県立都留高校体育館建設に先立ち、平成６年10月～平成７年１月にかけて発掘調査された大月市大月遺跡についてその成果をまとめたものであります。

大月遺跡は、郡内地域で最も有名な遺跡の一つであり、調査の歴史も古く大正年間にはすでに一部が発掘されております。その後、富士急行線路敷設や都留高校の校舎立て替えなどに伴って発掘調査が行われ、今回が第６次調査ということになります。

これまでの調査の結果、縄文時代中期後半の住居跡や平安時代の住居跡などが確認されていたことから、今回の調査でも同時期の住居跡の発見が予想されていました。今回の調査地点はすでにプールが建設されていたため、その際の撹乱の影響が懸念されておりましたが、調査の結果、予想を上回る11軒の住居跡が確認され、しかも６軒が敷石住居跡であるという成果が得られました。これらの敷石住居跡は、全面に石敷きを施した住居としては最古級に位置づけられるもので、しかも出土した土器は甲府盆地と関東地方のそれぞれの特徴をもったものが混在している実態が確認されました。また、これまで本県ではほとんど出土例のなかった北関東地方に分布の中心をもつ後期初頭の土器群がまとまって出土するなどの新知見も得られました。さらに、溝や柱穴列に囲まれた平安時代の掘立柱建物跡は公的色彩の強いものであり、古代の郷とのかかわりで注目されます。

本報告書が多くの方の研究資料としてご利用いただければ幸甚です。

末筆ながら、種々ご協力を賜った関係機関各位、ならびに直接調査に従事していただいた方々に厚く御礼申し上げます。

1997年３月

山梨県埋蔵文化財センター

所　長　大　塚　初　重

例　　言

1　本報告書は平成６年度に県立都留高校体育館建設に先立ち発掘調査された、大月市大月遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は山梨県教育委員会が実施した。

3　発掘調査および出土品の整理は山梨県埋蔵文化財センターで行い、長沢宏昌・笠原みゆきが担当した。

4　本報告書の編集は長沢・笠原が行い、第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅲ章第９節の遺物を笠原が、第Ⅲ章第３節～第９節の遺構・第10節～12節、第Ⅴ章を長沢が執筆した。また、微小種子について東京大学松谷暁子、大型炭化種子について名古屋大学渡辺誠の先生方に御執筆いただいた。なお、年代測定およびリン分析は(株)パリノサーヴェイに委託した。

5　写真撮影は遺構・遺物ともに長沢・笠原が行った。

6　本報告書にかかる出土品および記録図面、写真等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。

7　発掘調査および本報告書の作成に当たり、下記の方々のご協力を得た。記して謝意を表する次第である。

渡辺　誠（名古屋大学）

松谷暁子（東京大学総合研究博物館）

上杉　陽（都留文科大学）

杉本正文（大月市教育委員会）

福田正人（　同　　上　）

目　　次

第Ⅰ章　調査概要
第１節　調査に至る経過 …… 1
第２節　調査組織 …… 1

第Ⅱ章　遺跡概況
第１節　遺跡の位置 …… 2
第２節　地理的・歴史的環境 …… 2
第３節　大月遺跡研究史 …… 4
第４節　調査方法 …… 6
第５節　基本層序 …… 6

第Ⅲ章　遺構と遺物
第１節　住居跡と出土遺物 …… 7
第２節　土坑と出土遺物 …… 30
第３節　集石土坑と出土遺物 …… 30
第４節　配石と出土遺物 …… 38
第５節　単独埋甕 …… 50
第６節　Ｅ－17グリッド注口部特殊出土状況 …… 50
第７節　Ｉ－８グリッド黒曜石集中出土状況 …… 50
第８節　Ｊ－16グリッドドングリ集中遺構 …… 51
第９節　掘立柱建物跡・溝と出土遺物 …… 53
第10節　遺構外出土土器 …… 63
第11節　土製品 …… 81
第12節　遺構外出土石器 …… 86

第Ⅳ章　自然遺物の検討
第１節　大月遺跡から出土した炭化植物について …… 115
第２節　大月遺跡出土の堅果類 …… 118
第３節　大月遺跡出土堅果類の放射性炭素年代測定 …… 122
第４節　大月遺跡における自然科学分析 …… 124

第Ⅴ章　まとめ …… 127

挿　図　目　次

第１図　大月遺跡位置図
第２図　調査位置図･全体図
第３図　大正７年大月遺跡出土土器
第４図　１号住居跡
第５図　１号住居跡出土土器
第６図　２号住居跡
第７図　２号住居跡出土土器（その１）
第８図　２号住居跡出土土器（その２）
第９図　３号住居跡
第10図　３号住居跡出土土器
第11図　４号住居跡
第12図　４号住居跡出土土器
第13図　５号住居跡炉
第14図　５号住居跡出土土器
第15図　７号・10号住居跡
第16図　７号・10号住居跡炉
第17図　７号住居跡出土土器（その１）
第18図　７号住居跡出土土器（その２）
第19図　10号住居跡出土土器
第20図　８号住居跡炉
第21図　８号住居跡出土土器
第22図　９号住居跡
第23図　９号住居跡炉
第24図　９号住居跡出土土器（その１）
第25図　９号住居跡出土土器（その２）
第26図　11号住居跡
第27図　11号住居跡出土土器（その１）
第28図　11号住居跡出土土器（その２）
第29図　13号住居跡
第30図　13号住居跡出土土器
第31図　土坑（その１）
第32図　土坑（その２）
第33図　土坑（その３）
第34図　土坑（その４）
第35図　土坑出土土器（その１）
第36図　土坑出土土器（その２）
第37図　土坑出土器坑（その３）
第38図　土坑出土土器（その４）
第39図　１号集石土坑
第40図　２号集石土坑
第41図　１号・２号集石土坑出土土器
第42図　１号配石
第43図　１号配石出土土器
第44図　２号配石
第45図　２号配石出土土器
第46図　３号配石
第47図　３号配石出土土器
第48図　４号配石
第49図　４号配石出土土器
第50図　５号配石
第51図　５号配石出土土器
第52図　６号配石
第53図　６号配石出土土器
第54図　７号配石
第55図　７号配石出土土器
第56図　８号配石
第57図　８号配石出土土器
第58図　９号配石
第59図　９号配石出土土器
第60図　10号配石
第61図　10号配石出土土器
第62図　11号配石
第63図　11号配石出土土器
第64図　特殊配石
第65図　特殊配石出土土器
第66図　単独埋甕
第67図　単独埋甕土器
第68図　Ｅ－17グリッド注口部出土状況

第69図　Ｅ－17グリッド出土注口土器
第70図　Ｉ－８グリッド黒曜石集中状況
第71図　Ｉ－８グリッド出土黒曜石
第72図　Ｊ－16グリッドドングリ集中区
第73図　掘立柱建物跡・溝位置図
第74図　１号掘立柱建物跡
第75図　２号掘立柱建物跡
第76図　３号掘立柱建物跡
第77図　１号・２号溝・小ピット群
第78図　３号～６号溝
第79図　掘立柱建物跡・溝出土遺物（その１）
第80図　掘立柱建物跡・溝出土遺物（その２）
第81図　掘立柱建物跡・溝出土遺物（その３）
第82図　土器集中区接合図
第83図　遺構外出土土器（その１）
第84図　遺構外出土土器（その２）
第85図　遺構外出土土器（その３）
第86図　遺構外出土土器（その４）
第87図　遺構外出土土器（その５）
第88図　遺構外出土土器（その６）
第89図　遺構外出土土器（その７）
第90図　遺構外出土土器（その８）
第91図　遺構外出土土器（その９）
第92図　遺構外出土土器（その10）
第93図　遺構外出土土器（その11）
第94図　遺構外出土注口土器（その１）
第95図　遺構外出土注口土器（その２）
第96図　遺構外出土注口土器（その３）
第97図　ミニチュア土器
第98図　土製蓋
第99図　土偶
第100図　土製円盤・土錘
第101図　底部圧痕（その１）
第102図　底部圧痕（その２）
第103図　底部圧痕（その３）
第104図　打製石斧（その１）
第105図　打製石斧（その２）
第106図　打製石斧（その３）
第107図　打製石斧（その４）・石匙・スクレイパー
第108図　磨製石斧
第109図　石皿（その１）
第110図　石皿（その２）
第111図　磨石・凹石・敲き石（その１）
第112図　磨石・凹石・敲き石（その２）
第113図　磨石・凹石・敲き石（その３）
第114図　磨石・凹石・敲き石（その４）
第115図　磨石・凹石・敲き石（その５）
第116図　磨石・凹石・敲き石（その６）
第117図　磨石・凹石・敲き石（その７）
第118図　磨石・凹石・敲き石（その８）
第119図　多孔石（その１）
第120図　多孔石（その２）
第121図　石棒（その１）
第122図　石棒（その２）
第123図　石棒（その３）
第124図　石鏃（その１）
第125図　石鏃（その２）
第126図　ドリル
第127図　加工痕ある剥片
第128図　石錘
第129図　鉄石英
第130図　石製垂飾品
第131図　軽石・溶岩
第132図　ドングリ類長幅示数分布図

図　版　目　次

図版１　調査前風景　全景
図版２　１号住居跡　２号住居跡
図版３　７号・10号住居跡　９号住居跡　11号住居跡
図版４　13号住居跡　特殊配石　土坑　掘立柱建物跡
図版５　土器（１号・２号・４号・９号・11号住居跡）
図版６　土器（単独埋甕・42号土坑・配石・グリッド）
図版７　土器片　土製品　弥生土器　石器
図版８　石器
図版９　マメ類
図版10　マメ類
図版11　種子類
図版12　植物珪酸体および灰像の状況

表　目　次

表１　土坑一覧
表２　遺構外出土土器観察表
表３　ミニチュア土器観察表
表４　土製円盤・土器片錘観察表
表５　底部圧痕観察表
表６　石器観察表
表７　ドングリ類の分類
表８　ドングリ類計測値一覧
表９　放射性炭素年代測定結果
表10　大月遺跡のリン分析結果

第Ⅰ章　調査概要

第１節　調査に至る経緯

県立都留高等学校の体育館および野外プール老朽化に伴い改築工事が計画された。都留高校一帯は、古くから注目された周知の遺跡であり、度重なる校舎改築の際にも遺構・遺物が確認されている。遺跡の中心は現校舎部分と考えられていたが、その周辺に多くの構築物が立てられていたことから調査対象部分についての保存状態は悪いと思われていた。しかし、大月遺跡の縁辺部を明確にするためにも調査の必要が求められ、平成６年９月中旬～末まで試掘調査を行うことになった。その結果、プール下に入れたトレンチから敷石住居跡２軒と多くの遺物を発見し、平成６年10月～平成７年１月まで４カ月に渡って本調査を行った。

第２節　調査組織

調 査 主 体　山梨県教育委員会
調 査 機 関　山梨県埋蔵文化財センター
調査担当者　長沢宏昌　（副主査・文化財主事）
　　笠原みゆき（文化財主事）
調　査　員　小林安典　（前　都留市史編纂委員）
作　業　員　小俣吉広・志村恵子・天野昭次・田代源次・帯津まさ子・平井大三・今泉久・小林武・永田勤昭・杉田和信・佐藤あさ子・佐藤美須子・天野美津子・近藤みち子・堀内まき・田代久子・杉田イト江・鈴木八重子・田代光男・白川義明・中村九二・佐藤昌枝・和田末吉・今泉みつゑ・今泉諄挙・天野きみ子・吉村雄治・吉村公子・小俣孝子・石塚義弘・佐野洋介・佐野美津子
整理作業員　名取洋子・佐々木富士子・渡辺麗子・中込みち子・堀内まき

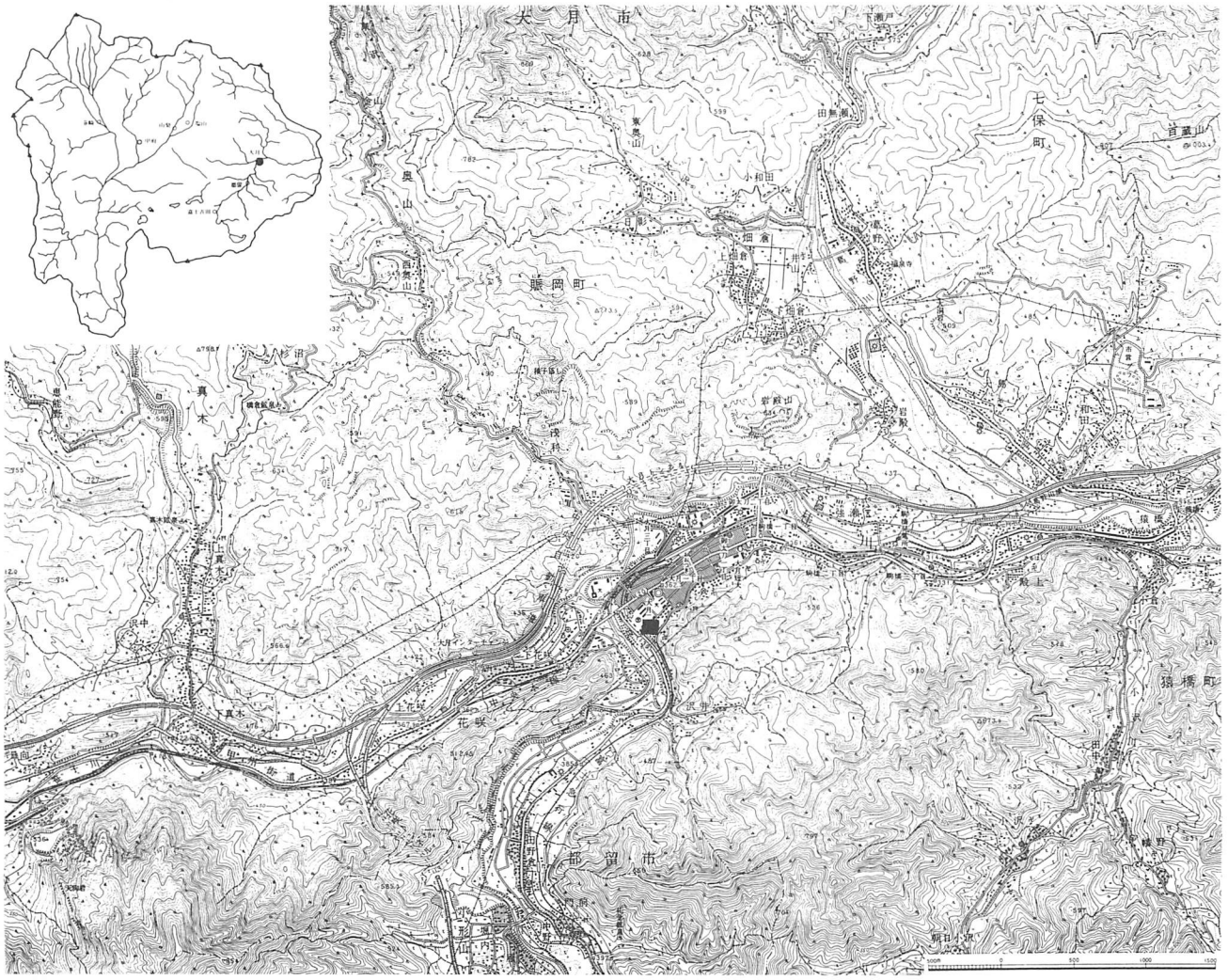
第Ⅱ章　遺跡概要

第１節　遺跡の位置

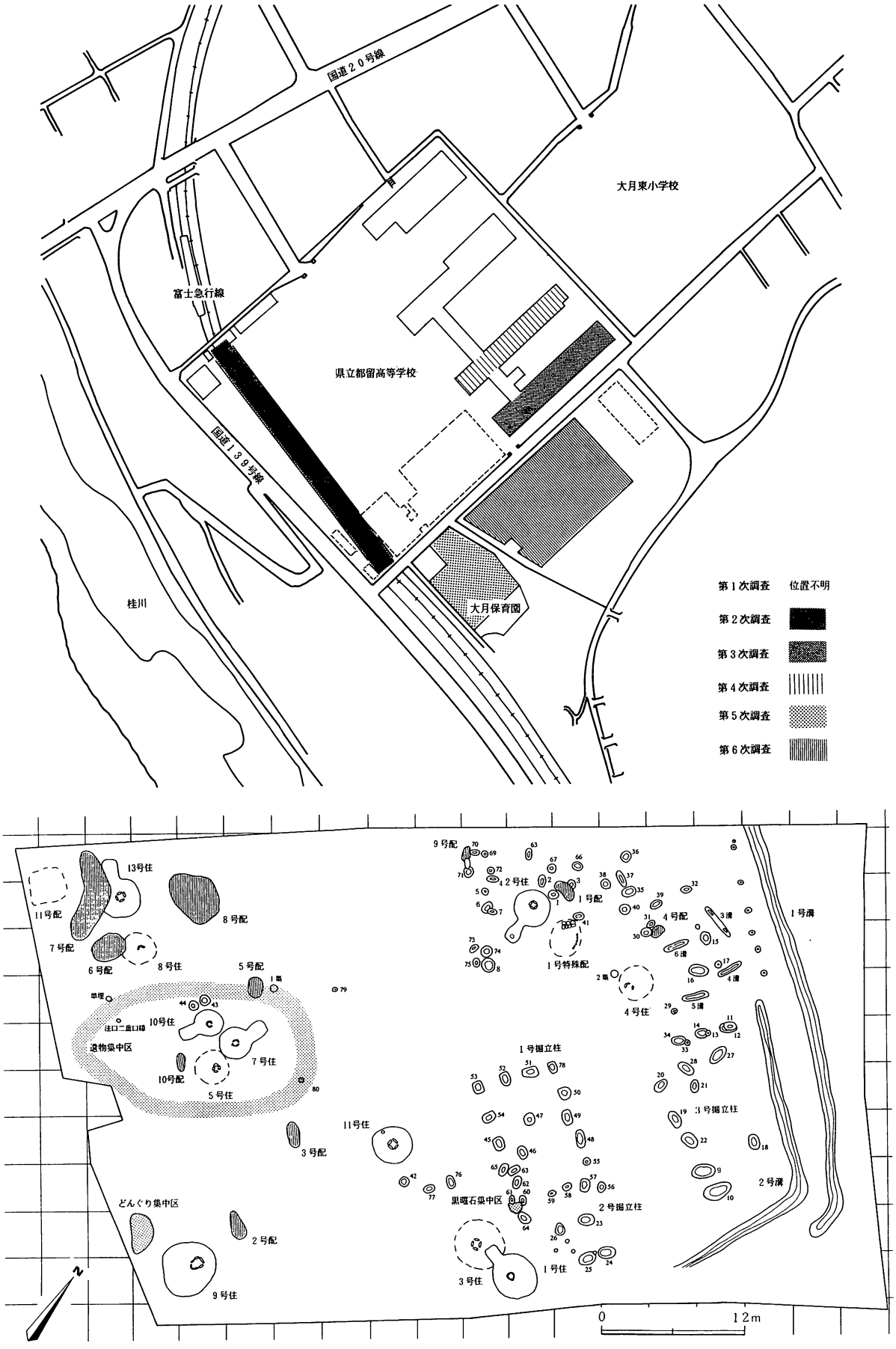
本遺跡は大月市大月２丁目11－20番地、現県立都留高等学校の敷地内に所在する。屋外の50ｍプールおよび更衣室、テニスコート・ハンドボールコート一部の跡地約3,200㎡の範囲を対象とし、現在では室内プールを有する体育館が建設されている。

第２節　地理的・歴史的環境

遺跡は、山梨県東部大月市の南西端に位置する。山梨県は御坂山塊と笹子峠を境に北西側を国中地域、南東側を群内地域と、その地域性により大きく二つに区分することが多い。大月市はその群内地域の中程にあたり、市域の70％が山林という地域である。その南辺には、山中湖を水源とする桂川が笹子峠から流れでる笹子川と合流し、下流の相模湖へ流れ込む。この時、相模川と名前を変えてさらに下流の相模湾へとそそいでいく。現在、人々の生活は、この河川の両側に発達したわずかな河岸段丘上で営まれている。遺跡分布図をみると遺跡



第１図　大月遺跡位置図

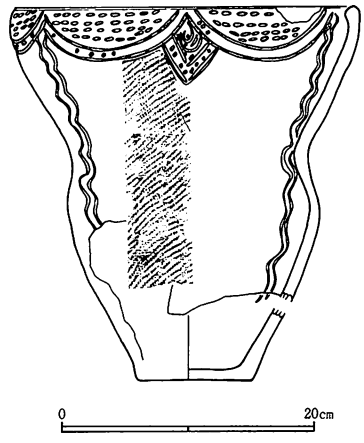


第２図　調査位置図・全体図

が点在するのもこの川の流域であった。このような平地が少ない地域性のなかで、ここ数年来、秋山村・都留市・大月市・上野原町域で山梨リニア実験線建設や中央自動車道改築工事に伴う発掘調査が行われている。特に、大月市内では国道20号線（大月バイパス）建設関連等により発掘件数が増加している。バイパス建設地東端に位置する御所遺跡からは、平安時代の住居跡や塗金が先端についた石器などが発見されて注目された。平成７年度、大月市教育委員会が作成した『埋蔵文化財包蔵地一覧表・分布図』を見ると、笹子川や桂川・その支流沿いに遺跡が多く、特に初狩駅周辺や笹子川に真木川が合流する付近、市の中心部、桂川右岸の南斜面などに確認されている。初狩駅周辺では、堰遺跡・上原遺跡・連野遺跡・外ガイド遺跡等が分布し、平成３年度に外ガイド遺跡が調査され、縄文時代早期の遺構や押型文土器や絡条体圧痕文土器などの遺物、さらに、平安時代の住居跡が確認されるなど、ほとんど調査されていなかった大月市西部域における貴重な資料を得ることになった。また、真木川との合流付近では、縄文時代早期～前期にかけての集落跡として知られている原平遺跡をはじめとして、孝道Ⅰ・Ⅱ遺跡・柴草遺跡など縄文時代の遺跡がある。市街の桂川右岸には、県指定史跡で中世の山城である岩殿城跡、さらに、市内で唯一石室と墳丘を残している子の神古墳等が存在している。さらに東部地域では、桂川の支流で葛野川流域や桂川右岸に遺跡が多い。なかでも、中央自動車道建設など度重なる分布調査がなされた宮谷遺跡では、Ｓ47年に農作業中の偶然な発見で、縄文時代中期末の住居跡が１軒調査され、現在では復元されて市指定史跡となっている。また、上野原町に隣接する梁川町では、平成７年度から当センターによって塩瀬下原遺跡が調査され、縄文時代中期末から後期の集落・祭祀遺構が発見され注目されている。この遺跡は、桂川左岸につくられており、調査例の少なかった地域での大きな発見であった。

第３節　研究史

遺跡の存在は古くから知られており研究者からも注目されていた。しかし、研究史として取り上げられるのは、明治34年の県立都留中学校（現　県立都留高校）建築時からであろう。工事で掘削をした際にたくさんの遺物が出土したらしいが、星野玄仲氏によって拾われた１つの石棒が知られるのみである。ここで伝えられた石棒は現在どうなっているのか所在はわかっていない。この時点での遺跡に対する当時の人々の認識はとても浅く、特に遺構に対しては何ら関心も示されなかった。その後、理化学教室を大正７年に構築した時にも、たくさんの縄文土器が発見された。そして、当時の職員から特に注目されたものが、旧帝大人類学教室（現　東京大学）に持ち込まれ、現在も東京大学に所蔵されている（第３図）。このような多くの遺物の発見は、考古学界から注目され、特に地元出身の仁科義男氏は本格的な発掘調査の必要性を指摘していた。そのような折り、昭和２年４月、当時の都留中学校長だった石塚末吉氏が、富士山の噴出物の研究を目的として校庭の一部を掘りおこした。富士の噴出物調査という目的ではあったが、この調査では土層の堆積状況や遺構の配置・遺物の出土状況などが記録され、仁科氏の詳細な報告がなされている。これを本遺跡の最初の発掘調査と見なしてよいであろう。この成果をうけて、昭和３年９月～10月の、富士山麓電鉄（現　富士急行線）の土木工事に伴った発掘調査が行われることになった。調査の指揮は仁科氏が行い、その範囲は、線路工事予定地の幅約10m、長さ50m、深さ２～７mで、校庭の西側に位置していた。現在でも、富士急行線の路線として利用されおり、およその調査地点を推定することができる。この時の報告についても、仁科氏が数回にわたって紙面に細かく掲載している。その後、発掘調査がおこなわれたのは昭和50年で、それ以降数回におよぶ校舎改築や大月バイパスの建設に伴って調査がおこなわれてきた。これらの調査の結果から、大月遺跡は縄文



第３図　大正７年大月遺跡出土土器

時代中期～後期、および奈良～平安時代にかけて形成された集落跡であり、以下、各調査ごとにその成果を記す。

第１次調査（昭和２年）では、富士の噴出物調査に便乗した遺跡の観察記録で、幅３ｍ・長さ数十ｍにおよぶ溝を東西に掘っている。仁科氏の記述によれば、桂川左岸の東側からＡＢＣＤと位置づけがされ、特に遺物の出土地点ＣＤについて「桂川断崖より東方七十三尺より八十尺・・」と説明している。２次調査の報告で、２つがグランドの南端で直交する図が掲載されているが、はっきりした位置は確定できない。調査の結果、遺構は無く、調査区西域で石器や縄文土器が発見された。なかでも３つの深鉢は完形に近く、11㎝程南北方向へ離れ逆位に置かれ、一つは底部穿孔であとの二つは重ね合わせてあった。出土の状態から土坑に二基の埋甕を配した土坑墓の様相を窺わせる。これらの遺物は県立都留高校に保管されている。

第２次調査（昭和３年）では、遺構が初めて確認・記載された。それは石囲い炉をもつ３基の住居跡で、１・２号住居跡の間には、大きめの礫数個を約１㎡に敷きつめた敷石（配石遺構）が確認され、その周辺には木炭の包含があった。３号住居跡は、２号住居跡より30ｍ余り離れていて、炉を中心に約６㎡に偏平な川原石や板状の安山岩による敷石が残り、南側が高く北側向かって傾斜している。炉はいずれも長方形又は略正方形に四方とも石で囲われたものである。遺物は、石器・土器とも多数出土しており、なかでも敷石住居の下部から高さ54㎝の深鉢が発見されている。遺物の所在に至っては文献に記載されていないため不明である。

第３次調査（昭和50年）では、現在都留高校の校舎南館建設部分の調査である。確認された遺構は縄文時代の住居跡２軒と遺物集中区１カ所、奈良時代の住居跡が２軒、土坑４基である。１号住居跡は隅丸方形の竪穴住居跡で周溝が２条巡っている。炉は方形の石囲い炉で、隣あった２個体の埋甕や柱穴の一部が重複していることから拡張された可能性がある。遺物は石器と縄文時代中期後半（加曽利Ｅ・曽利期）の土器が多く出土している。２号住居跡は、遺物と焼土が確認出来たのみあった。３・４号住居跡は隅丸方形で３号のみ周溝が巡る。北壁中央よりやや東寄りに竈を持ち、煙道も確認できている。遺物は、土師器・須恵器・鉄製品を出土している。

第４次調査（昭和52年）では、第３次に続く校舎改築工事に伴い、現校舎中館部分の調査がおこなわれた。遺構は、平安時代の竪穴住居跡２軒と溝１条、土坑１基である。１・２号住居跡とも平面は長方形を呈し北壁中央に竈が構築されている。１号住居跡のみ周溝が竈付近を除きほぼ全周して、東隅に貯蔵穴が設けられている。遺物は、１号住居跡から土師器長胴甕・胴張甕の２点が出土している。

第５次調査（平成元年）は、大月バイパス建設による大月保育園の移転改築に伴い大月市教育委員会によって調査されたもので、都留高校校庭と市道を挟んだ南側部分の調査を行っている。この結果、縄文時代後期の住居跡１軒・敷石住居跡１軒、平安時代の住居跡１軒と、配石遺構１基・土坑10基（縄文３・平安以降７）、環状遺構１基が確認されている。遺物は多数出土しているが、整理中のため内容は把握されていない。

第６次調査（平成６～７年・本調査）では、体育館老朽化に伴った改築工事のため調査をおこなった。第５次と市道を挟んだ東側で、都留高校のプールおよびテニスコート・ハンドボールコートの一部跡地が範囲である。調査の結果、縄文時代中期の住居跡１軒、敷石住居跡６軒、石囲い炉４基の合計11軒が発見された。この他、配石遺構が10基、磨石や小円礫を用いた特殊配石遺構が１基、集石２基、土坑５基、平安時代以降の溝状遺構２条、土坑75基（掘建て柱状建物址を含む）が確認されている。遺物は第Ⅲ章に詳細な記述がなされているためここでは省略するが、１・２号住居跡からは加曽利ＥⅣ式が、11号住居跡からは曽利Ⅴ式の埋甕が出土しており、縄文時代中期末の甲府盆地と関東地方との接点として遺跡の重要性が浮かんでくる。また、２号住居跡からは炭化した種子や獣骨などが発見され、当時の生活を考えるうえでも注目される。

このように、６次にも渡って調査がなされ、遺跡全体の性格・内容などが明らかにされつつある。これまでの発掘結果から、大月遺跡は、奈良・平安時代と縄文時代の中期から後期にかけて、２つの時代に形成された集落跡である。奈良・平安時代では都留高校敷地内の東側から、遺構が発見され、住居跡、掘建柱建物跡、溝、土坑など密度が濃く、その他の地域に遺構が少ないことから、この時代の遺跡の中心は、隣接する大月市立大

月東小学校へ広がることが予想される。また、縄文時代では、今回の調査区を中心に直径50mほどの範囲内に、中期から後期にかけての住居跡が10軒程確認されている。このことから、住居跡が７軒確認できた今回の調査区が遺跡の中心と考えられる。しかし、第２次調査での３軒の住居跡の記載から、グランド下にも遺構が存在する可能性も残されている。各調査で出土した遺物は、第１次調査以前の遺物は、一部が東京大学に保管され、第１・２次調査における出土遺物は都留高校に、第３・４・６次調査のものについては山梨県埋蔵文化財センターに、第５次調査については大月市教育委員会に保管されている。

第４節　調査方法

今回の調査は、県立都留高校体育館建設に伴う事前調査として行われたものであり、調査前は競技用の50mプールであった。プール及び更衣室・テニスコート・ハンドボールコートの一部等を含めた長軸約80m・短軸約40mの長方形の調査区の長軸に合わせて４×４mの方形に区画を設定した。北東から南西に向かって１２３....、北西から南東方向にＡＢＣ...、とふり各グリッドを目安に全面調査を行った。

第５節　基本層序

調査区域は、地表面から0.5～１m近く盛土がされ現校舎や道路から高い位置にあった。このため、遺構の残りが非常によい状態であった。周辺の地形は南から北にかけて傾斜していおり、南側は、山から流れ出たとみられる土砂が厚く堆積していた。校舎の立っている位置から40～50cmほど下げると、黒色土となり、この中から遺物が多く検出された。黒色土は深いところで70cm、浅いところで20cmほどで、この黒色土を取り除いた面から遺構が確認された。

第Ⅲ章　遺構と遺物

前章で触れたように、これまで行われた数回の調査で、縄文時代中期後葉、奈良・平安時代の住居跡などが確認されていたため、今回の調査でも同時期の遺構の存在が予想された。しかし、調査対象域はプールとして利用されていた訳で、プール建設による撹乱もまた予想されていたのであり遺構の残存状況には期待をもてる状況ではなかった。プールの解体作業段階から立ち会ったものの、並行して行った試掘調査での遺物出土状況からはすでにプールの底面に相当するレベルから遺物が出土し始めており、プール建設の基礎工事を考えるとかなり深い部分にまで掘削が及んでいると思われた。

このような状況でプールの解体作業が終了し、直ちにプール下の試掘を行ったが、幸いなことに包含層自体の厚さが予想よりも厚く、遺構自体への撹乱は予想ほどではなかった。元の地形は調査地背後（南側）の菊花山から桂川（西及び北側）に向かってかなりきつく傾斜しており、そのため当初行った試掘地域とプール跡地では最大30m程の距離しか離れていないにもかかわらず、遺構確認面の深さがかなり違うという状況であった。

調査の結果、縄文時代中期～後期に位置づけられる11軒の住居跡、12基の配石遺構、２基の集石土坑、40基程の土坑や後期のドングリ集中部分と、平安時代に位置づけられる３棟の掘立柱建物跡、それを囲む溝・柵列などの遺構が確認された。また遺物も予想以上に豊富で、とくに縄文時代の土器が多量に出土したが、なかでも後期初頭の称名寺式土器はこれまで県内ではあまり出土量が多くないものであったが、今回まとまって出土した。

以下に、遺構毎に記すこととするが、遺構図の後には帰属時期を明確にさせるため出土した土器の図面を続け、土器以外の石器や土製品などの遺物図面は後半にまとめることとする。また、遺物については本文中での図面番号を省略するためすべて通し番号とする。

第１節　住居跡と出土遺物

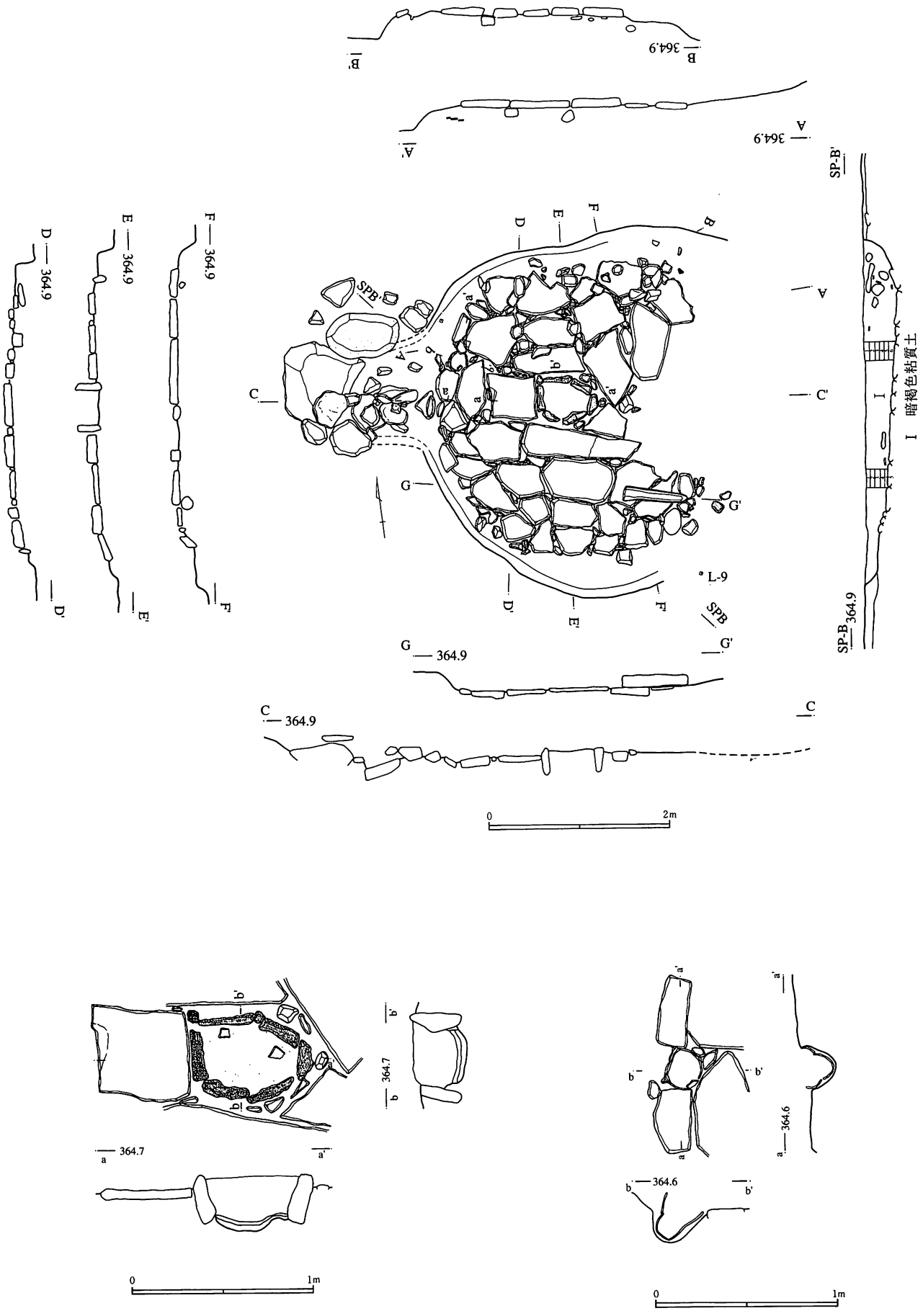
・１号住居跡

Ｊ・Ｋ－８・９グリッド。本住居跡は、試掘調査時に遺構確認面を確認する段階で重機による掘削が深すぎたために敷石の一部を剥ぎ取ったことにより確認されたもので、掘削位置は住居の奥壁部分に相当する。敷石の一部を廃土中に確認してすぐ掘削を中止しその廃土で遺物の有無を確認したが、遺物は含まれていなかった。

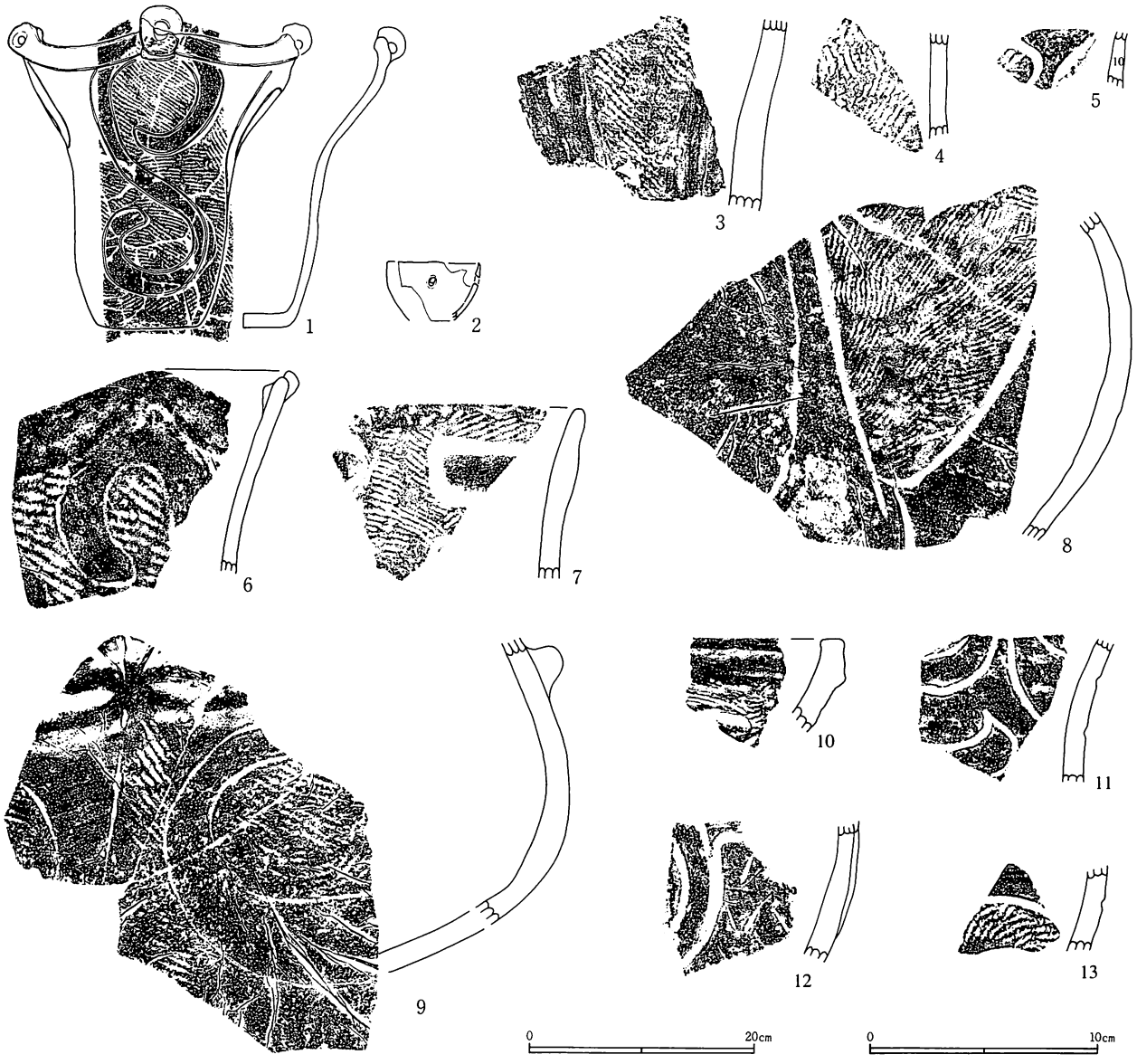
本住居跡は、当初は円形の住居跡と思われたが、敷石の並び（収束の方向性）と入り口部と思われる部分に石が散布していることから柄鏡形敷石住居跡であると判断し、その部分を拡張したところ数枚の平石が確認された。80㎝～100㎝大の自然礫２個を利用し、それに50㎝大の礫を組み合わせたものであろうが、残存状況は良くない。おそらく最も外側の自然礫を入り口の階段として利用したものと思われる。それからすると、入り口部は長さ1.5m、幅１m程度となる。主軸はほぼ東西で、入り口部は西向きである。

居住部は直径約3.8mの円形を呈すると推定される。敷石は炉を中心として六角形を呈し、住居の主軸上に角があたるよう配置されている。炉前方部に四角形の平石を置き、それを中心に左右に大型の平石（最大長さ130㎝、幅30㎝）を敷き、間隙には小石を埋め込んだ丁寧な作りである。各辺も直線を意識して作り出している。壁部分にはとくに石を張り付けた様子はない。居住部の内外ともに柱穴は全く確認されていない。

炉は、住居の主軸方向に長く、長方形にちかいが六角形を意図したものである。炉に用いられた礫はすべて熔岩である。前述したように、今回の調査域から西方約70mの地点で桂川の侵食による猿橋熔岩の大規模な露頭がみられる。その露頭には無数のクラックが入っており、現在も一部崩壊している。その中には板状の剥片も混ざっていることから、大きさの調整程度の加工をするだけで近場の住居に持ち込むことは、極めて容易であったと想像できる。もともと熱に強い石材であり、炉石としては最適であろう。内法で、長径50㎝、それに直交する短軸40㎝、深さ30㎝を計る。



第４図　１号住居跡

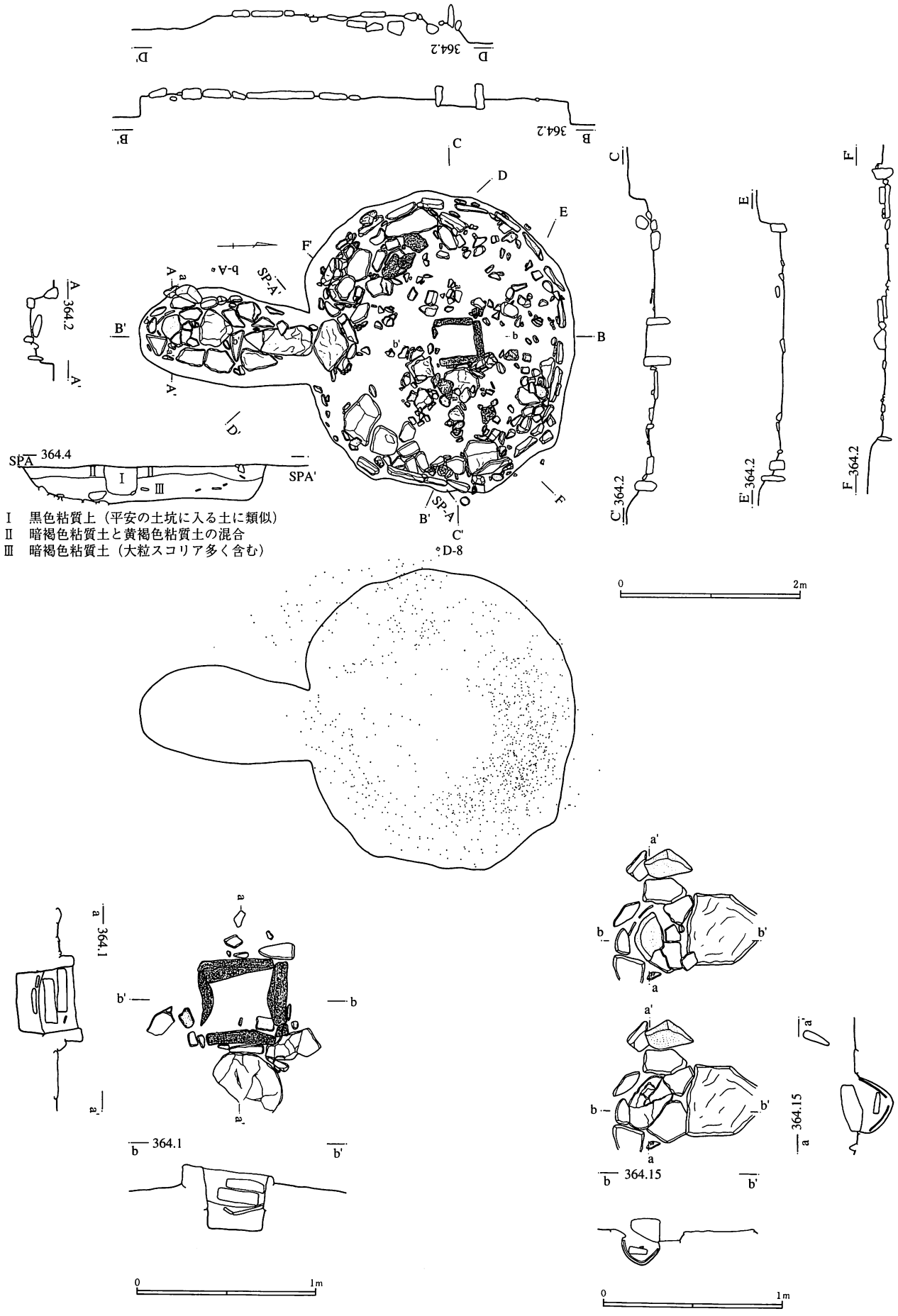


第５図　１号住居跡出土土器

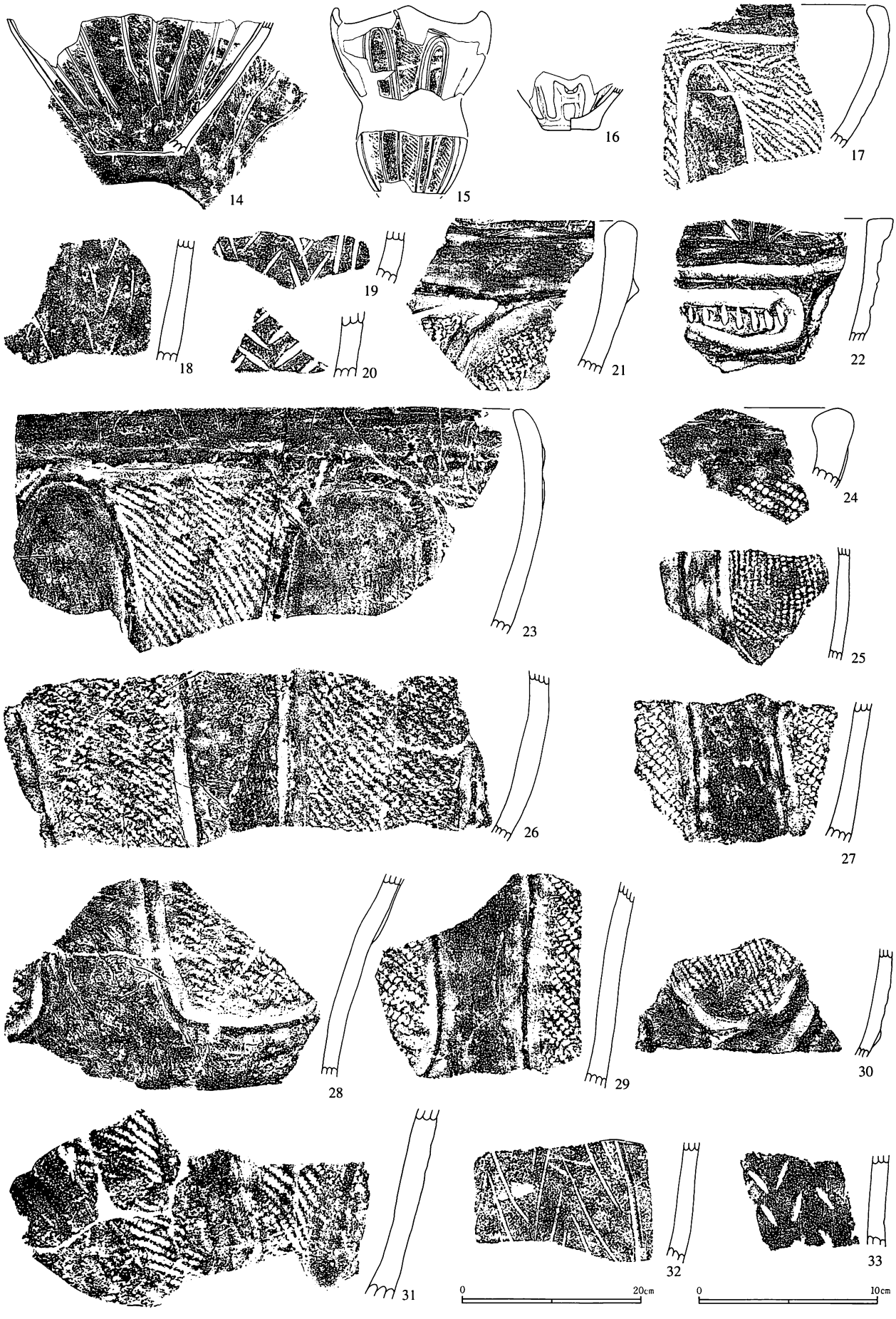
居住部の入り口寄りに埋甕が確認されている。主軸上ではなく北にずれているため、発見時には（住居の方向の問題もあって）小ピット内に正位で納められた完形土器と考え、埋甕とは認識しなかった。その後、主軸と入り口部分がはっきりたため周辺を精査したが埋甕は新たに発見できなかったため、これを埋甕と認識することとしたものである。しかし、通常の埋甕と違い口縁部が敷石面より上部に出ていたため敷石を追っていく段階から土器の存在は確認されていた。住居として機能している時点でもこの状況であったことになり、埋甕とすれば内部の空間を保持するために石蓋等が存在したことも想定する必要があると思われるが、その場合口縁部が一様に破損することが予想され、蓋を意識するのであれば、重量のないものを想定すべきであるかもしれない。

炉よりやや奥に石棒（1175）が倒れていた。長さ約70cm、太さ約10cm、重量約21kgの大型品で先端がやや細くなるよう均一に磨かれている。

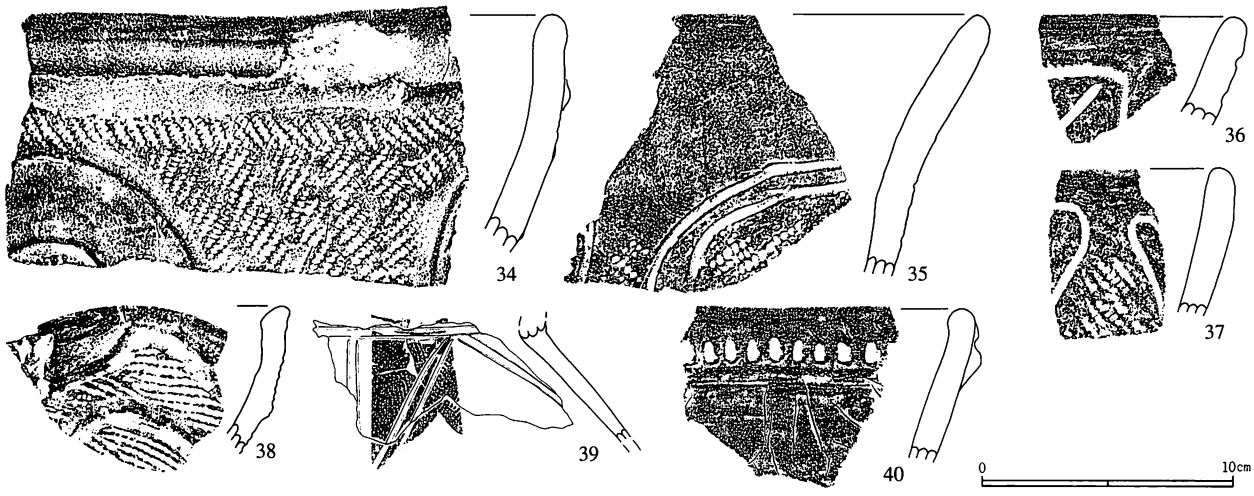
土器は少ない。１は埋甕である。口縁部に４単位の小突起を有する深鉢で、胴部には沈線によるＳ字状モチーフがみられる。２は覆土出土のミニチュア鉢で、口縁部下に小孔を有する。破片資料では、３～５が炉内出土で３は加曽利ＥⅣ式、５は称名寺Ⅰ式である。また、８は床面直上で加曽利ＥⅣ式である。図示したそのほかの資料はすべて覆土中からの出土であるが、６は１と同様のＳ字状モチーフ、７は帯縄文を有するものでともに称名寺Ⅰ式の古い段階に位置づけられる。11の剣先状弧線も同時期であろう。また、12のハの字などもみ


I　黒色粘質土（平安の土坑に入る土に類似）
II　暗褐色粘質土と黄褐色粘質土の混合
III　暗褐色粘質土（大粒スコリア多く含む）
SPA 364.4
SPA'
364.2
364.1
364.15
D-8
0
1m
2m

第６図　２号住居跡



第７図　２号住居跡出土土器（その１）



第８図　２号住居跡出土土器（その２）

られ、中期終末～後期初頭の資料が混ざっている。遺構の時期は称名寺Ⅰ式期の古段階とすることができようが、土器には確実に加曽利ＥⅣ式が混ざる。

石器では前述した石棒とは別の石棒（1176）のほか、磨石（1118）、石鏃（1199～1202）が、また石器ではないが熔岩（1324）が出土している。

・２号住居跡

Ｃ・Ｄ－８グリッド。本住居跡も柄鏡形敷石住居跡である。長軸4.9mを計る。入り口部の長さ1.9m、最大幅１m、最小幅0.8m、確認面からの深さ0.2mを計る。居住部は長軸方向３m、直交する幅3.3mを計る。

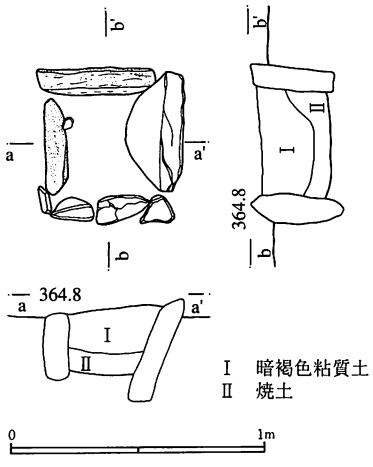
敷石は入り口部平石３枚を主軸方向に配置し、とくに１・２枚目の平石周辺に石を配し全体として長楕円形を呈する。３枚目の平石は居住部への連結部分で、この部分には他の石は置かれていない。居住部は、壁際に20cm～50cm大の平石を立てて、その近くに平石を配している。炉の付近には東～南辺にかけてわずかに敷石は存在するだけで、それ以外の部分には確認されない。柱穴は全く確認されなかった。

本住居跡でも埋甕が確認された。入り口部の最も外寄りに確認されたもので、埋甕上部には30cmちかい石が、あたかも蓋のように乗せられていた。土器は深鉢の胴下半部で底部も欠損しており、正位であった。

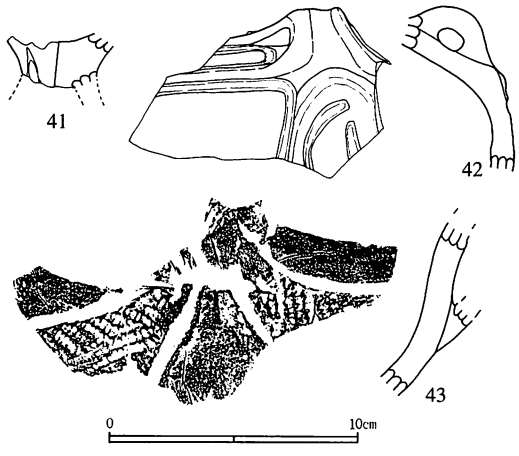
炉は四角形を呈しており、これも熔岩の板石を用いている。内法で径・深さとも30cmを計る。炉内には長さ・幅とも20cm、厚さ５cmの平石が２枚入れられていた。板状の石であることから、敷石の一部であった可能性もある。

遺物は居住部全域から出土しているが、とくに奥壁ちかくに濃く分布する。

土器は小破片がほとんどである。14は埋甕で加曽利ＥⅣ式である。15は床面直上からの出土で、やはり加曽利ＥⅣ式である。16も床面直上出土で曽利Ⅳ式期に見られる紐掛け用小把手と溝を有する鉢と思われる。17～20は炉内からの出土で加曽利ＥⅣ式と曽利Ⅴ式が混ざっている。床面直上資料も多く、21～33までに示したが、やはり加曽利ＥⅣ式と曽利Ⅴ式である。量的には圧倒的に加曽利ＥⅣ式が多い。34以降に覆土資料の



第９図　３号住居跡



第10図　３号住居跡出土土器

一部を示したが、加曽利ＥⅣ式、曽利Ⅴ式、堀之内Ⅰ式などが見られる。

石器では打製石斧（973）、磨製石斧（1043）、磨石（1091・1092・1119～1122）、多孔石（1166）、石棒（1177～1180）、石鏃（1203～1205）、ドリル（1272）、石錘（1300）が出土した。また、詳細は第Ⅳ章に譲るが、本住居跡からは炭化したマメ類が何点も出土している。

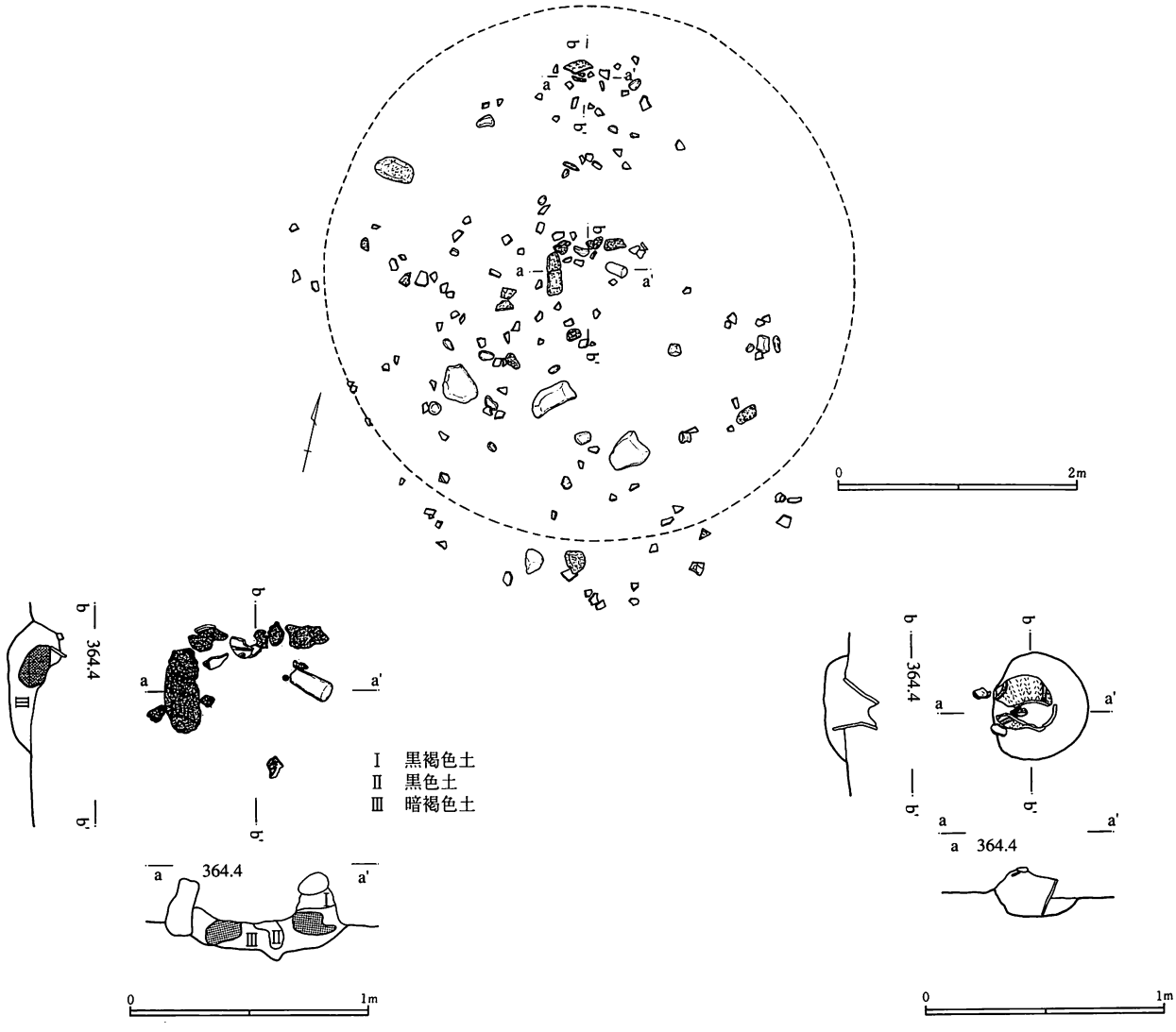
・３号住居跡

Ｊ－９グリッド。本住居跡は１号住居跡のすぐ脇に確認された炉を示す。炉の付近には20cm～30cm大の石がまばらに存在することや炉の形態が住居と同様であることなどから、屋外炉ではなく住居跡であると判断した。周辺を精査したが、埋甕・柱穴・周溝等は確認されなかった。したがって主軸方向、規模なども不明である。

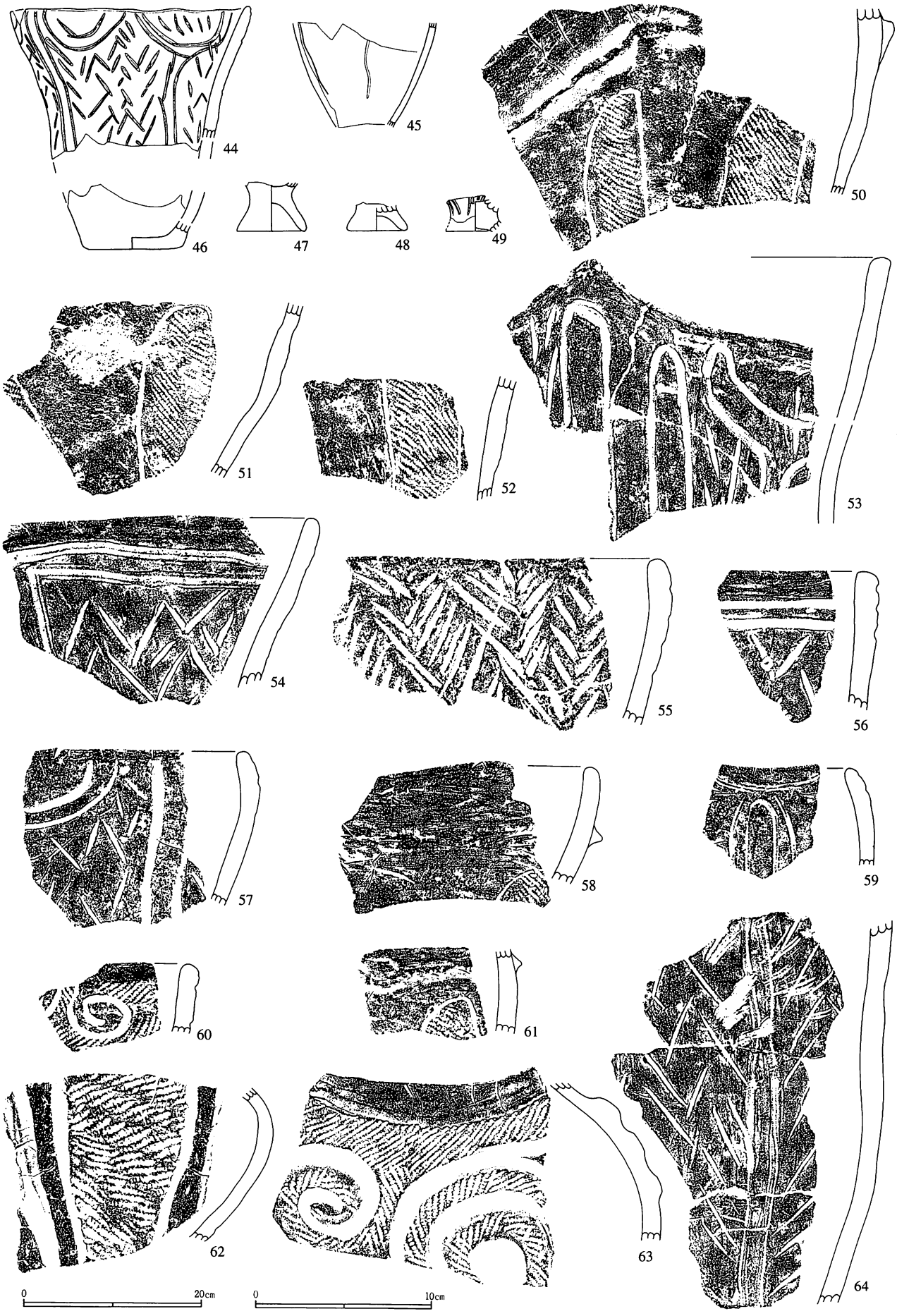
炉は、ほぼ一辺約40cmの正方形を呈する。深さは30cmである。四辺とも一枚石を使っているが、一辺のみ熔岩を用いている。

遺物は少なく、炉内及び炉周辺の同一レベルのものを本住居跡遺物として回収した。41は炉内出土であり、中期終末に位置づけられる台付鉢である。他の２片も中期末～後期初頭に位置づけられよう。石器では磨石（1123・1124）、石棒（1181）、石鏃（1206）が出土している。

・４号住居跡



第11図　４号住居跡



第12図　4号住居跡出土土器

D・E－6グリッド。本住居跡も掘り方がはっきりしない。炉の周囲に多くの土器が集中しているうえ、埋甕と考えられる土器の埋設も確認されたため、住居跡と判断した。規模ははっきりしないが、炉と埋甕の位置関係及び土器の散布状況から、径4m程度の円形住居を想定した。住居の主軸はほぼ南北で埋甕は北に位置する。柱穴、周溝等は確認されなかった。

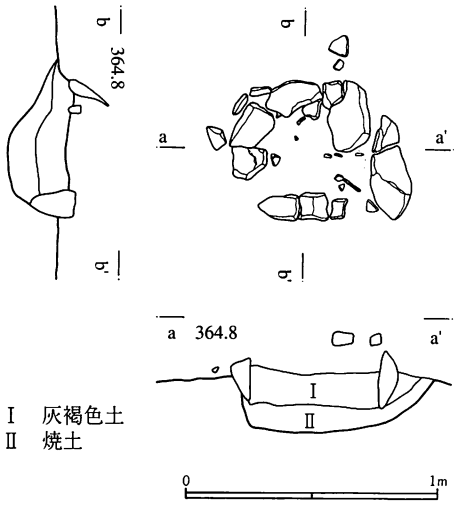
埋甕は曽利V式期の深鉢上半部を逆位に埋設したものである。掘り込みは深くはない。

炉はやはり熔岩を用いた石囲炉である。方形と思われるが、二辺のみに炉石は確認されており、内部の焼土はブロック状に存在する。炉の最上部から石棒（1182）が出土しているが、石棒自体には極端な被熱の痕跡はみられない。

土器は多いが、前述したように、住居壁が全く確認できない状況であるため一定の範囲内のものを住居内資料として示したもので、その意味では伴出状況は明確とは言えない。44は埋甕である。また、47～49に示したような台付の鉢も多く、このミニチュアの台部破片が炉内からも出土している。50～52は炉内出土の加曽利EⅣ式であるが、同一個体である可能性が強い。したがって、埋甕と炉内出土とで土器の系統が全く違うことになる。その他、住居内と判断し図示したものの主体を成すのが曽利V式で、客体として加曽利EⅣ式が出土している。

石器は前述の石棒のほか、打製石斧（974）、石皿（1054）、磨石（1093・1125・1159）、石鏃（1207）、加工痕ある剥片（1279）が、また石器ではないが鉄石英（1298）が出土している。

・5号住居跡



第13図　5号住居跡炉

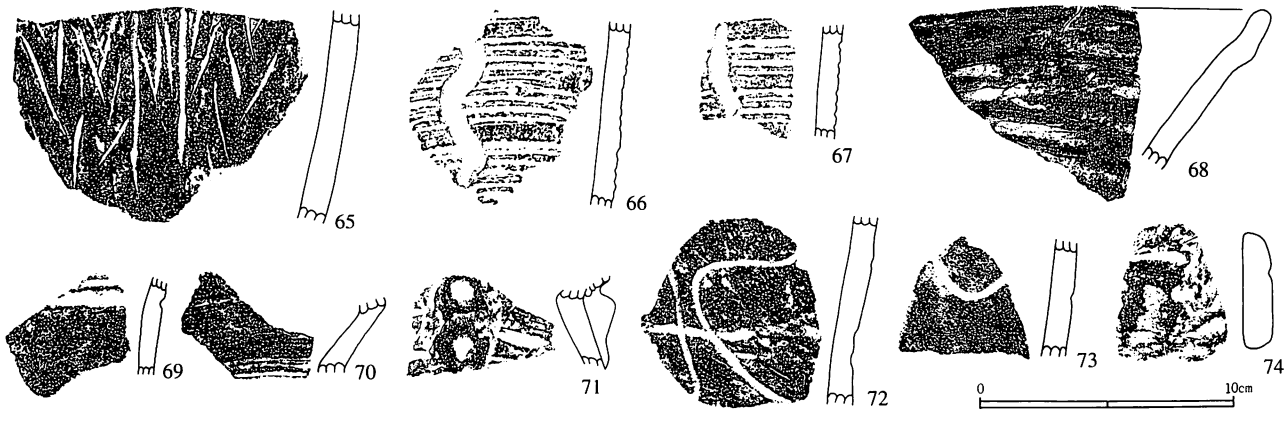
F・G－15グリッド。本住居跡も炉だけの確認である。埋甕、柱穴等は確認されておらず、規模・方向などは不明である。

炉は他の住居跡に比べやや大きく、長方形もしくは五角形を呈すると思われ、内法で長軸50cm、短軸40cm、深さ20cmを計る。石は被熱によるものか割れが生じているが、焼土は底部にブロック状に飛散する程度である。

本炉に確実に伴うは遺物はないが、炉付近の遺物を図示する。曽利Ⅲ式～堀之内Ⅰ式までの土器が混ざっており、時期の確定は困難である。なお、74は周辺部分を擦っている。形態が不整楕円形であるところから、土製円盤もしくは土器片錘の製作途上品と思われる。

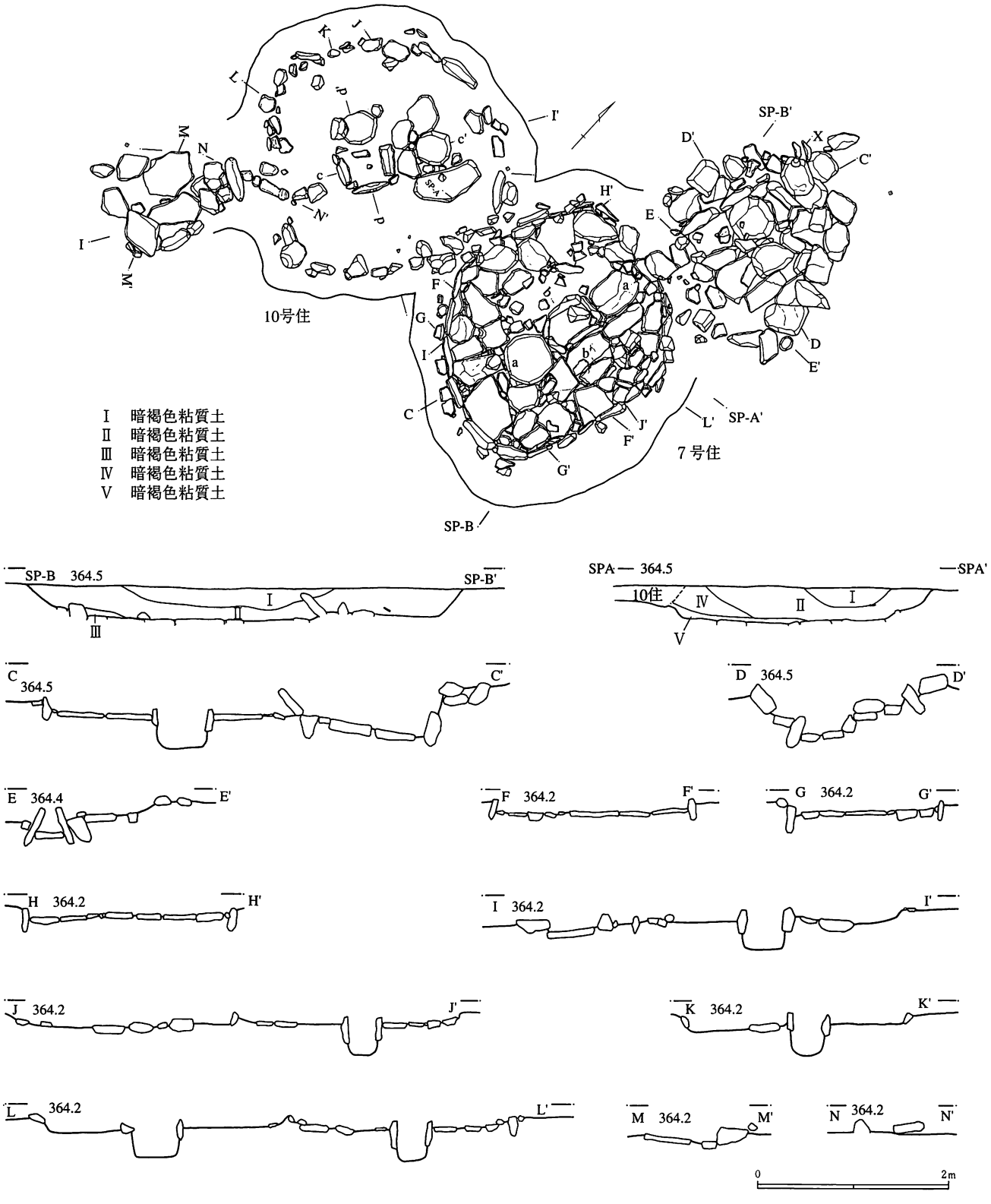
・7号住居跡・10号住居跡

E・F－14・15グリッド。この2軒の住居跡は最初からはっきり

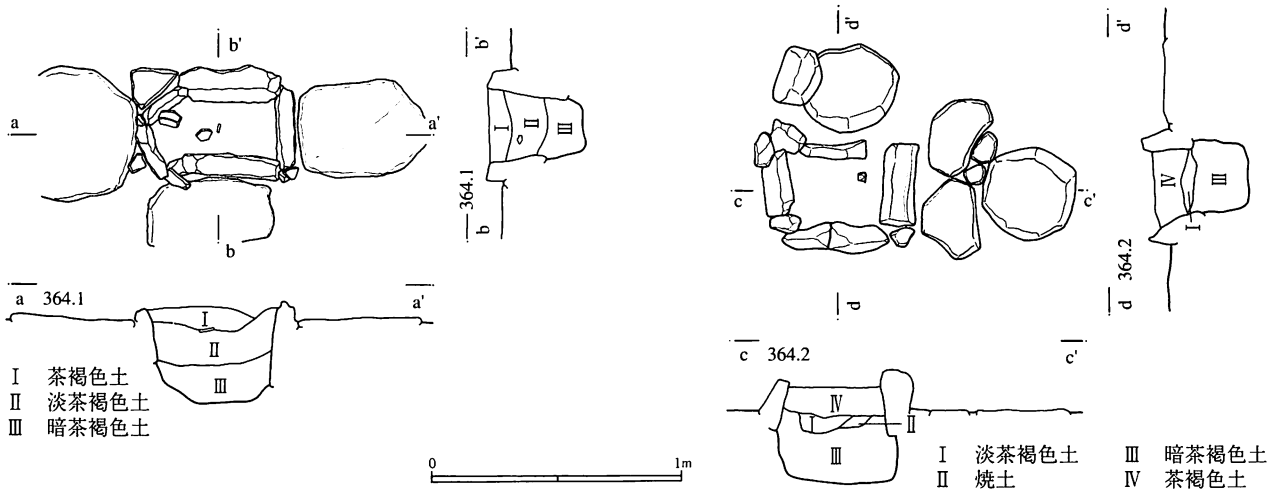


第14図　5号住居跡出土土器

と２軒の住居跡として遺構を認識していた訳ではない。まず、７号は、入り口部外側にまで延びる配石により住居跡の存在が確認された。しかし、当初はこの入り口部分のみを単独の敷石住居跡と考え、６号住居跡として途中まで調査を行った経緯がある。敷石と思われた配石を追っていくと石棺状の落ち込みが確認されたのであるが、その段階でも単独の石棺墓の可能性も考えていた。居住部はこれと並行して調査する中で確認されていたが、６号住居跡もしくは石棺墓とは別物と考えていた。というのも、本遺跡で今回確認されている敷石住居跡では入り口部外側の配石がこのように大規模に作られているケースはほかに確認されていなかったためで、



第15図　７号・10号住居跡



第16図　7号・10号住居跡炉

そのために調査に手間取った。また10号は、7号調査中に居住部西側の壁際石列だけが乱れた状況であることから、さらに外部に拡張したところ同様の壁際石列が巡ることが確認され別の住居跡が存在することが確認された。このように、この2軒の住居跡が確認しずらかったのも、覆土と確認面の色調の違いがほとんど区別がつかない状況であったことによる。したがって、土層観察による住居の切り合い関係もはっきりとはしないが、わずかに残されたベルト及び前述した7号の壁際石列のこの部分だけの乱れから10号が7号を切っていると判断した。なお、後述するように土器には時間差は認められない。

さて、7号住居跡は、主軸がほぼ南北で、北側に入り口を有する。入り口部配石端から居住部の掘り込み端まで5.4mを計る。入り口部は端の仕切りから居住部との間仕切りまで長さ1.4m、幅0.5mを計るが、この幅は今回確認された柄鏡形敷石住居跡の柄の部分としては最も狭いものである。前述したように、確認時に石棺と見間違えたほど丁寧な作りで、40～50cm程度の平石を組み合わせている。入り口部外部周辺には同程度の大きさに石を配しているが、その広がりは主軸に対し左右対称にはなっておらず、東側に大きく張り出している。

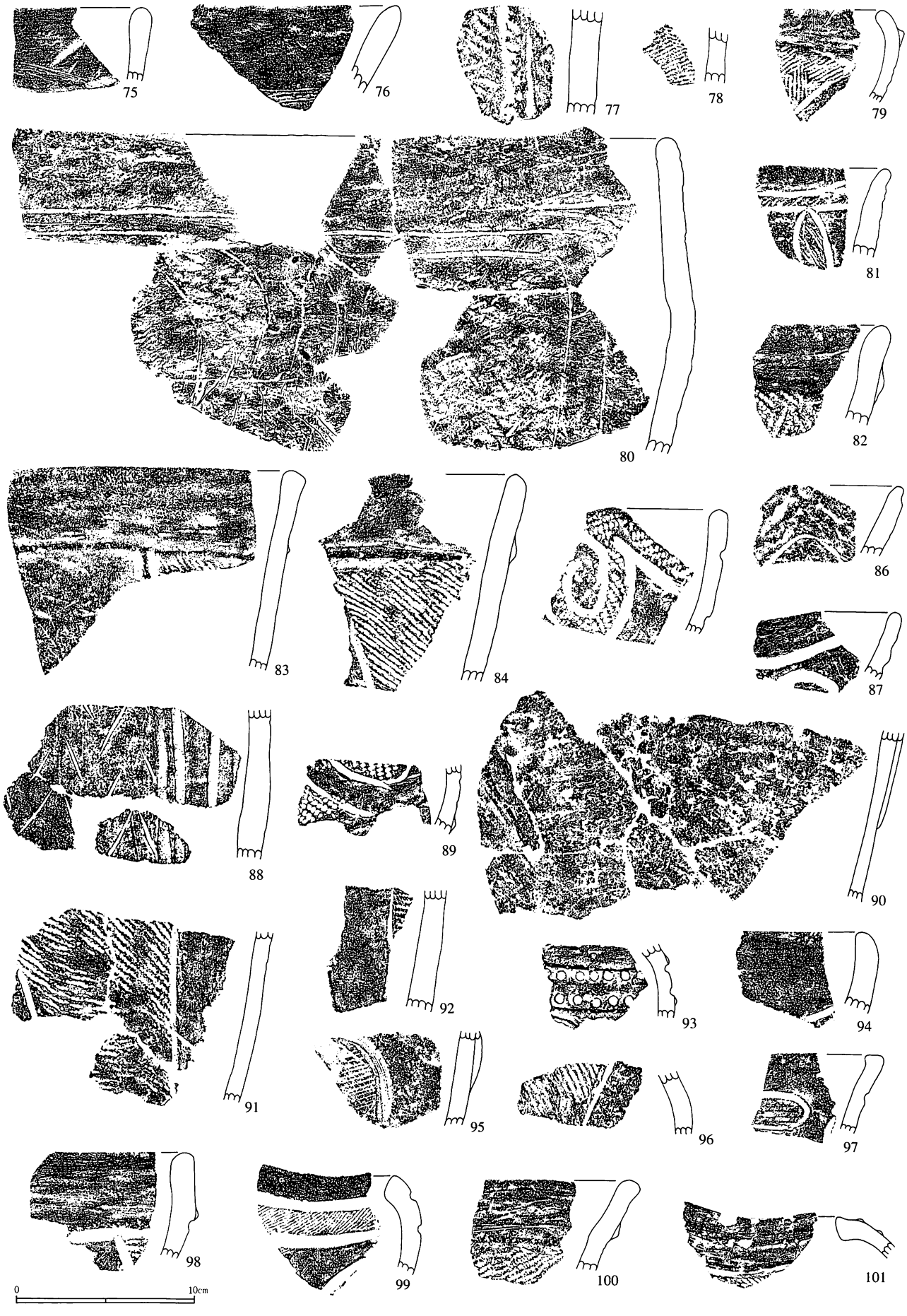
入り口部と居住部の間仕切りには、幅30cm、高さ30cmの平石を立てていたと思われ、確認時には居住部側に倒れ込むような形で斜めにかろうじて立っていた。さて、居住部は東辺をみる限り直線的であり、円というより隅円方形を意図したものと思われる。壁際石列でみると、主軸方向に2.5m、その直交方向で2.2mを計る。石敷きも丁寧で、平石の間隙に小石を埋め込んでいる。住居の主軸を強く意識しており、炉を含めた主軸には一際大きな平石を並べている。敷石端には石を立てて埋め込み、境を作り出しているが、壁はさらにその外側でゆるやかな傾斜で上がっている。柱穴や周溝は確認されなかった。

炉はホームベース状の五角形を呈する石囲炉で、本住居跡では熔岩は用いていない。ホームベースの先端は主軸の奥壁側を向く。内法で長軸50cm、幅25cm、深さ30cmを計る。焼土だけの堆積はみられず、飛散する程度である。

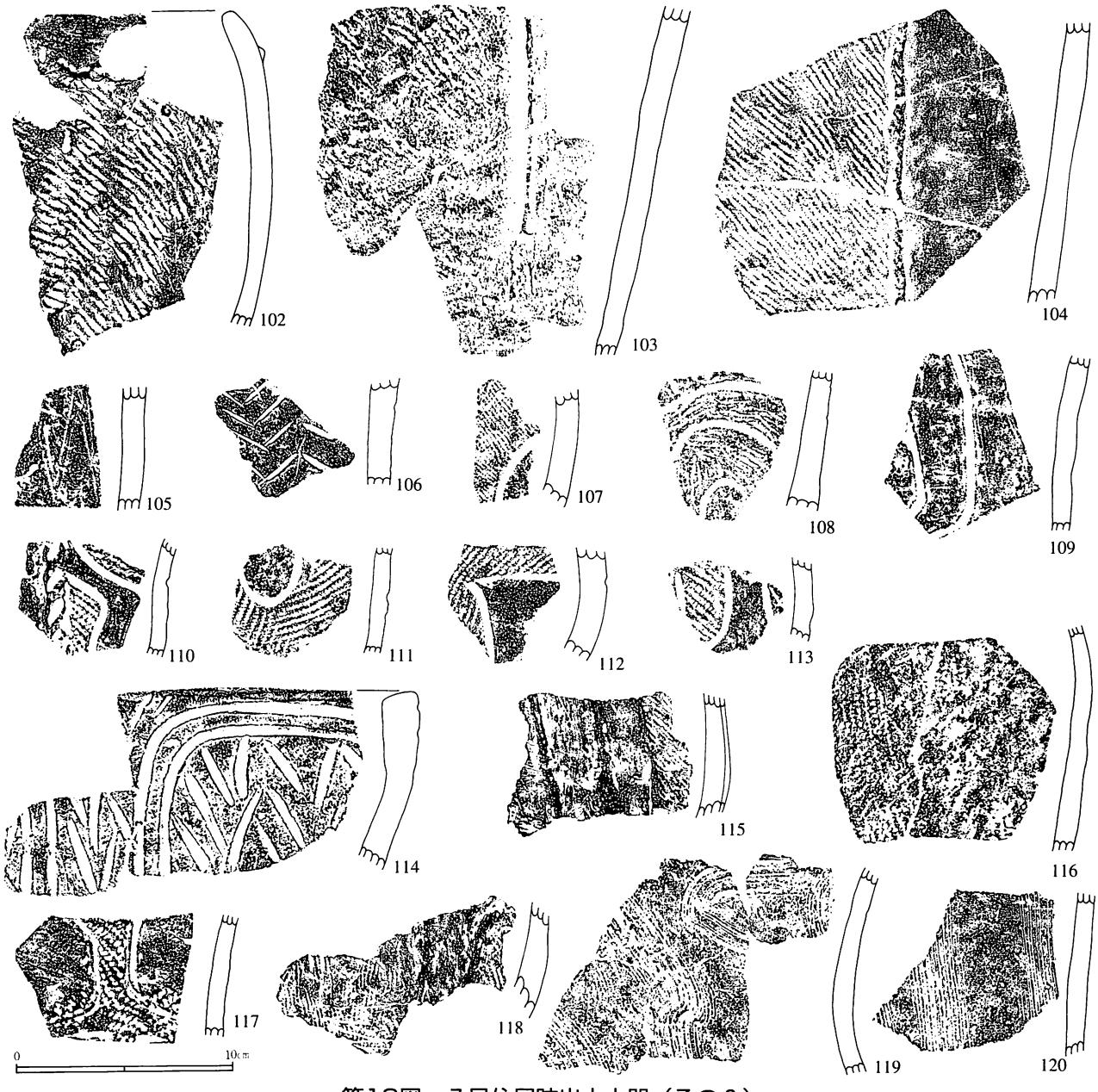
土器は中期終末に位置付けられるものがほとんどである。75～78は炉内出土であるが、主文様がはっきりしない。77は加曽利ＥⅣ式であろうか。79～113に床面直上資料を示したが、加曽利ＥⅣ式、曽利Ⅴ式、称名寺Ⅰ式が確認される。その中では曽利Ⅴ式が量的に最も少ない。加曽利ＥⅣ式と称名寺Ⅰ式は半々と言ったところであろうか。114以降には覆土資料の一部を示したが、床面直上資料と時期的な差はない。なお、99は太い沈線間に細密な縄文が施文されており、西日本の中津式に類似するものである。

石器では打製石斧（975・976）、石皿（1055）、磨石（1153・1154・1160）、多孔石（1167）、石棒（1183～1185）、石鏃（1208）が出土している。

一方、10号住居跡は7号に接しながらもほぼ正反対の方向を向いている。主軸は北東－南西で、7号とややずれる。住居の構造は7号と同様に壁際に石列を有するタイプである。南西側の入り口部は7号と違い雑であ



第17図　７号住居跡出土土器（その１）

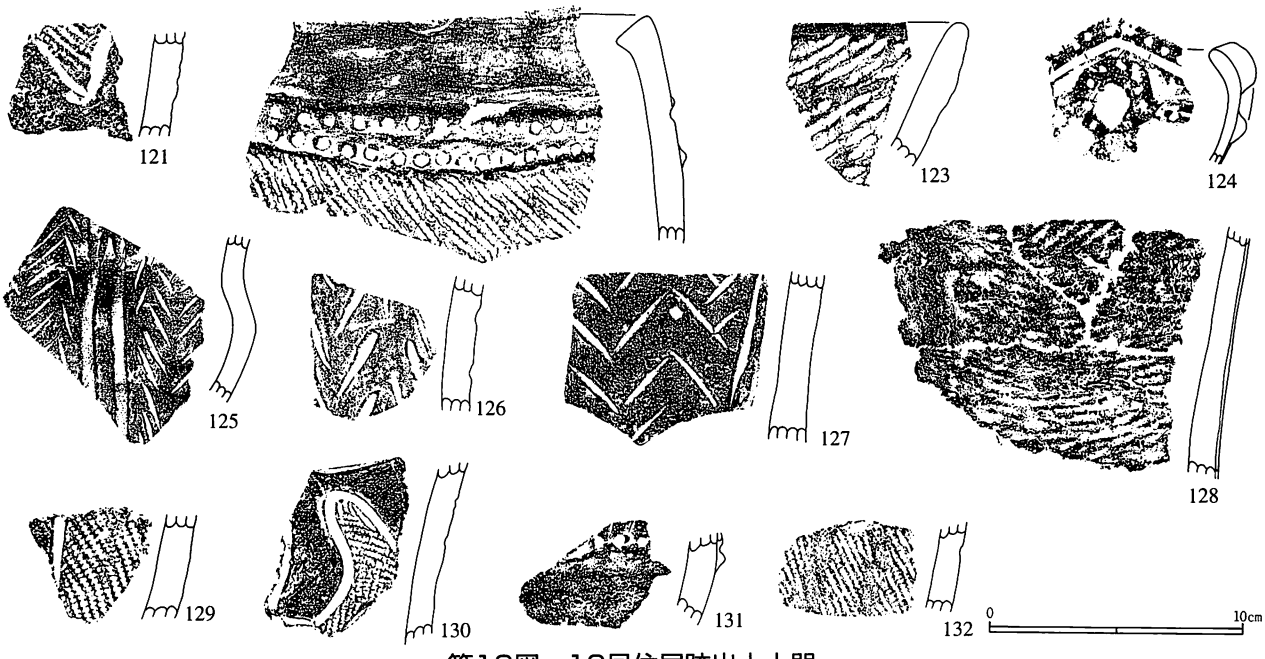


第18図　7号住居跡出土土器（その2）

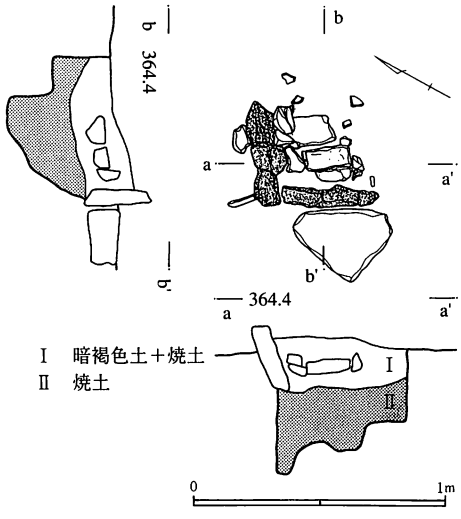
る。入り口端や脇などの本来立てられていたはずの板石がすべて倒れている事もあって、規模は不明である。入り口部の石は飛散しているが、入り口底面と考えられる板石は少なくとも2枚並んでおり、その幅は約90cmである。したがって、入り口部の幅は1m以上あったものと推定される。長さは不明であるが、居住部との間仕切りははっきりしており、長さ50cm、幅15cmの石が主軸に直交するかたちで埋められていた。

本住居跡を最も特徴付けるのは、居住部間仕切り石のすぐ内側に確認された石棒（1186）である。石棒は床面に基部を接し、頭部が浮いて居住部側に倒れ込むように確認されている。出土状況からはこの場所に置かれたものと考えられるが、当然立てられていたことが予想される。間仕切りから居住部に入る際、否応無くこれを跨いで入ることになる。石棒の長さは約30cmであり、跨いで入るのに支障はない。特別な屋内祭祀か、あるいは日常的な儀礼であるのかは判断できないが、いずれにしても出産・生命・再生など“生”に関する儀礼の一例と捉えられるものである。

居住部は間仕切りから奥壁際の列石まで2.9mを計る。主軸に対する直交方向は炉の部分で2.4mである。石敷きは炉の奥側にのみ確認されている。70cm以上もの大石を敷いており、間隙には小石を詰め込んだ丁寧な作りである。このような作りであるなら、全面に石敷きを行ってもよいと思われるが、なぜか極一部だけの石敷き



第19図　10号住居跡出土土器

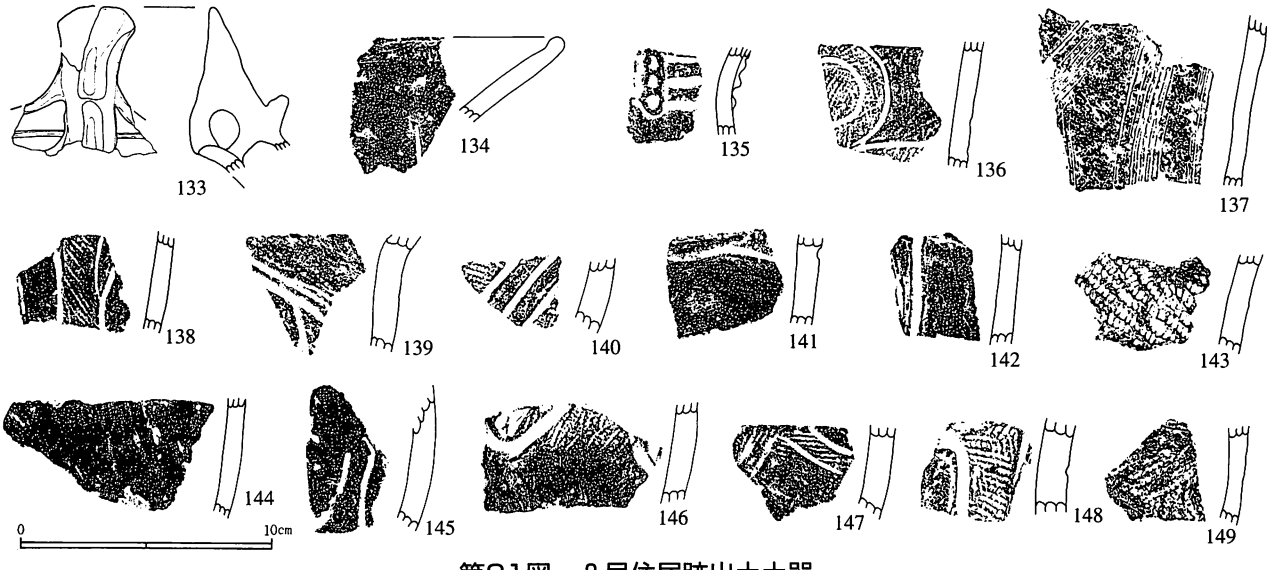


第20図　8号住居跡炉

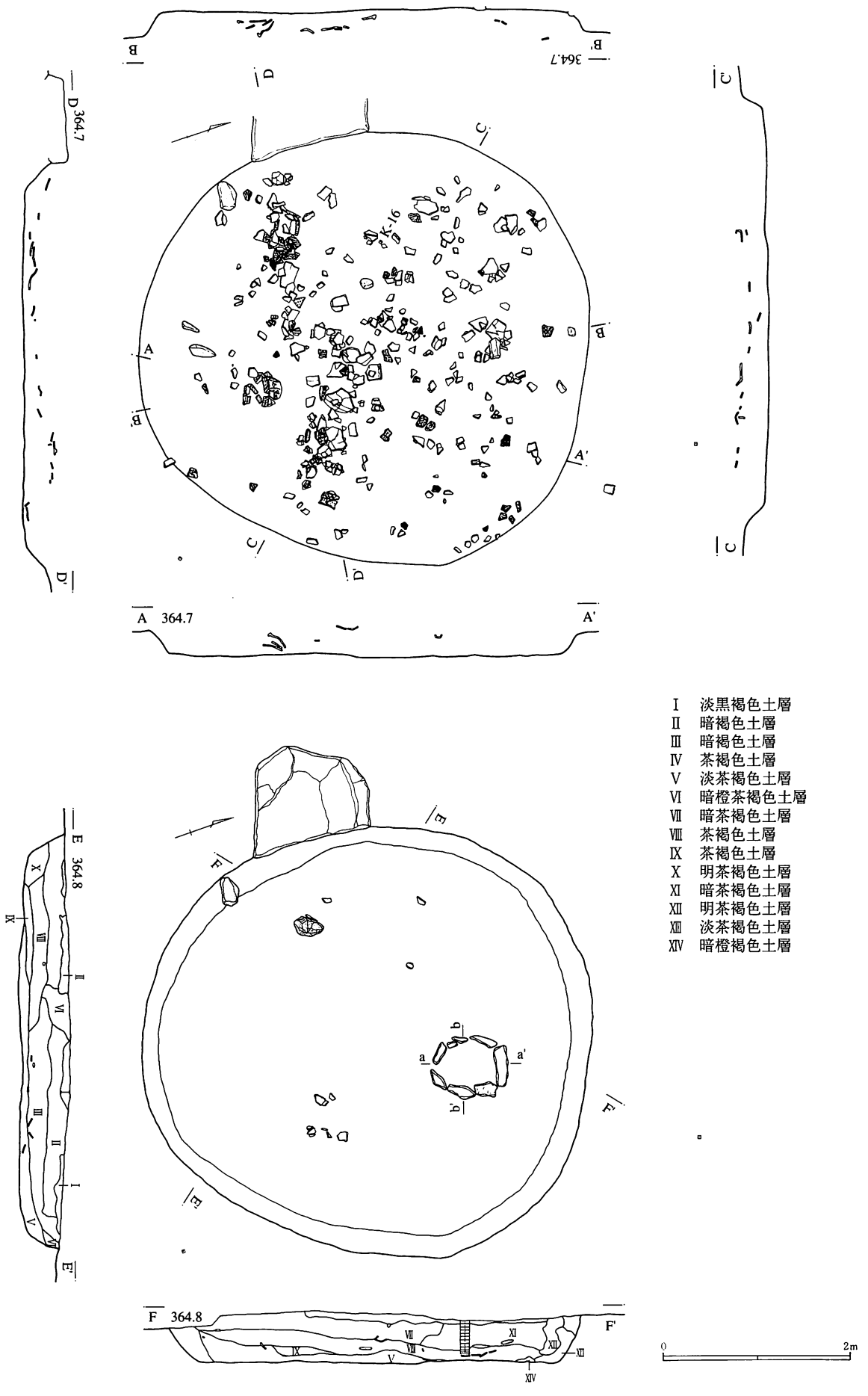
となっている。後述するように石棒なども残されており、廃絶に際しての敷石の剥ぎ取りが行われたとは考えにくい状況である。壁は壁際石列から緩やかに立ち上がっている。なお、本住居跡でも柱穴・周溝などは確認されていない。

炉は、主軸方向にやや長い長方形の石囲炉で、これも熔岩は用いていない。内法で長径40cm、短径30cm、深さ30cmを計る。焼土は中層部に最大6cm程の堆積がみられるが、その下部にもわずかながら飛んでいる。

遺物は多くない。121は炉内出土である。他の図示した資料はすべて床面直上資料であるが、7号住居跡同様、加曽利EⅣ式、曽利Ⅴ式、称名寺Ⅰ式の3種が確認される。また、132は斜縄文間に施文空白部が見られ、このような文様は中津式に見られるものである。中部・関東地方にこのような手法のものが全くないとは断言できない

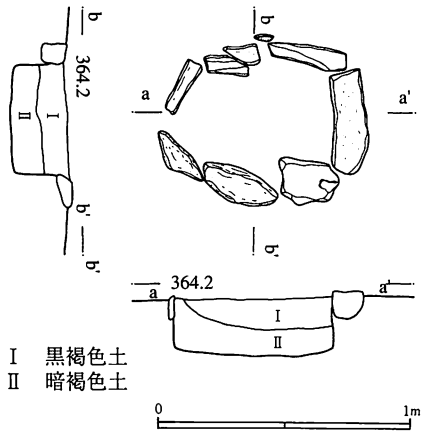


第21図　8号住居跡出土土器



I　淡黒褐色土層
II　暗褐色土層
III　暗褐色土層
IV　茶褐色土層
V　淡茶褐色土層
VI　暗橙茶褐色土層
VII　暗茶褐色土層
VIII　茶褐色土層
IX　茶褐色土層
X　明茶褐色土層
XI　暗茶褐色土層
XII　明茶褐色土層
XIII　淡茶褐色土層
XIV　暗橙褐色土層

第22図　9号住居跡



第23図　9号住居跡炉

が、中津式の可能性を指摘しておきたい。住居跡の方向が全く逆であるにもかかわらず、存在時期および土器の組み合わせなどの点において、7号住居跡と本住居跡では全く同じことになる。

石器は前述した石棒だけが出土している。

・8号住居跡

D－16グリッド。本住居跡は炉とそれに接する敷石の一部のみの確認である。敷石の一部が確認されたことで住居跡であることは間違いないと思われるが、埋甕、柱穴などの施設は周辺には確認されていない。

炉は熔岩を用いた石囲炉で、L字状に2枚の板状熔岩が確認されている。他の住居跡の例から長方形もしくはホームベース状と推定される。石囲いの内部からは20cmちかい柱状の石をはじめ数枚の板状の石片が出土しており、2号住居跡の状況に類似する。焼土は炉石端までの部分には全くみられず、炉石端以下の部分に飛散していた。

遺物は炉内及び周辺の同一レベルから出土したものを報告する。土器では、133～143、145が炉内出土である。133が把手の状況から堀之内Ⅰ式であると考えられるが、それ以外はいずれもⅡ式である。周辺資料のうち147は堀之内Ⅱ式土器である。146、148は沈線から称名寺式としておきたい。石器は出土していない。

・9号住居跡

J・K－15・16グリッド。卵形にちかい楕円形の竪穴住居跡である。住居の主軸は南々西－北々東である。住居の西壁に接して未風化の花崗岩の大礫があり、これにより住居の規模・形態が制限されたものと思われる。

本住居跡は、後述するように曽利Ⅱ式期の遺物を出土した竪穴住居跡であるが、通常みられる埋甕や柱穴・周溝などの諸施設は一切確認できなかった。

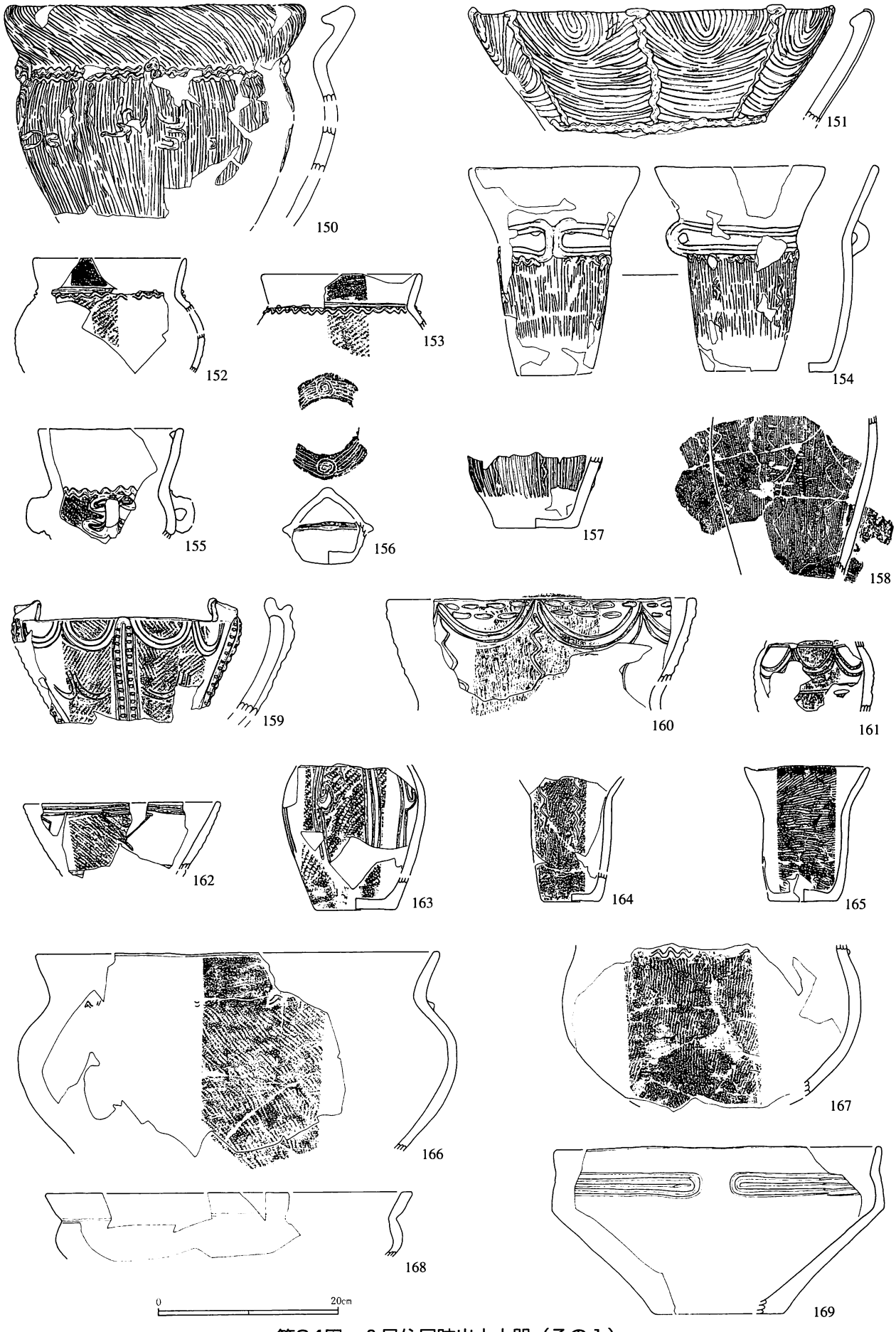
炉は中央やや奥寄りにつくられた石囲炉で、主軸方向に長い五角形（ホームベース状）を呈しており先端部分が入り口部を向く。内法で、長軸60cm、短軸40cm、深さ20cmを計る。焼土は上層部に飛散する程度であった。本住居跡では熔岩は用いていない。今回調査された住居跡では本住居跡が最も古いが、熔岩を利用しないのは時期的違いによるであるかもしれない。本遺跡の第4次調査でも曽利Ⅱ式期の竪穴住居跡が確認されているが、大型の炉には河原石が用いられている。

遺物は非常に多く、覆土中から廃棄された状態で出土している。土器は非常に多いため小破片は割愛した。時期はすべて曽利Ⅱ式期である。加曽利EⅡ式系統は非常に少なく、161の連弧文土器があげられる程度である。159・160の口縁部に重弧文を施文するタイプは曽利系に見られるもので、連弧文土器ではない。156は両サイドからブリッジがつく（ブリッジ自体は欠損している）タイプの小型釣手土器であるが、内面に被熱の痕跡やススの付着はみられない。178～180は赤色顔料が内外面に施されている。

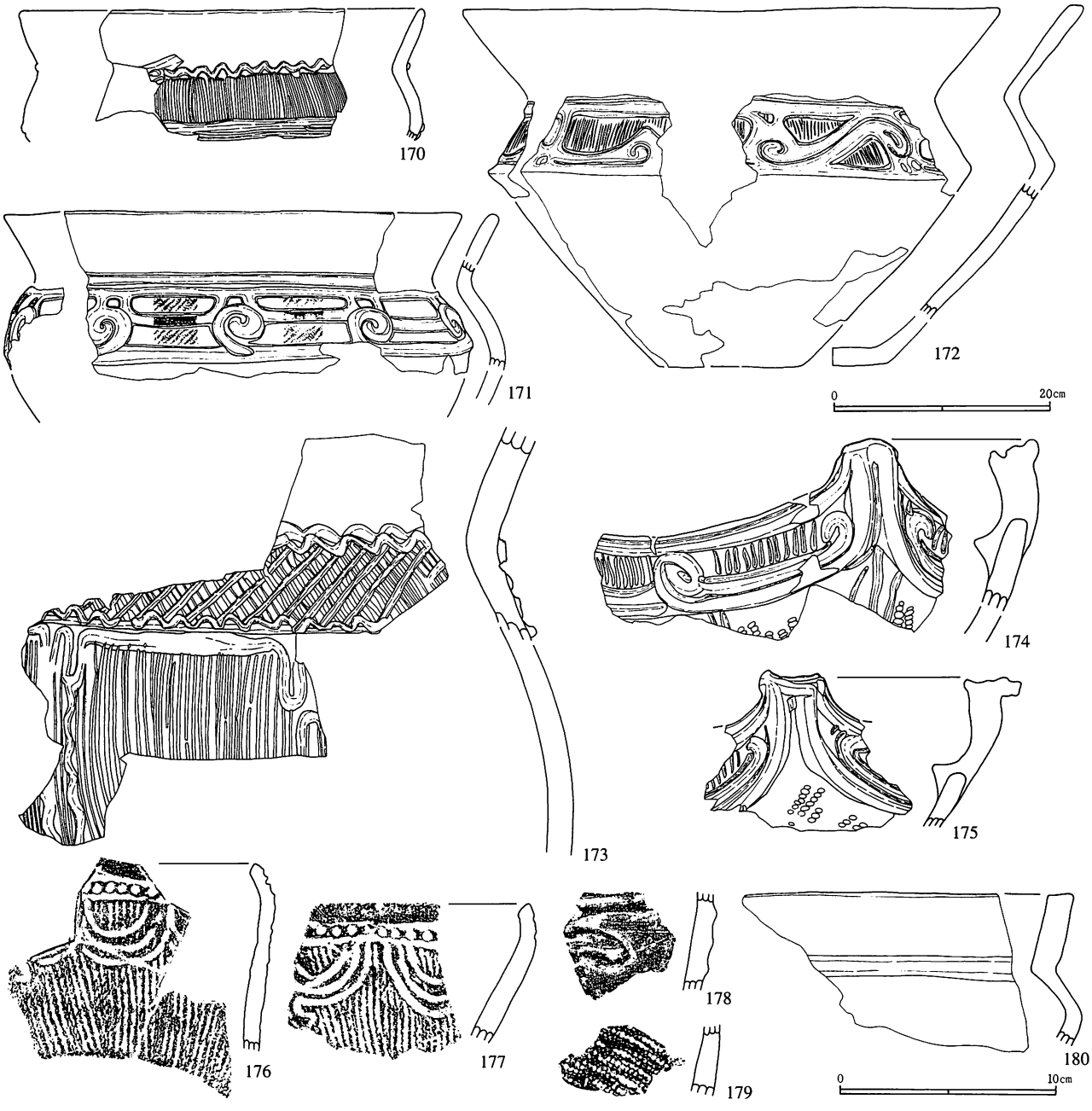
石器では打製石斧（977）、石匙（1031）、磨製石斧（1035）、磨石（1094）、多孔石（1168）、石鏃（1209）が出土している。

・11号住居跡

H－11グリッド。直径約3.5mの円形の敷石住居跡である。主軸は西南西－東北東であり、西南西に入り口部をもつ。本住居跡でも柱穴、周溝は確認されていない。本住居跡の石敷きは非常に丁寧であり、方向性や規則性を十分考慮しながら敷き詰めたものである。平石の最大のものは長さ80cm×50cmに及び、小さいもので長さ30cm程度である。これらの平石を、形態に合わせうまく敷き、その間隙に小石をはめ込んで平らな面を作り出している。ところどころ平石が抜けており、廃絶に際し引き抜かれたことも考えられる。主軸上の炉に接して、三角形の平石が確認されているが、頂点を入り口方向に向けており、主軸や入り口部を明らかに意識して配置



第24図　9号住居跡出土土器（その1）



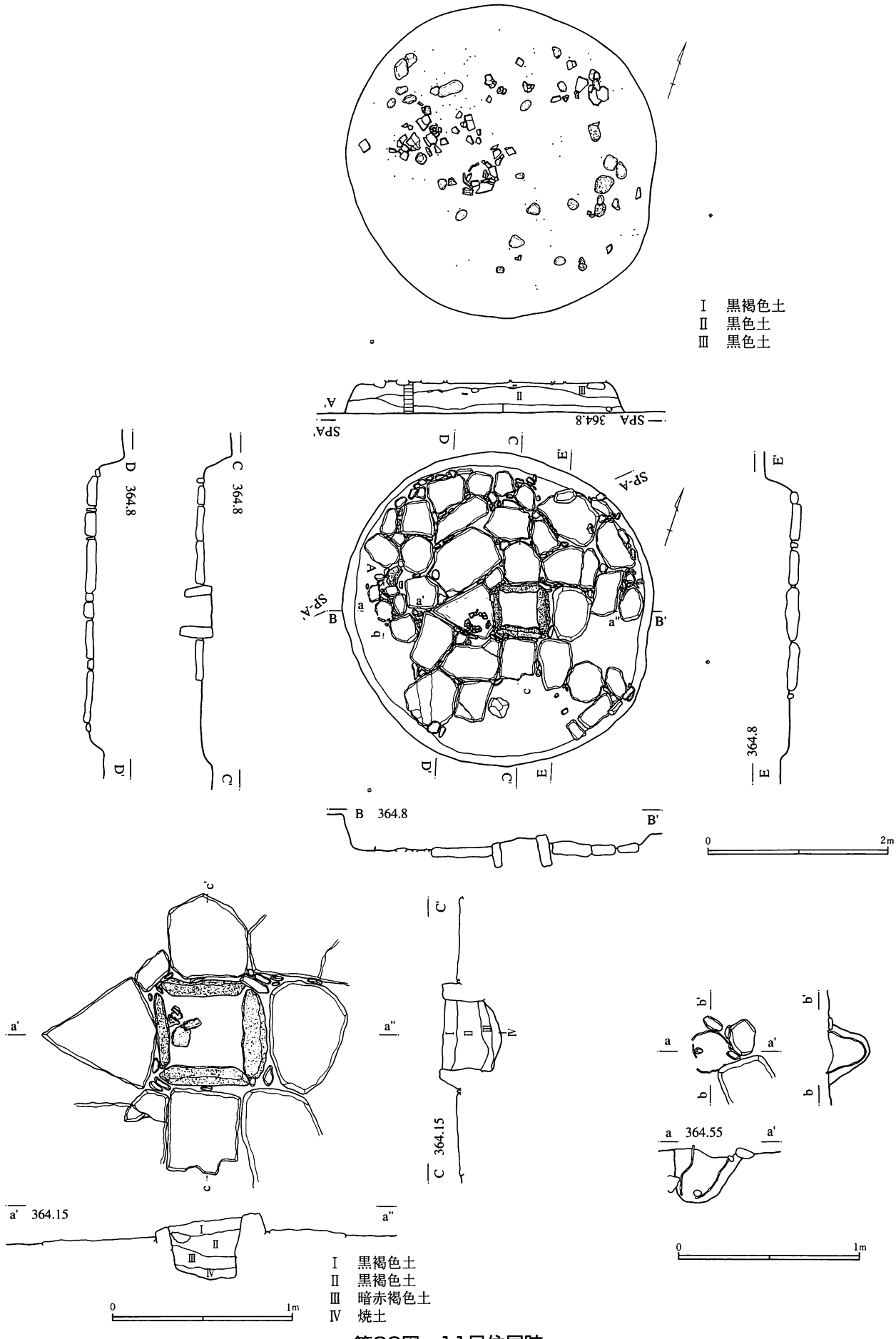
第25図　9号住居跡出土土器（その2）

したものである。

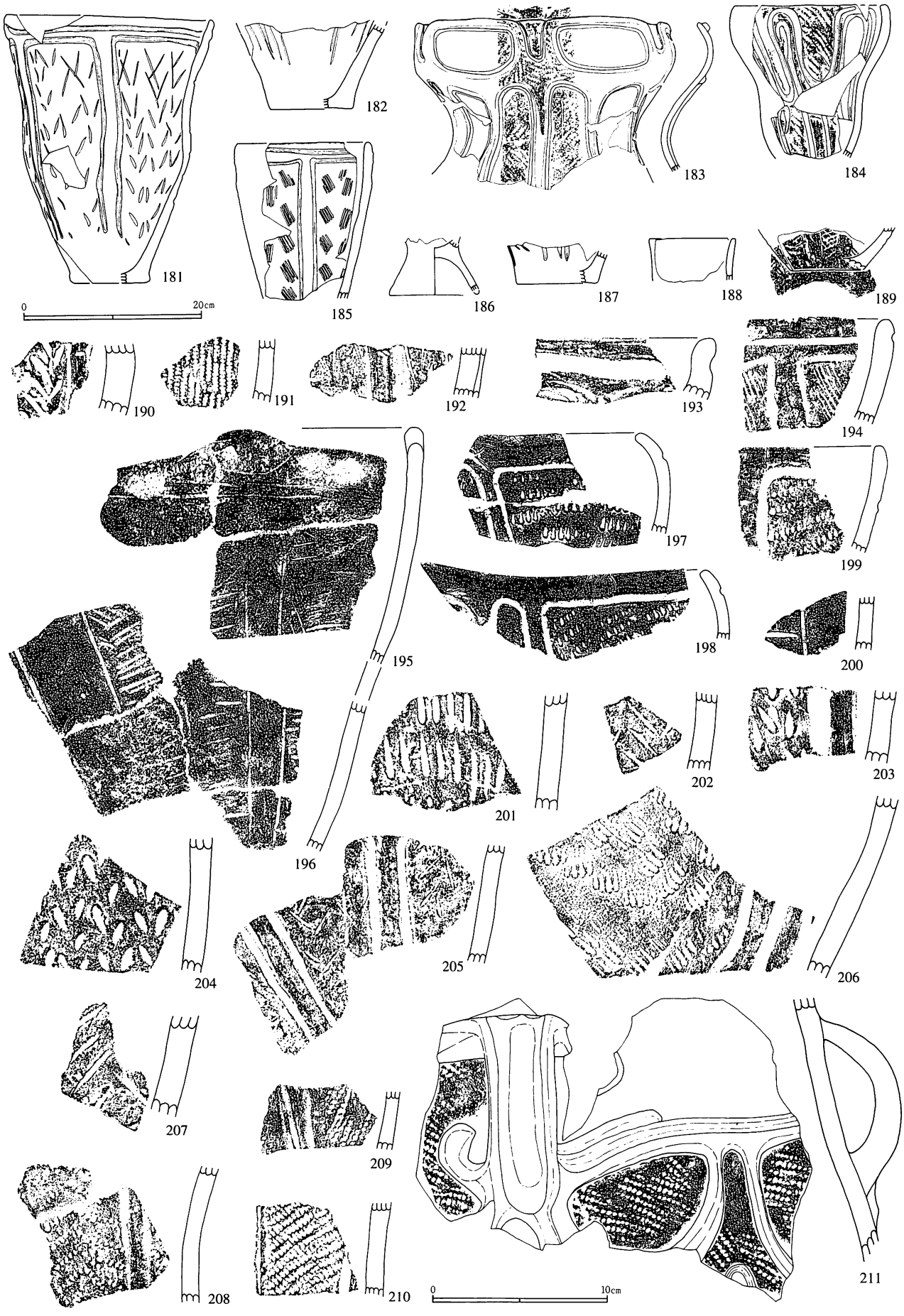
入り口部に埋甕が確認された。主軸上にあり、前述の三角形の平石から入り口側に50cmよった部分での確認である。竪穴の壁の下場からは30cm離れることになる。埋甕掘り方のすぐ脇まで石敷きが行われているが、土器の上部に石蓋は確認されていない。確認時には土器の口縁部が、一部敷石の下面に接していた。埋甕は正位であり、底部の一部を欠損している。

炉は熔岩の板石4枚による石囲炉で、ほぼ正方形である。内法で径50cm、深さ30cmを計る。焼土は全体に飛んでいるが、とくに最下層には5cmの厚さで焼土層が形成されている。

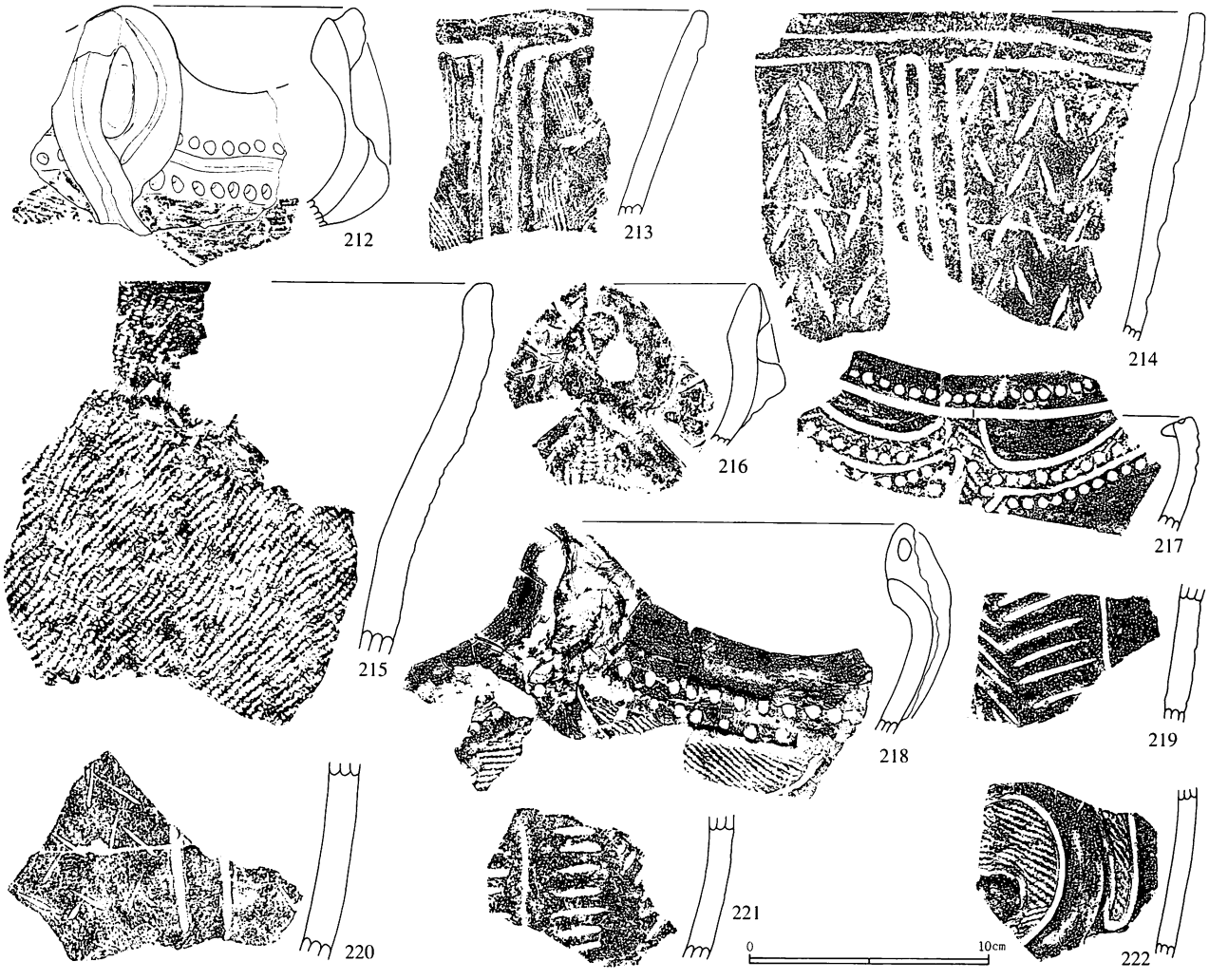
遺物は比較的多い。土器は曽利V式が主体である。図では181～211までに床直資料を示した。181は埋甕で、底部の欠損部には磨きは行われていない。183や211などの加曽利E式系統の土器は、埋甕に比べやや古く位置付けられるものであろう。182および190～192は炉内出土である。212～222には覆土資料を示した。212は他の土器と同一レベルであるものの、出土位置（炉の奥やや右）に石敷きがないことから撹乱の可能性が考えられる。他の資料は中期末～後期初頭のものが見られる。


Ⅰ 黒褐色土
Ⅱ 黒色土
Ⅲ 黒色土
SPA 364.8
SPA'
A
A'
SP-A
SP-A'
B 364.8
B'
C 364.8
C'
D 364.8
D'
E 364.8
E'
0
2m
a' 364.15
a''
a 364.55
a'
b
b'
C 364.15
C'
Ⅰ
Ⅱ
Ⅲ
Ⅳ
0
1m
Ⅰ 黒褐色土
Ⅱ 黒褐色土
Ⅲ 暗赤褐色土
Ⅳ 焼土

第26図　11号住居跡



第27図　11号住居跡出土土器（その1）



第28図　11号住居跡出土土器（その２）

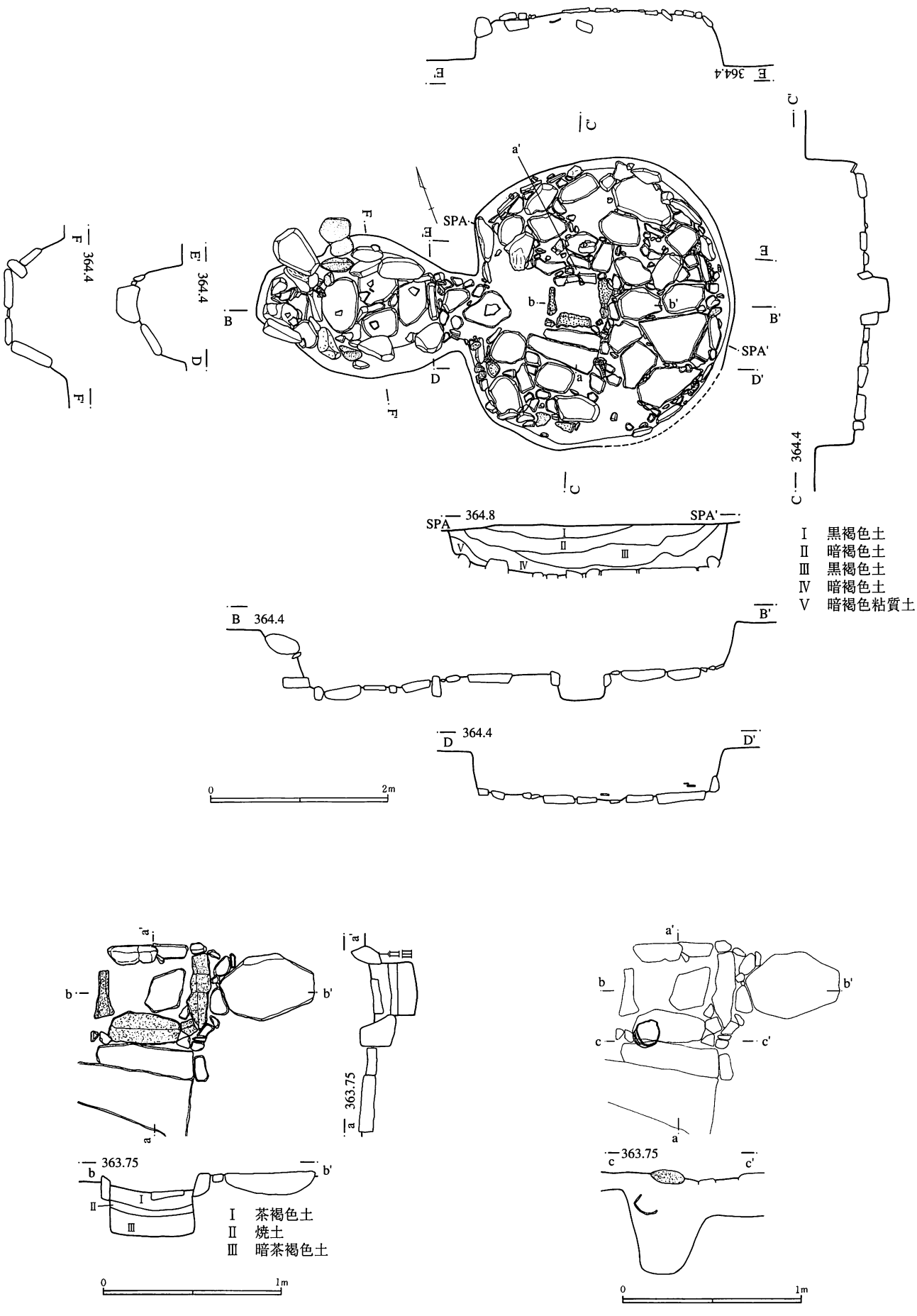
石器では磨製石斧（1036）、磨石（1073・1126）、加工痕ある剥片（1280）が出土している。

・13号住居跡

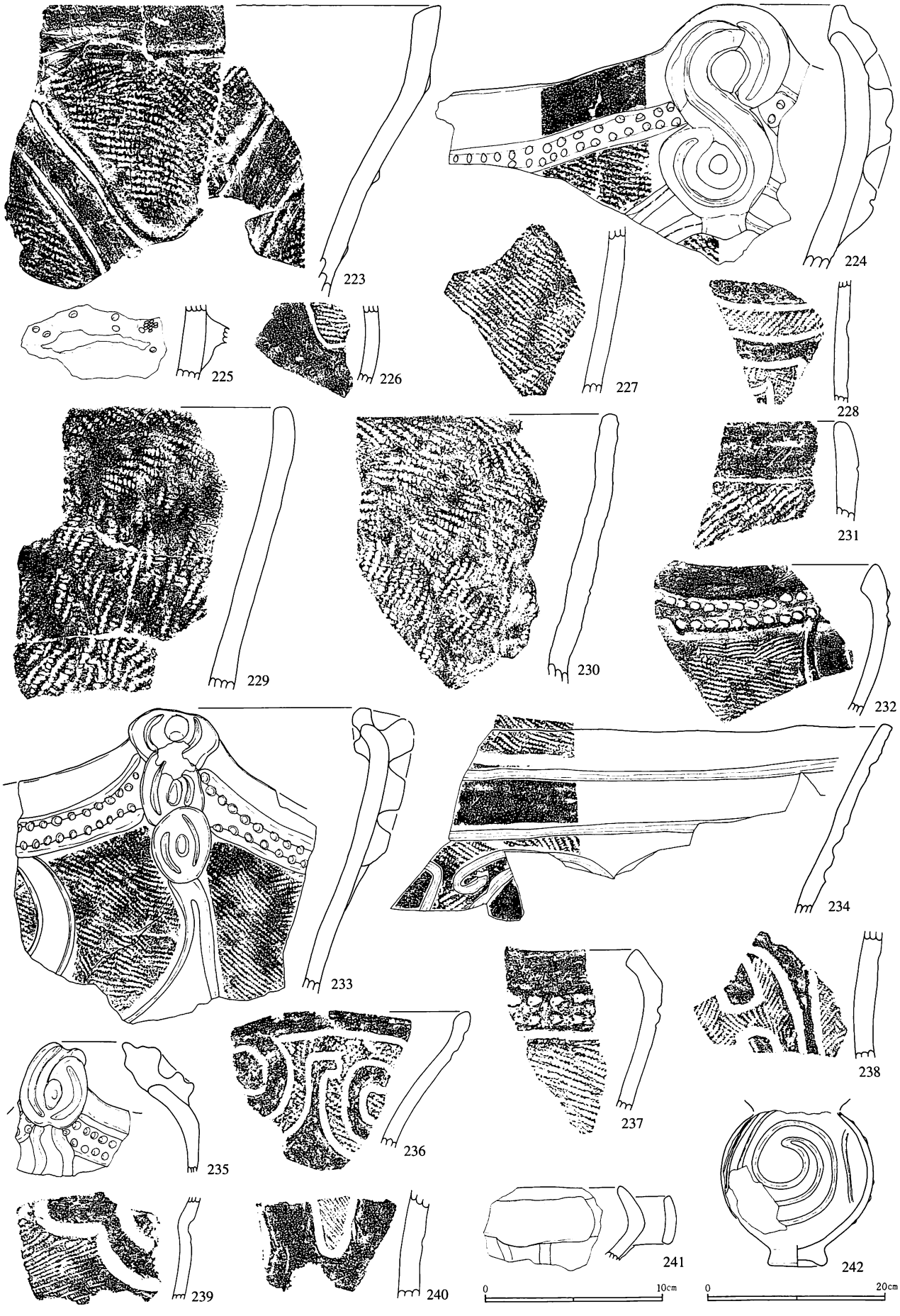
Ｂ・Ｃ－16・17グリッド。今回確認された住居跡のなかで最も深く掘り込まれた住居跡である。柄鏡形を呈するが、柄の中央部が膨らむ特徴がある。主軸は北西－南東で入り口は北西を向く。入り口部の掘り込み端から居住部の掘り込み端まで5.4ｍ、居住部の幅3.2ｍ、入り口部最大幅1.6ｍ、最小幅0.75ｍ、深さ0.5ｍを計る。入り口部は居住部との連結部分で極端に狭くなるが、その部分には間仕切石が主軸に直交するように５㎝ほどを残して深く埋め込まれている。入り口部の石敷きおよび壁の防護石が丁寧に張り付けられ、入り口には、階段風に40㎝程の河原石が埋められている。居住部は壁際に縁石を埋めるタイプで、ところどころ直線を意識したようにも見受けられ、円もしくは六角形としておきたい。居住部の石敷きも丁寧で、平石は居住部の間仕切り側に向かって収束する。なお、主軸上の炉の脇には石敷きはみられない。埋甕、柱穴などは確認されなかった。

炉は、内法50㎝の正方形を呈する石囲炉であるが、４枚の板石のうち３枚が熔岩である。炉の内部に30㎝大の平石が確認されているが、程度の差こそあれ、これは２号、８号住居跡の炉の状況と同じである。炉を、住居構築財の一部によって封印するという行為が想像できるが、住居廃絶時における儀礼を考える必要があろう。

炉石のうち最も大きな熔岩の真下に、深さ50㎝・径30㎝の円形小ピットが確認され、内部より土器が出土している。土器は炉石からは約20㎝離れてはいるが、火熱によるものか表面の剥離が著しい。炉の調査中には全く確認できなかったこと事からも明らかなように、この掘り込みは炉の施設とは考えられない。しかし、後述


SPA
SPA'
364.8
364.4
Ⅰ 黒褐色土
Ⅱ 暗褐色土
Ⅲ 黒褐色土
Ⅳ 暗褐色土
Ⅴ 暗褐色粘質土
0
2m
363.75
Ⅰ 茶褐色土
Ⅱ 焼土
Ⅲ 暗茶褐色土
1m

第29図　13号住居跡



第30図　13号住居跡出土土器

するように土器の時期と住居跡の時期の時間差はほとんど無い。炉構築時もしくはそれ以前の土器埋設ということになるが、小ピット以外には掘り込み等は認められず、住居と全く別の遺構であると積極的には考えにくい。したがって、ここでは住居（炉）構築段階での儀礼に伴う行為が行われたことを想定しておきたい。

遺物は意外に少ない。土器は完形に復元できるものは全くない。床面直上は223～228の６点のみである。223は加曽利ＥⅣ式であり、224以下は称名寺Ⅰ式である。229～241は覆土出土であるが、床直資料と時期的に全く差がない。241は紐かけ用の把手と溝を有することから瓢箪形注口土器である可能性が強い。242が炉の下部から出土した埋設土器である。形態や施文から、明らかに瓢箪形注口土器である。くびれの強さから小孔や鍔を失った形態であることが考えられ、同時に時期的には称名寺期に下るものであることが窺われる。

石器では打製石斧（981）、磨製石斧（1037・1045）、石皿（1057）、磨石（1127）、石棒（1187・1188）、石錘（1303）が出土している。

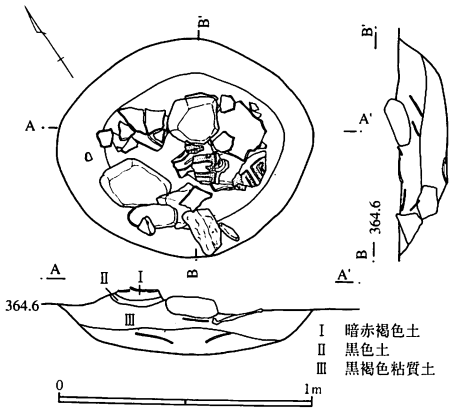
第２節　土坑と出土遺物

土坑は縄文時代に位置付けられるものと平安時代のものとがある。後述するように、平安時代の土坑は、掘立柱建物跡の柱穴である。それ以外は縄文、平安どちらとも判断し難い。すべての土坑から縄文土器は出土しているが、小破片がほとんどである。そのようななか、復元実測可能な縄文土器の大破片を出土した土坑は、16号土坑、34号土坑、42号土坑、43号土坑の４基である。この４基については縄文時代に位置付けられる可能性が大きいが、34号については２点の縄文土器（243・244）が出土しているものの位置から掘立柱建物跡の一部である可能性も否定できない。

明らかに平安時代の掘立柱建物跡と考えられるのは９号、10号、18号～23号、26号～28号、45号～65号、78号で、この他に位置や配列の規則性などから掘立柱建物跡との関連が考えられるものとして24号、25号、11号～14号、33号、34号が挙げられる。これらの土坑のうちの幾つかからは土師器や須恵器が出土している。また、位置からは掘立柱建物跡の一部とは考えられないものの、土師器や須恵器を出土したものとして８号、40号、69号土坑が挙げられる。

縄文時代に属すると考えられる土坑のうち、42号・43号土坑について出土状況や遺物について述べる。

42号土坑（31図）は長径１ｍ、短径0.85ｍ深さ0.2ｍを図る楕円形の浅い皿状土坑で、坑内には20～30㎝大の石５個が確認される。そのうちの４個は縁にまとまっているが、１個だけ離れ、坑中央に位置する。それに押し潰されるように称名寺式期の深鉢上半部２個体（245・246）が出土している。出土状況からは、埋設時にはこの石が土器の上に乗せられていたと考えられる。また、出土位置ははっきりしないが、本土坑の覆土を水洗したところ、小型の石製垂飾品（1337）が確認された。長さ13㎜、最大幅６㎜の長楕円形の円礫の端に１㎜の小孔を穿ったものである。非常に小型であり、これが単独で垂飾品として使用されていたかは疑問であるが、水洗で得られた資料はこれ１点のみである。さらに本土坑からは多孔石（1169）も出土している。



第31図　土坑（その１）

43号土坑は径1.1ｍの不整円形を呈し、深さ0.9ｍを計る。坑底に20～40㎝大の河原石を高さ４０㎝程積み上げ、図示した土器底部（247）はその上部から細片となって出土している。

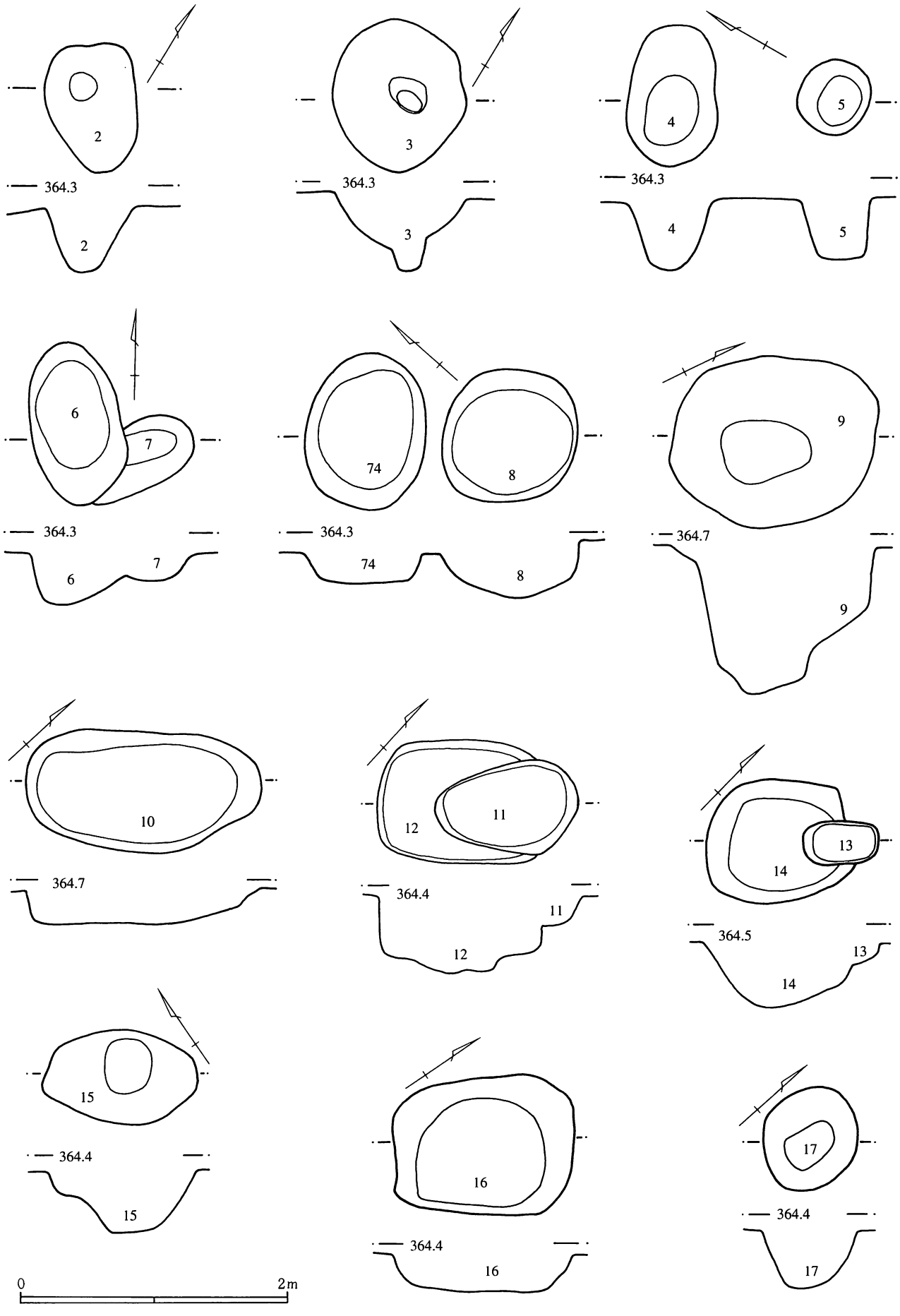
石器の出土は少なく、前述の資料以外では、８号土坑から石鏃（1210）と鉄石英原石（1299）が、27号土坑から加工痕ある剥片（1281）が出土しているにすぎない。

個々の規模・形状等については一覧表に示す。

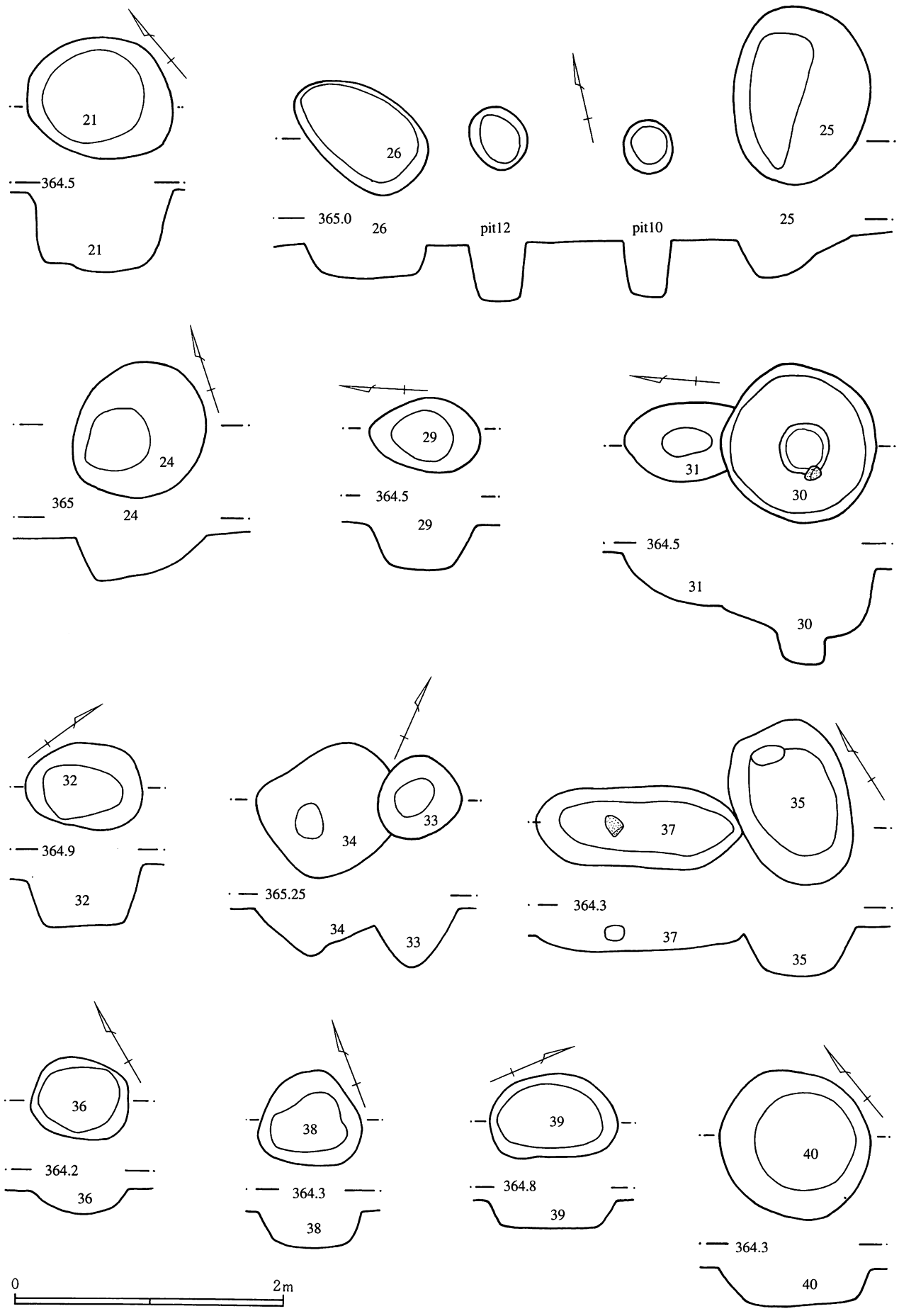
第３節　集石土坑と出土遺物

・１号集石土坑

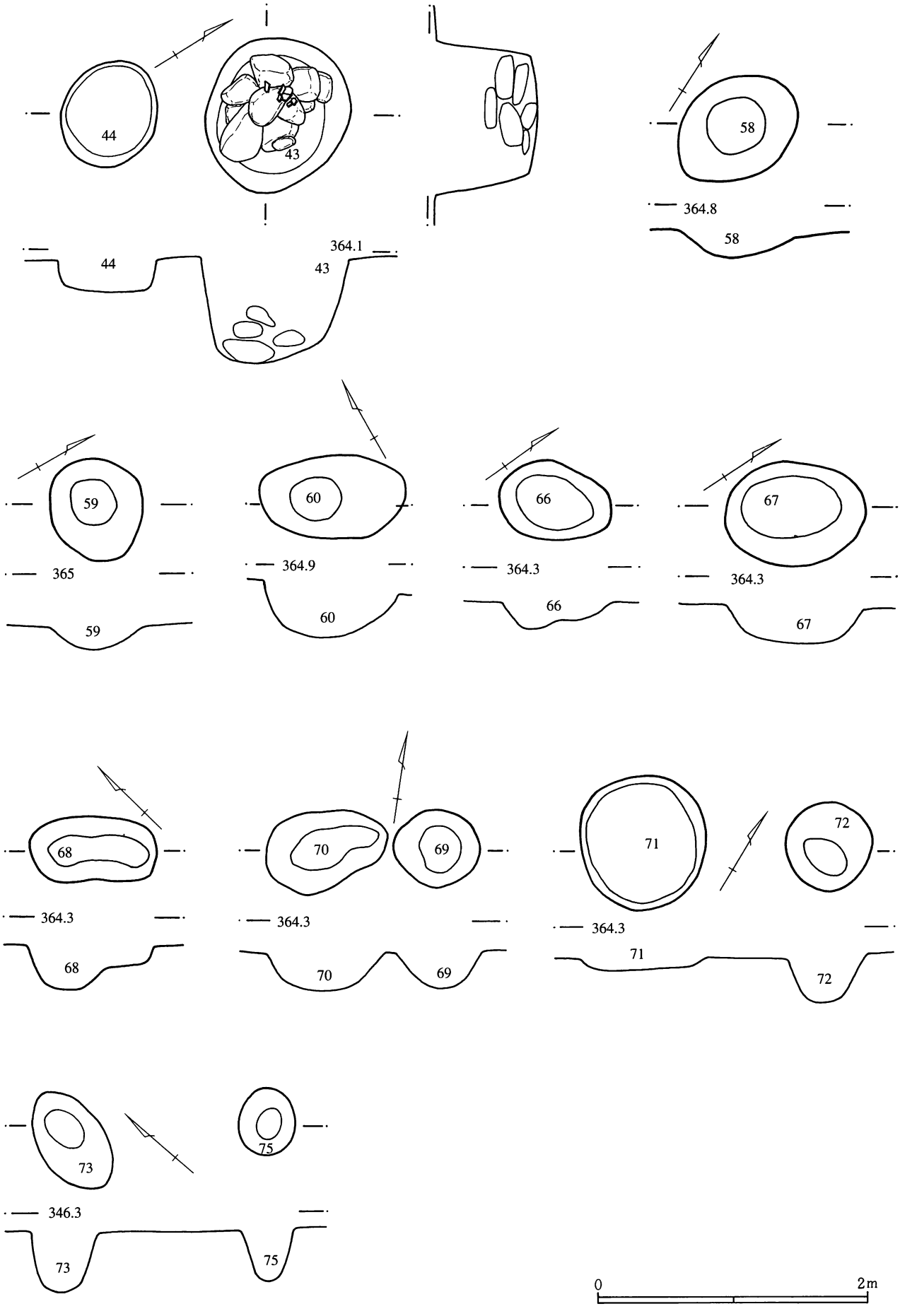
Ｅ－13グリッド。直径0.5ｍの円形を呈し、深さ0.2ｍを計る。上部


2
364.3
2
3
364.3
3
4
5
364.3
4
5
6
7
364.3
6
7
74
8
364.3
74
8
9
364.7
9
10
364.7
12
11
364.4
11
12
13
14
364.5
13
14
15
364.4
15
16
364.4
16
17
364.4
17
0
2m

第32図　土坑（その２）


21
364.5
21
26
365.0
26
pit12
pit10
25
25
24
365
24
29
364.5
29
31
30
364.5
31
30
32
364.9
32
34
33
365.25
34
33
37
35
364.3
37
35
36
364.2
36
38
364.3
38
39
364.8
39
40
364.3
40
0
2m

第33図　土坑（その３）


44
43
364.1
58
364.8
59
365
60
364.9
66
364.3
67
364.3
68
364.3
70
69
364.3
71
72
364.3
73
346.3
75
0
2m

第34図　土坑（その４）

表1　土坑一覧

番号	長径×短径×深さ（cm）	番号	長径×短径×深さ（cm）	番号	長径×短径×深さ（cm）
1	120× 107× 48	28	160× 120× 56	55	80× 80× 36
2	96× 68× 48	29	84× 55× 34	56	68× 66× 24
3	112× 100× 56	30	118× 114× 74	57	100× 90× 40
4	112× 68× 52	31	100× 58× 34	58	97× 74× 20
5	56× 55× 46	32	87× 64× 42	59	78× 71× 18
6	120× 68× 39	33	63× 61× 44	60	108× 61× 40
7	88× 50× 20	34	106× 96× 36	61	96× 74× 34
8	100× 98× 42	35	122× 85× 38	62	115× 74× 20
9	150× 126× 110	36	71× 61× 19	63	120× 70× 40
10	175× 90× 26	37	154× 59× 13	64	150× 102× 60
11	108× 70× 22	38	78× 71× 28	65	100× 76× 22
12	130× 91× 60	39	96× 63× 24	66	84× 55× 20
13	56× 22× 14	40	111× 110× 30	67	104× 78× 28
14	110× 92× 48	41	――	68	95× 48× 34
15	115× 70× 46	42	100× 85× 20	69	65× 58× 28
16	135× 103× 30	43	115× 108× 78	70	94× 60× 30
17	78× 70× 45	44	80× 72× 25	71	100× 91× 10
18	160× 118× 90	45	108× 88× 48	72	66× 63× 36
19	154× 84× 58	46	128× 84× 50	73	83× 50× 46
20	123× 98× 56	47	100× 90× 40	74	116× 90× 24
21	107× 90× 60	48	116× 66× 46	75	50× 42× 38
22	156× 130× 68	49	118× 78× 60	76	――
23	120× 104× 94	50	114× 106× 54	77	――
24	108× 93× 28	51	120× 92× 54	78	120× 104× 58
25	130× 100× 26	52	104× 92× 56	79	――
26	108× 66× 24	53	124× 110× 60	80	――
27	180× 124× 76	54	146× 98× 56		

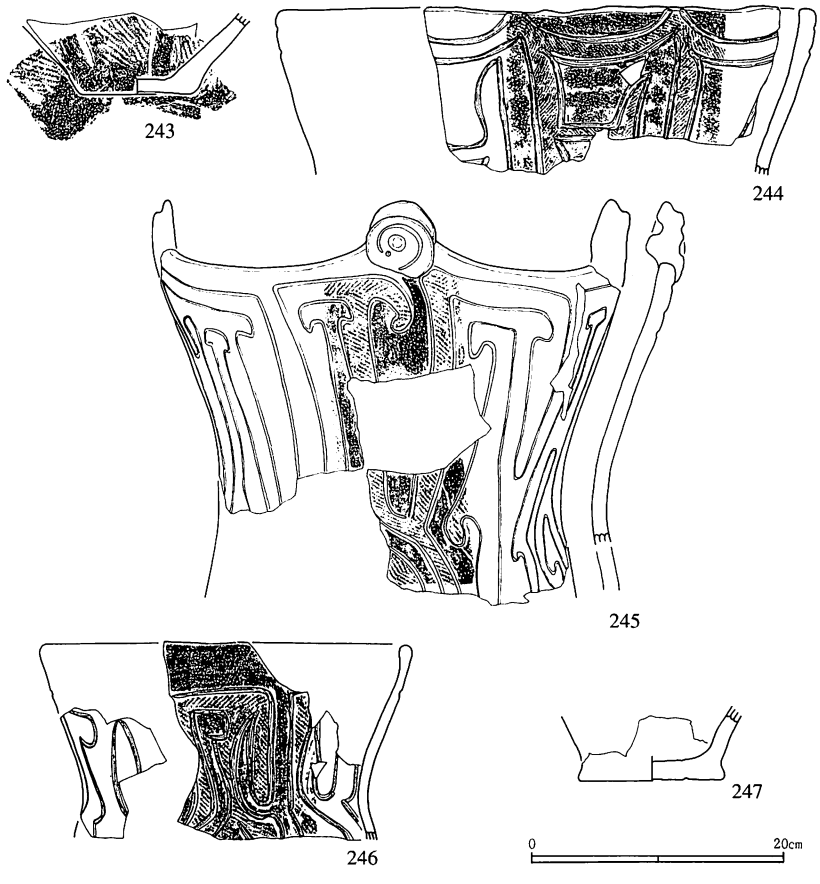
から底部にまでに10～30㎝大の角礫が集中している。内部は暗褐色粘質土の単一層で焼土・カーボンなどは全く含んでいない。

土器2点を報告するが、360は坑口から10㎝離れて出土した堀之内式土器の口縁部で、厳密には本集積土坑に伴うとは言えない。361は内部の角礫間から出土した称名寺式土器である。本集積土坑の時期を示すものである。

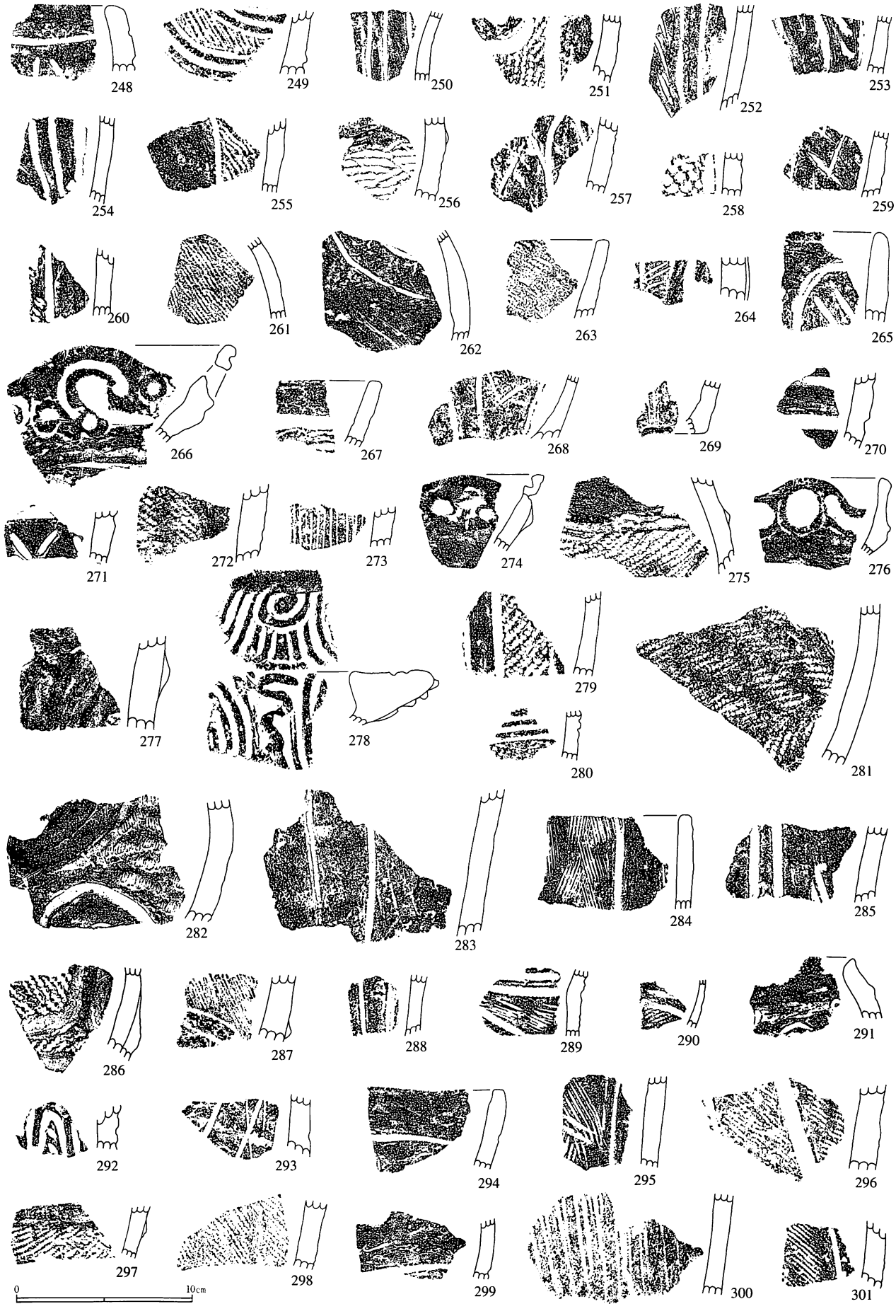
・2号集石土坑

E－6グリッド。直径0.8mの不整円形を呈し、深さ0.2mを計る。やはり10～30㎝大の礫が集中しており、覆土には焼土もカーボンも見られない。

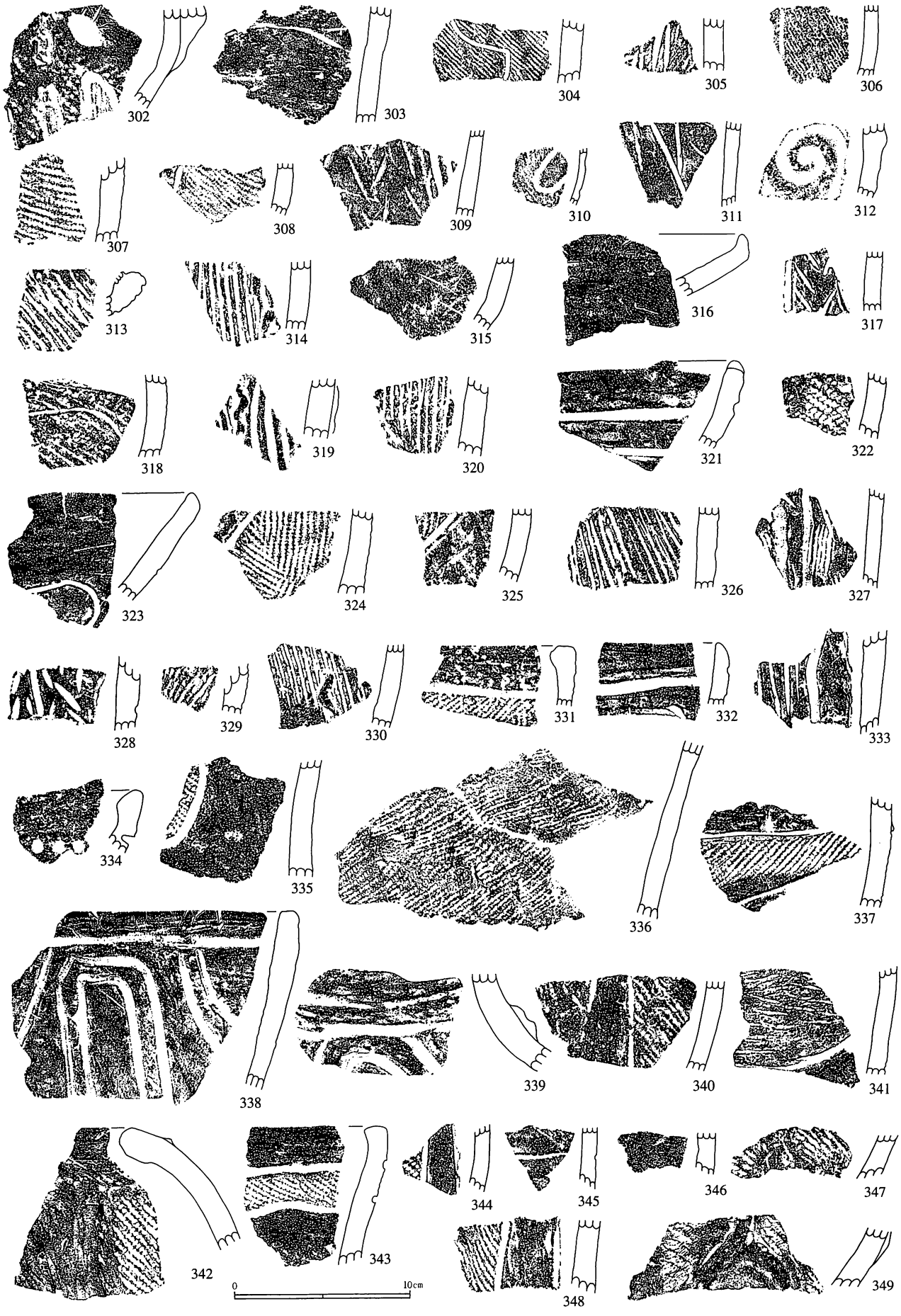
遺物は土器が礫上部から出土している。362は曽利Ⅳ式期に見られる壷または小型鉢の破片と思われる。このほか石皿（1058）が出土した。



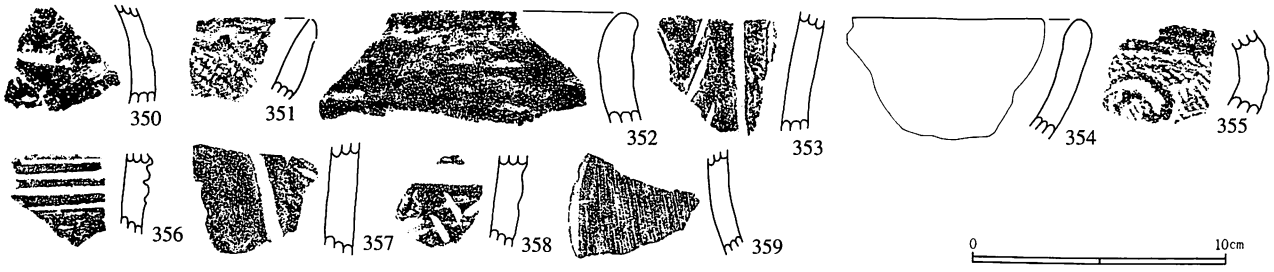
第35図　土坑出土土器（その1）



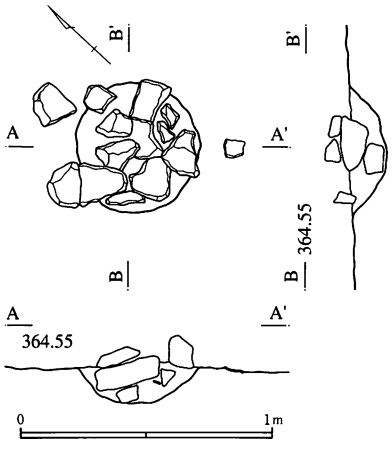
第36図　土坑出土土器（その２）



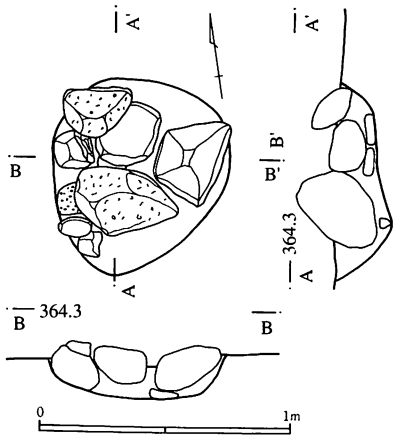
第37図　土坑出土器坑（その３）



第38図　土坑出土土器（その４）

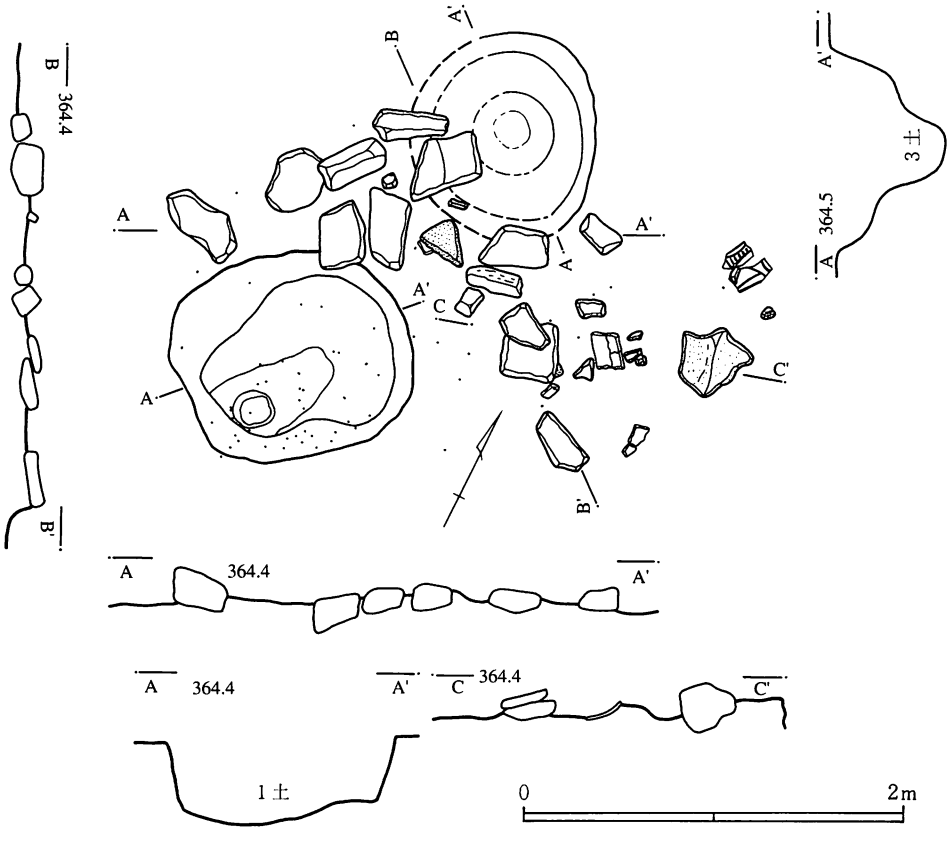


第39図　１号集石土坑

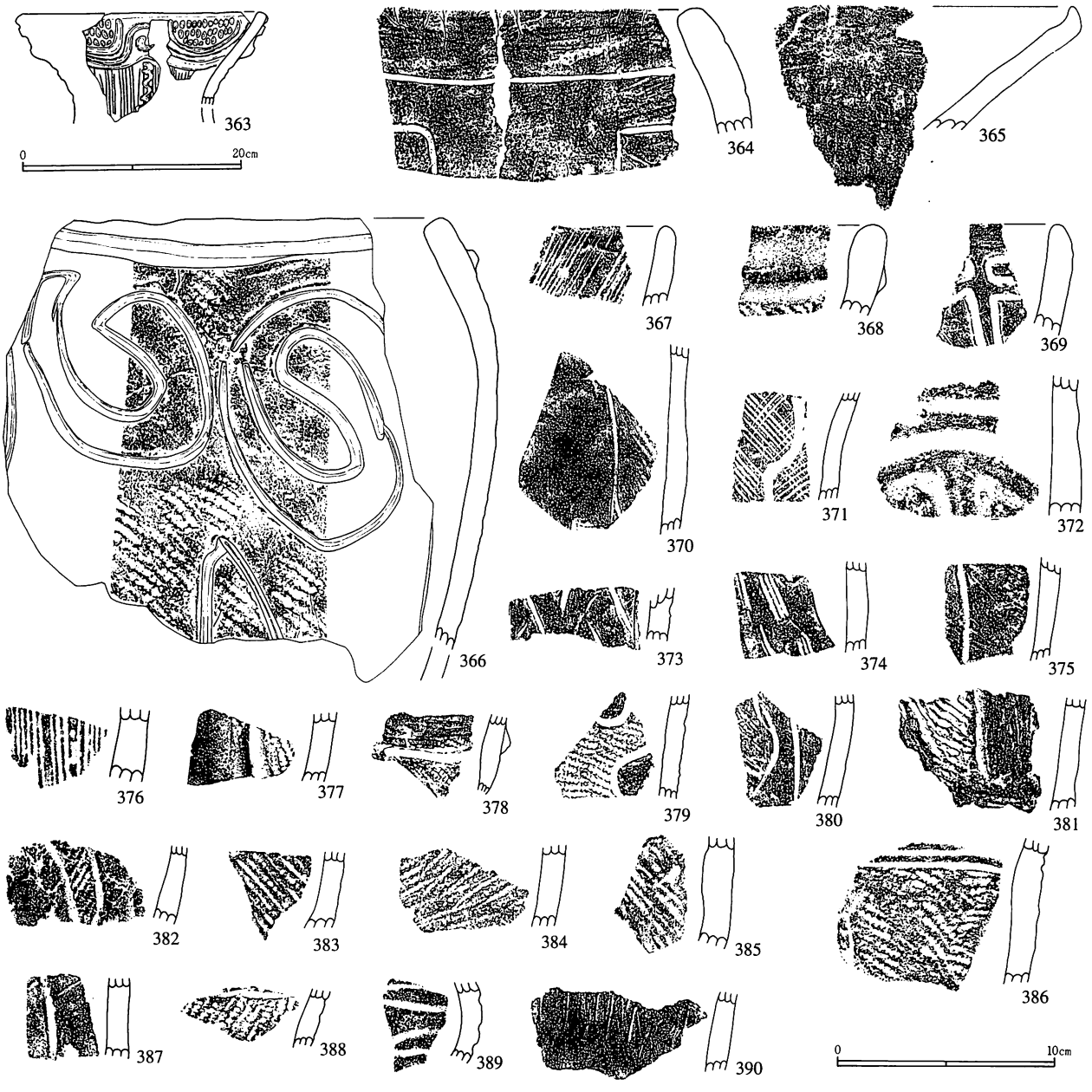


第40図　２号集石土坑

第41図　１号・２号集石土坑出土土器



第42図　１号配石



第43図　1号配石出土土器

第4節　配石と出土遺物

・1号配石

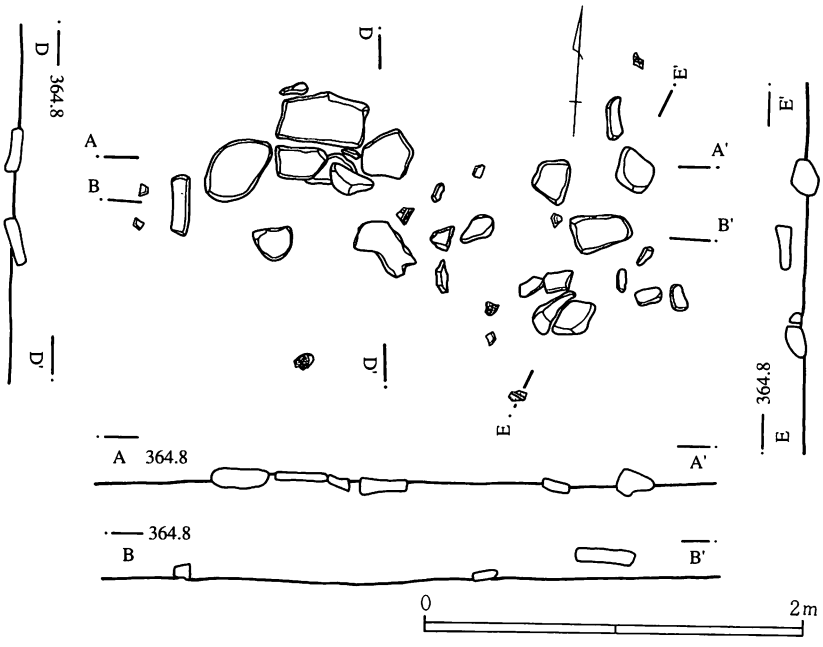
C－7グリッド。長さ3m、幅1mにわたって10～30cm大の石がまとまっていた。石は折り重なるような状況ではなく、疎らである。面としてはほぼ平らで、傾斜もない。遺物は疎らな石の間から出土している。なお、1号土坑と3号土坑は本配石に一部が掛かる状況で、下部に確認されたものである。

土器は復元実測できたものは363の1点だけである。363は曽利Ⅲ式期の深鉢上半部であるが、他の土器に比べ時期が古い。同様の大きさの破片に364や366があるが、他の小破片も含め中期終末に位置付けられよう。石器では打製石斧（982）、磨石（1097・1098）多孔石（1170）が出土している。

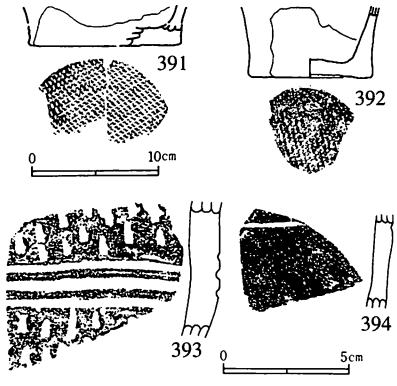
・2号配石

J－14グリッド。長さ2.5m、幅1mにわたってこれも10～30cm大の石がまとまっていた。やはり折り重なるような状況ではなく、疎らな配列で、面も平らである。

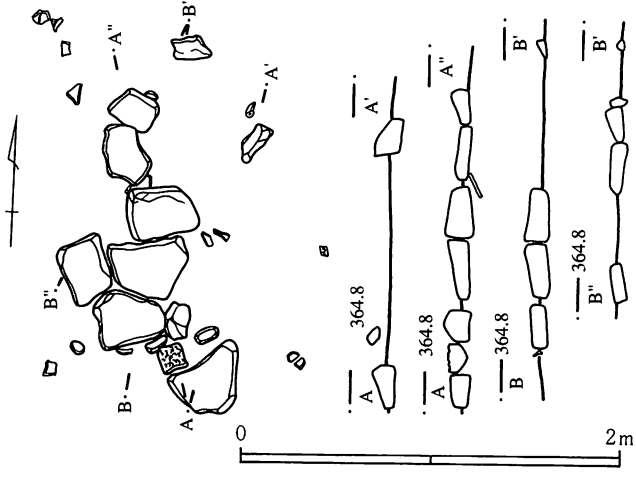
遺物は多くはない。土器は復元実測可能な底部が2点（391・392）出土しているが、張り出しの角度や圧痕



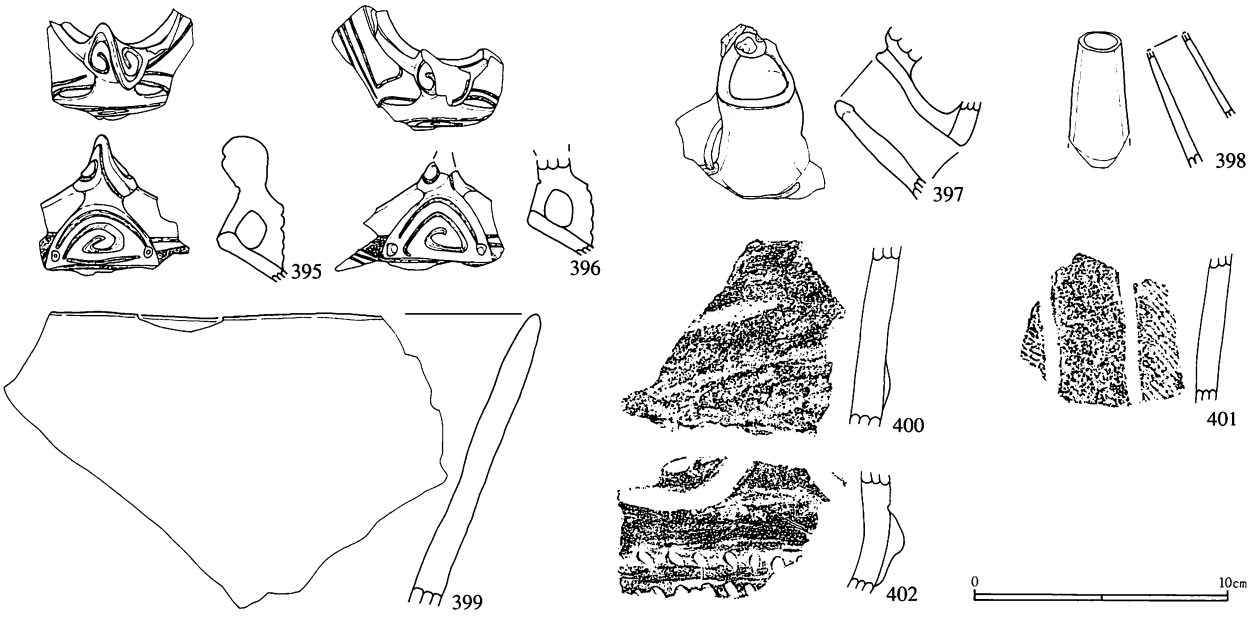
第44図　2号配石



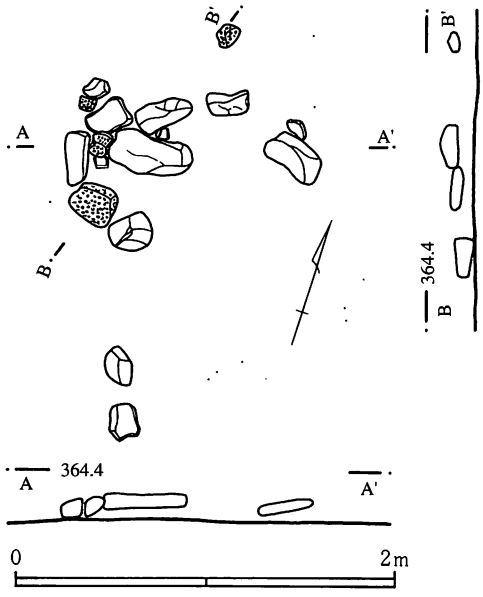
第45図　2号配石出土土器



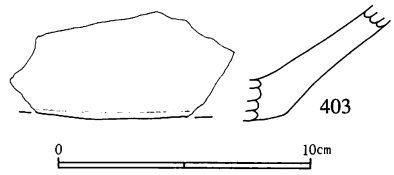
第46図　3号配石



第47図　3号配石出土土器



第48図　4号配石



第49図　4号配石出土土器

の状況等から堀之内式期のものと思われる。破片の394も同時期と考えられ、本配石の時期も該期としておきたい。石器は出土していない。

・3号配石

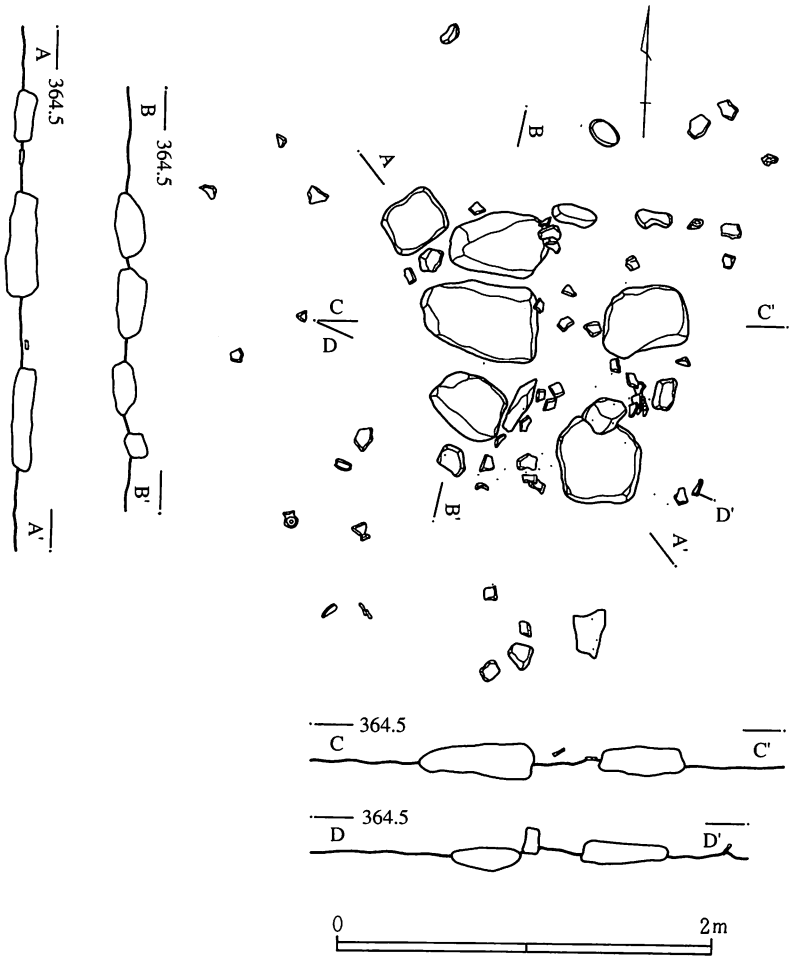
H－13グリッド。長さ1.6m、幅0.7mの範囲に平石がまとまっている。石の各辺は隣り合う平石の辺と密着するように配置されていること及び平石で構成される面が平坦であることなどから、敷石住居跡の残骸である可能性もある。

遺物は少ない。土器は注口土器の破片が目立つが、395・396は堀之内Ⅱ式～加曽利B式、397は堀之内Ⅰ式、398も堀之内Ⅱ式～加曽利B式に位置付けられよう。399～402は中期後半～末と思われ、時期の違いが大きい。配石の時期も特定しにくい。石器は出土していないが、熔岩（1332）が出土している。

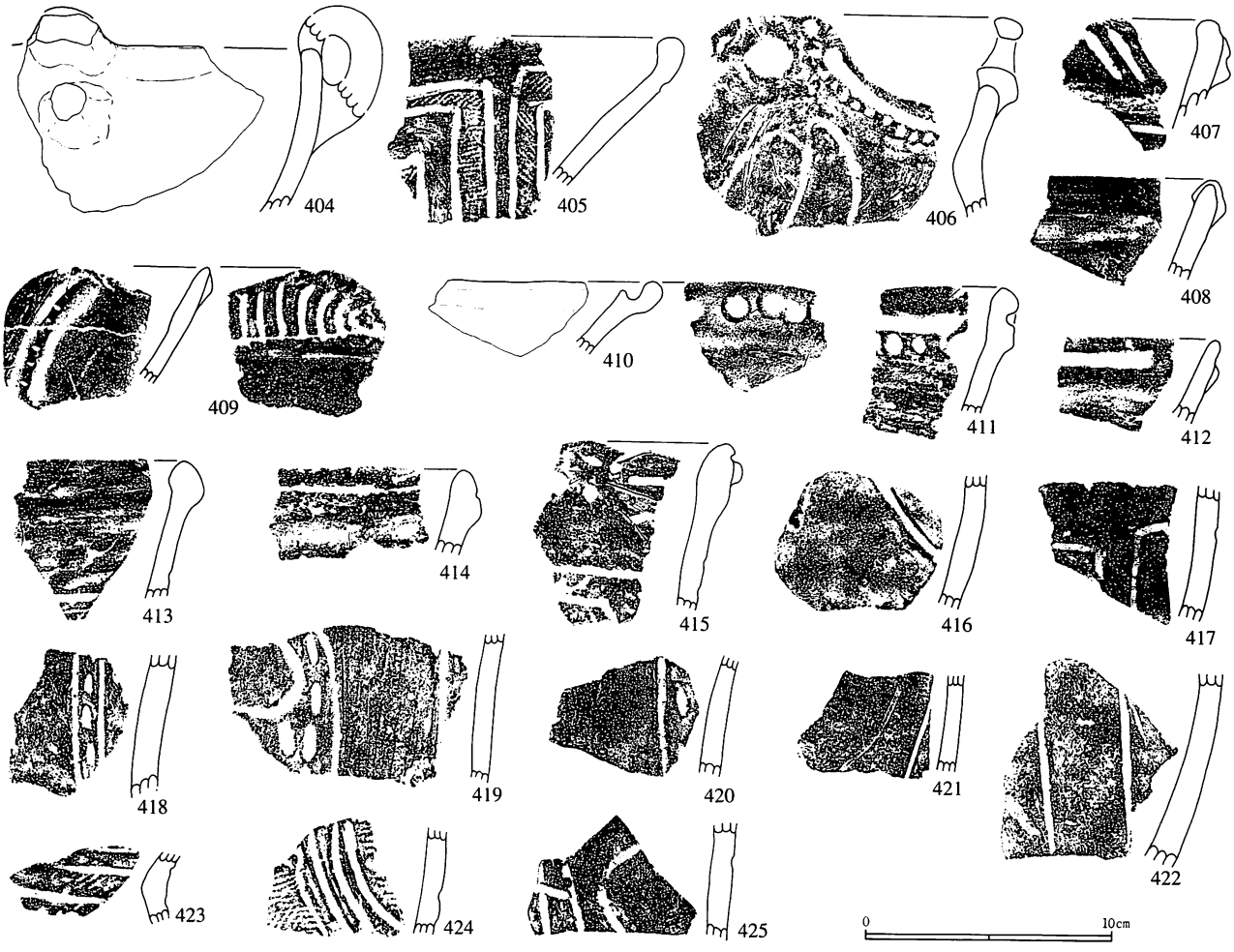
・4号配石

D－5グリッド。径1.2mの範囲内に10～50cm大の石を疎らに配したもので、配置の状況からは前述の3号配石のような住居跡の残骸という可能性は考えられない。

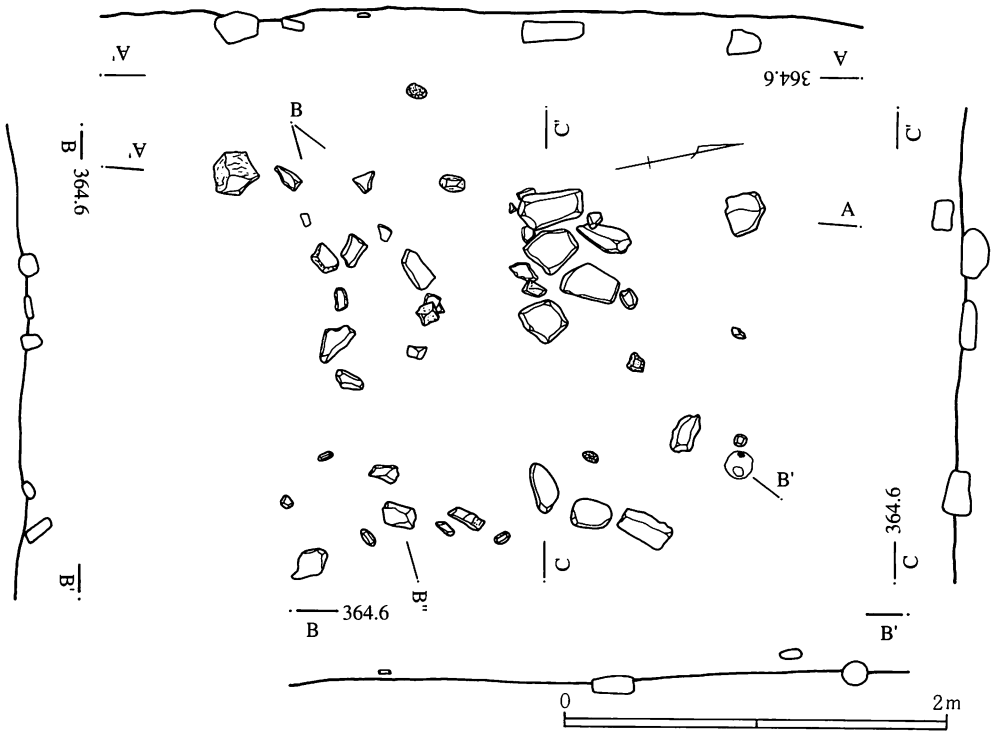
遺物は周辺から土器が小破片となって出土しているが、確実に本遺構に伴うとも言えず、配石中央の石の下部から出土した1点（403）のみを図示する。急激に開く底部片で、器厚から中期後半かと思われる。石器は出土していない。



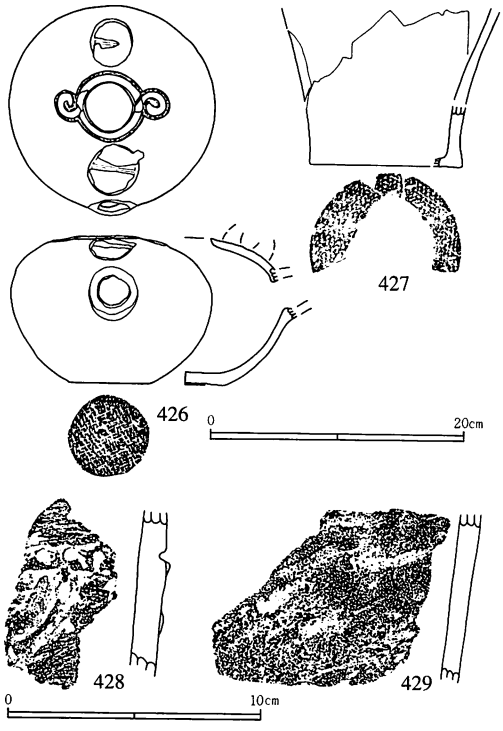
第50図　5号配石



第51図　5号配石出土土器



第52図　6号配石



第53図　6号配石出土土器

・5号配石

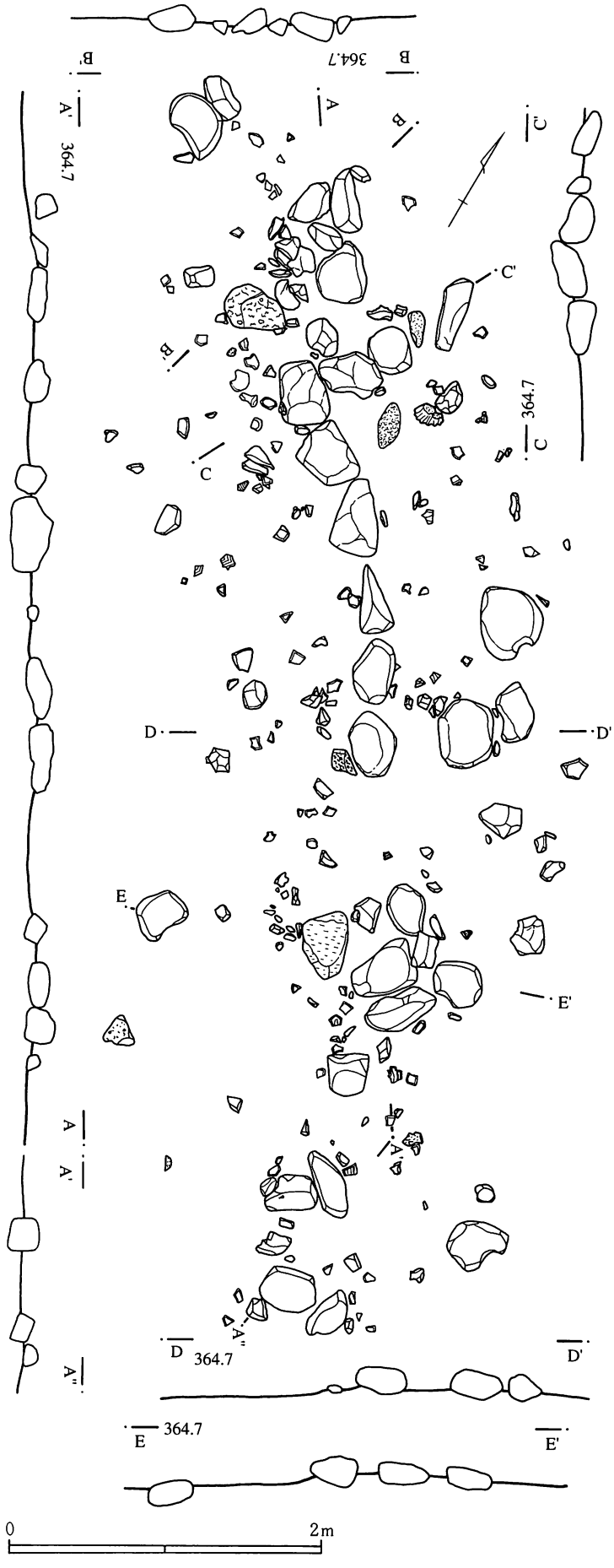
E－14グリッド。長さ2m、幅1.5mの範囲に30～60cm大の平石6個を配したもので平石間は間隔が離れている。その間隔が広すぎることや間隙への小石のはめ込みがないことなどから敷石住居跡の残骸とは考えられない。しかし、平石によって構成される面はフラットである。

遺物は比較的多く平石周辺から出土している。土器は407～412、424など堀之内式も含むが、称名寺式が多い。本配石の時期は称名寺式期としておきたい。石器では石鏃(1212)、石錘（1304）が出土している。

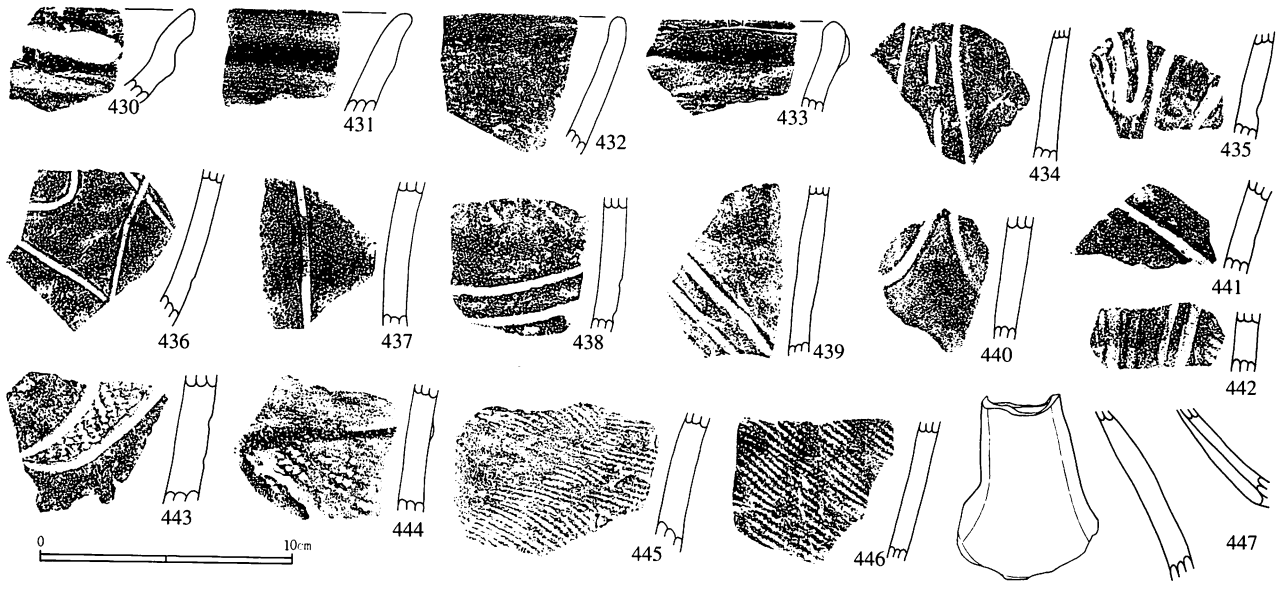
・6号配石

D－17グリッド。3m×2.5mの範囲に、河原石や角礫が混ざって散布している。石の密集度は極めて疎である。30cm大のものも6・7個存在するが、10～20cm程度のものが多い。遺物も少ない。

土器では、本遺構北東端に注口部を欠損した注口土器（426）が確認された。427は4点以上の破片が接合したものであるが、これらは堀之内Ⅱ式期に位置付けられよう。428、429も同時期であろう。石器では磨石（1099）



第54図　7号配石



第55図　7号配石出土土器

が出土している。

・7号配石

B～D－17・18グリッド。今回確認された配石遺構のなかで最大のものである。8m×3mの範囲に10～50cm大の石を配したもので、配石によって構成される面はほぼ平らである。本配石に用いられた石は必ずしも平石ではない。また、石の配列を意識して行い、部分的ではあるが、しっかりした並びも見られる。遺物は配石の間や周辺から細片となって多く出土している。

土器は、復元できるものはなく、破片の一部を図示したが、有文のほとんどは加曽利EⅣ式と称名寺式である。石器では石錘（1305）が出土している。

・8号配石

B・C－15・16グリッド。6m×4.5mの広い範囲に疎らに平石が確認される。特に配列に規則性は認められず、敷石住居跡の残骸とは考えにくい。石どうしの密着は数箇所で確認でき、それぞれが小規模な配石という捉え方ができない訳でもない。しかし、個々を個別の配石として括るとなると、それぞれに含み難い単独の石も想定せざるを得ず、やむなくひとくくりにして配石としたものである。

遺物はほとんど無く、土器はわずかに5点が図示できたに過ぎない。ほとんどが堀之内Ⅱ式で、加曽利B式が1点だけ（452）含まれる。

・9号配石

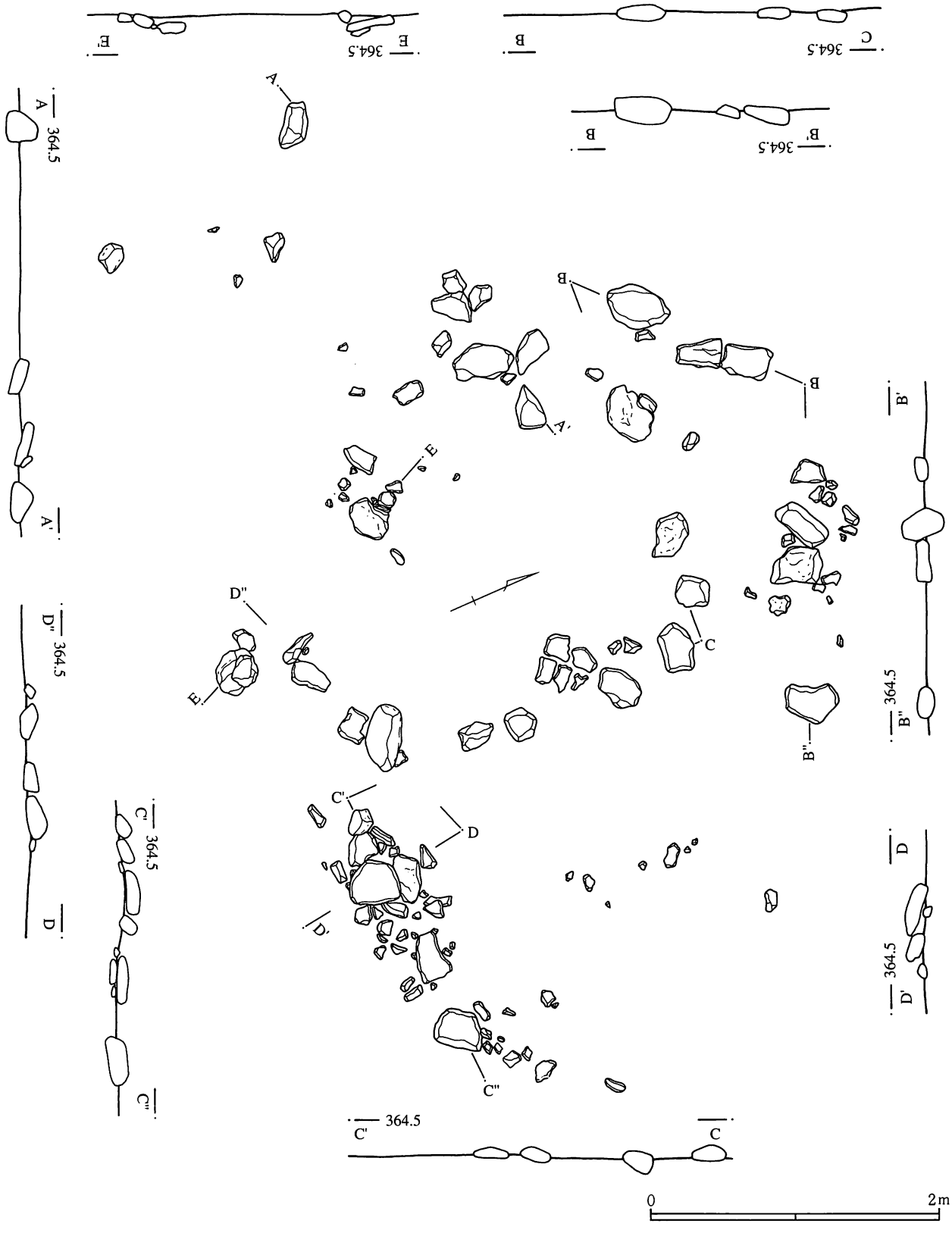
B－9グリッド。1.5m×0.7mの範囲に縦長に平石と河原石とを並べたものである。これらの石の軸とは45°ずれて、下部に長さ1m、幅0.5m、深さ0.4mの焼土を含んだ掘り込みが確認された。平石の一部はあたかもこの掘り込みに蓋をしたかのようである。

土器（453）はこの平石に乗るかたちで出土した。厚さから曽利V式と思われる。石器では磨石（1100）が出土している。

・10号配石

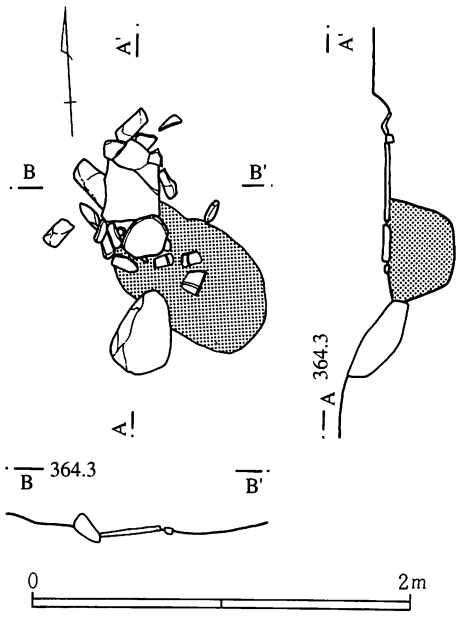
F－15グリッド。1.3m×1.1mの狭い範囲に石を集中したもので、20cm以下程度の小礫が多い。小礫だけをみると0.7mほどは列を成しているかのようにも見受けられる。本配石と同レベルあるいはそれより下部から土器が多く出土しており、土器の広がりは配石より広い。

土器のうち、図示したものでは454と455が同一個体で、曽利Ⅲ式である。456は磨きも丁寧で堀之内式期に位置付けられよう。破片では称名寺及び堀之内式の破片が多く、復元資料と時期的にも整合せず、配石の時期も決定しがたい。石器は出土していない。

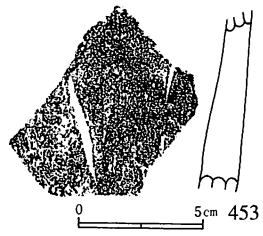


第56図　8号配石

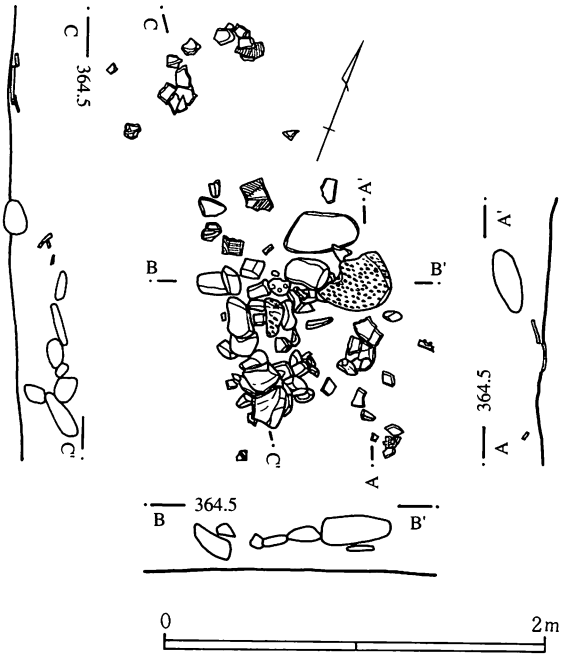
第57図　8号配石出土土器



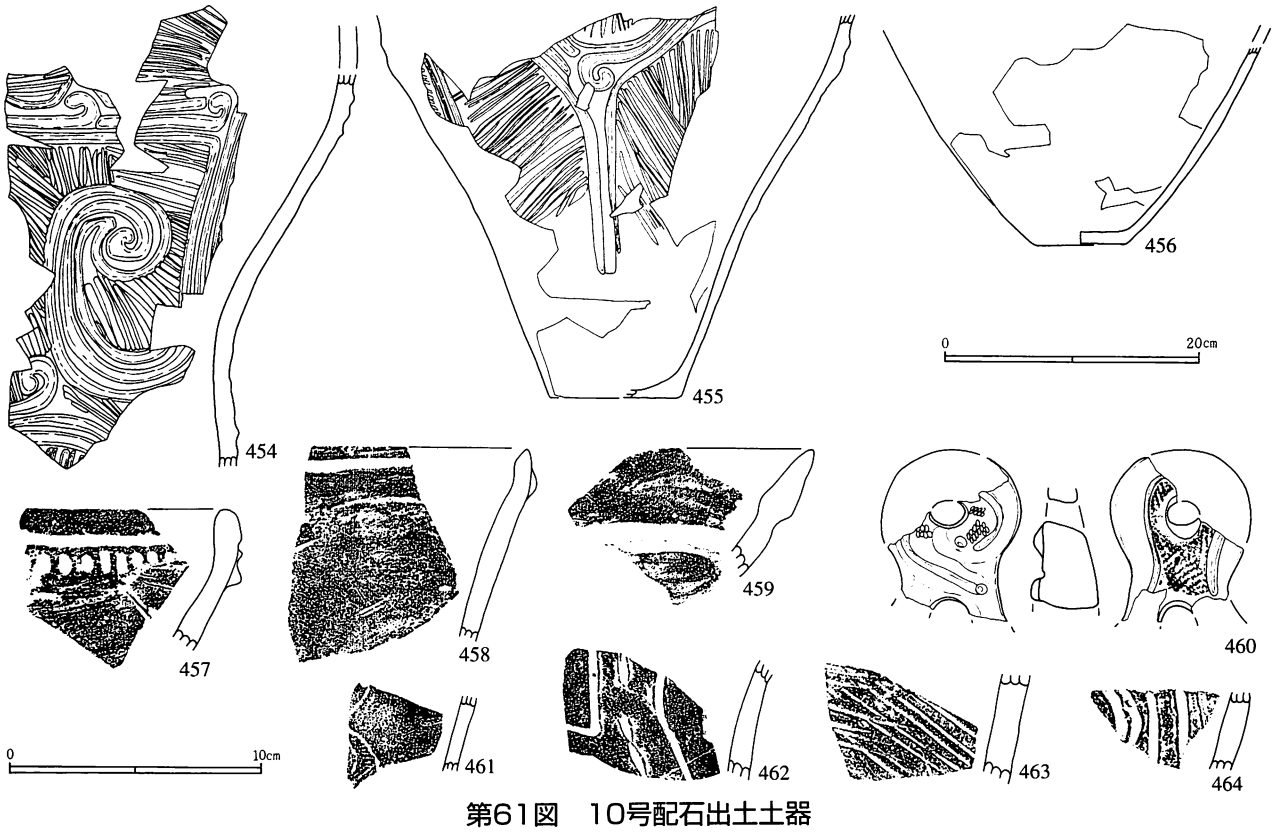
第58図　9号配石



第59図　9号配石出土土器



第60図　10号配石

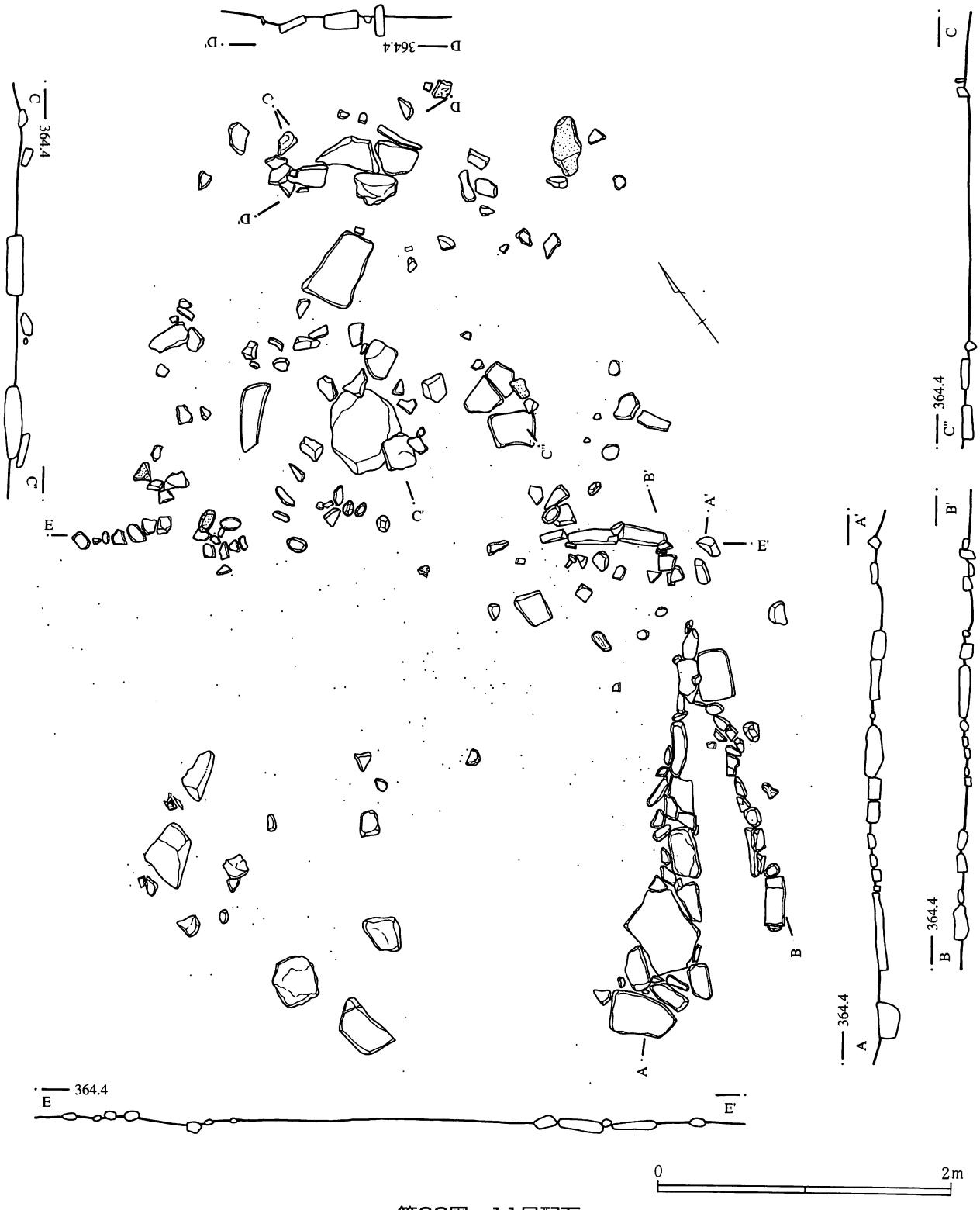


第61図　10号配石出土土器

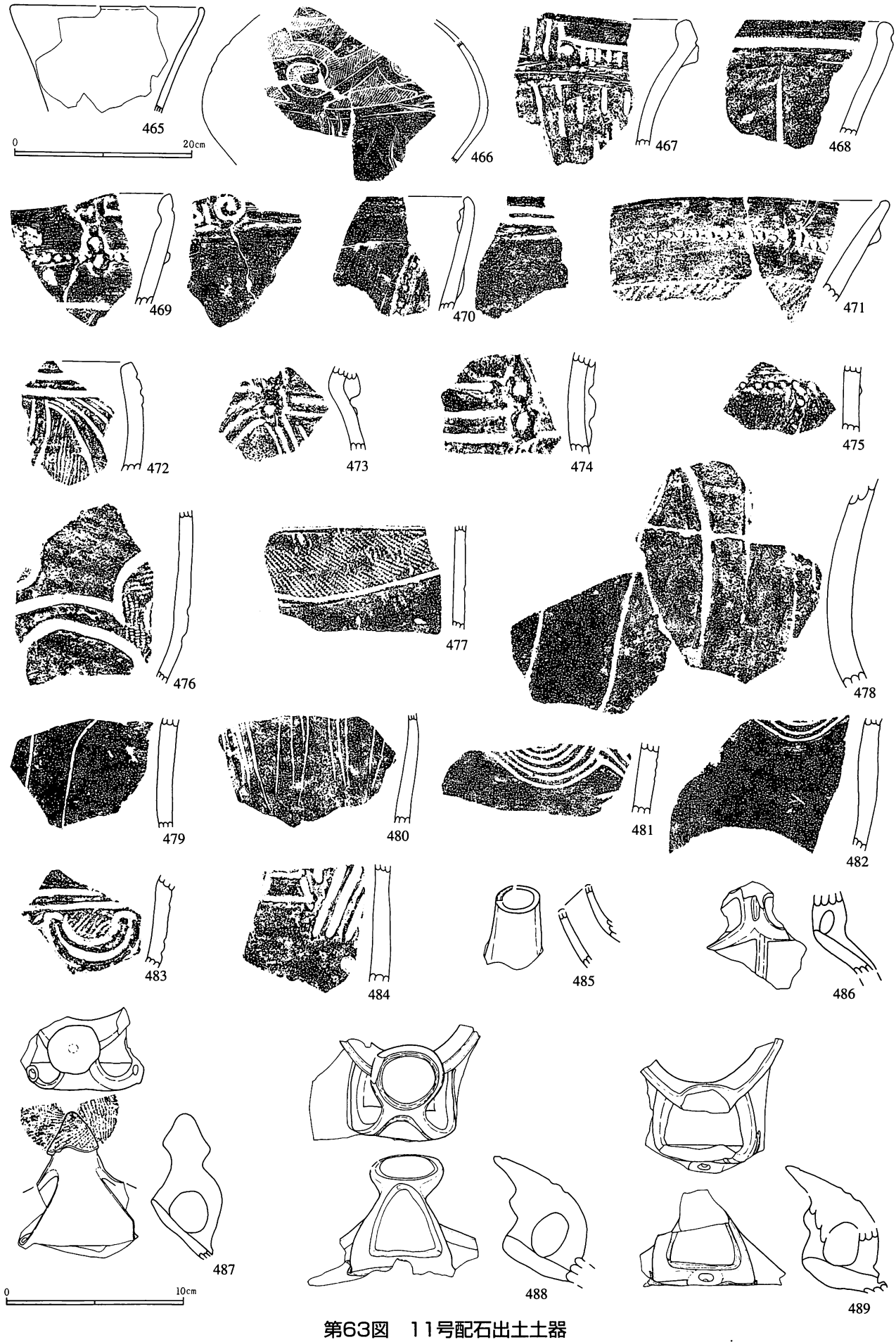
・11号配石

Ｂ・Ｃ－18・19グリッド。本配石は、確認段階では住居と思われた。図中のエレヴェーションＡ－Ａ’、Ｅ－Ｅ’ラインの確認で方形の敷石住居跡が想定されたのであるが、居住部と想定される部分に炉が確認されないこととＡ－Ａ’ラインの途中からＶ字形にＢ－Ｂ’ラインの石列が延びることが確認されたことにより、住居跡ではなく、配石であると判断し変更したものである。そして、その範囲であるが、Ｅ－Ｅ’ラインの北東側に平石が確認されており、それらを含めてまとめてここで報告することにする。

明らかな石列は前述のＡ・Ｂ・Ｅの３本だけであるが、いずれも平坦に構成される。個の石列を構成する石



第62図　11号配石

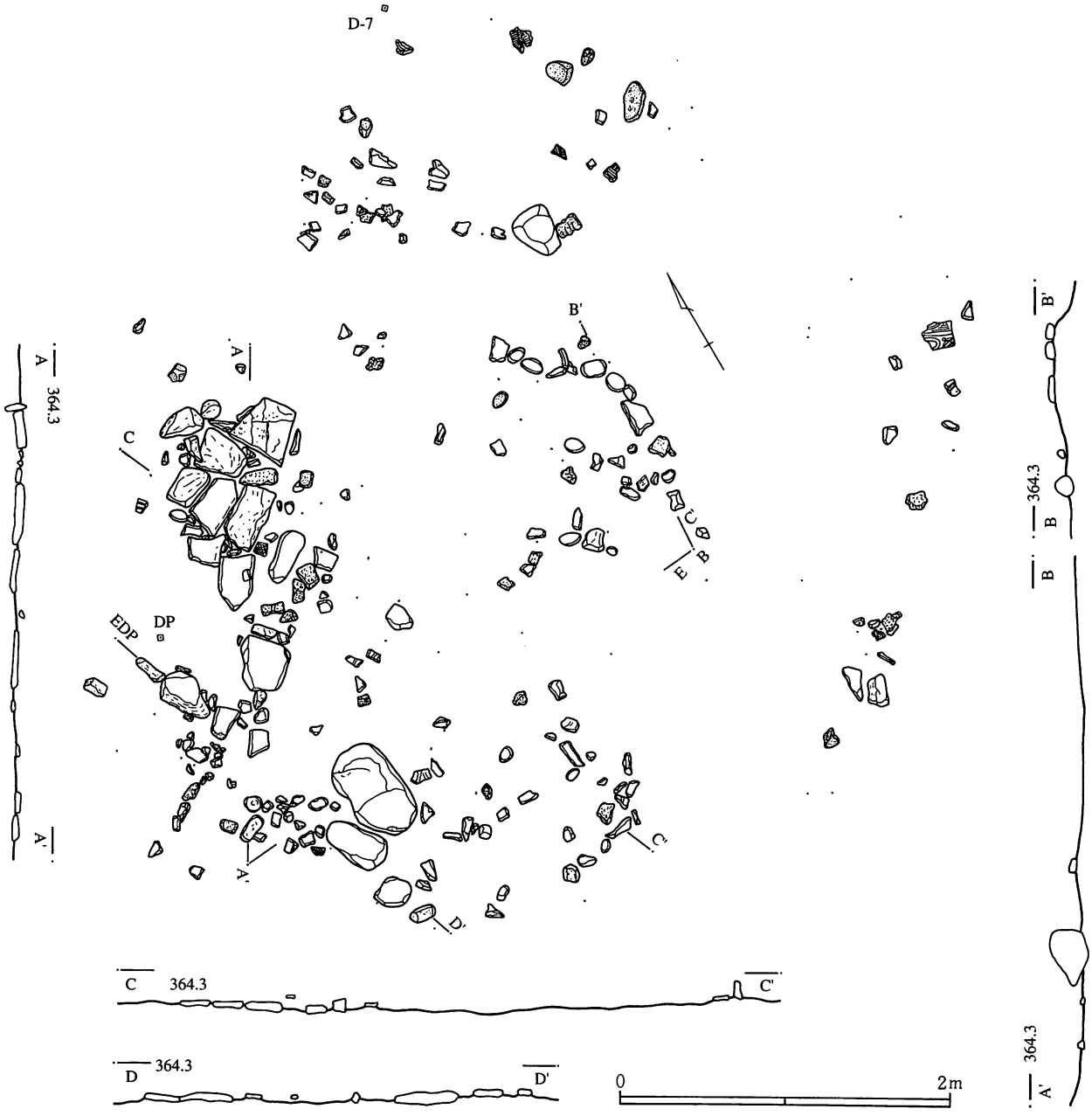


第63図　11号配石出土土器

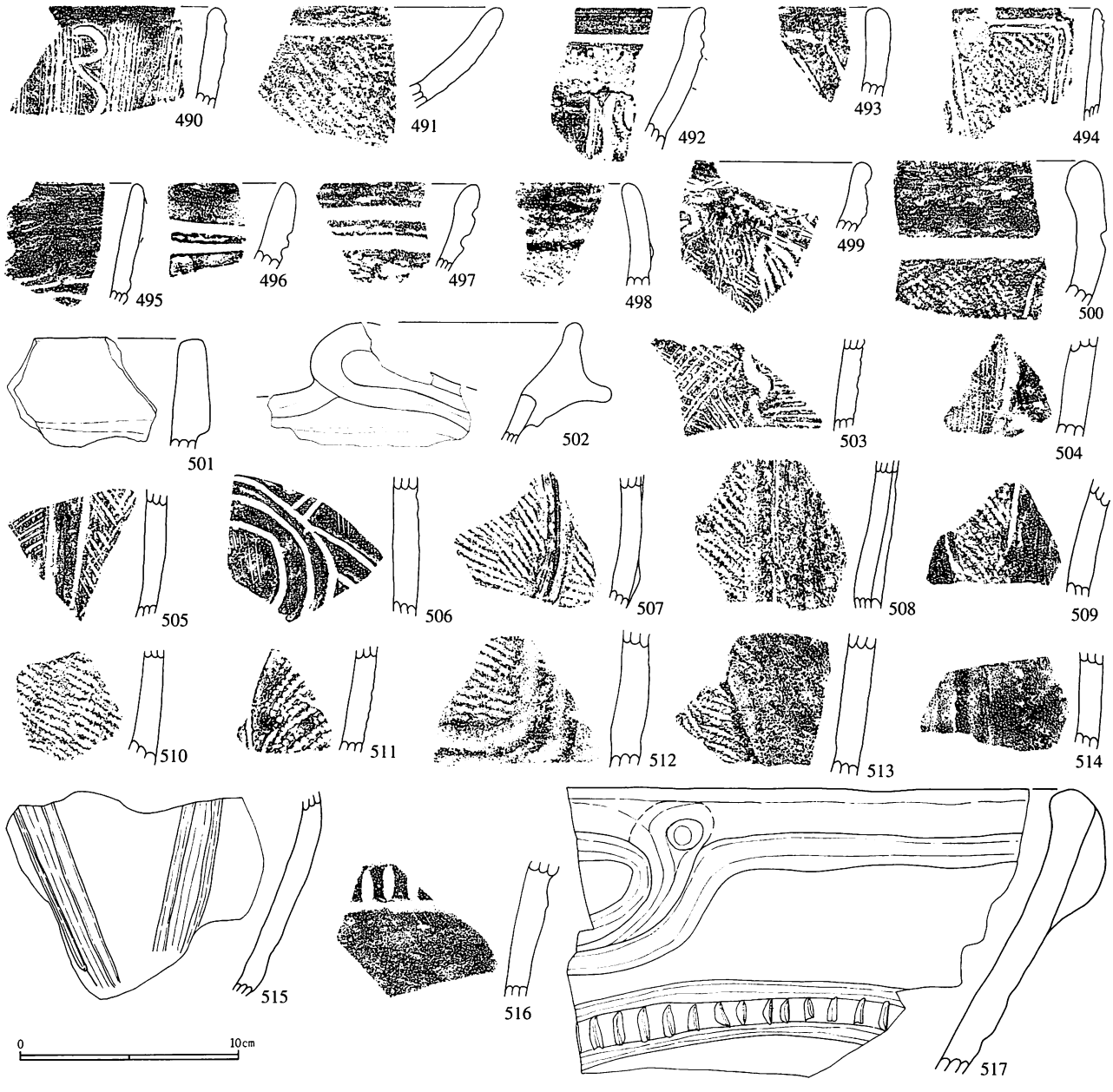
はＢ・Ｅラインでは小型のものが多く、しかも石の長径をライン方向に合わせて配置されているのに対し、Ａラインは石列ではあるものの50cm大の平石を含み、別の平石は長径をラインに直行させるような配置となっておりある程度の面を構成しようとしたとも考えられる。カギ形に配置された石列の内側部分には10～30cm大の石が数個確認されるだけである。

Ｅライン北東側の配石は50cmを超える平石も含まれるが、やはり疎らである。この部分では特に石どうしの密着や規則的配列などは認められない。

遺物はカギ形の内側から多く出土してた。土器は小破片ばかりで数点の接合が見られた程度である。復元実測可能となったものはわずか２点（465・466）で、堀之内Ⅱ式である。他の破片資料についても、堀之内Ⅰ式が混ざるものの、堀之内Ⅱ式が主体でどであるが、とくに注口土器破片が目立つ。石器では打製石斧（978～980）、磨製石斧（1044）、石皿（1056）、磨石（1095・1096）、ドリル（1273）、石錘（1301・1302）が出土している。



第64図　特殊配石



第65図　特殊配石出土土器

・特殊配石遺構

D－7グリッド。本配石は平石のまとまりとその付近の小礫から成る。平石は長さ1.2m、幅0.8mの範囲に20～40cm大のもの8個がまとまって面を構成している。その南西にも若干の平石が確認されるが、極めて疎らである。さらにその先には60cm大の石があるが、これは平石ではなく30cmちかい厚みがある。その大石までのまとまりに対し、東側では磨石や凹石あるいは使用の痕跡は不明瞭ながらも円形の河原石などが点在している。部分的にはそれらが直線上に配置されているようにも見える。

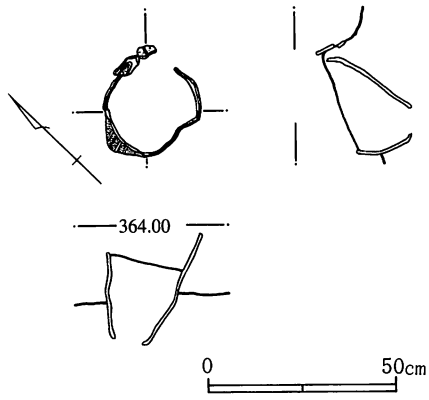
遺物は土器・石器とも他に比べ豊富である。土器は本配石の全面から出土するが、一部配石下から出土したものもある。曽利Ⅳ式、同Ⅴ式、加曽利ＥⅣ式、堀之内式など時期や系統にばらつきがあるが、資料の多さから本配石の帰属時期を中期末としておきたい。なお、517は配石下から出土したもので中期中葉に溯るものであろう。516も同一個体と思われる。

石器は磨石を中心に非常に多い。スクレイパー（1032）、磨製石斧（1046）、磨石（1074～1079・1128～1135・1155・1161・1162）、石鏃（1211）などが出土している。

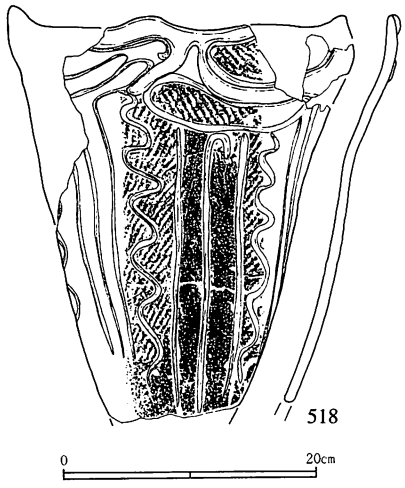
第５節　単独埋甕

Ｅ－17グリッド。今回の調査で確認された唯一の単独埋甕である。正位に埋設され、底部は欠損しているが、欠損部を磨いている。埋甕掘り方は確認できなかったが、恐らく埋設土器ギリギリの大きさの掘り方だったものと思われる。埋甕内部の土に焼土、カーボン等は認められず、遺物も出土していない。

土器（518）は加曽利ＥⅡ式深鉢で、底部の欠損面には磨きが施されている。



第66図　単独埋甕

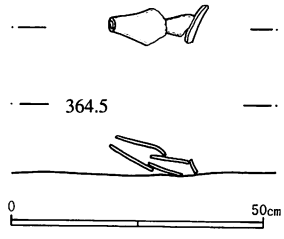


第67図　単独埋甕土器

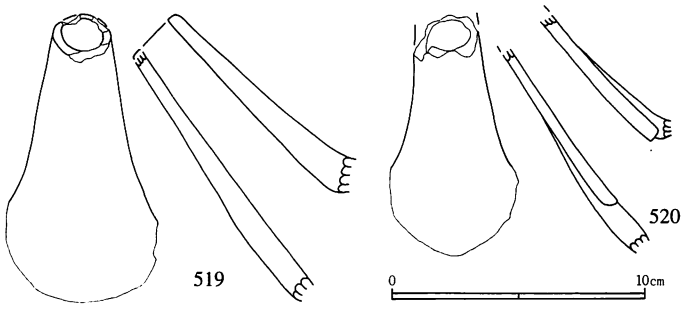
第６節　Ｅ－17グリッド注口部特殊出土状況

Ｅ－17グリッドにおいて、注口土器注口部が特殊な出土状況を示している。519が注口部の下部側を上にし、その中に520が、これも下部を上にして差し込まれていた。当然520の方が一回り小さい。また、520は先端部を欠損している。

これらが破損品を利用したものか、あるいはこのために注口部のみをもぎ取ったのかは判断できないが、当然意識してこのような状況にしたものである。確認段階では真横ではないものの、倒れた状態であるが、このような入れ子状態にされた段階では立てられていた可能性もある。注口土器でも、特に注口部は男性自身を示すものとされており、生殖・豊饒などを願ったものなのであろうか。この出土状況はこれだけで確認されており、付近に丸石や焼土などは確認されていない。



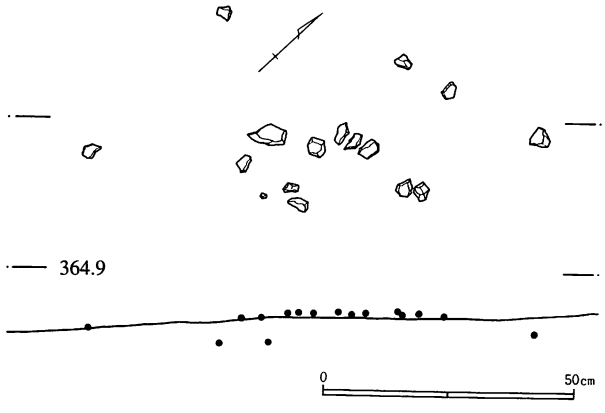
第68図　Ｅ－17グリッド注口部出土状況



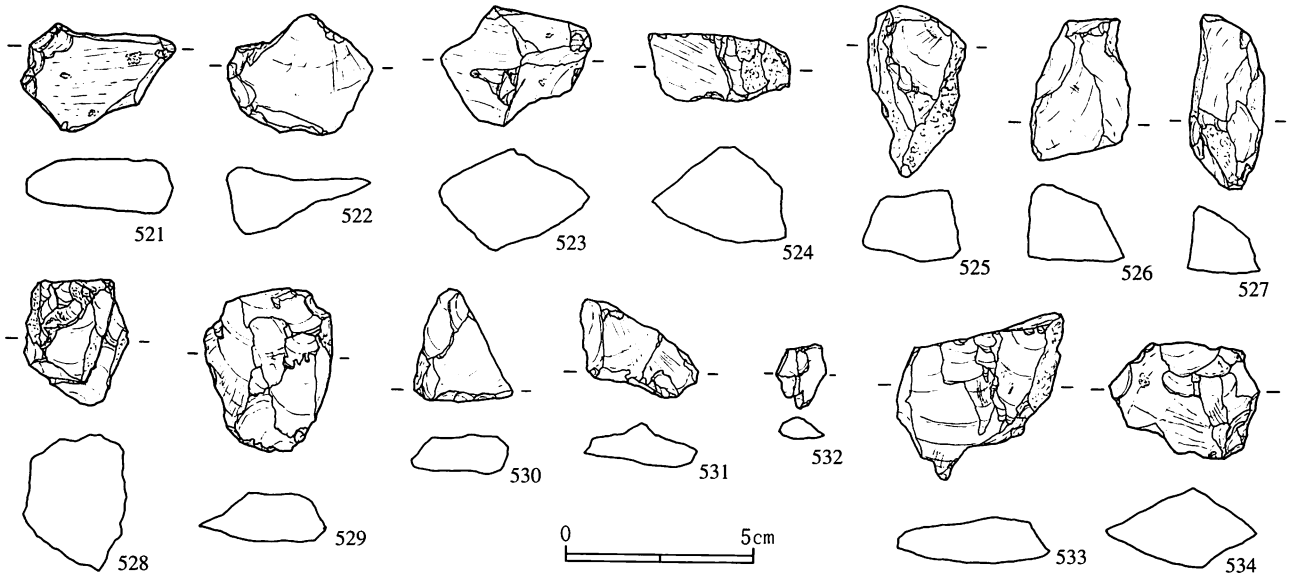
第69図　Ｅ－17グリッド注口土器

第７節　Ｉ－８グリッド黒曜石集中出土状況

Ｉ－８グリッド内において、黒曜石の集中が確認された。長さ90cm、幅50cmの範囲内に大小の黒曜石16個がまとまっていた。まとまりとして捉えられるのはそのうちの11個で、他の５個はまとまりからは20cm程度離れている。レベル差はほとんど無く、５cm以内である。特にこのあたりに掘り込みがないか精査したが、全く確認できなかった。いずれの資料にも加工や使用の痕跡は認められない。黒曜石自体の状況は、521は全体が発泡状態で、他の資料は533を除いて節理面が中心部分にあったり、大きなクラックが入っていたりしており石器作成にはよい状態とは言えない。しかし、533は５cmを超える大きさでまだ利用可能な剥片であり、他の資料についてもスクレイパー程度なら利用で



第70図　Ｉ－８グリッド黒曜石集中状況



第71図　Ｉ－８グリッド黒曜石

きないことはない。このような状況や集落内の位置、あるいは黒曜石だけという条件からは廃棄とは考えにくい。つまりは地表面に自然に置かれたものと解釈できよう。とすれば、それが意識的なものであったかどうかが問題となる。土坑内への意図的埋置などの資料は散見されるが、集落内の平地に置く、あるいは撒くという行為が行われたと積極的に述べる程の資料的蓄積はなく、今後の資料増加を待ちたい。

個々の重量を記しておく。521:15.76g・522:16.12g・523:21.89g・524:17.64g・525:18.98g・526:19.94g・527:14.02g・528:32.34g・529:20.84g・530:9.91g・531:7.43g・532:1.10g・533:24.03g・534:21.53g

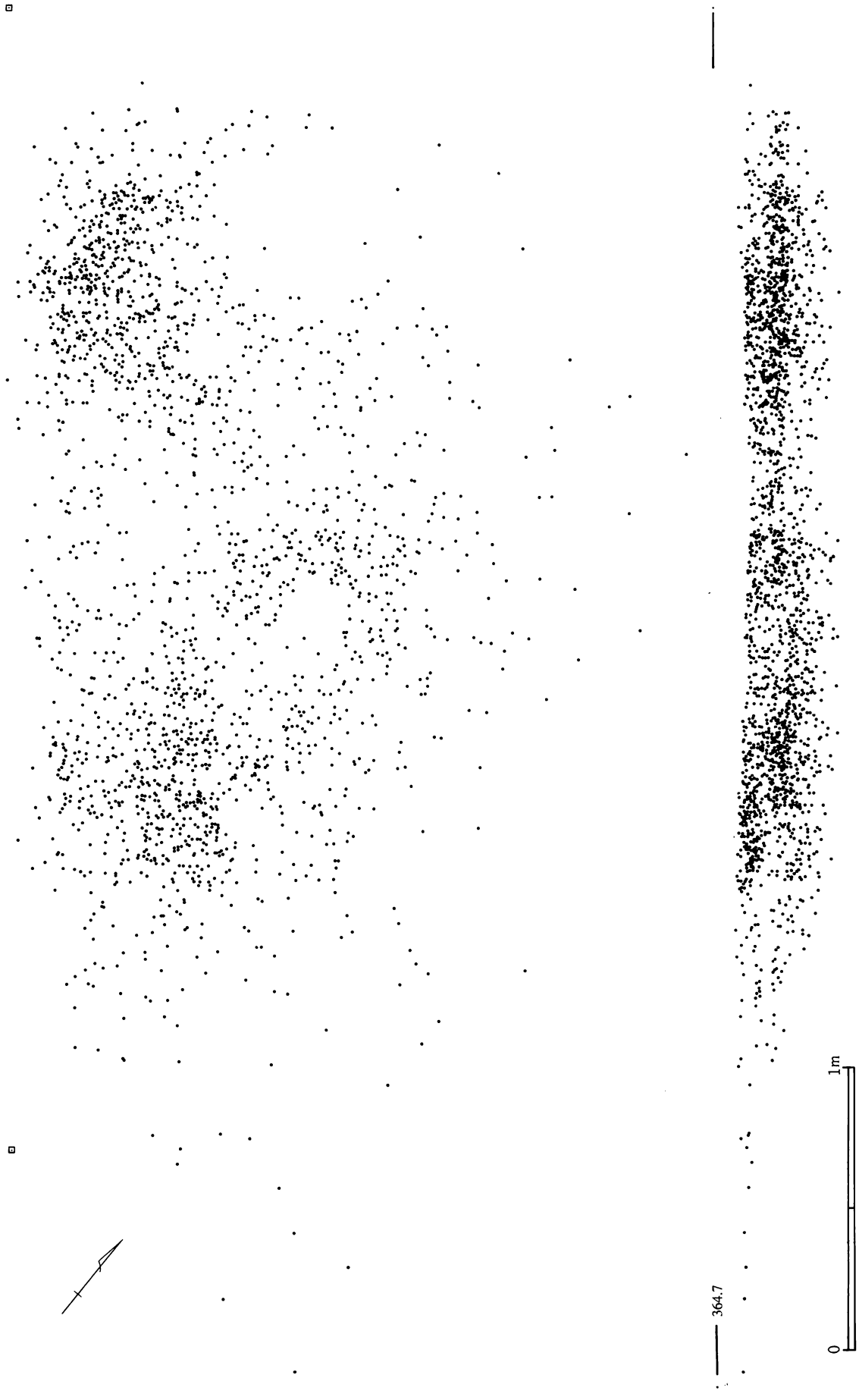
第８節　Ｊ－16グリッドドングリ集中遺構

Ｊ－16グリッド内においてドングリの集中が確認された。調査区西端において、重機による表土剥ぎが若干浅かったため、さらに小型重機による剥ぎ取りを行った。剥ぎ取りを進めるうちに、炭化物が多くなることに気付き、重機による剥ぎ取りを中止し、観察した所それらはすべてドングリであった。そして、一見してドングリには少なくとも２種類が混ざっていることが明らかであった（詳細は第Ⅳ章第２節参照）。ドングリを含む層は、すでに一部が重機により剥ぎ取られていたわけであるが、幸いなことにその廃土は一定の場所にまとめてあったため、すべて水洗を行い回収した。そして、それと併行して測量を開始した。

確認できるドングリは、完形であれ破片であれ１点としてドット化し、レベルを記録して取り上げた。取り上げの点数は中途からではあったが、約2,000点である。

その平面・垂直分布を示したものが第72図である。測量段階では全く確認されなかったが、どうやらドングリは浅い皿状の掘り込みの中にまとまっていたと考えられる。調査区域の関係で、一部の調査に止まったわけであるが、疎らな部分まで入れれば、４ｍ以上の広がりが認められる。しかし、分布の濃い部分に限定してみるとおおむね１ｍ以下程度のまとまりとして捉えられ、しかも、垂直分布ではそれぞれが30㎝の深さで弧を描いている。このことから、数基の浅いピットが存在し、その中に詰まっていたものと推定される。

本資料はＣ14による年代測定を行い、約3,500年前の数値を得ている（詳細は第Ⅳ章第３節参照）が、これは縄文時代後期中葉に位置付けられる。県内ではこれまで縄文時代の低湿地遺跡は調査例がなく、当然ドングリ等が詰まった状態での確認例もない。今回の資料が貯蔵か廃棄かは即断できないが、縄文時代のドングリピットとして県内では初めての確認と言えよう。



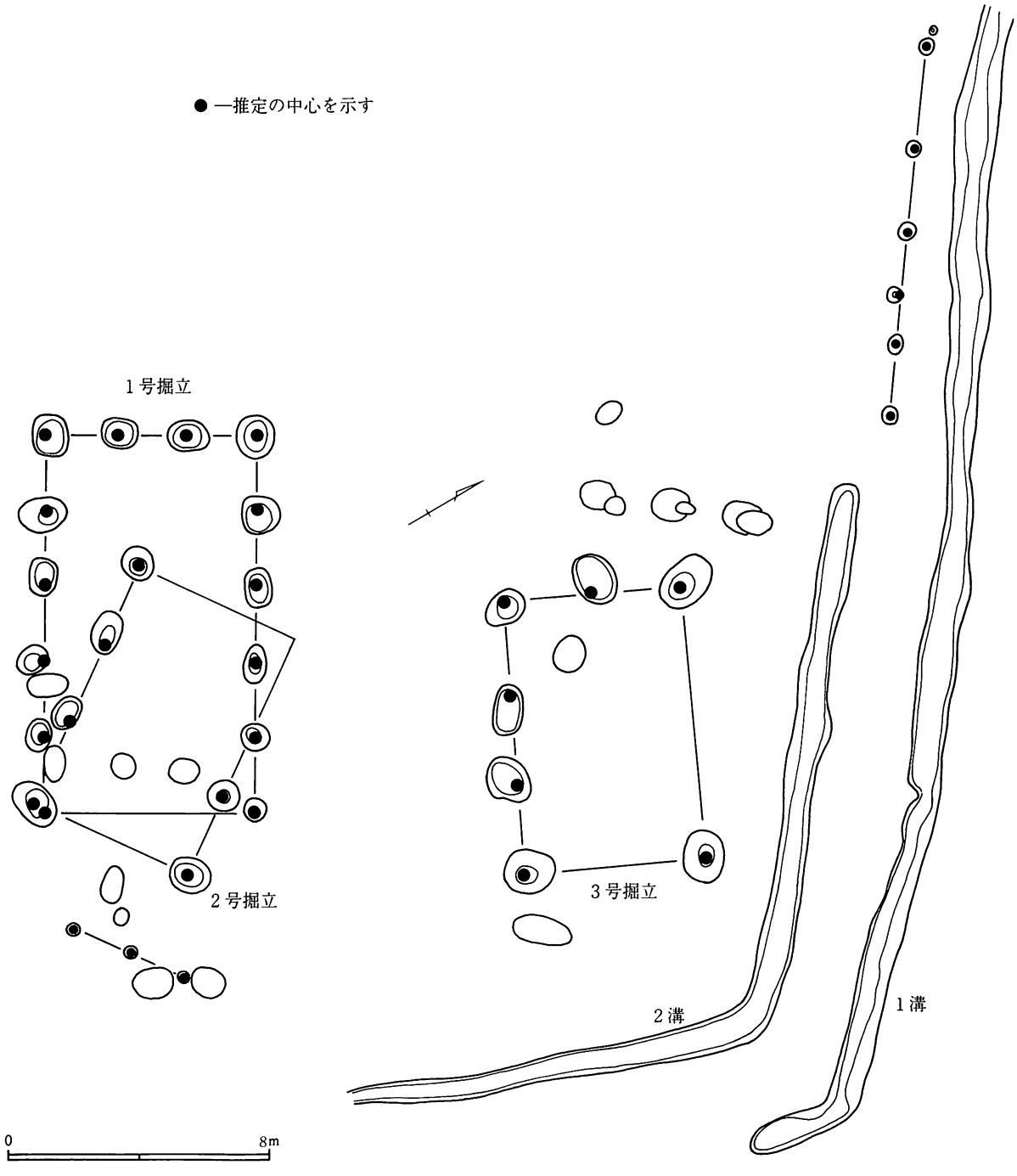
第72図　J－16グリッドドングリ集中区

第９節　掘立柱建物跡・溝と出土遺物

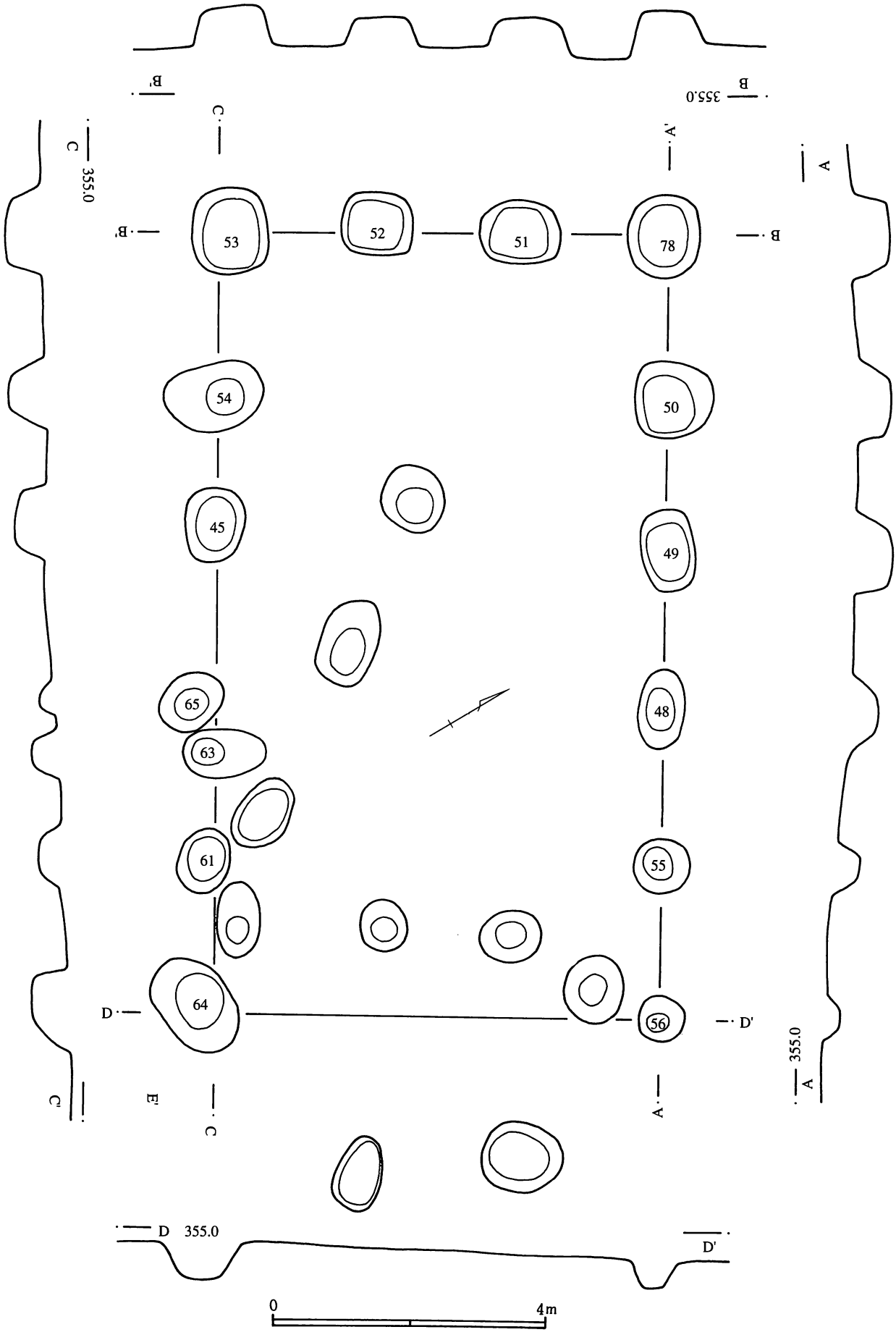
調査区東半において掘立柱建物跡３棟とＬ字状に曲がる溝２条、そのほか柵列などと平安時代の遺構群が確認されている。以下に遺構毎に記述するが、該期の遺物については、わずかに遺構（土坑・溝内）から出土したものもあるものの圧倒的に遺構外が多い。

・１号掘立柱建物跡

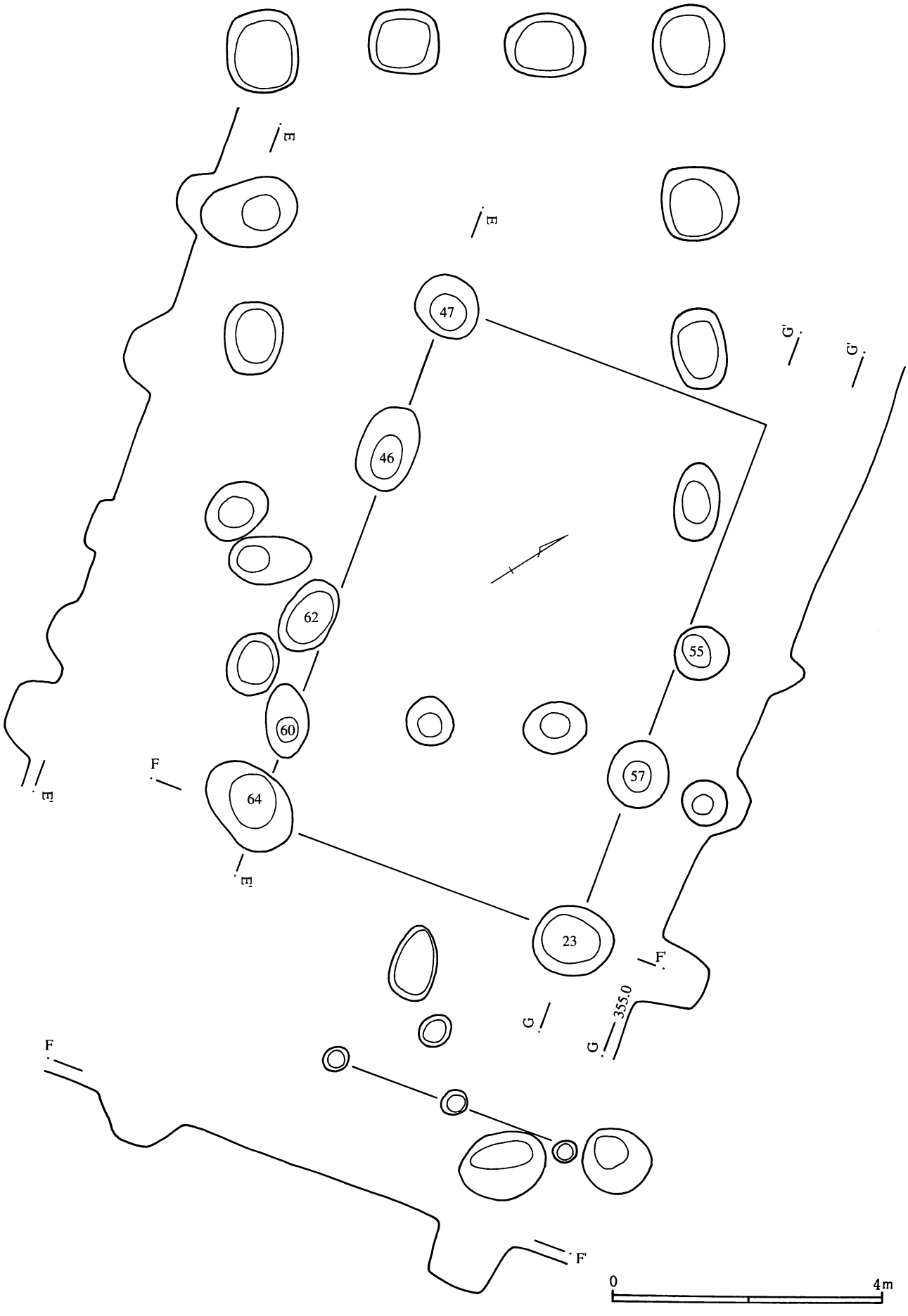
56－55－48－49－50－78（Ａ）、78－51－52－53（Ｂ）、53－54－45－65（または63）－61－64（Ｃ）、64－56（Ｄ）号の土坑がそれぞれ直線に並ぶ。建物の大きさは五間×三間である。南側のＤライン上には全く柱穴が確認されていない。あるいは付属の施設等があることも考えられ、その場合さらに南に位置する23号や26号土坑がそれであることになろう。しかし、23号土坑は、明らかに後述する２号掘立柱建物跡の柱穴のひとつである。これらの柱穴のうち、65・56・64号の３基の土坑からは土師器や須恵器が出土している。なお、柱穴間



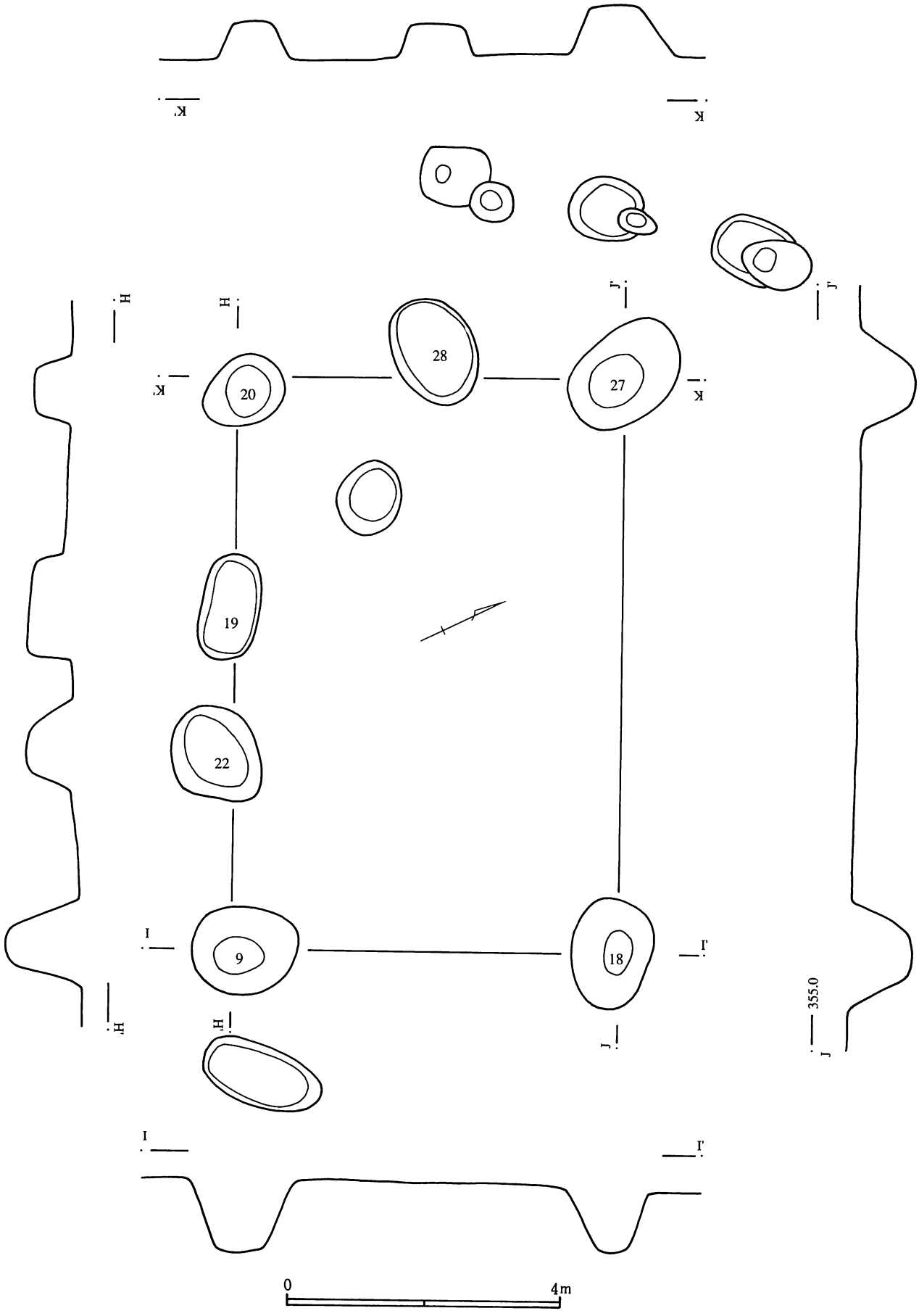
第73図　掘立柱建物跡・溝位置図



第74図　1号掘立柱建物跡



第75図　2号掘立柱建物跡



第76図　3号掘立柱建物跡

の距離は、中心部でみると、最もきれいに並んでいるＢラインで2.19m、Ａラインで2.27mを計る。当然のことながらＣラインは、65号（または63号）の部分でやや乱れるが、Ａラインと同じ間隔である。なおいずれの土坑も坑底に何らの施設も認められない。

・２号掘立柱建物跡

１号と位置が重複している。47－46－62－64（Ｅ）、64－23（Ｆ）、23－57－55（Ｇ）号の土坑から成る。64号と55号土坑は１号掘立柱建物跡と重複することになるが、特に坑底に小ピットや堅い面などが複数カ所確認されている訳ではない。最も土坑が等間隔にちかいかたちで並んでいるＥラインは、４基の土坑から成るため三間となる。それに直交するＦラインは両端の２基だけの確認であるが、当然その中間に想定される。建物は三間×二間ということになろう。Ｇライン上にも55号の先にもう１基の存在が予想される。柱穴間は2.6m前後と考えられる。57号と55号の間がやや狭く感じられるが、柱穴の中心部分にこだわらなければ、土坑間で2.6mの間隔は取り得る。

本掘立柱建物跡には、Ｆラインの外側に、平行する３基の小ピットが確認されており、何らかの付属施設と考えられる。小ピットは径、深さとも30～40cm程度である。同様の小ピット列は、後述するように１号溝に平行して６基確認されている。しかし、本掘立柱建物跡に付属するとしたのは、こちらの３基の小ピットは建物と平行するものの、溝とはまったく平行していないことによる。ピット間の中心でみると、その間隔は1.85mである。

本掘立柱建物跡にかかわる土坑では、64号から土師器が、63号から須恵器が出土している。

・３号掘立柱建物跡

１号と柱穴列の方向が同じで、２棟が並んで建てられていた可能性がある。20－19－22－９（Ｈ）、９－18（Ｉ）、18－27（Ｊ）、27－28－20（Ｋ）から成るが、Ｈライン上に位置する10号土坑は、位置的にはライン上と見なし得るが、間隔が違うことからは柱穴列の一部とは考えにくく、ここでは掘立柱建物跡とは切り離して考えておきたい。また、Ｋラインの外側には11・12号、13・14号、33・34号の２基ずつ重なりあう土坑が一列に並ぶが、これもＫラインとは平行しておらず、掘立柱建物跡と関連付けることは困難であろう。Ｈ・Ｋラインを重視し、三間×二間の建物としておく。

本掘立柱建物跡にかかわる土坑では、19号土坑を除いたすべての土坑から遺物が出土している。土師器はすべての土坑から、須恵器は20号、27号土坑から出土している。

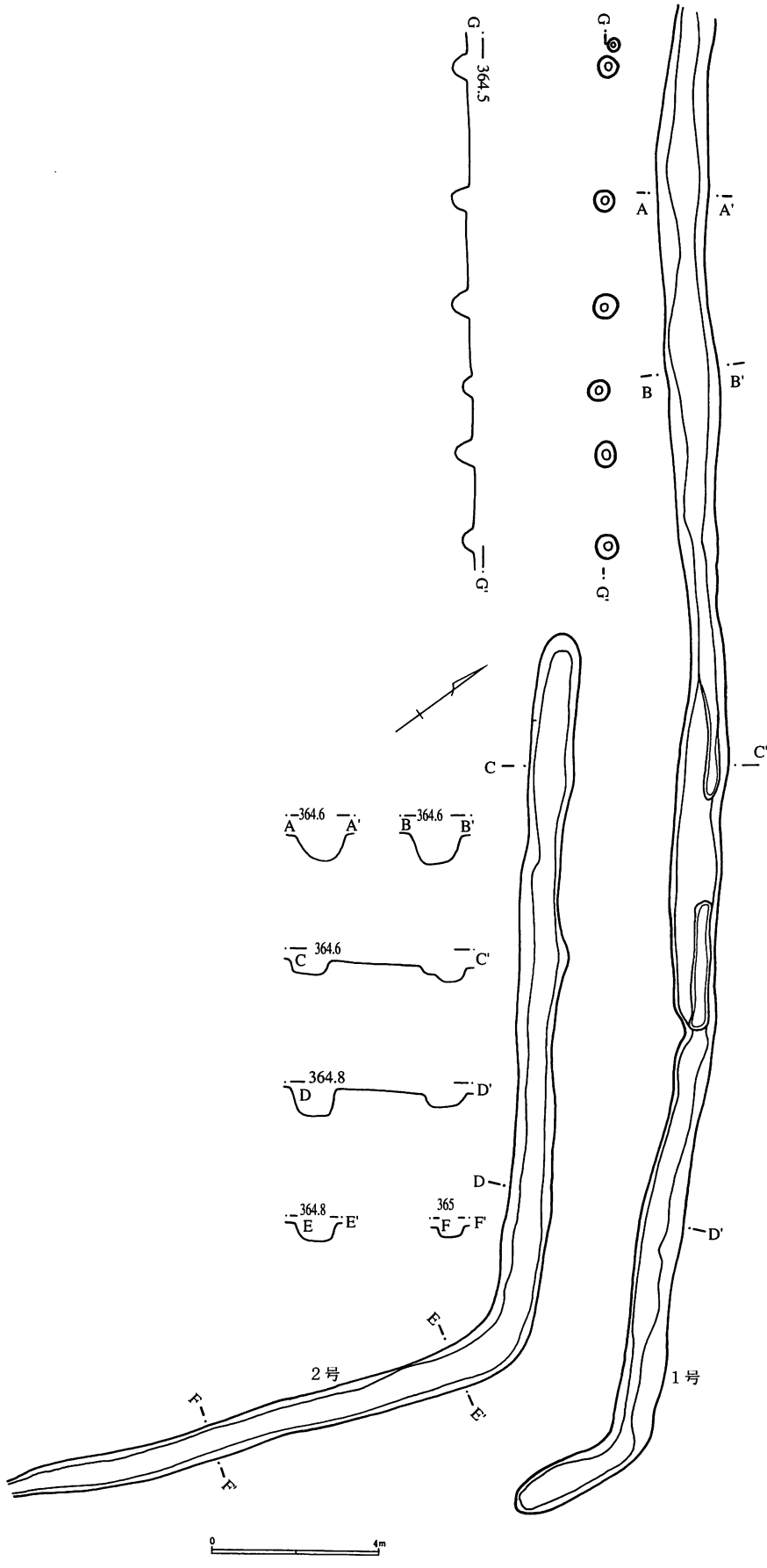
・１号・２号溝・小ピット

１号溝はＪ－２グリッドから北側に向かって掘り込みが始まり、Ｉ－２グリッド杭付近で北西方向に急角度で曲がっている。そして調査区域外まで真っすぐ伸びている。確認された長さ延べ32m、幅約１m、深さ0.3～0.5mを計る。

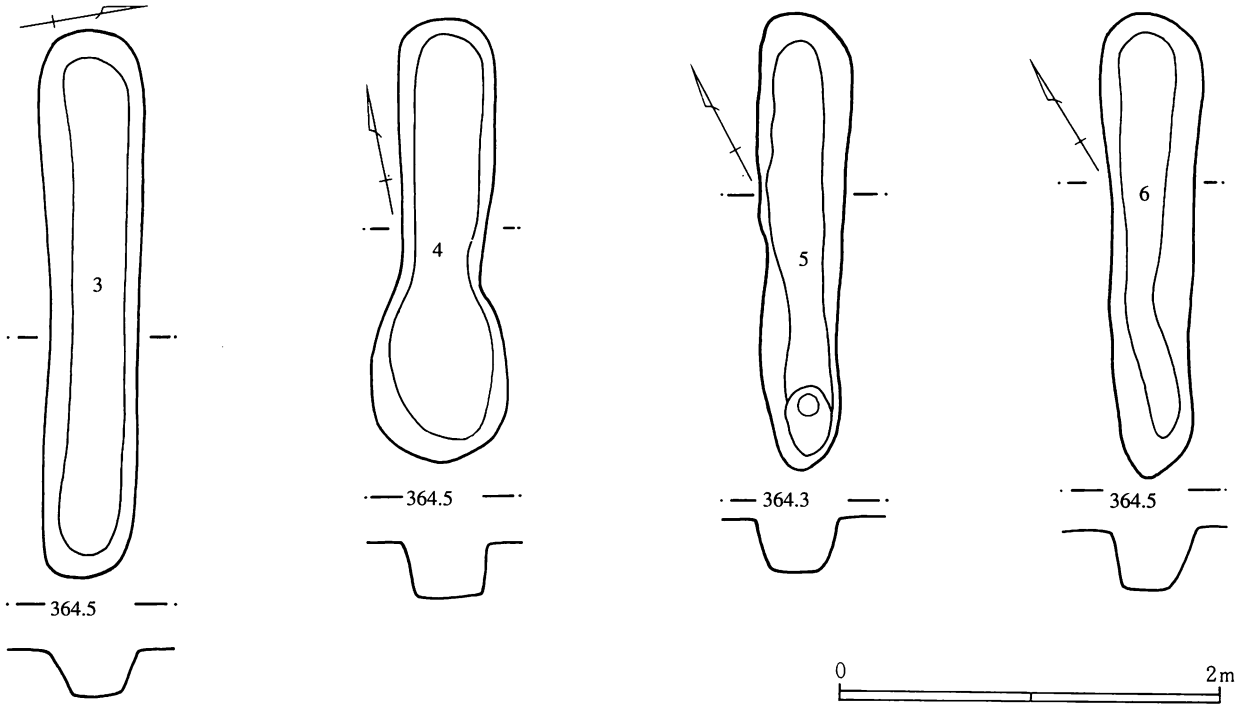
調査区域北側の道路を隔てた北側（調査区域から校舎端までは10数メートルを計る）には２棟の校舎が立っており、いずれも建築時に発掘調査を行っているが、この溝の続きは確認されていない。したがって、この溝はこの先さらに伸びるとしても校舎までの関係から、この先10数メートル以内で終結するか、あるいはさらに鍵形に曲がるかのどちらかが考えられるが、以前の調査の状況からすれば、終結する可能性が強い。

２号溝は１号溝と２m程の間隔をもって平行する溝である。やはりＩ－３グリッド杭近くで北西方向に急激に曲がっており、Ｅ－３グリッド内で終結している。反対の南側については確実な収束部分は捉えられていない。しかし、確認部分の端は本調査前のトレンチによって削られたものであるが、トレンチの断面には溝の続きが確認されなかったことから、このトレンチ内で終結するものと考えられる。それからすれば南端は確認部分から１・２m前後の部分ということになろう。したがって、２号溝は長さ約30mということになる。幅・深さは１号溝のそれと同じである。

小ピットは２号溝の先に、１号溝に平行して確認されている。７基が確認されているが、調査区端に確認された小ピットはさらに一回り小さいもので補助穴であろう。したがって、小ピット列は６基から成るものと考



第77図　1号・2号溝・小ピット群



第78図　3号～6号溝

えられる。径20～30cm、深さ20～40cmを計るが、底面にはとくに何らかの施設があるわけではない。規模や位置、並びの状況等からは柵列を想定するのが妥当であろう。

これらの溝・小ピットは、重複もなく位置的にも平行関係や並びが規則的であることから同時存在したものと考えられ、当然、前述の掘立柱建物跡と関連するものであろう。掘立柱建物跡では1号と3号が同時存在の可能性が強く、溝や柵列の規模からはこれらに伴うものと推定できよう。

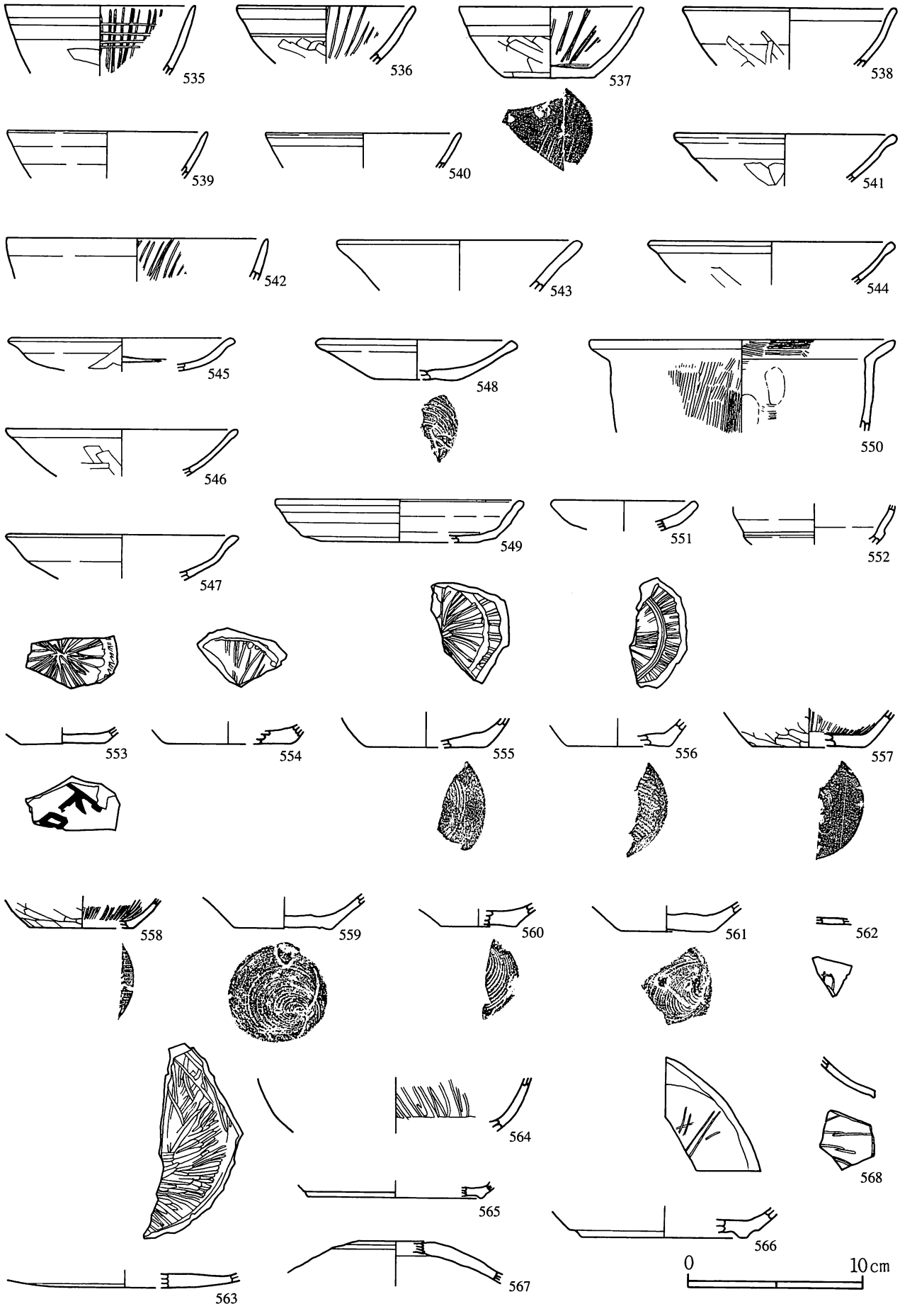
・3号～6号溝

C－4、D－4・5、E－4・5グリッド内にまとまって4条の小規模な溝が確認されている。3号が最も長く2.8mを計る。他はいずれも2.3m前後である。4条とも幅は約0.5m、深さ約0.3mである。4～6号が南北方向、3号だけがそれらに直交する方向となっている。

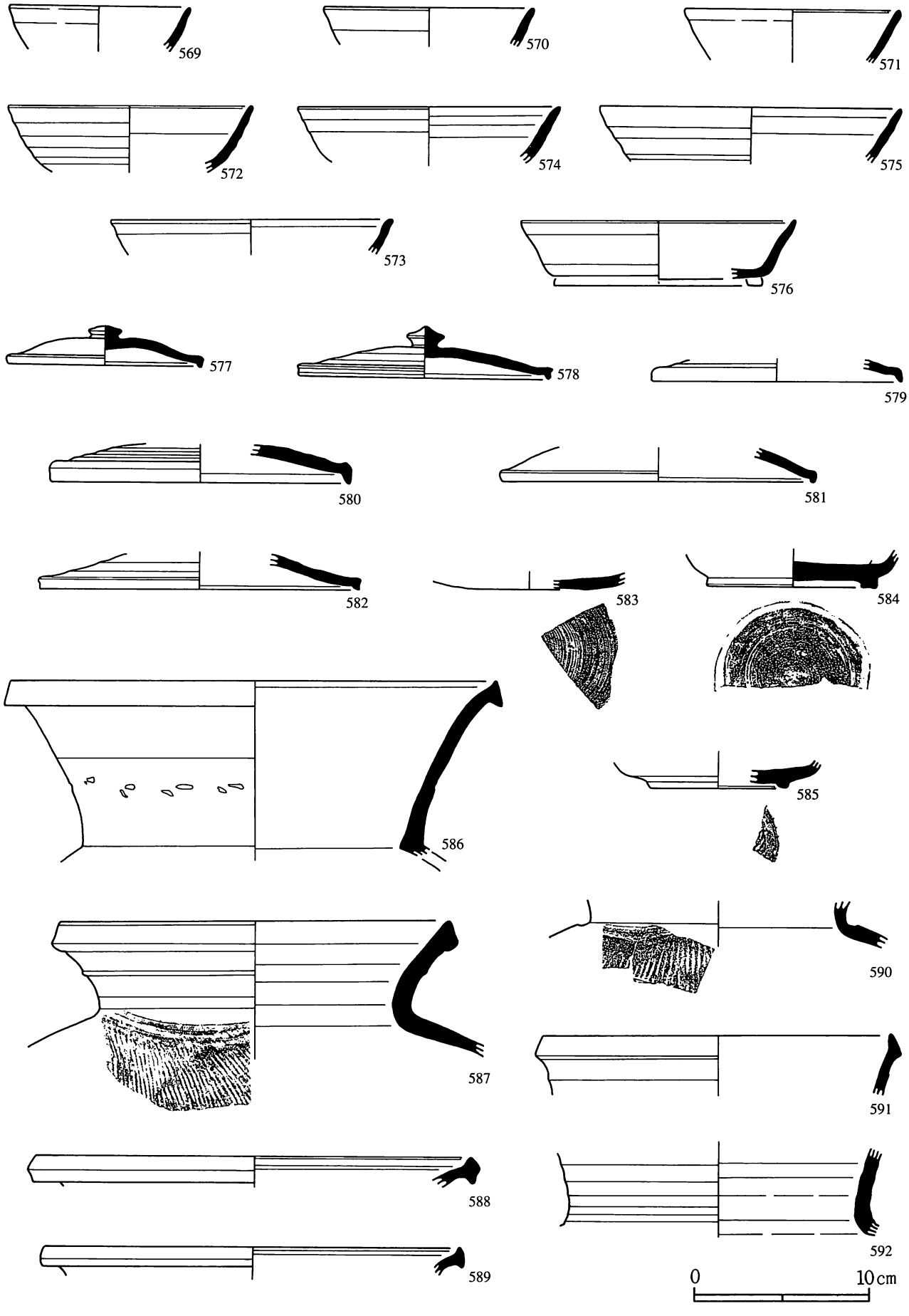
出土遺物

土師器・須恵器は調査区全体から検出されたが、その多くは調査区中央から東側と西側隅で出土している。調査区東部分では掘建柱建物跡が3棟、これらに伴うと思われるL字状の溝が2条確認されるなど、平安時代以降の遺構が検出されている。遺物はその周辺および遺構内から出土しているが、復元可能なものが少なく破片がほとんどであった。

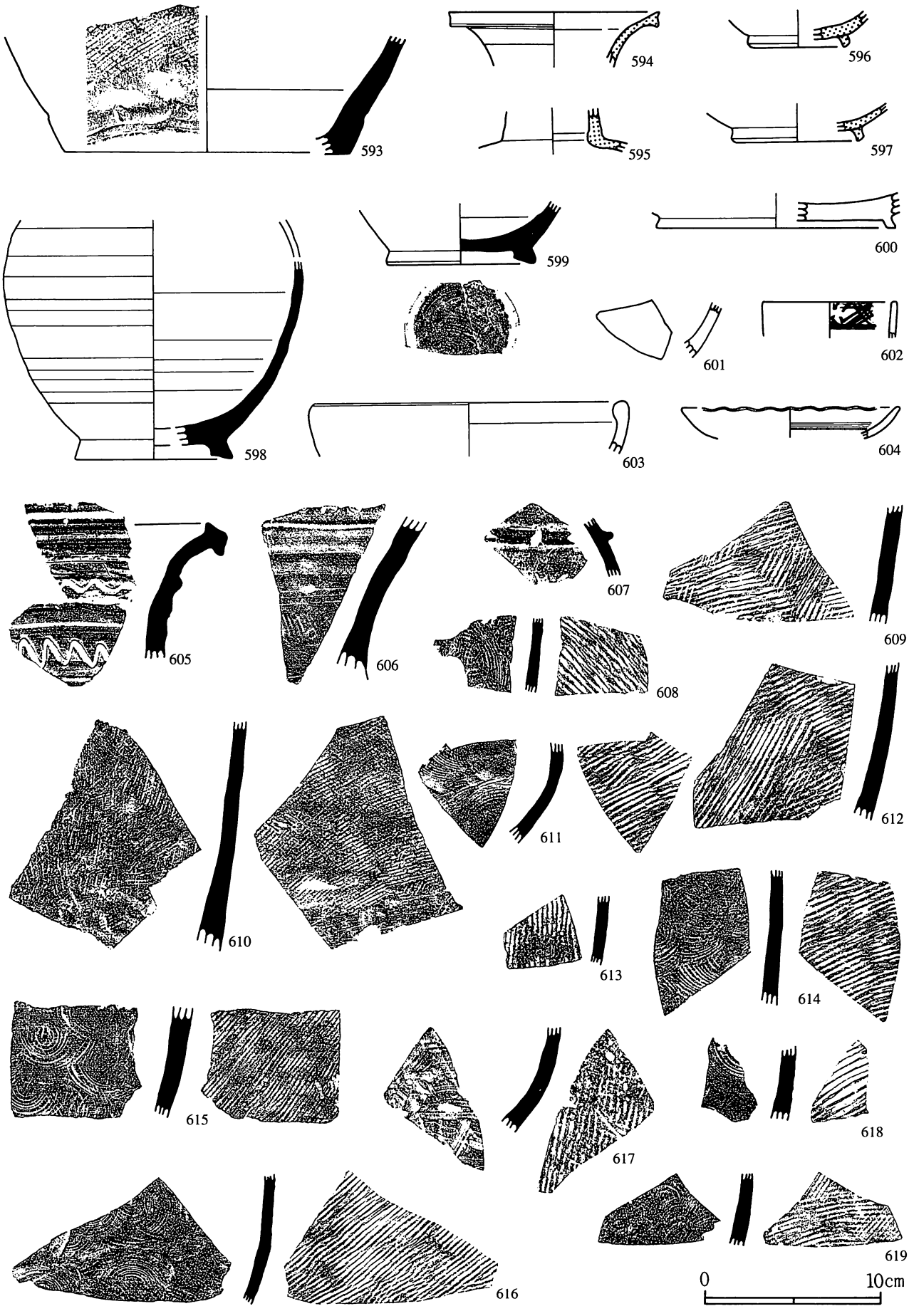
実測図536・537・571・572・578（2号溝と接合）・581・583・584・589・608・609・610は1号溝、542・572・578（1号溝と接合）・592・611・614は2号溝、582・612は5号溝、577・585・613は6号溝、577・613は1号掘建柱建物跡、538・539　・540・553・558・562・562・567・589・590・617・619は3号掘建柱建物跡からの出土である。また。538は10号、579は18号。550は25号、564は33号、570は40号、554は69号土坑内の発見となる。土師器は出土量の半分以上が坏で甕等が極端に少なく、須恵器では高台付きの坏と宝珠形のつまみをもつ蓋・甕の出土が多い。甲斐型土器編年のⅧ期以前の遺物が若干含まれるが、そのほとんどがⅧ期からX期くらいに相当するであろう。594・695・596・597は灰釉陶器である。遺物の多くは平安時代に属するが、その他、古墳時代後期鬼高式のは杯片が1点（442）、奈良時代の磐状の杯片が3点（542・563・56）、緑4釉陶器片が2点（600・601）、陶磁器（602・603・604）など数例の出土が見られる。542は2号溝、564は33号土坑、それ以外はグリッド出土である。



第79図　掘立柱建物跡・溝出土遺物（その１）

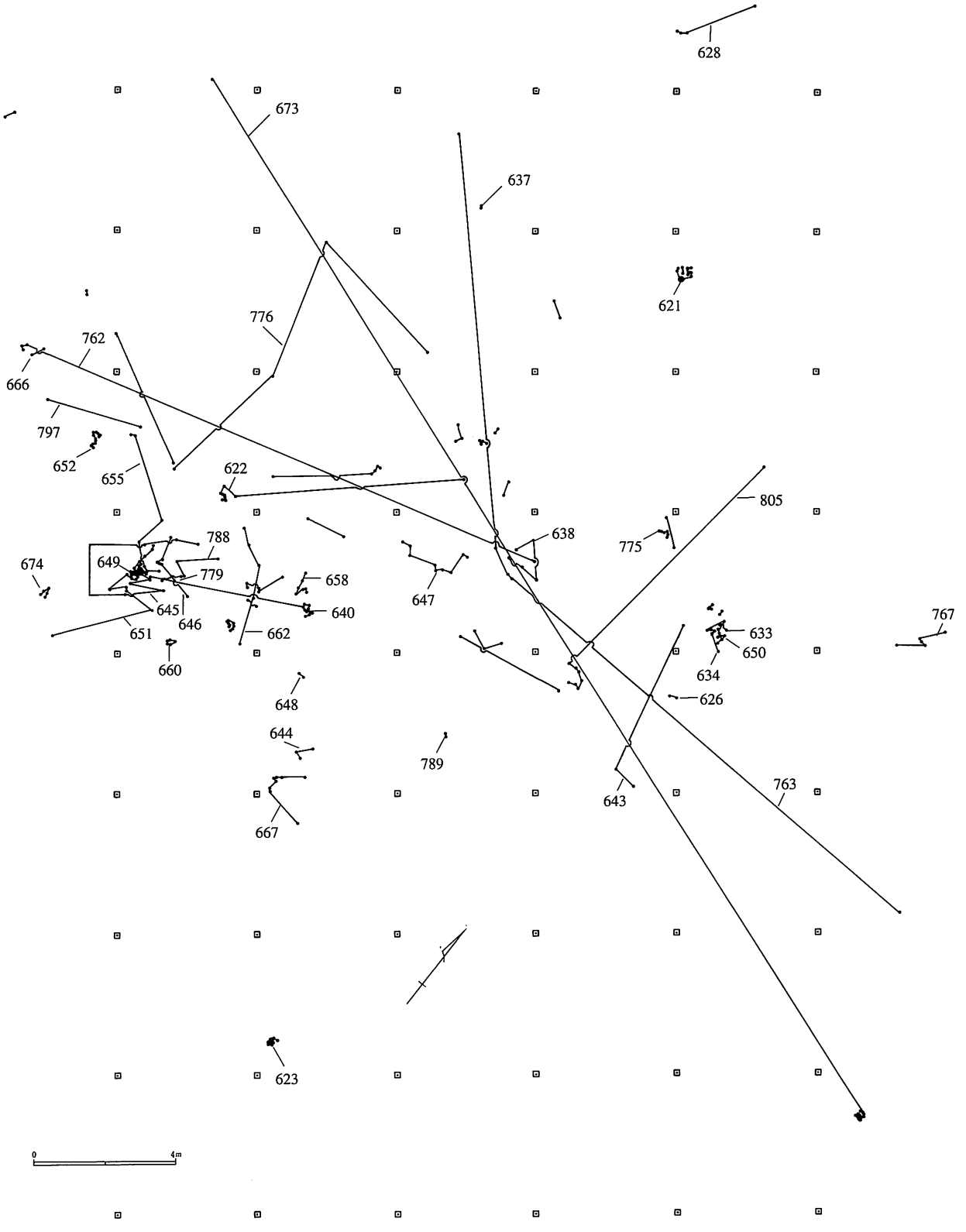


第80図　掘立柱建物跡・溝出土遺物（その2）

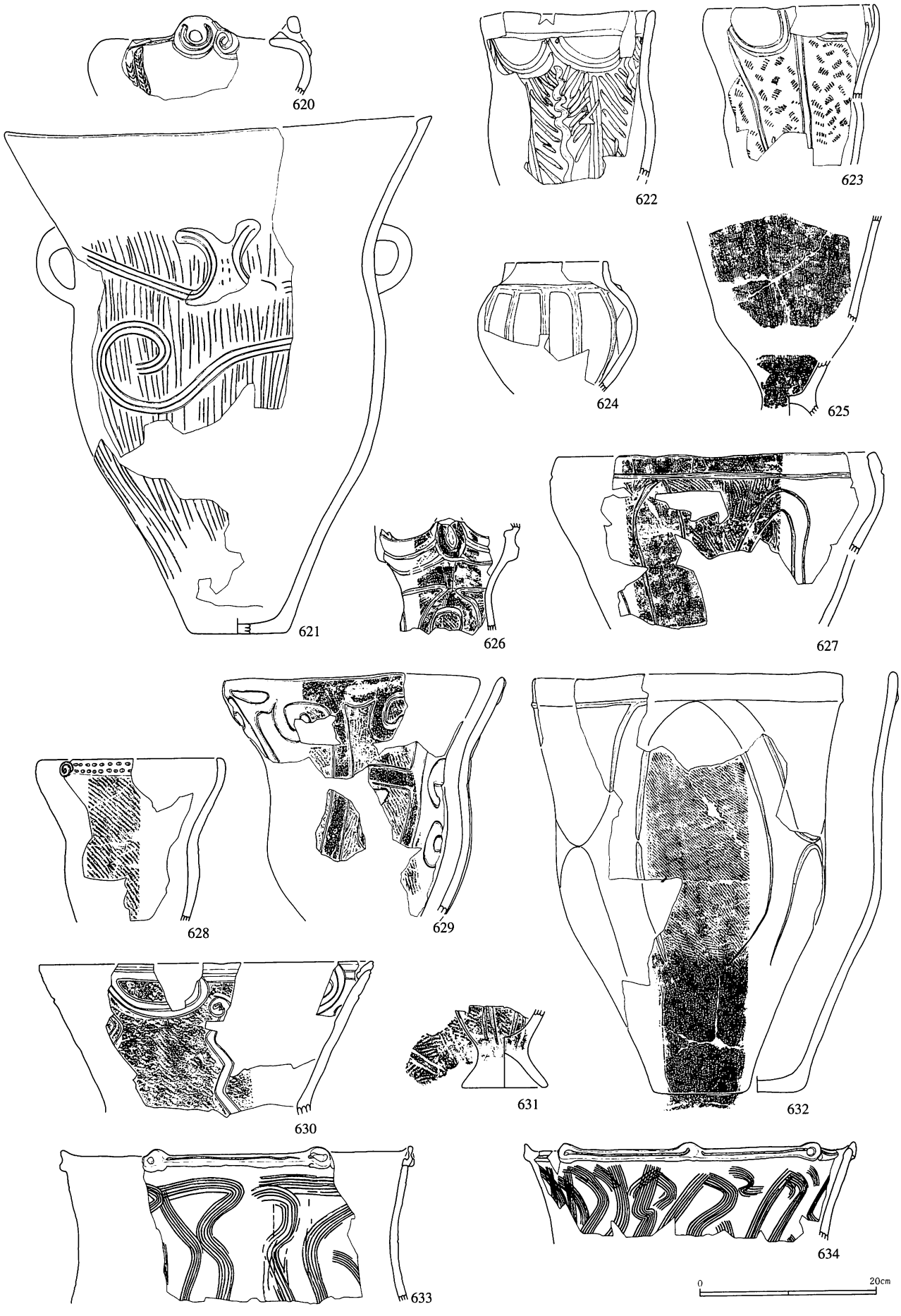


第81図　掘立柱建物跡・溝出土遺物（その３）

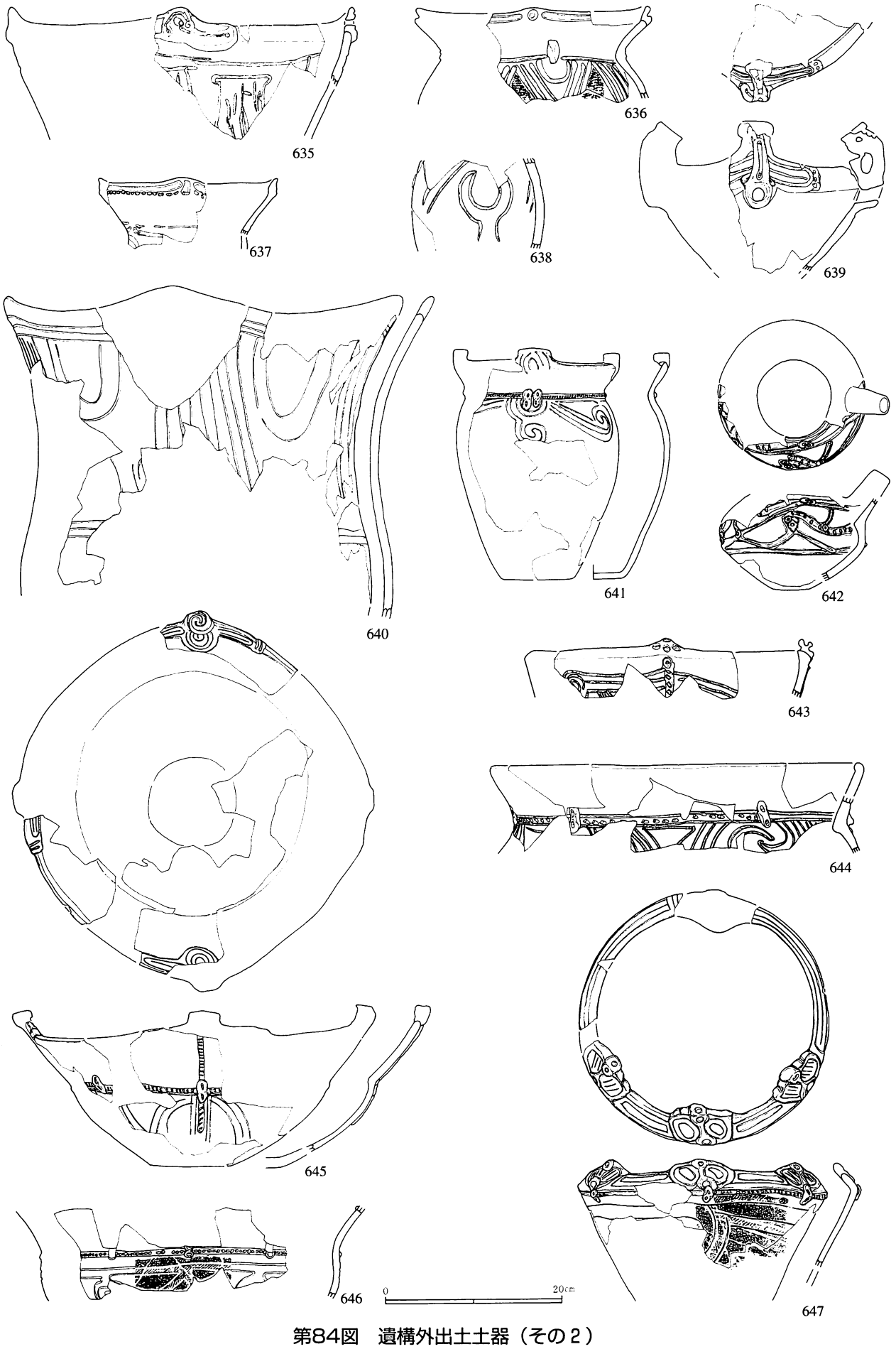
第10節　遺構外出土遺物



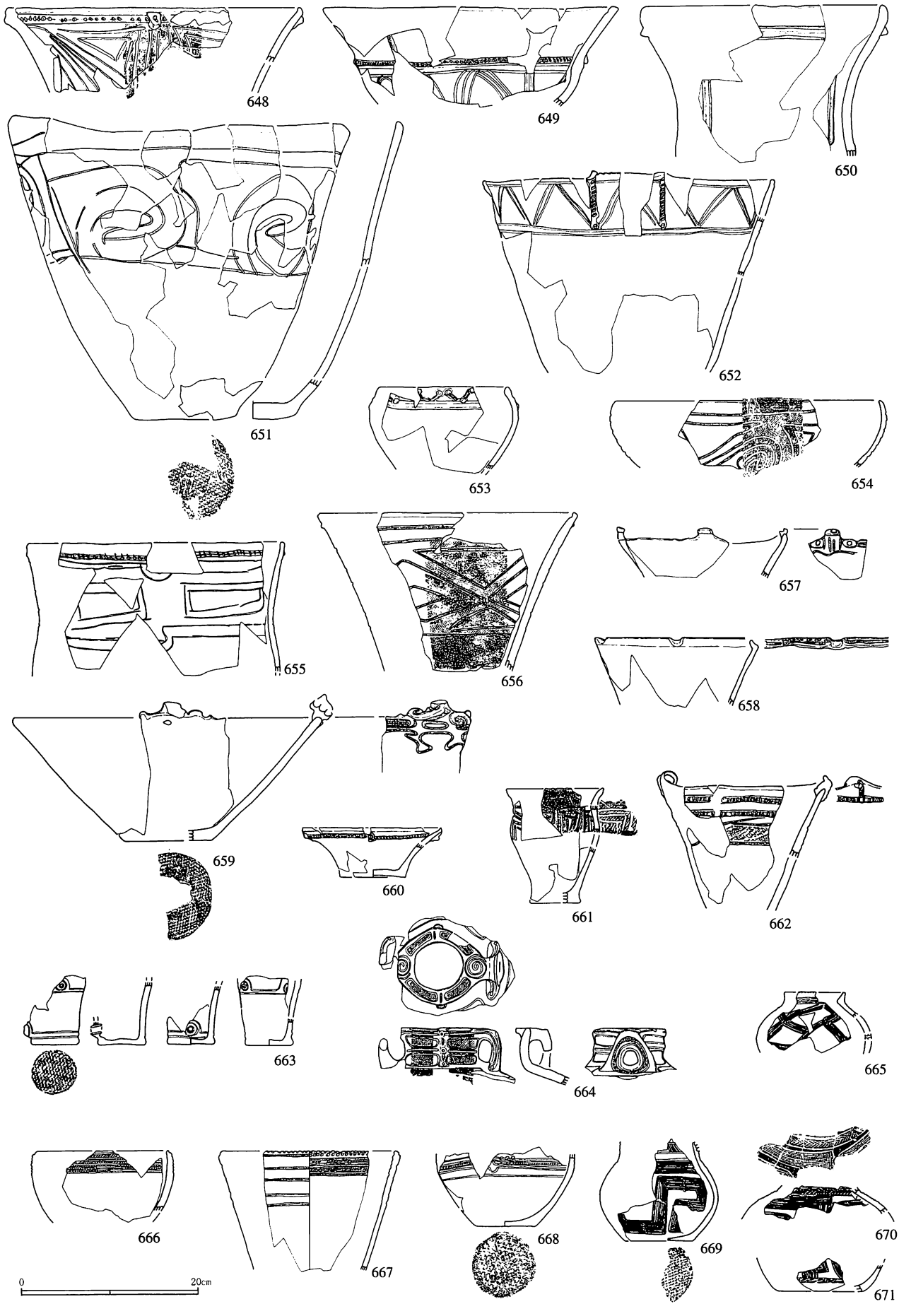
第82図　土器集中区接合図



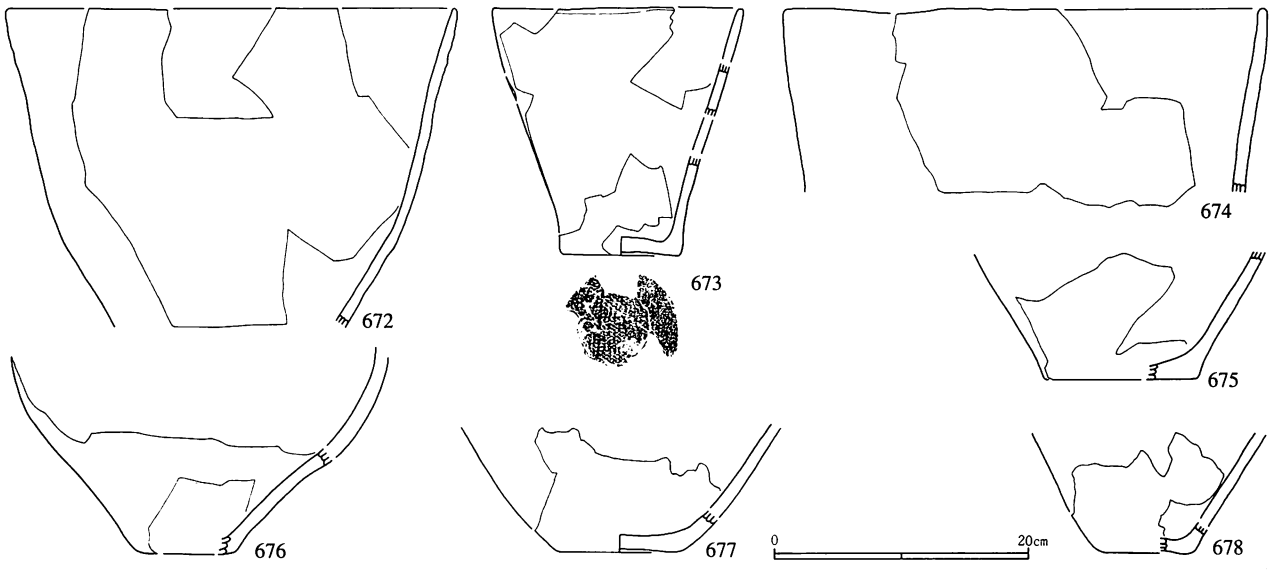
第83図　遺構外出土土器（その１）



第84図　遺構外出土土器（その２）



第85図　遺構外出土土器（その３）



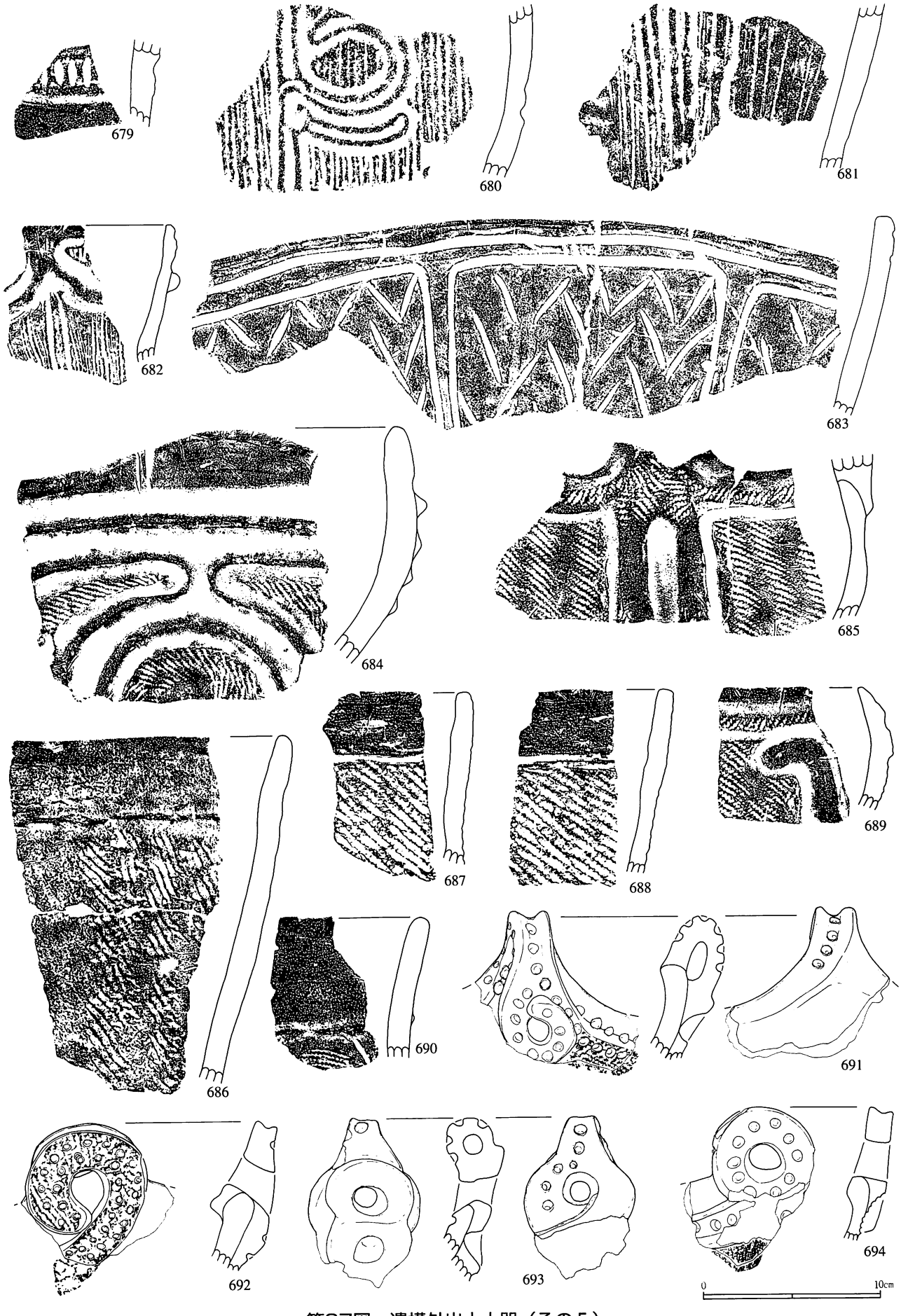
第86図　遺構外出土土器（その４）

今回の調査では縄文時代中期中葉から中・近世にいたる遺物が確認されたが、とくに縄文時代中・後期の遺物が大量に出土した。本節ではこのうちの主な遺物について一覧表に示すこととするが、調査区西側において、とくに中・後期の土器が集中した部分が確認されたので、それについてここで触れておく。

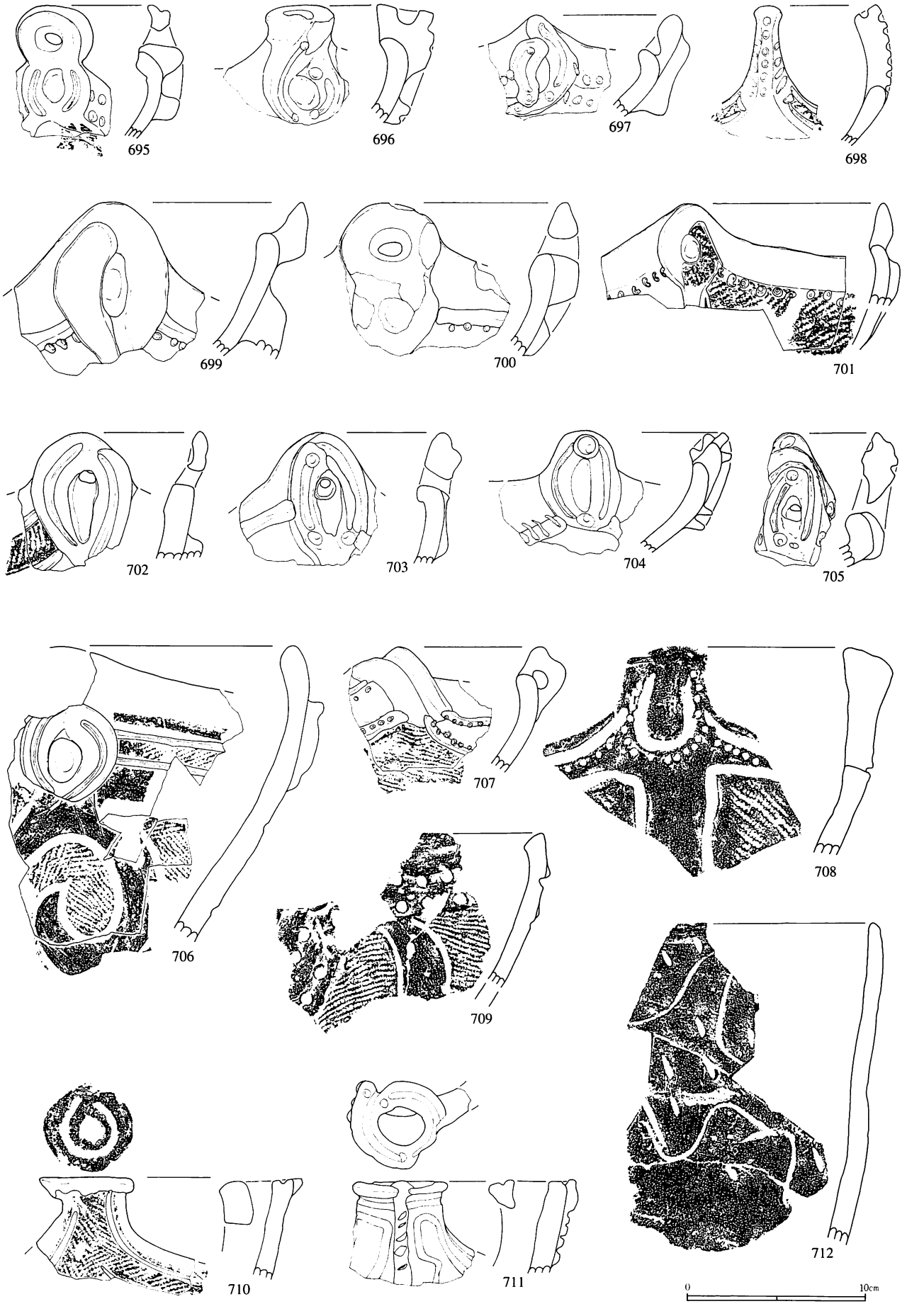
全体図中に遺物集中区として示しておいたが、この部分は遺構確認作業中にとくに土器が多く確認された部分である。土器は細片が多く、また確認段階で同一個体であることが確認できるような状況でもない。グリッドではＥ・Ｆ・Ｇ－13～18の計18グリッド分・面積288㎡程である。全体図に示したように、この範囲内には２軒の敷石住居跡（いずれも中期終末～後期初頭）と１軒の住居跡残骸、配石、土坑などが確認されており、これらの遺構と関連する土器も含まれるものと思われるが、距離が離れて接合したものも多く確認されており、接合状況からは、土器捨て場と考えられないこともない。しかし、通常土器捨て場は、台地上の集落であれば谷の傾斜面に形成されることが多く、このような平坦地かつ集落内に形成されることは考えにくい。この場合、土器捨て場は想定すべきではなかろう。

第82図に示したように、上記のグリッドを中心として土器の接合が確認されている。２点以上の接合例は60個体ちかく確認できたが、30㎝以内の部分にまとまっていたものから、数メートル以内程度の接合例が多い。しかし、一方で16ｍ、26ｍなどの距離でも接合し、最大では35ｍ離れた接合例が確認されている。673は最大の距離のある接合例で、ほとんどすべての破片（10数点）が30㎝以内に集中していたが、１点のみ35ｍ離れて接合したものである。また、763は１ｍの範囲に３点が並び、それぞれの端から12ｍ、14ｍ離れた１点づつが接合している。並びが直線ではないものの、接合の最大距離は約26ｍである。

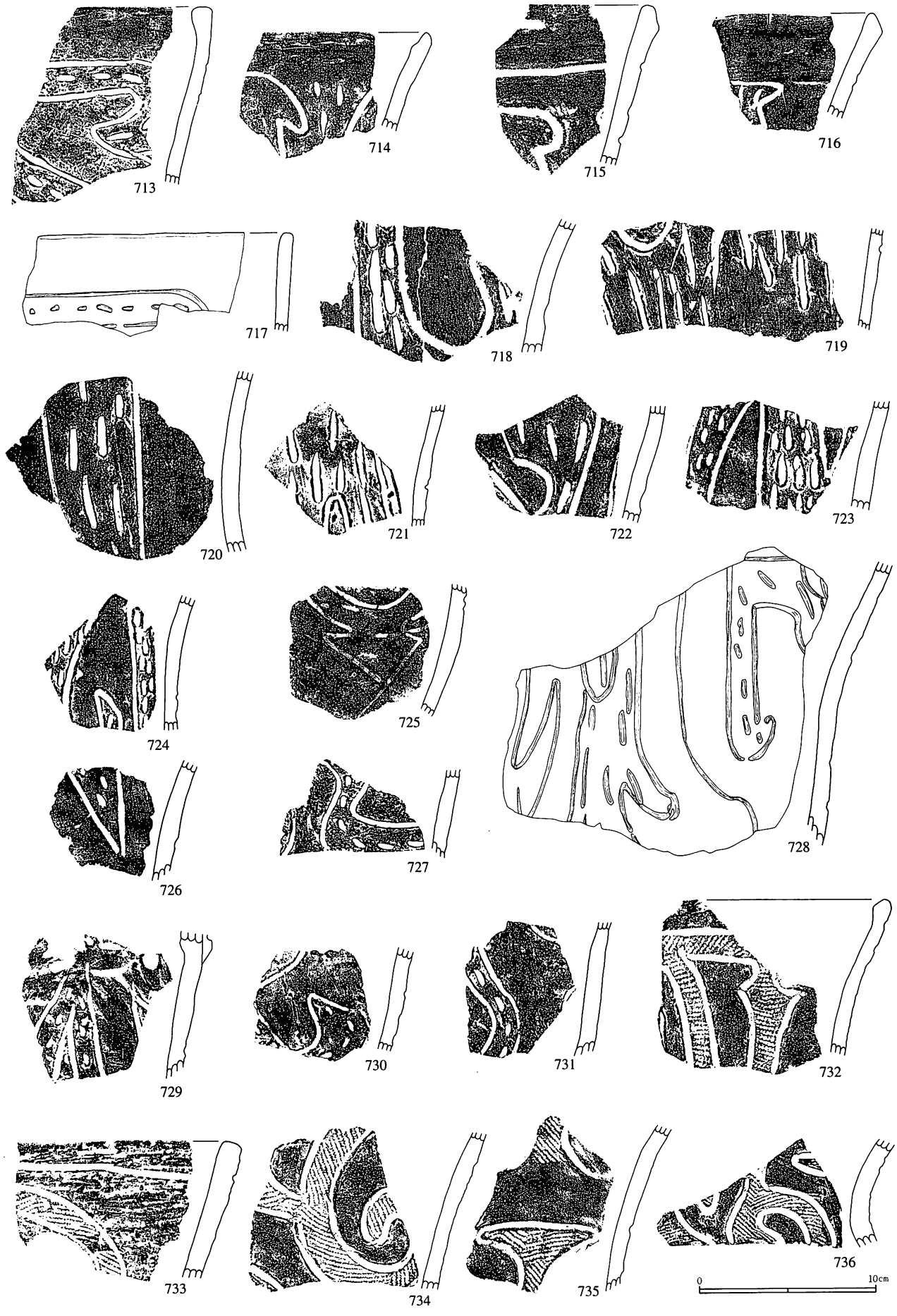
個々の資料について概要を述べる。第83図には中期の資料を示したが、このうち接合が確認された資料について１ｍ以内を集中、１ｍ以上を分散として表記すると以下のようになる。621（集中）・622（分散）・623（集中）・628（分散）・633（集中）・634（集中）という状況である。なお、626（集中）については後述する。これらの資料は曽利Ⅳ式・Ⅴ式及び加曽利ＥⅣ式であり、前述した２軒の敷石住居跡と時期的な差はない。しかし、敷石住居跡には極端に撹乱を受けた痕跡はなく、敷石もしっかりしていることから、これらの住居跡資料とは考えにくい。また、住居跡らしき痕跡も確認されているが、例えそれが中期末のものであったとしても、後世の撹乱によるものならば、もっと遺物の分散が見られるはずであるのに、集中し原位置を保っているものが主であることからも住居内資料の散逸とは考えられない。通常の廃棄とは区分すべき何らかの廃棄行為の結果であろうか。第84図以降には後期資料を収載した。これらについても集中、分散の状況を示しておく。637（集中）・638（分散）・640（分散）・643（分散）・644（集中）・645（分散）・646（分散）・647（分散）・648（集中）・649（集中）・650（集中）・651（分散）・652（集中）・655（分散）・658（集



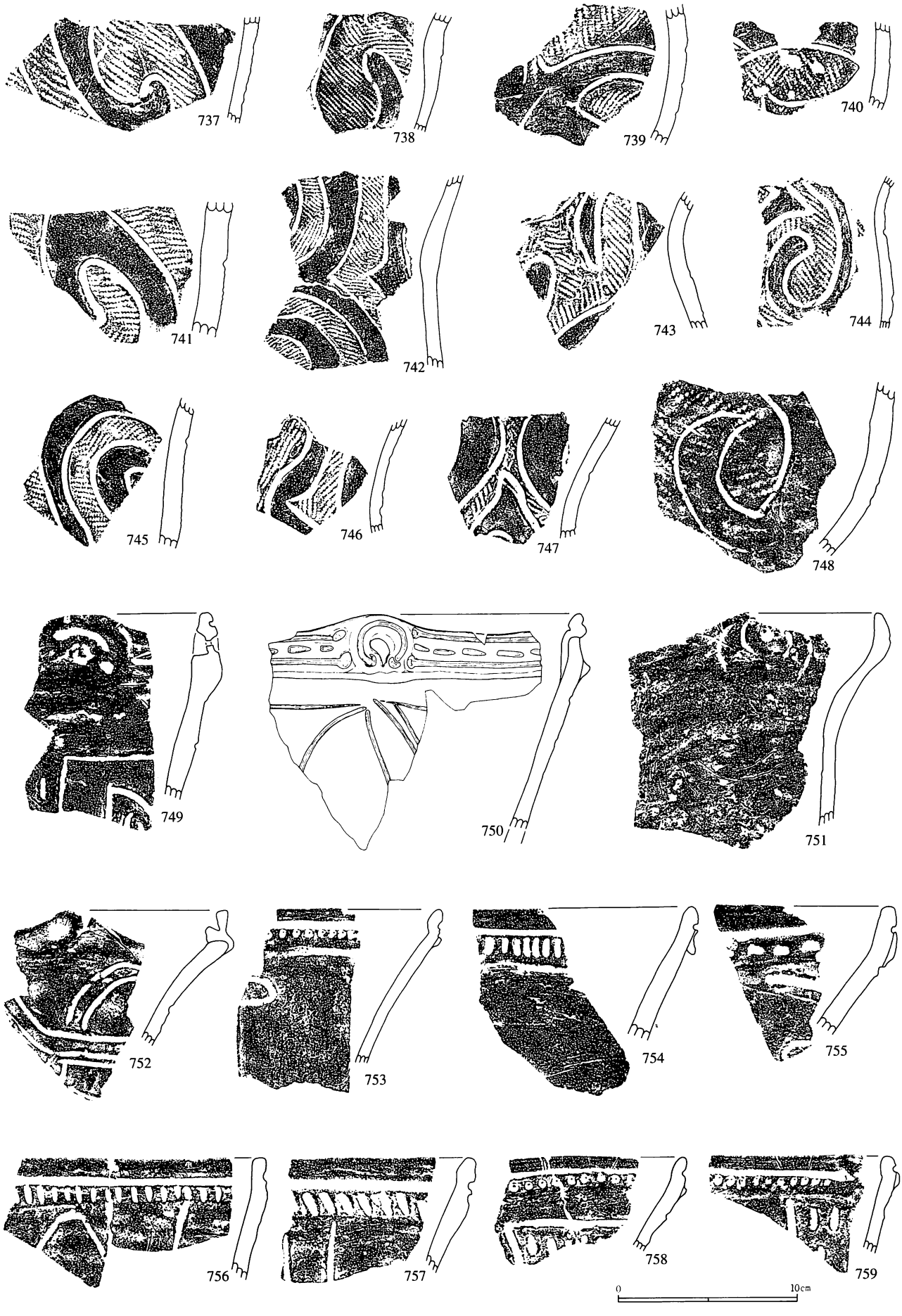
第87図　遺構外出土土器（その５）



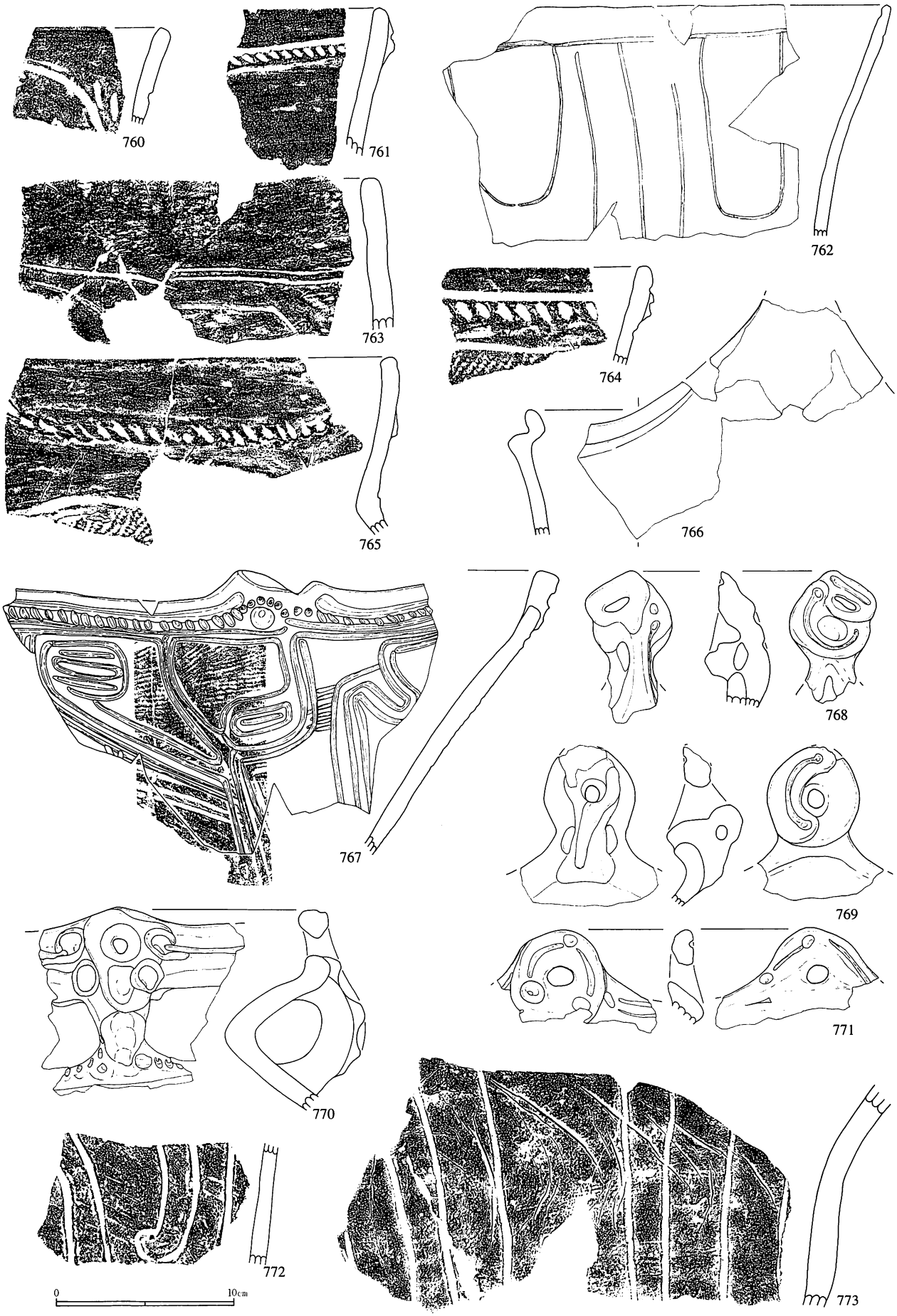
第88図　遺構外出土土器（その６）



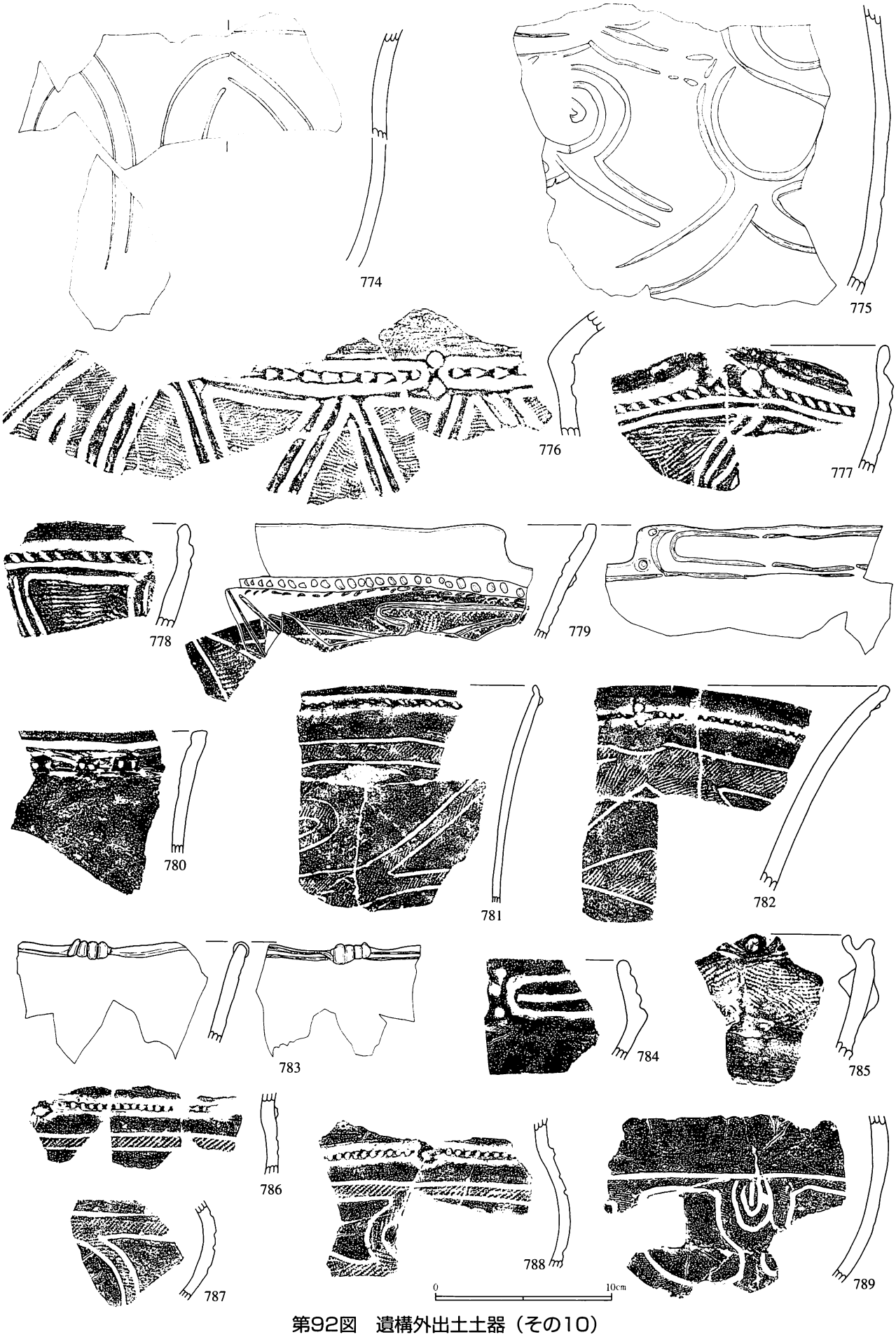
第89図　遺構外出土土器（その７）



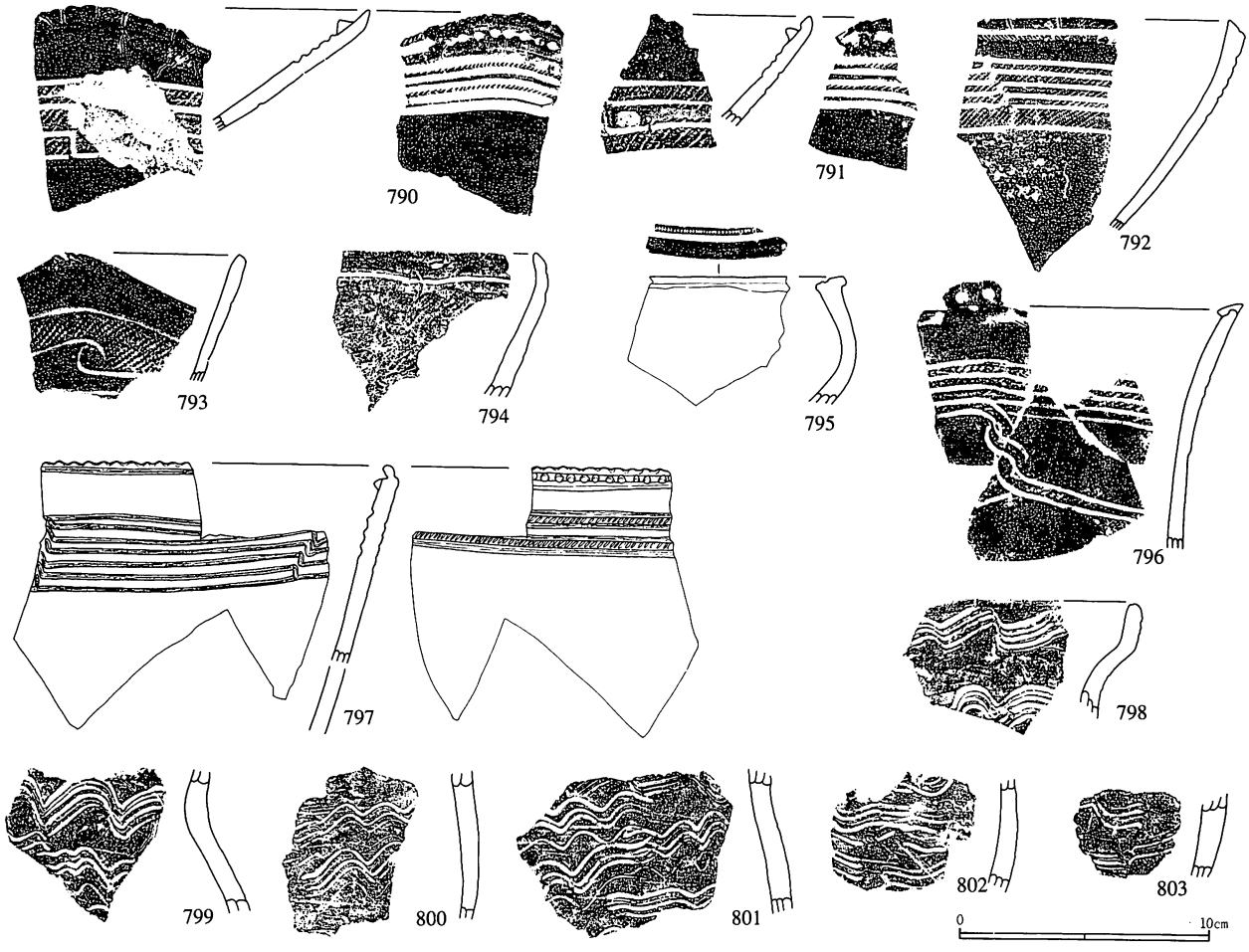
第90図　遺構外出土土器（その８）



第91図　遺構外出土土器（その９）



第92図　遺構外出土土器（その10）

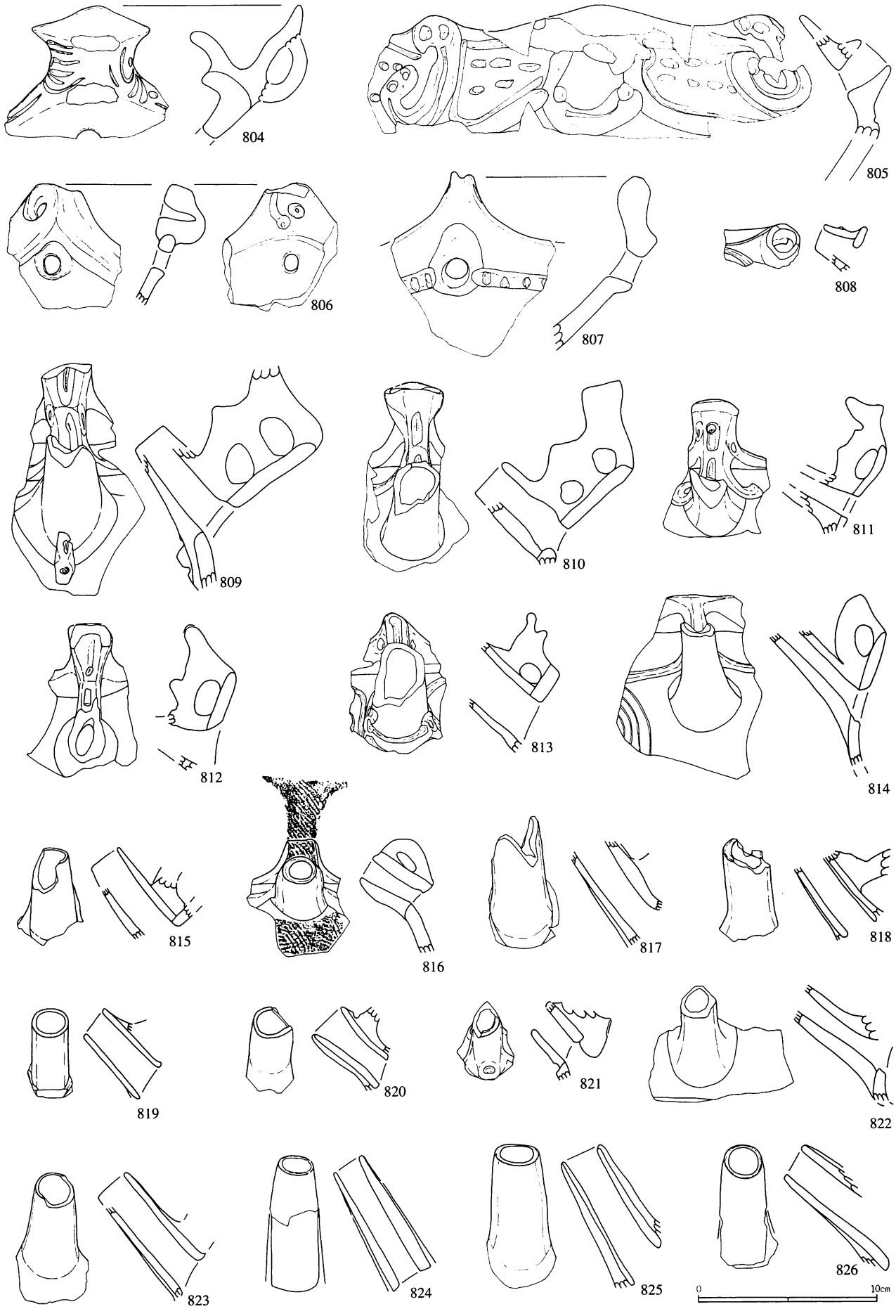


第93図　遺構外出土土器（その11）

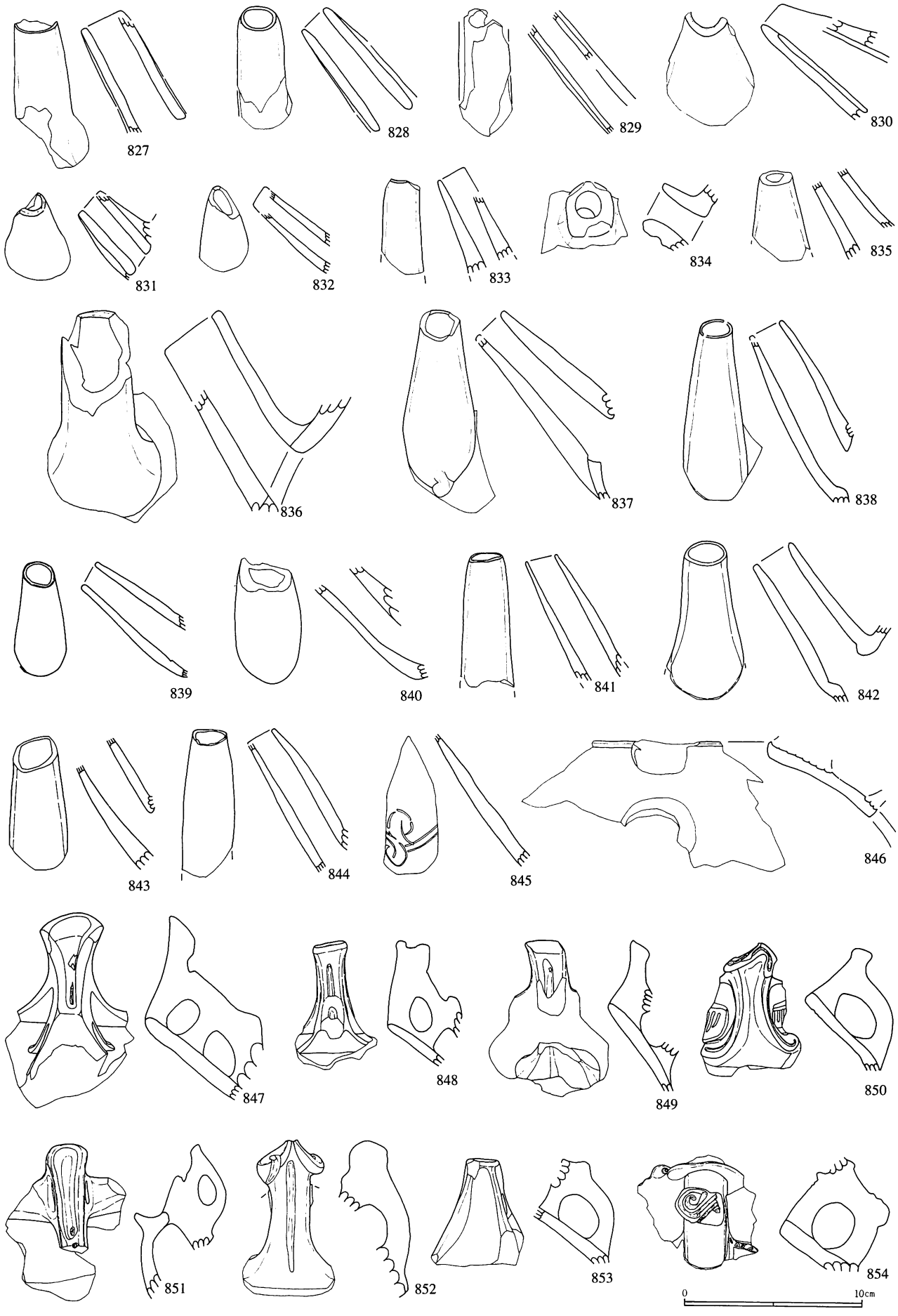
中）・660（集中）・662（分散）・666（集中）・667（分散）・672（集中）・673（分散）・674（集中）・750（分散）・762（分散）・763（分散）・767（分散）・775（集中）・776（分散）・779（集中）・783（集中）・788（分散）・789（集中）・796（集中）・797（分散）・805（分散）である。1mという範囲で見る限り集中と分散の状況ではやや分散傾向にあると言えよう。

後期の資料は時期幅広く見られるが、その中でも称名寺式のうち関沢類型として分類される一群が多いのが目立つ。626は4単位の波状口縁となり波頂部には幅広の粘土を長円形に貼付し、胴部下半には沈線による円形区画を施したものである。また第87図・88図に口縁部資料の一部を示したが、いずれも同様の口縁形態で粘土紐のはりつけが見られる。これらは遺物集中区だけでなく今回の調査区全域から出土している。また、住居跡資料でも13号住居跡床面直上から称名寺式土器の古手と伴出するなど本遺跡の主体を成す土器のひとつでもある。これまで本県では、この一群の調査例は極めて少なく、当然のことながら資料も断片的なものにすぎなかった。また、関東地方でも北部を中心とした分布域が指摘されていたが、今回の確認により、ようやく県内での実態がおぼろげながらも見えてくると同時に、広域的な分布の面からは関東地方南西部の実態がはっきりしないものの西関東とも言える本県で確認されたことによって、新たな問題を提起することになろう。

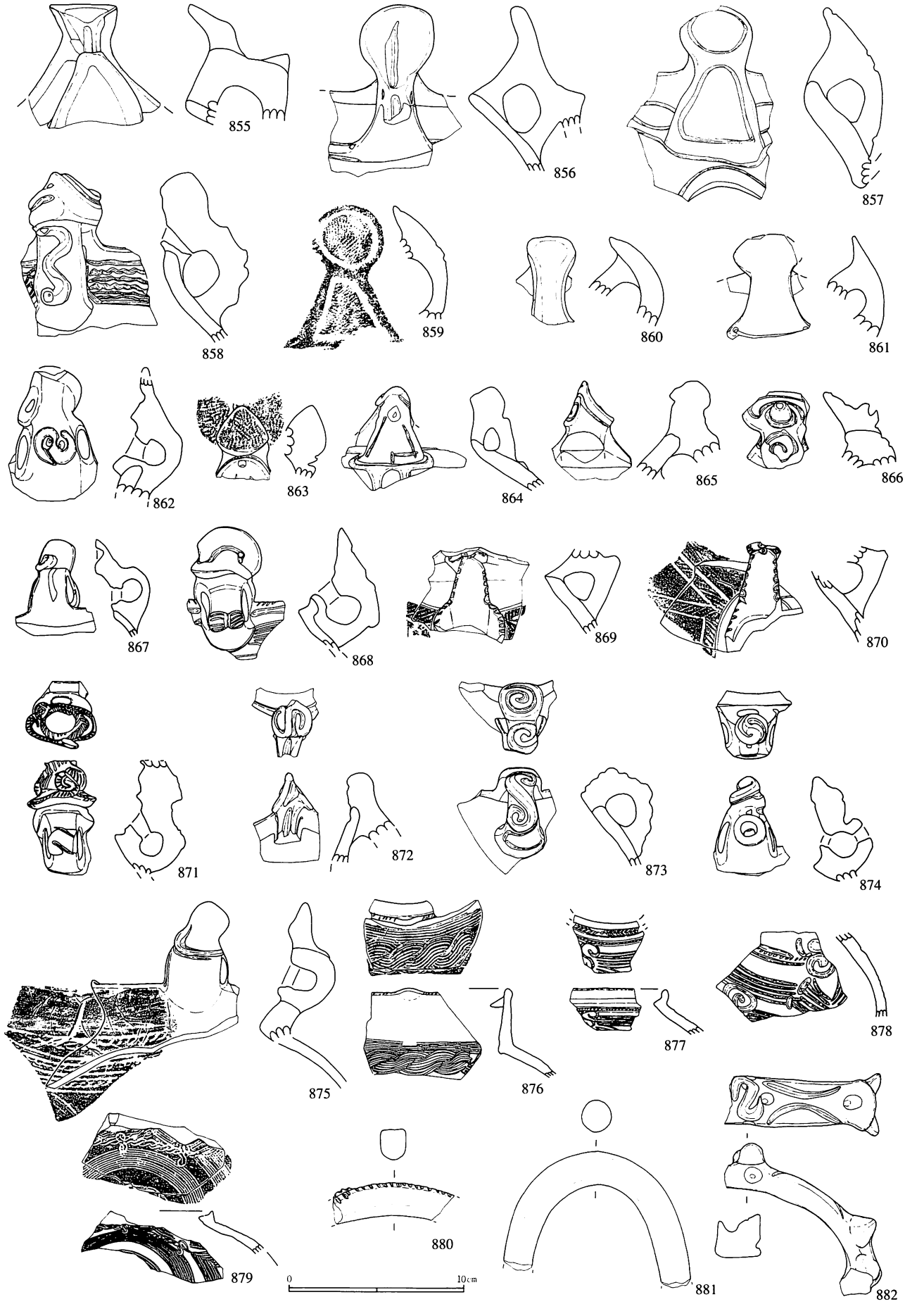
639や805は、いずれも浅鉢形注口土器であり、堀之内Ⅰ式でも古い部分に位置づけられるものであろう。また、663は底部ちかくに注口部ふうな小孔を有しているが、これは外面に向かって下向きに傾斜していることから、明らかに注口とは違うものである。器形が上部方向に開く形態であるが、残存部端がやや内傾しており、収束部（口縁部）はちかいものと思われる。復元高8～9cm程度と推定されるが、前述の特徴から容器とは考えられない。このような形態で、しかも容器ではないとすれば土製品ということになろう。上半部が欠損しているためはっきりしないが、容器型土偶の可能性を指摘しておきたい。



第94図　遺構外出土注口土器（その１）



第95図　遺構外出土注口土器（その２）



第96図　遺構外出土注口土器（その３）

表２　遺構外出土土器観察表

番号	出土位置	時期	備考	番号	出土位置	時期	備考
620	Ｈ－６	井戸尻Ⅲ		663	Ｂ－16・Ｄ－12	加曽利Ｂ？	接合
621	Ｄ－13	曽利Ⅳ	接合	664	Ｅ－16	加曽利ＢⅠ	
622	Ｅ－15・17	曽利Ⅳ	接合	665	Ｅ－18	加曽利ＢⅠ	接合
623	Ｈ－15・Ⅰ－16	曽利Ⅴ	接合	666	Ｄ－18	加曽利ＢⅠ	接合
624	Ｈ－７・Ⅰ－８	曽利Ⅴ？	接合	667	Ｇ・Ｈ－16	加曽利ＢⅠ	接合
625	Ｅ－５・Ｇ－13	曽利Ⅴ	接合	668	Ｂ・Ｃ－18・Ｆ－17	加曽利ＢⅠ	接合
626	Ｇ－13・14	称名寺Ⅰ	接合	669	Ｄ－18・Ｇ－13	加曽利ＢⅠ	接合
627	Ｆ－５・13・Ｇ－14	加曽利ＥⅣ	接合	670	Ｄ－17	加曽利ＢⅠ	接合
628	Ｂ・Ｃ－13	曽利Ⅱ？	接合	671	Ｄ－17	加曽利ＢⅠ	
629	Ｄ－５	称名寺Ⅰ	接合	672	Ｆ－17		接合
630	Ｂ－６	曽利Ⅲ？	接合	673	Ｂ－７・Ｊ－12		接合
631	Ｇ－６	加曽利ＥⅣ		674	Ｆ－18		接合
632	Ｇ－14	加曽利ＥⅣ		675	Ｈ－10		接合
633	Ｆ－13	堀之内Ⅰ	接合	676	Ｆ－５		接合
634	Ｆ－13	堀之内Ⅰ	接合	677	Ｊ－10		
635	試掘トレンチ	堀之内Ⅰ		678	Ｆ・Ｇ－13		接合
636	Ｄ－12	堀之内Ⅰ		679	Ｃ－７	井戸尻Ⅲ	
637	Ｃ－15	堀之内Ⅰ	接合	680	Ｃ－11	曽利Ⅱ	
638	Ｆ－15	堀之内Ⅰ	接合	681	Ｄ－13	曽利Ⅱ	接合
639	Ｆ－15・16	堀之内Ⅰ	接合	682	Ｆ－16	曽利Ⅲ	
640	Ｆ－16	堀之内Ⅰ	接合	683	Ｅ－５	曽利Ⅴ	接合
641	Ｄ－16	堀之内Ⅰ		684	Ｅ－５	加曽利ＥⅣ	
642	Ｆ－15	堀之内Ⅰ		685	Ｆ－５	加曽利ＥⅣ	接合
643	Ｇ－14	堀之内Ⅰ	接合	686	Ｆ－15	加曽利ＥⅣ	
644	Ｃ－３・10・Ｇ－16	堀之内Ⅰ	接合	687	Ｇ－13	加曽利ＥⅣ	
645	Ｌ・Ｆ－17・Ｆ－18	堀之内Ⅰ	接合	688	Ｇ－13	加曽利ＥⅣ	
646	Ｆ－17	堀之内Ⅱ	接合	689	Ｈ－７	加曽利ＥⅣ	
647	Ｆ－15	堀之内Ⅱ	接合	690	Ⅰ－10	加曽利ＥⅣ	
648	Ｇ－16	堀之内Ⅱ	接合	691	Ｈ－10	称名寺Ⅰ	
649	Ｆ－17	堀之内Ⅱ	接合	692	Ｅ－18	称名寺Ⅰ	
650	Ｆ－13	堀之内Ⅱ	接合	693	Ｈ－10	称名寺Ⅰ	
651	Ｆ－17	堀之内Ⅱ	接合	694	試掘トレンチ	称名寺Ⅰ	
652	Ｅ－18	堀之内Ⅱ	接合	695	表彩	称名寺Ⅰ	
653	Ｆ－14	堀之内Ⅱ		696	Ａ－19	称名寺Ⅰ	
654	Ｆ－17	堀之内Ⅱ		697	試掘トレンチ	称名寺Ⅰ	
655	Ｆ・Ｅ－17	堀之内Ⅱ	接合	698	Ｆ－13	称名寺Ⅰ	
656	Ｈ－15	堀之内Ⅱ		699	試掘トレンチ	称名寺Ⅰ	
657	Ｇ－11・Ⅰ－13	堀之内Ⅱ	接合	700	Ｆ－15	称名寺Ⅰ	
658	Ｆ－16	堀之内Ⅱ	接合	701	Ⅰ－10	称名寺Ⅰ	
659	Ｄ・Ｅ－17・Ⅰ－16	堀之内Ⅱ	接合	702	Ｅ－14	称名寺Ⅰ	
660	Ｆ－17	堀之内Ⅱ	接合	703	Ｇ－11	称名寺Ⅰ	
661	Ⅰ－11	加曽利ＢⅠ		704	Ｆ－13	称名寺Ⅰ	
662	Ｆ－17	加曽利ＢⅠ	接合	705	Ｂ－18	称名寺Ⅰ	

番号	出土位置	時期	備考	番号	出土位置	時期	備考
706	G－12	称名寺Ⅰ	接合	751	F－18	堀之内Ⅰ	
707	F－14	称名寺Ⅰ		752	I－16	堀之内Ⅰ	
708	C－9	称名寺Ⅰ		753	H－9	堀之内Ⅰ	
709	E－15	称名寺Ⅰ		754	試掘トレンチ	堀之内Ⅰ	
710	G－10	称名寺Ⅰ		755	D－15	堀之内Ⅰ	
711	G－15	称名寺Ⅰ		756	I－10	堀之内Ⅰ	
712	G－5	称名寺Ⅱ		757	D－18	堀之内Ⅰ	
713	F－13	称名寺Ⅱ		758	H－9	堀之内Ⅰ	
714	G－8	称名寺Ⅱ		759	H－9	堀之内Ⅰ	
715	試掘トレンチ	称名寺Ⅱ		760	H－3	堀之内Ⅰ	
716	F－13	称名寺Ⅱ		761	D－2	堀之内Ⅰ	
717	F－14	称名寺Ⅱ	接合	762	D－18・F－18	堀之内Ⅰ	接合
718	H－12	称名寺Ⅱ	接合	763	C・F－15	堀之内Ⅰ	
719	G・H－11	称名寺Ⅱ	接合	764	D－15	堀之内Ⅰ	
720	C－13	称名寺Ⅱ		765	F－13・H－12	堀之内Ⅰ	
721	G－13	称名寺Ⅱ		766	F－13	堀之内Ⅰ	接合
722	G－11	称名寺Ⅱ		767	F－12	堀之内Ⅰ	接合
723	F－16	称名寺Ⅱ		768	I－15	堀之内Ⅰ	
724	試掘トレンチ	称名寺Ⅱ		769	F－13	堀之内Ⅰ	
725	G－15	称名寺Ⅱ		770	D－15	堀之内Ⅰ	
726	C－15	称名寺Ⅱ		771	試掘レンチ	堀之内Ⅰ	
727	F－13	称名寺Ⅱ		772	G－14	堀之内Ⅰ	
728	E－13	称名寺Ⅱ		773	B－6	堀之内Ⅰ	接合
729	G－16	称名寺Ⅱ		774	F－15	堀之内Ⅰ	接合
730	F－13	称名寺Ⅱ		775	F－14・G－13	堀之内Ⅰ	接合
731	E－12	称名寺Ⅱ		776	D・E－16・17	堀之内Ⅰ	接合
732	F－14	称名寺Ⅰ		777	G－11	堀之内Ⅰ	接合
733	H－8	称名寺Ⅰ？		778	F－11	堀之内Ⅰ	
734	F－15	称名寺Ⅰ		779	E・F－17	堀之内Ⅰ	接合
735	B－17	称名寺Ⅰ		780	F－18	堀之内Ⅰ	
736	I－12	称名寺Ⅰ		781	J・K－15	堀之内Ⅱ	接合
737	I－15	称名寺Ⅰ		782	H・K－16	堀之内Ⅱ	接合
738	G－15	称名寺Ⅰ		783	D－18	堀之内Ⅱ	
739	G－12	称名寺Ⅰ		784	I－10	堀之内Ⅱ	
740	F－12	称名寺Ⅰ		785	F－15	堀之内Ⅱ	
741	D－6	称名寺Ⅰ		786	F－17	堀之内Ⅱ	
742	F－16	称名寺Ⅰ		787	D－17	堀之内Ⅱ	
743	G－12	称名寺Ⅰ		788	F－17	堀之内Ⅱ	
744	E－17	称名寺Ⅰ		789	G－15	堀之内Ⅱ	
745	F－13	称名寺Ⅰ		790	G－16	賀曽利ＢⅠ	
746	E－15	称名寺Ⅰ		791	F－17	賀曽利ＢⅠ	
747	F－13	称名寺Ⅰ		792	D－15	賀曽利ＢⅠ	
748	F－13	称名寺Ⅰ		793	表彩	賀曽利ＢⅠ	
749	F－13	堀之内Ⅰ		794	F－18	賀曽利ＢⅠ	
750	F－15・G－14	堀之内Ⅰ	接合	795	C－18	賀曽利ＢⅠ	

番号	出土位置	時期	備考	番号	出土位置	時期	備考
796	B－19	賀曽利BⅠ		840	C－17	堀之内	
797	E－18	賀曽利BⅠ		841	B－17	堀之内	
798	J－12	北原？	弥生・一同	842	E－17	堀之内	
799	J－12	北原？	弥生・一同	843	E－18	堀之内	
800	J－12	北原？	弥生・一同	844	F－17	堀之内	
801	J－12	北原？	弥生・一同	845	G－15	加曽利B？	
802	I－12	北原？	弥生・一同	846	G－16	堀之内	
803	J－12	北原？	弥生・一同	847	B－18	堀之内Ⅰ	
804	試掘レンチ	堀之内Ⅰ		848	D－12	堀之内Ⅰ	
805	E－13・G－14	堀之内Ⅰ	接合	849	C－17	堀之内Ⅰ	
806	H－11	堀之内Ⅰ		850	B－15	堀之内Ⅰ	
807	F－13	堀之内Ⅰ		851	C－17	堀之内Ⅰ	
808	E－16	堀之内Ⅰ		852	D－12	堀之内Ⅰ	
809	C－8・F－16	堀之内Ⅰ	接合	853	F－17	堀之内Ⅰ	
810	F－17	堀之内Ⅰ		854	F－17	堀之内Ⅰ	
811	C－13	堀之内Ⅰ		855	F－17	堀之内Ⅰ	
812	I－12	堀之内Ⅰ		856	D－16	堀之内Ⅰ	
813	F－16	堀之内Ⅰ		857	D－17	堀之内Ⅱ	
814	F－17	堀之内Ⅰ		858	B－18	堀之内Ⅱ	
815	J－15	堀之内Ⅰ		859	K－14	堀之内Ⅱ	
816	F－12	堀之内Ⅰ		860	D－16	堀之内Ⅱ	
817	D－18	堀之内Ⅰ		861	D－16	堀之内Ⅱ	
818	G－15	堀之内Ⅰ		862	D－17	堀之内Ⅱ	
819	F－17	堀之内Ⅰ		863	F－17	堀之内Ⅱ	
820	G－13	堀之内Ⅰ		864	D－17	加曽利BⅠ	
821	B－15	堀之内Ⅰ		865	I－16	加曽利BⅠ	
822	B－17	堀之内Ⅰ		866	試掘レンチ	加曽利BⅠ	
823	B－18	堀之内Ⅰ		867	F－15	加曽利BⅠ	
824	F－17	堀之内		868	K1416	加曽利BⅠ	
825	G－14	堀之内		869	E－18	加曽利BⅠ	
826	F－18	堀之内		870	D－17	加曽利BⅠ	
827	I－14	堀之内		871	H－15	加曽利BⅠ	
828	B－11・F－15	堀之内		872	E－16	加曽利BⅠ	
829	D－17	堀之内		873	B－15	加曽利BⅠ	
830	G－16	堀之内		874	F－17	加曽利BⅠ	
831	G－16	堀之内		875	G－16	加曽利BⅠ	
832	H－16	堀之内		876	E－17	加曽利BⅠ	
833	F－18	堀之内		877	F－18	加曽利BⅠ	
834	F－11	堀之内		878	D－18	加曽利BⅠ	
835	I－15・16	堀之内		879	E－18	加曽利BⅠ	
836	E－17	堀之内		880	I－11	加曽利BⅠ	
837	F－17	堀之内		881	EH－16	加曽利BⅠ	
838	F－17	堀之内		882	B－16	加曽利BⅠ	
839	D－18	堀之内					

798～803には同一個体と考えられる６点を示した。802だけがＩ－12グリッドから出土し、それ以外はいずれもＪ－12グリッドから出土している。櫛歯状工具による波状文が施文されており、内面の磨きは丁寧に行われている。798は唯一の口縁部破片であり、799・801は頸部片である。その他の破片は胴部であるが、いずれにも波状文が施文されていることから、少なくとも胴上半部以上は波状文だけとなろう。さて、器形であるが、壷もしくは甕ということになろう。口縁部形態からは壷の方が可能性が強いようにも思われるが、壷にはこのような施文の類例は見られない。口縁部の内傾という、通常の形態とはやや異なるものの、甕にむしろ類例がある。松本市宮渕本村遺跡26号住居跡から口縁形態類、施文等極めて類似した資料があり、一応本資料については弥生中期後半の栗林式としておきたい。

第11節　土製品

本遺跡の遺構および遺跡外から数種類の土製品が出土している。確認できたものはミニチュア土器、蓋、土偶、土製円盤および土錘である。以下に、種類毎に概要を記すこととするが、詳細は一覧表に示す。なお、土製品ではないが、土器底部の圧痕についても本節で触れておく。

・　ミニチュア土器

ミニチュア土器として、ここに提示するのは９点である。いずれも遺構外からの出土で、深鉢形が４点、鉢又は浅鉢形が５点である。このうち890は半球形にちかいもので、土鈴の残欠の可能性もある。884は波状口縁の浅鉢のミニチュアで浅鉢形注口土器に見られるような小孔を有する。なお、887は極めて小型の鉢であることも考えられるが、ここに含めておく。

・　蓋

蓋として図示するのは２点のみであるが、いずれも蓋としては大型である。892は把手を有するもので、確認された２点の破片いずれにもついている。左右の２カ所につくものと思われる。赤色顔料の塗布が見られる。893も把手を有しており、やはり確認された２点の破片いずれにも把手が確認された。これも赤色顔料が塗布されている。

なお、このほかに蓋の可能性のある小破片が１・２点確認されているが、小破片故に他の器種の可能性もあり、ここでは割愛する。

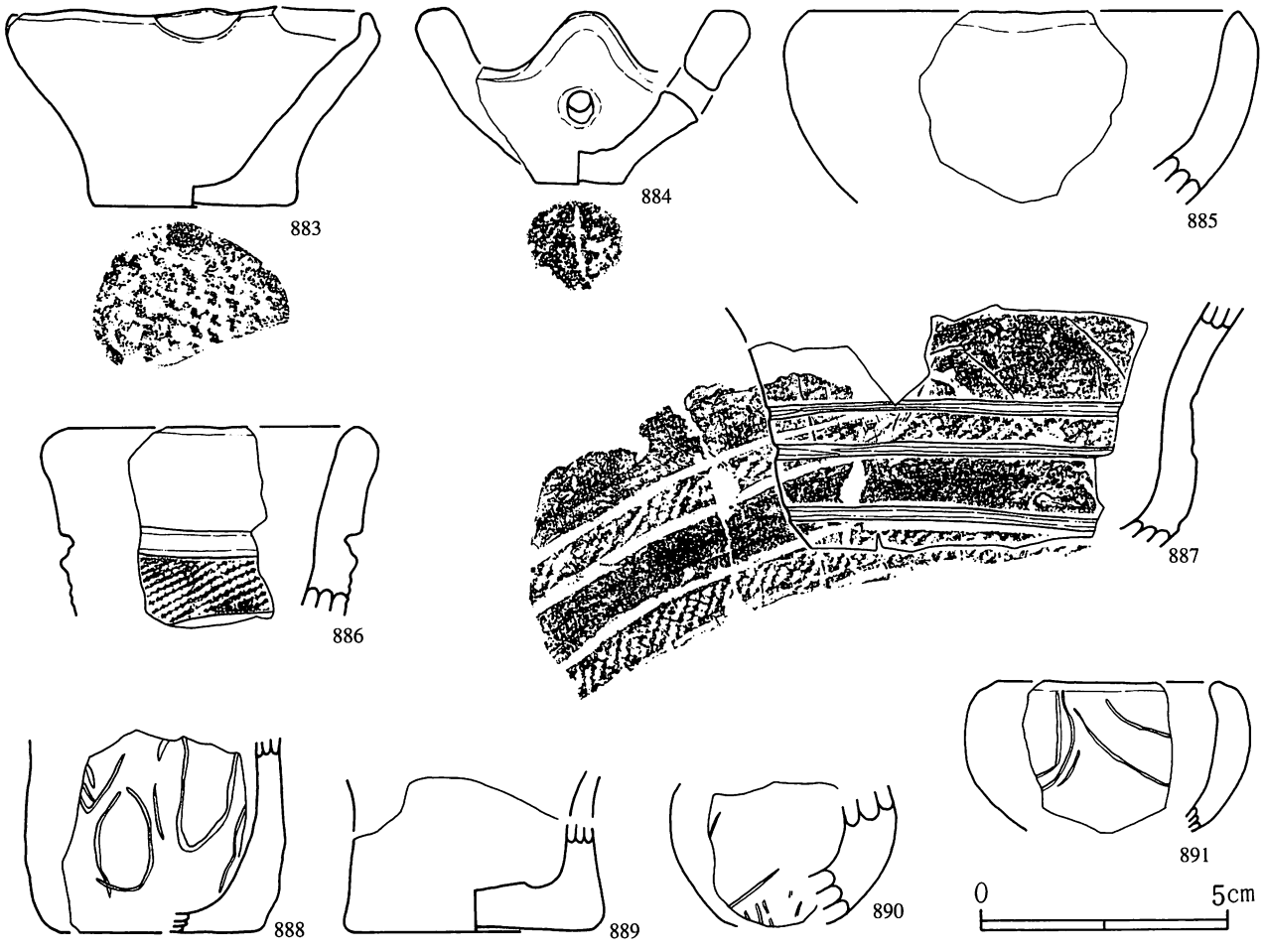
・　土　　偶

確実な土偶破片４点が確認されたが、いずれも同一個体である。894は顔面部分の破片であるが、顔面部分は鼻の突起部以外は平らであり、顔面というより仮面を表したものであろう。韮崎市後田遺跡から同様の土偶が出土しており、仮面を付けた土偶であるとするなら、仮面の角度はもっと上向きになることになる。895～897はこれと同一の胴部破片である。後田遺跡ほかの例からもこの種の土偶は中空となるが、内外面のカーブから、895は体部の、897は脚部の破片であると考えられる。なお、894の側面に見られる極端に細密な縄文は、他の３点の破片にも共通する。胎土が通常の同時期の土器と明らかに違って灰色を呈し、瓦質とでも呼ぶべき胎土と言える。また、砂粒も多く含んでいる。大型の中空という造形上の制約からこのような胎土を用いたものと思われる。

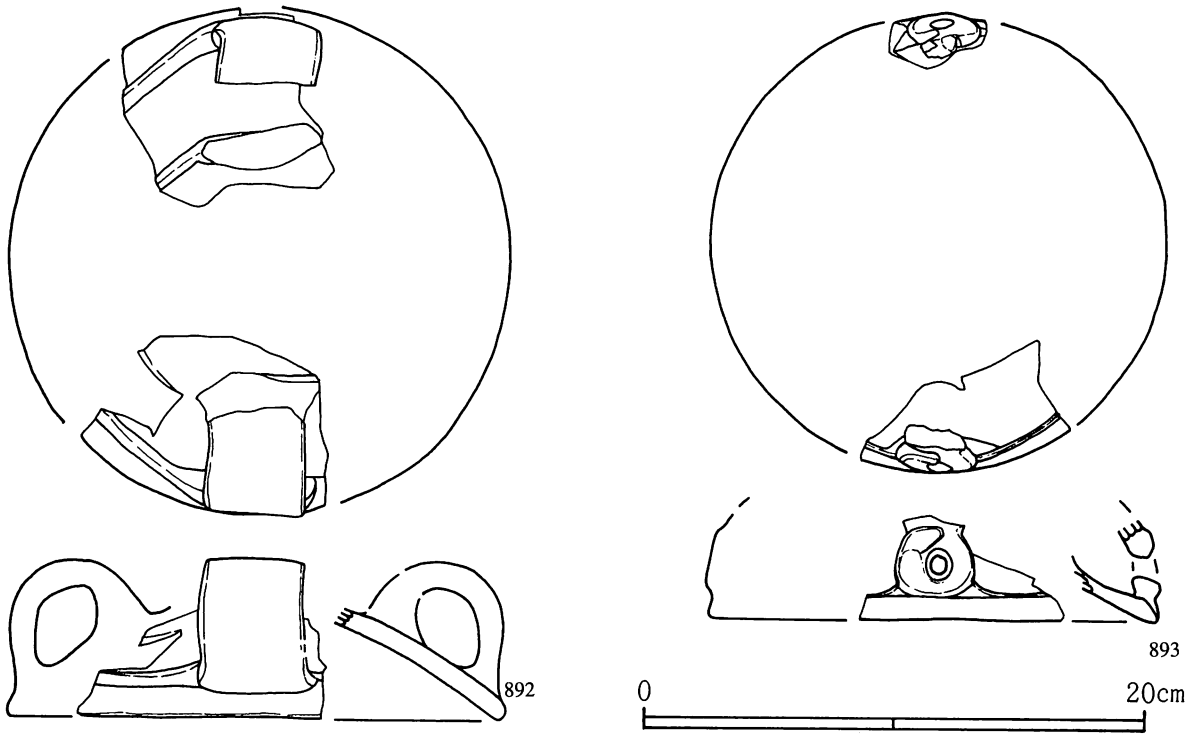
沈線と縄文の施文状況から堀之内Ⅱ式末～加曽利Ｂ式に位置付けられよう。

・　土製円盤

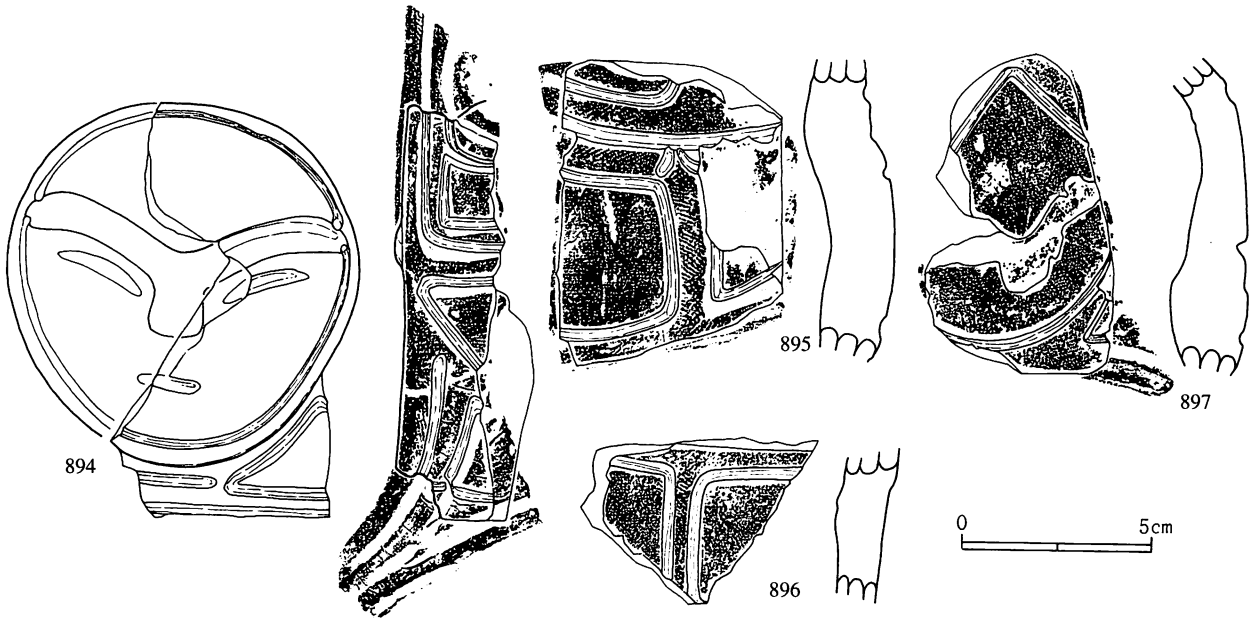
22点の土製円盤が確認された。いずれも土器破片を再利用したもので当初から円盤として作成されたもの、中央部に小孔を有するものなどは含まれていない。ただし908は両面から穿孔を行っているが、両面の穿孔位置がずれているためか貫通していない。しかし、通常土器片への穿孔は簡単にできるもので、多少の位置のずれなど問題にはならないはずであり、貫通を意識しなかった可能性も否定できない。住居跡・土坑等縄文時代の遺構内からはわずか３点のみの出土でたはすべて遺構外である。径2.7～4.7㎝、重量８～28ｇとばらつきが大き



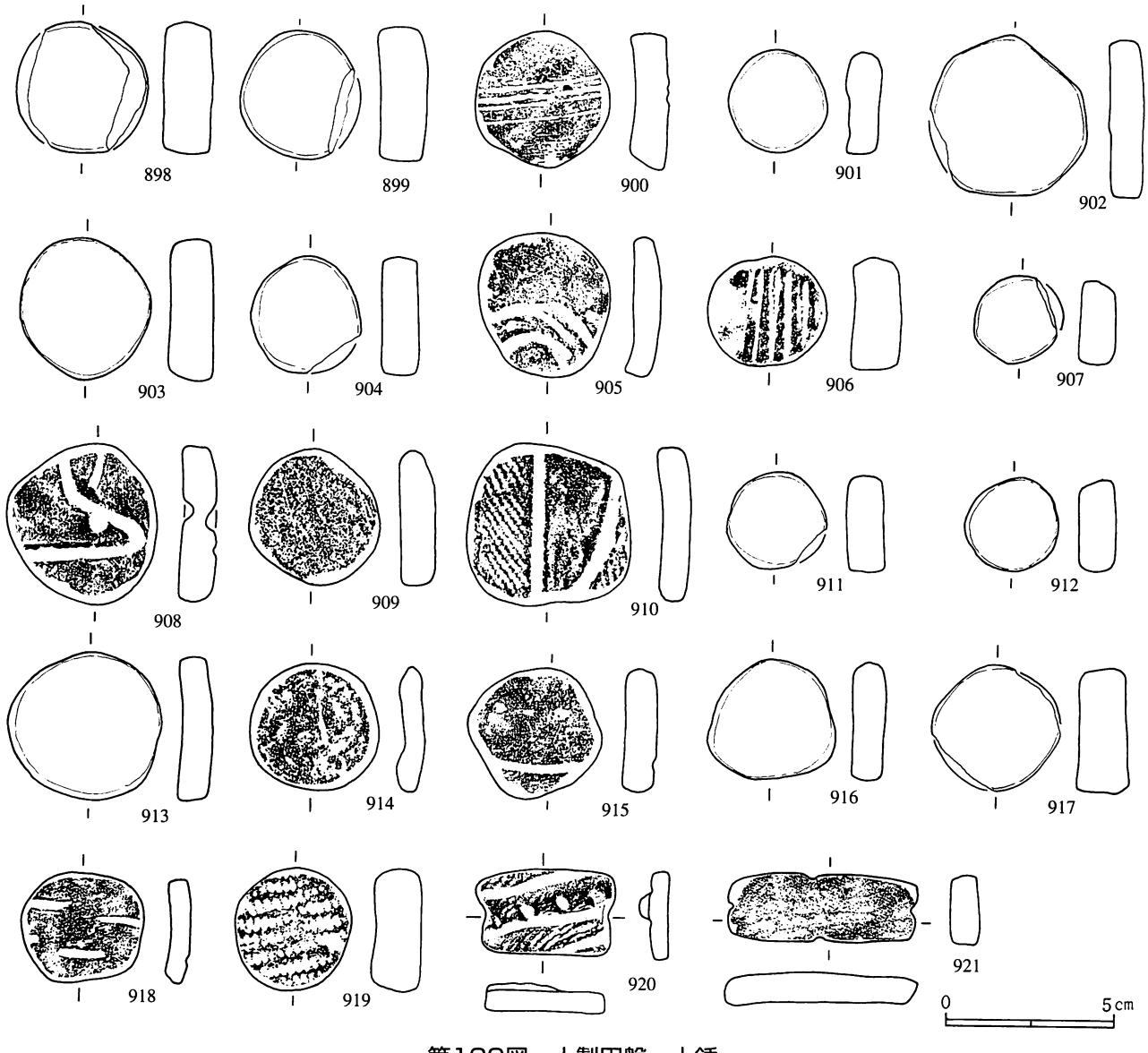
第97図　ミニチュア土器



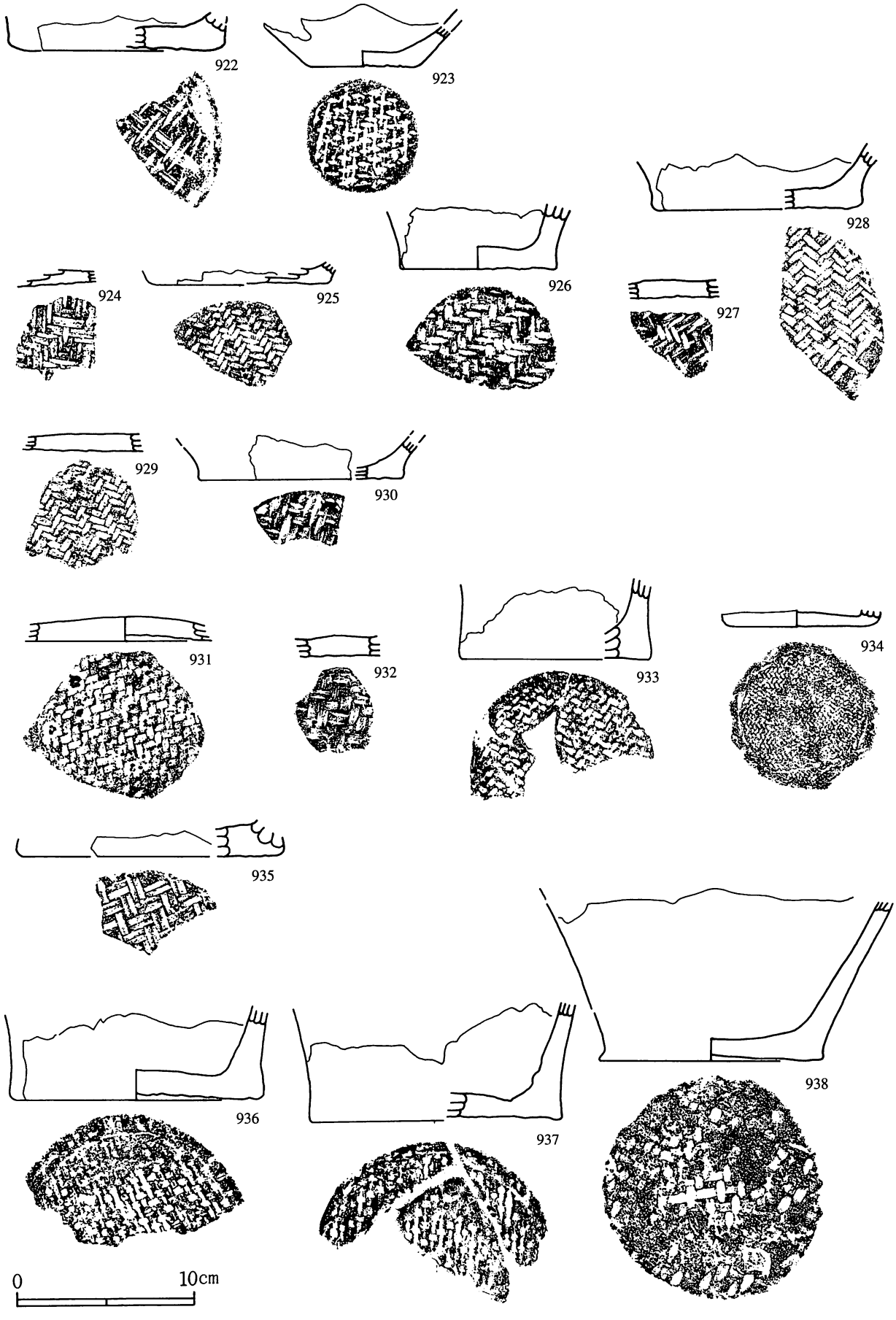
第98図　土製蓋



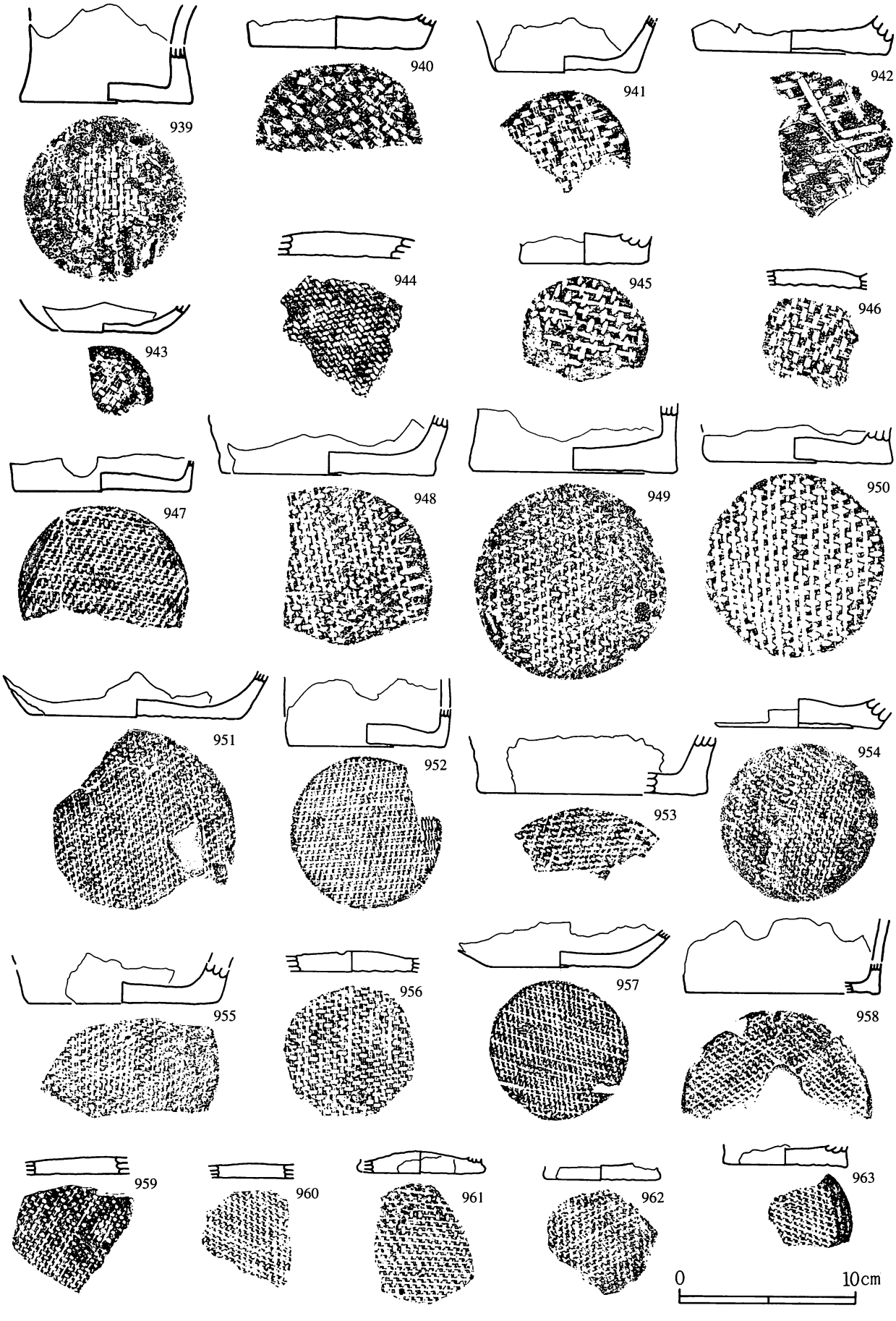
第99図　土偶



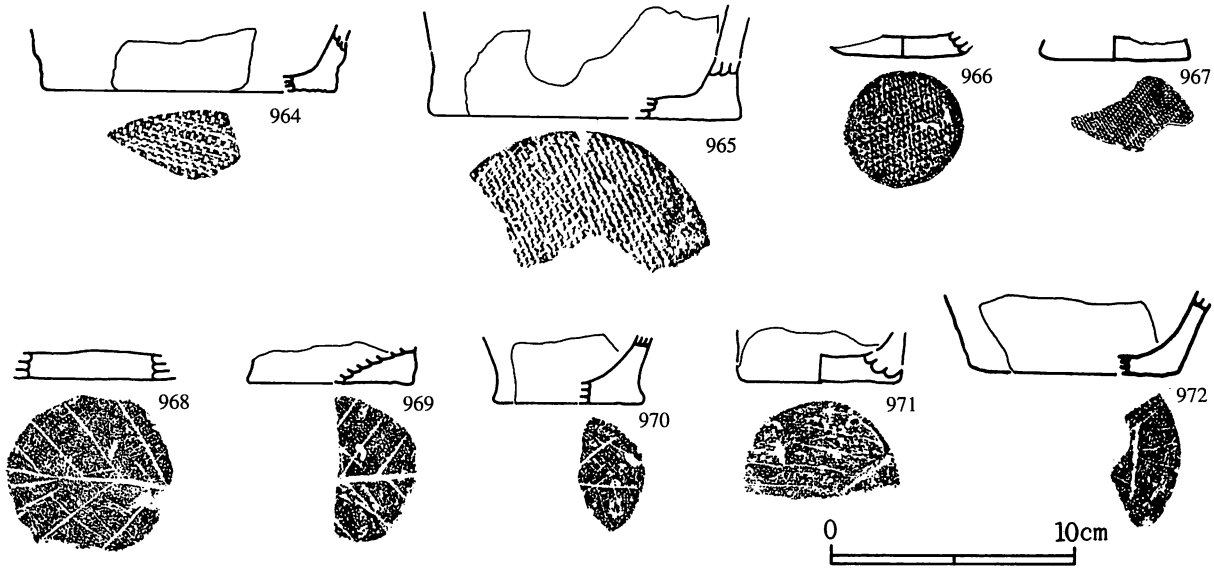
第100図　土製円盤・土錘



第101図　底部圧痕（その1）



第102図　底部圧痕（その２）



第103図　底部圧痕（その３）

い。

・　土　　錘

２点のみの確認で、いずれも土器片を再利用した土器片錘である。920は長軸方向のみに、921は長短両軸に切れ込みを入れたものである。

・　底部圧痕

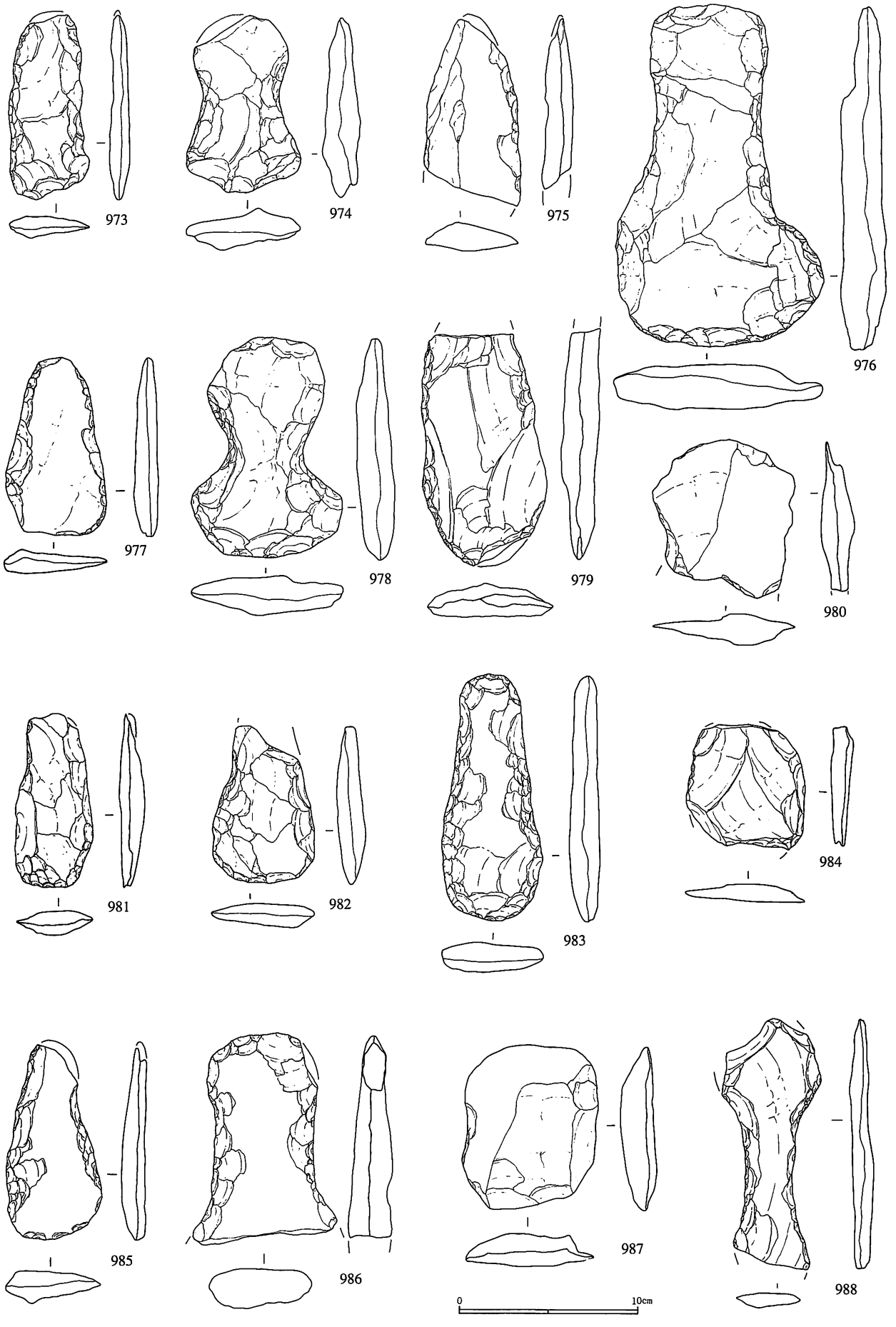
今回の調査では後期の資料が多かったこともあって底部に見られる圧痕もバリエーション豊かである。種類は木葉痕と網代圧痕だけであるが、タテ・ヨコの条の太さや編み方の違いにより網代圧痕の種類は豊富となる。条の幅では922が最も太く、約８㎜、最も細いものが967で0.7㎜を計る。

底部の整形に関して、周辺部と中心部の状況が著しく違うものが何点か確認される。934は網代圧痕の確認される中心部分と確認できない周辺部の間につなぎ目が存在するものである。936や937は中心部・周辺部ともに網代圧痕が同様な方向で確認できるものの、その境目につなぎの痕跡が確認できるものである。938は中心部分と周辺部分とで網代圧痕の方向性が違っているものである。939や963は周辺部分にまったく網代圧痕が確認できないものである。これらは各々状況が違うものの、中心部と周辺部を別に作っている可能性が指摘できるものである。

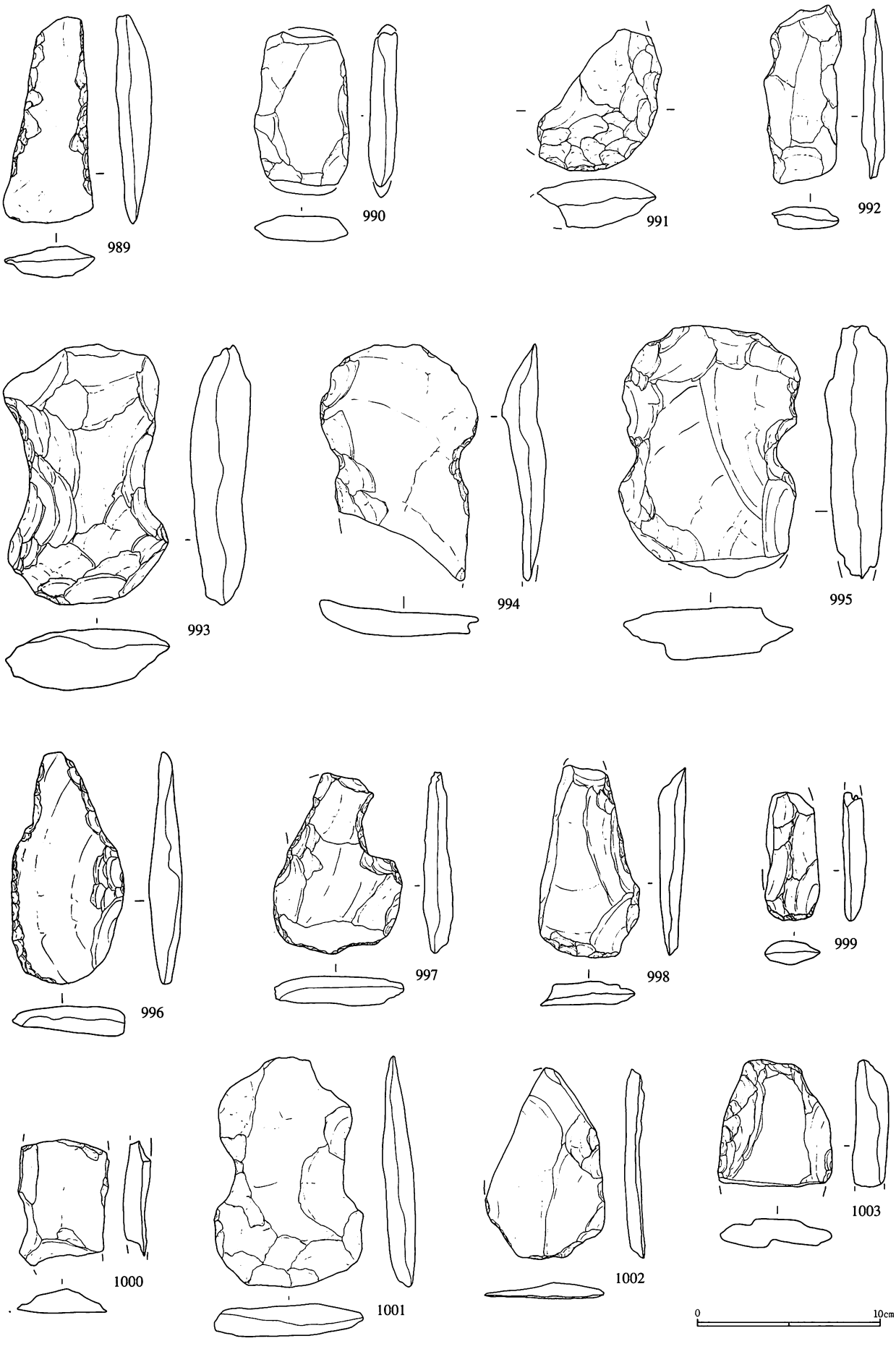
第12節　遺構外出土石器

これまで各遺構毎に出土した石器について触れてきたが、遺構外からも非常に多くの石器が出土している。ここではそれらについての概要を記す。出土位置・石材等、詳細は一覧表に示す。

定形的な石器では打製石斧、磨製石斧、石皿、磨石・凹石・たたき石、多孔石、石棒、石鏃、石錘などがある。打製石斧は今回の調査で合計58点が確認されたが、遺構内出土が10点（このうち９点が住居跡内出土）、遺物集中区出土が10点であり、38点が遺構外出土となる。中期中葉の住居跡などの出土状況とは違い、住居跡内からの出土率が低い。形態では撥・短冊形が多いが、分銅形も19点確認できる。中期の場合では圧倒的に前者の比率が高いのが普通であり、このように分銅形が３割以上にもなるのは後期が主体であることによるものであろう。磨製石斧は19点の出土であり、乳棒状８点、定角式11点となっている。1045は定角式であるが、打ち欠きが明瞭に残っている。小型の自然礫を加工し、磨製石斧に作り上げる途上の未製品と思われる。石皿は19点出土したが、台石あるいは作業台とも呼ぶべき板状石皿が全くなく、磨り面の凹が深い定形的な石皿ばかり

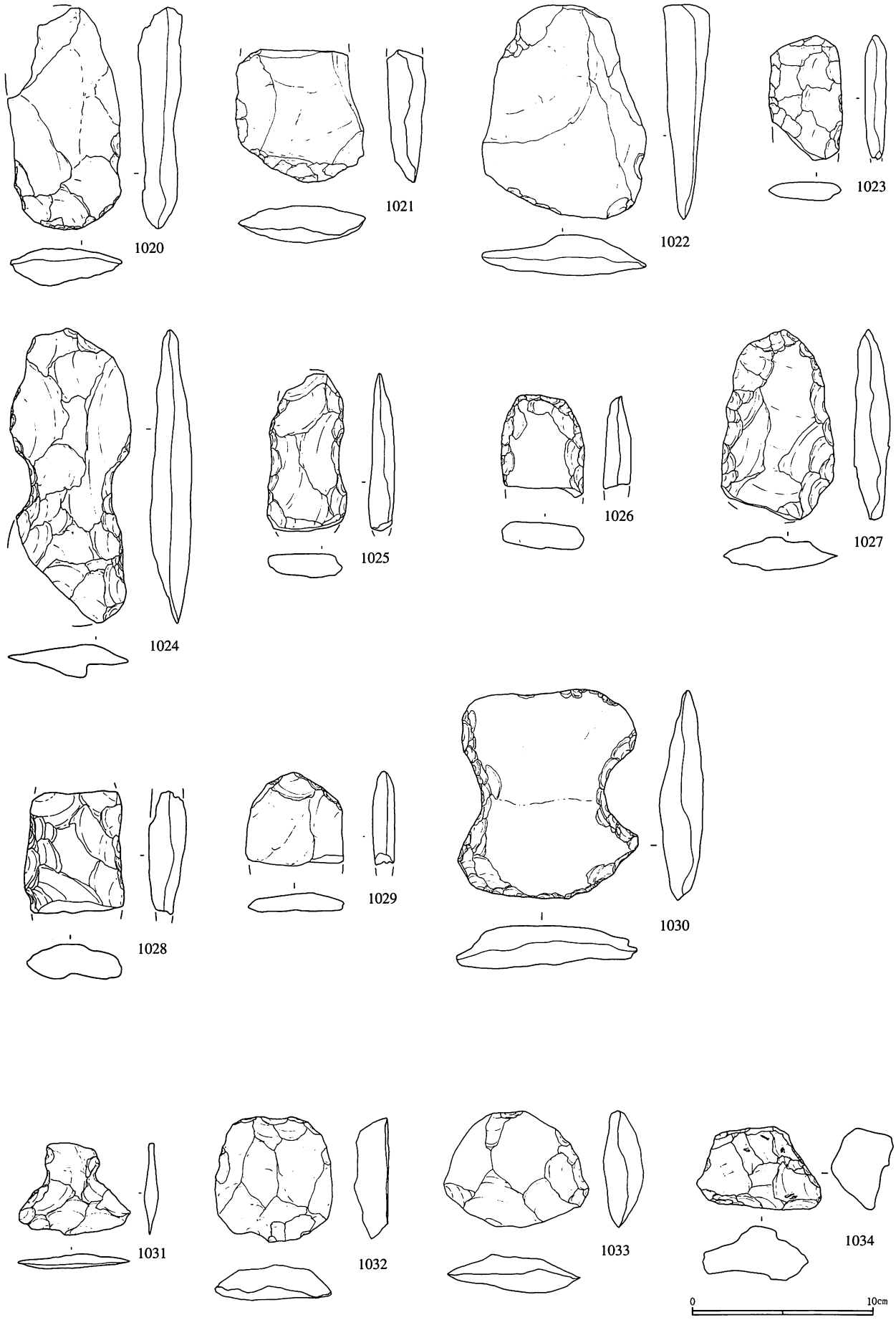


第104図　打製石斧（その1）

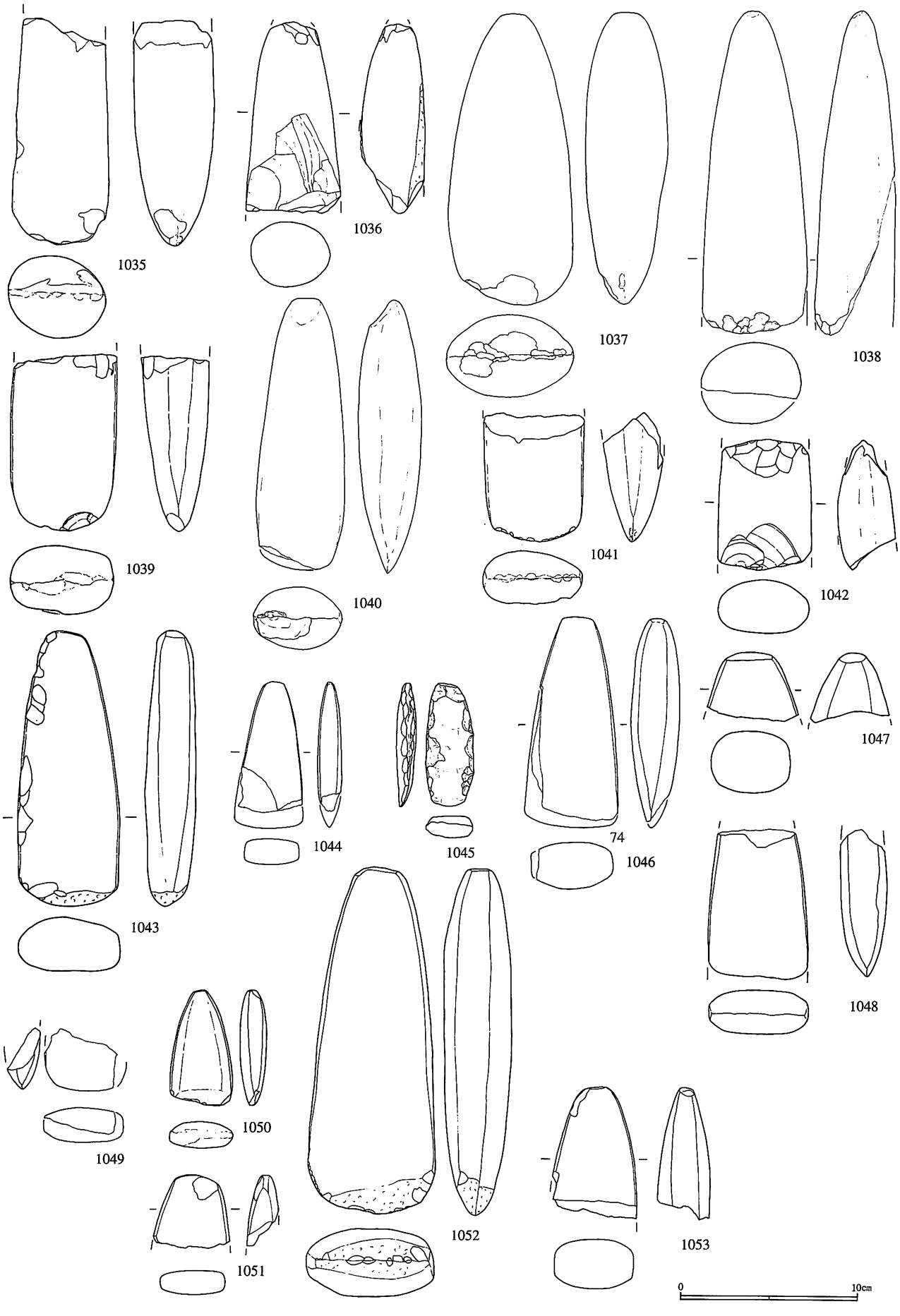


第105図　打製石斧（その２）

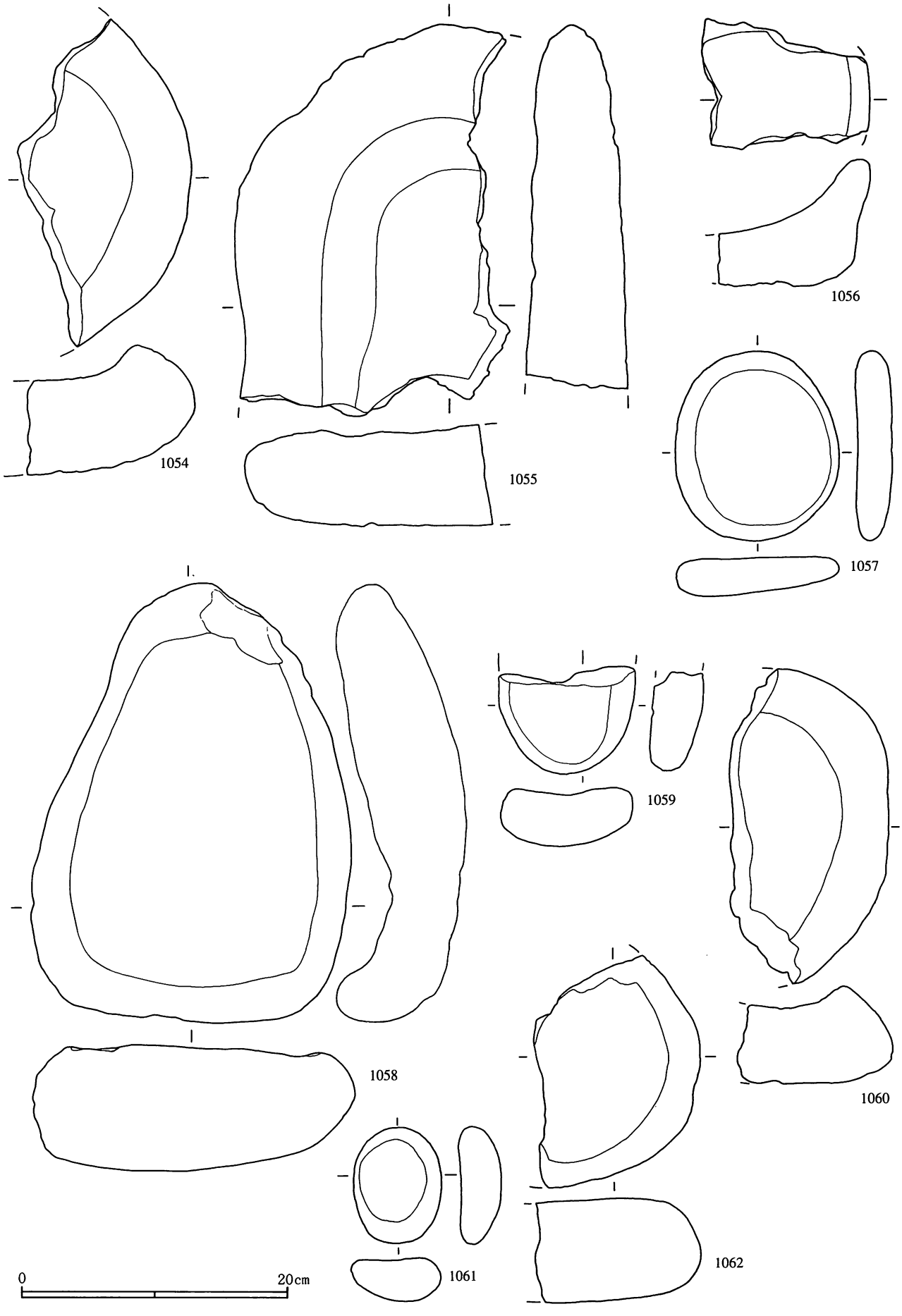
第106図　打製石斧（その３）



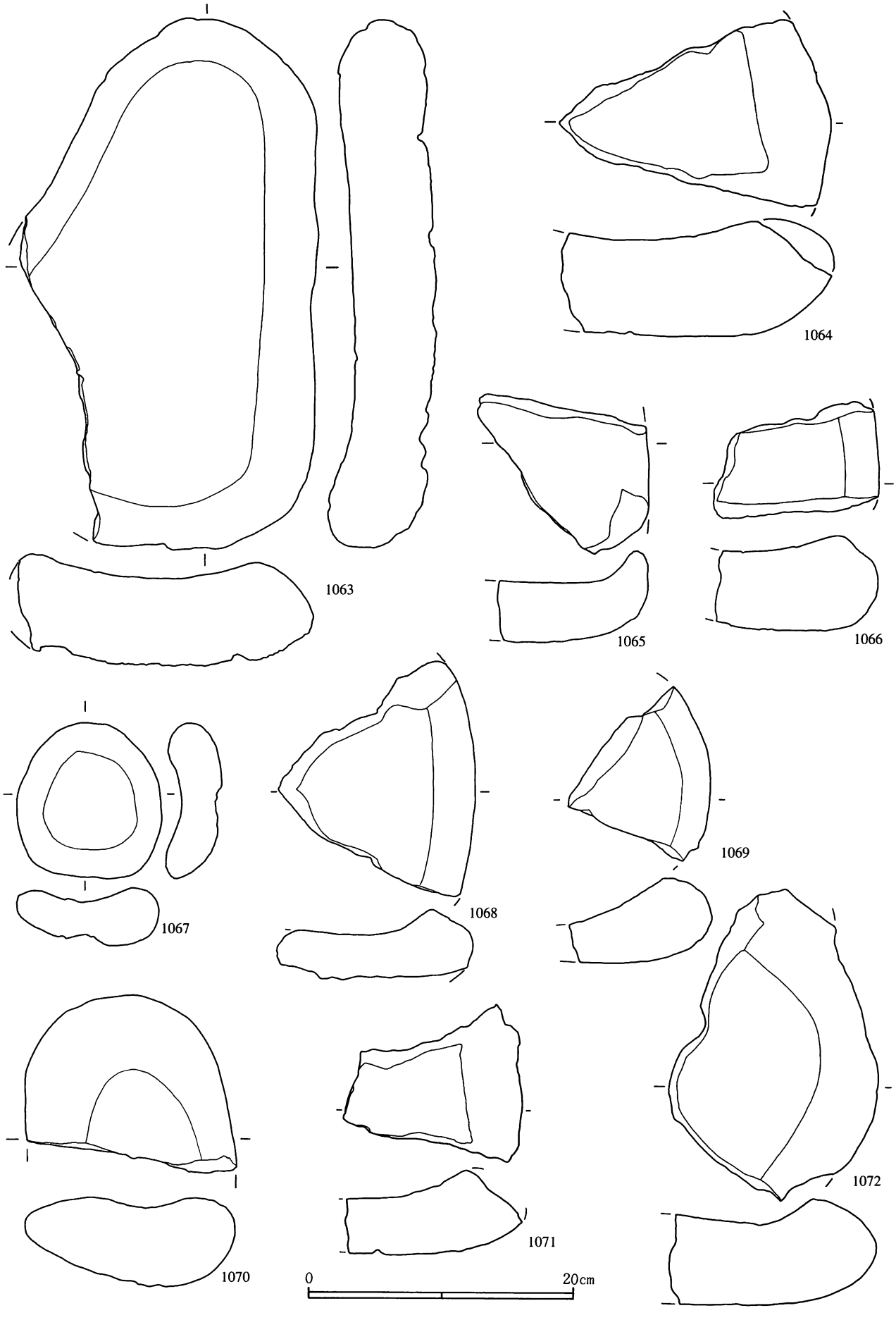
第107図　打製石斧その４・石匙・スクレイパー


1035
1036
1037
1038
1039
1040
1041
1042
1043
1044
1045
74
1046
1047
1048
1049
1050
1051
1052
1053
0
10cm

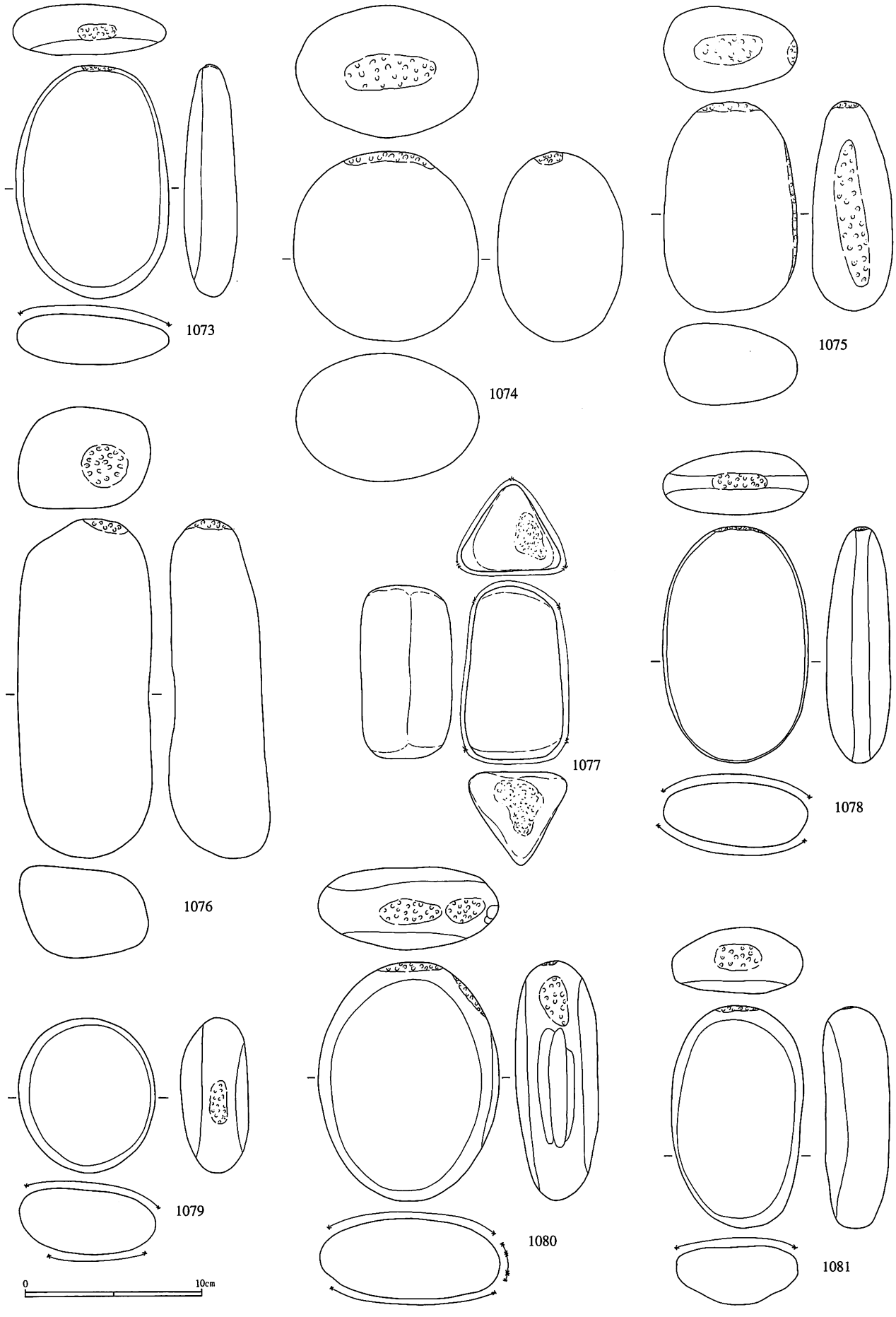
第108図　磨製石斧



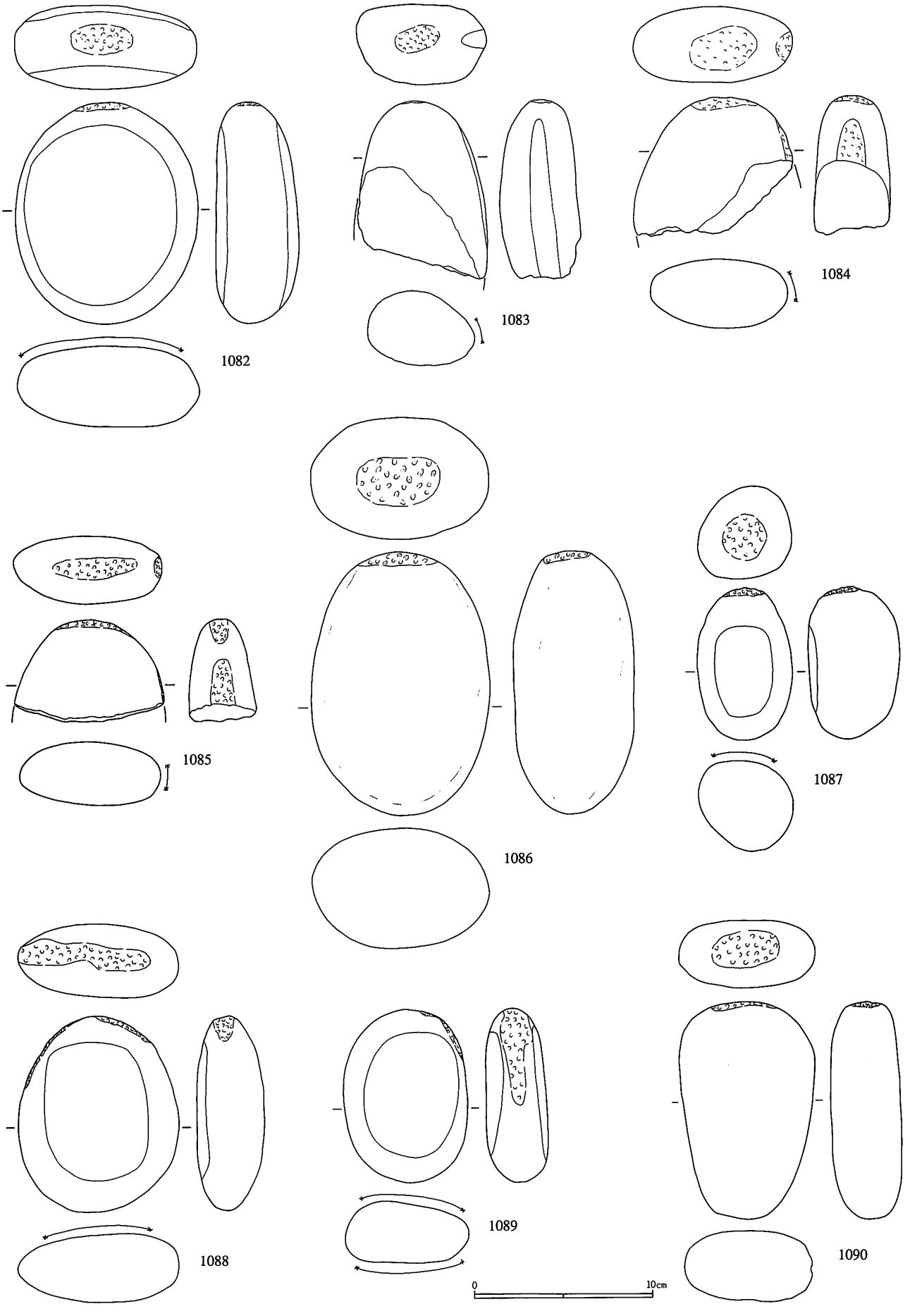
第109図　石皿（その1）



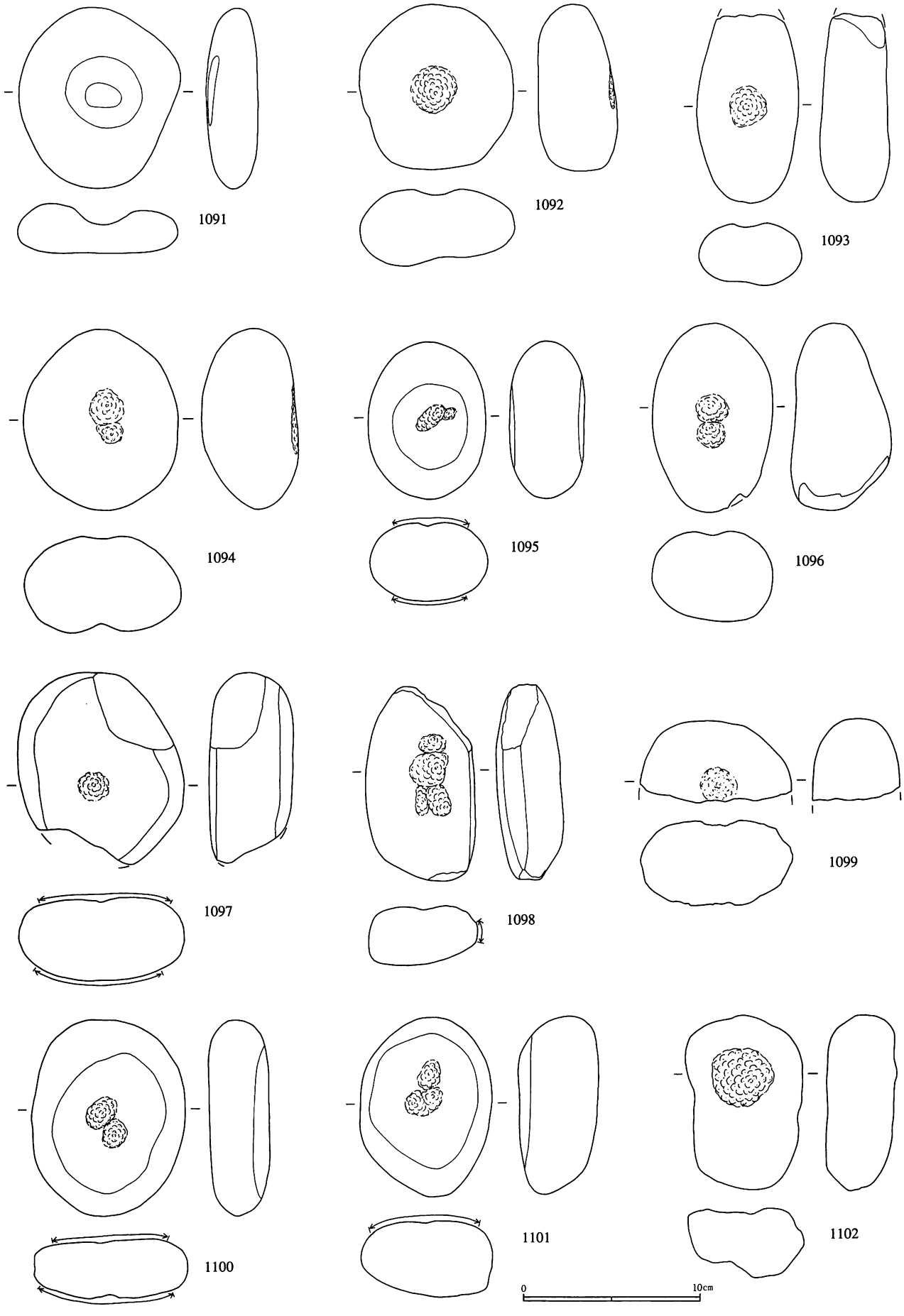
第110図　石皿（その2）



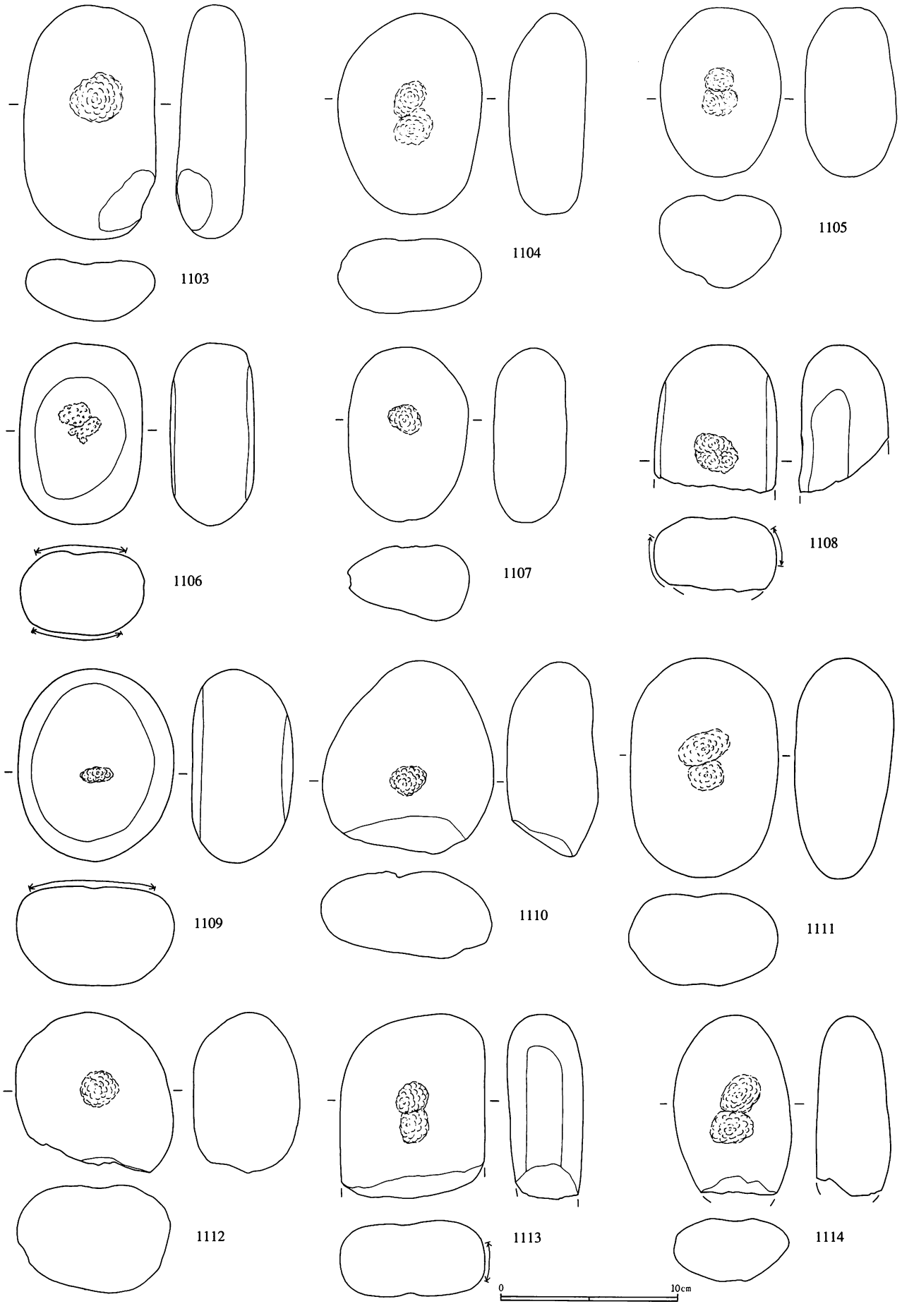
第111図　磨石・凹石・敲き石（その1）



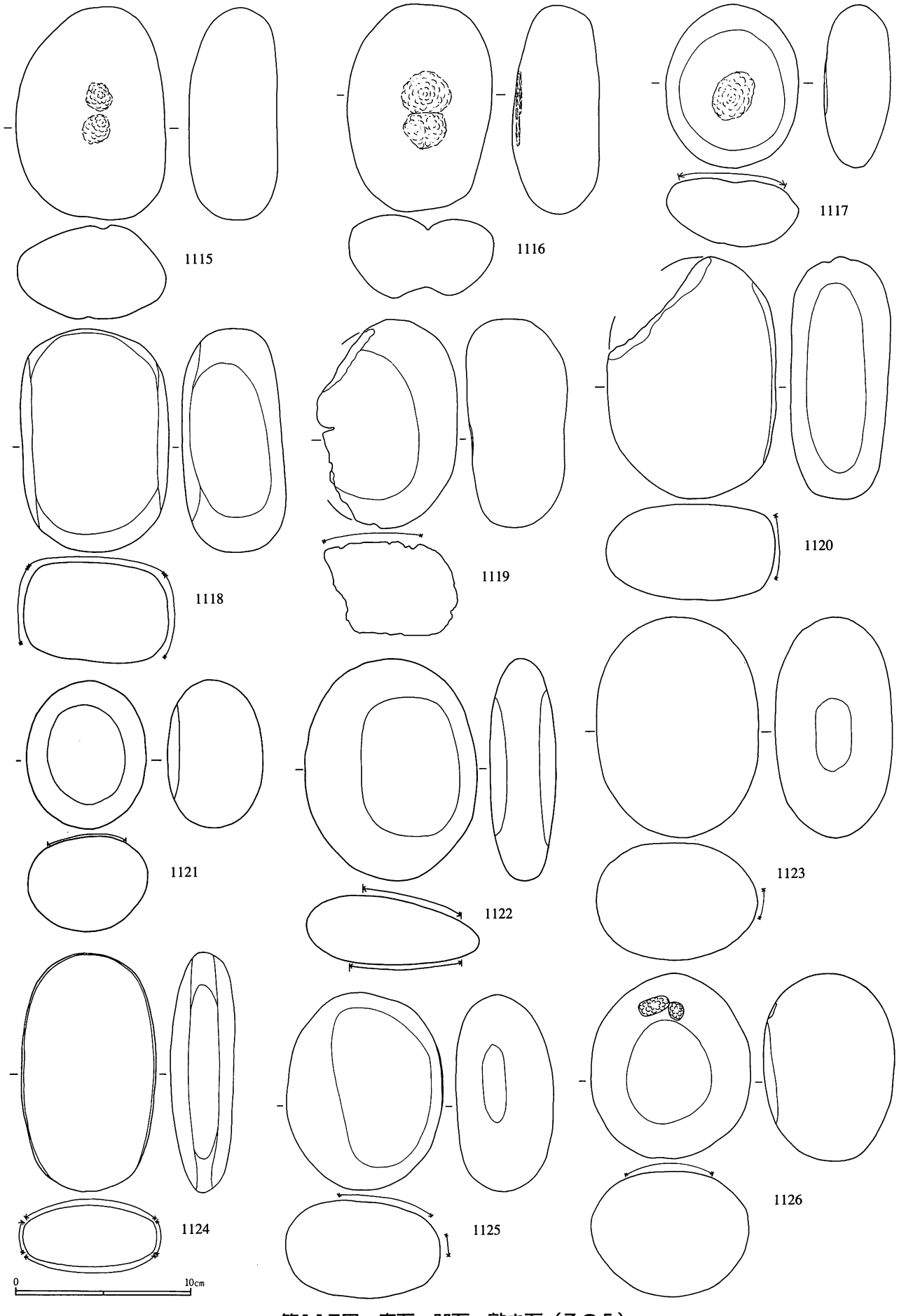
第112図　磨石・凹石・敲き石（その2）



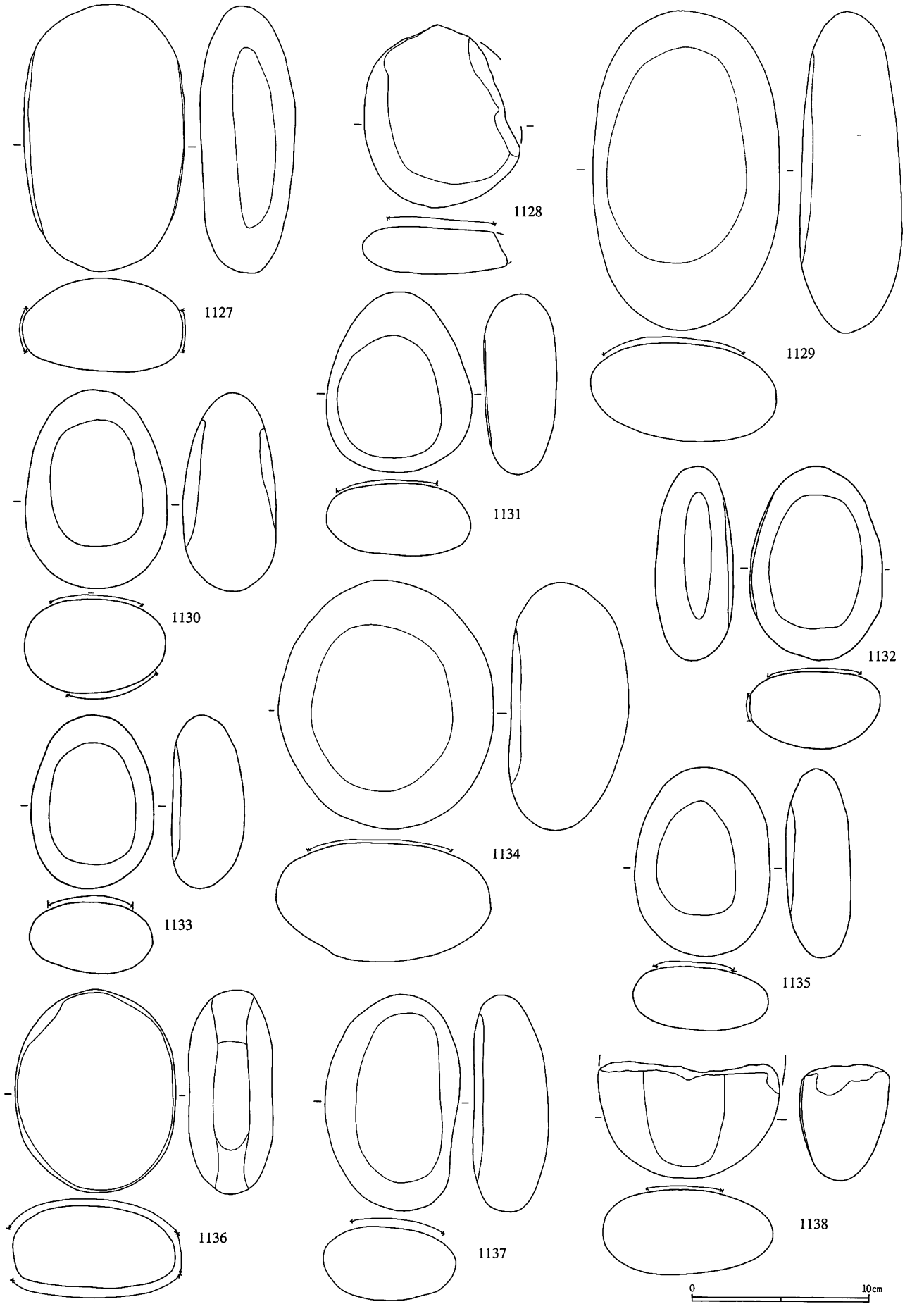
第113図　磨石・凹石・敲き石（その３）



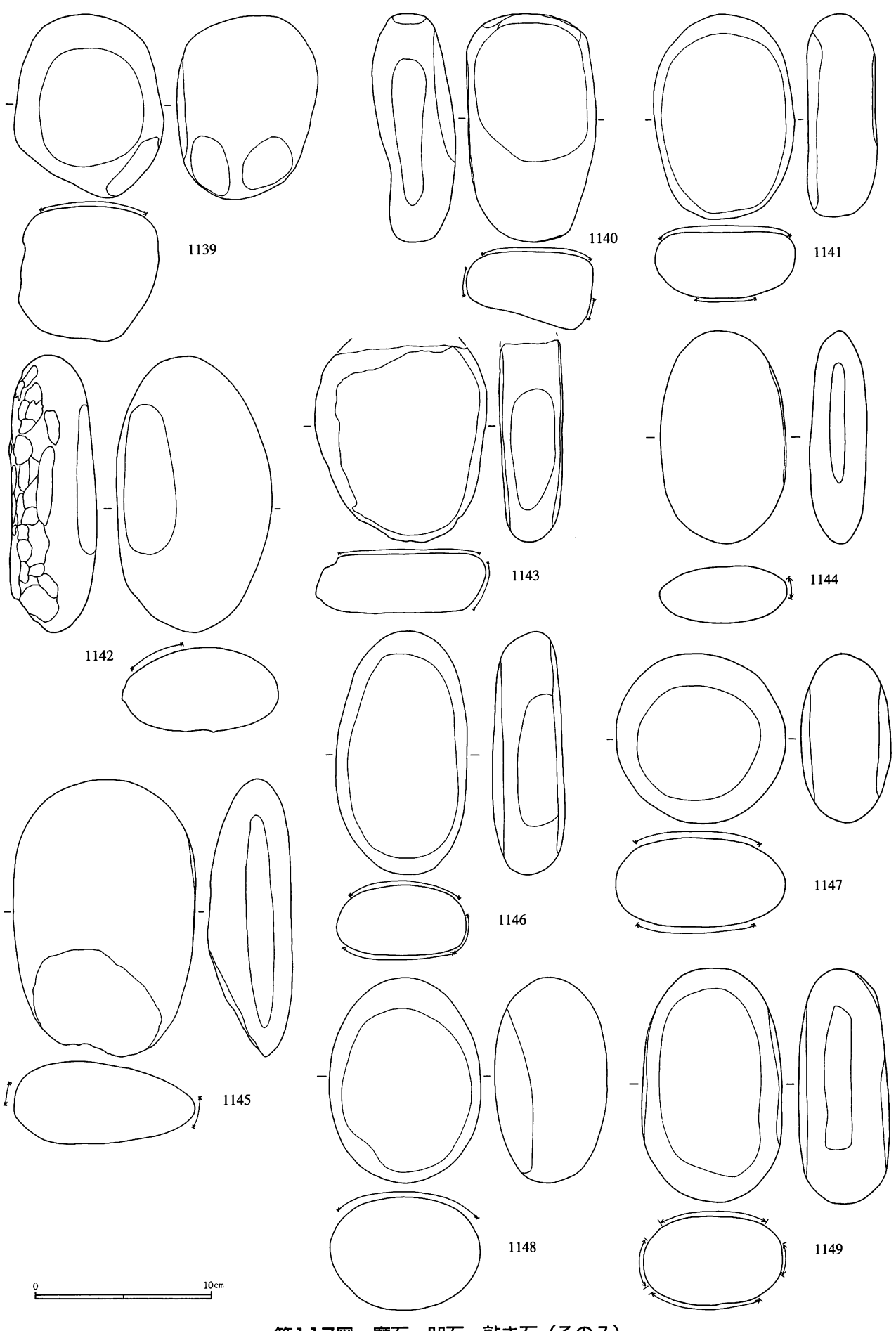
第114図　磨石・凹石・敲き石（その４）



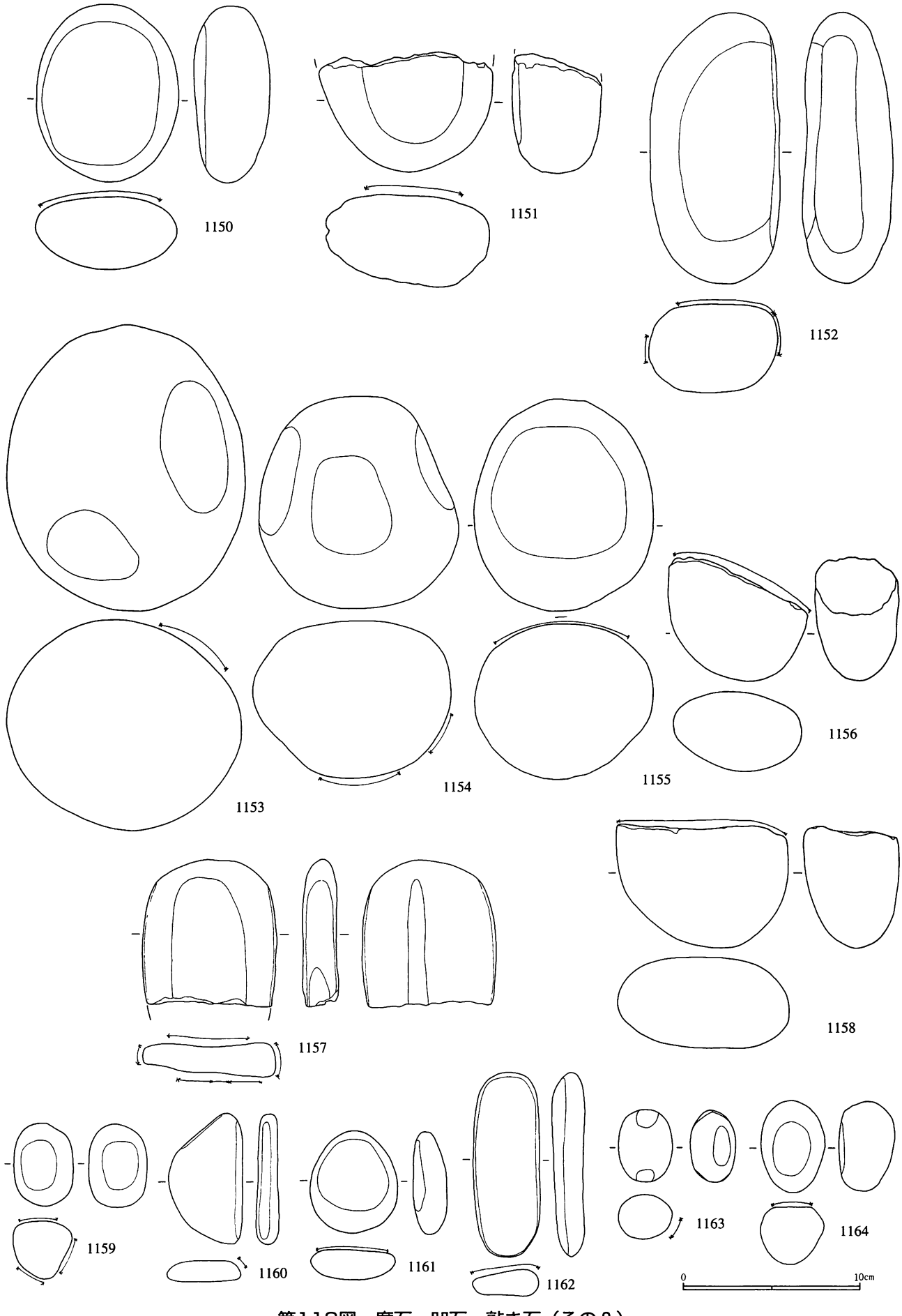
第115図　磨石・凹石・敲き石（その5）



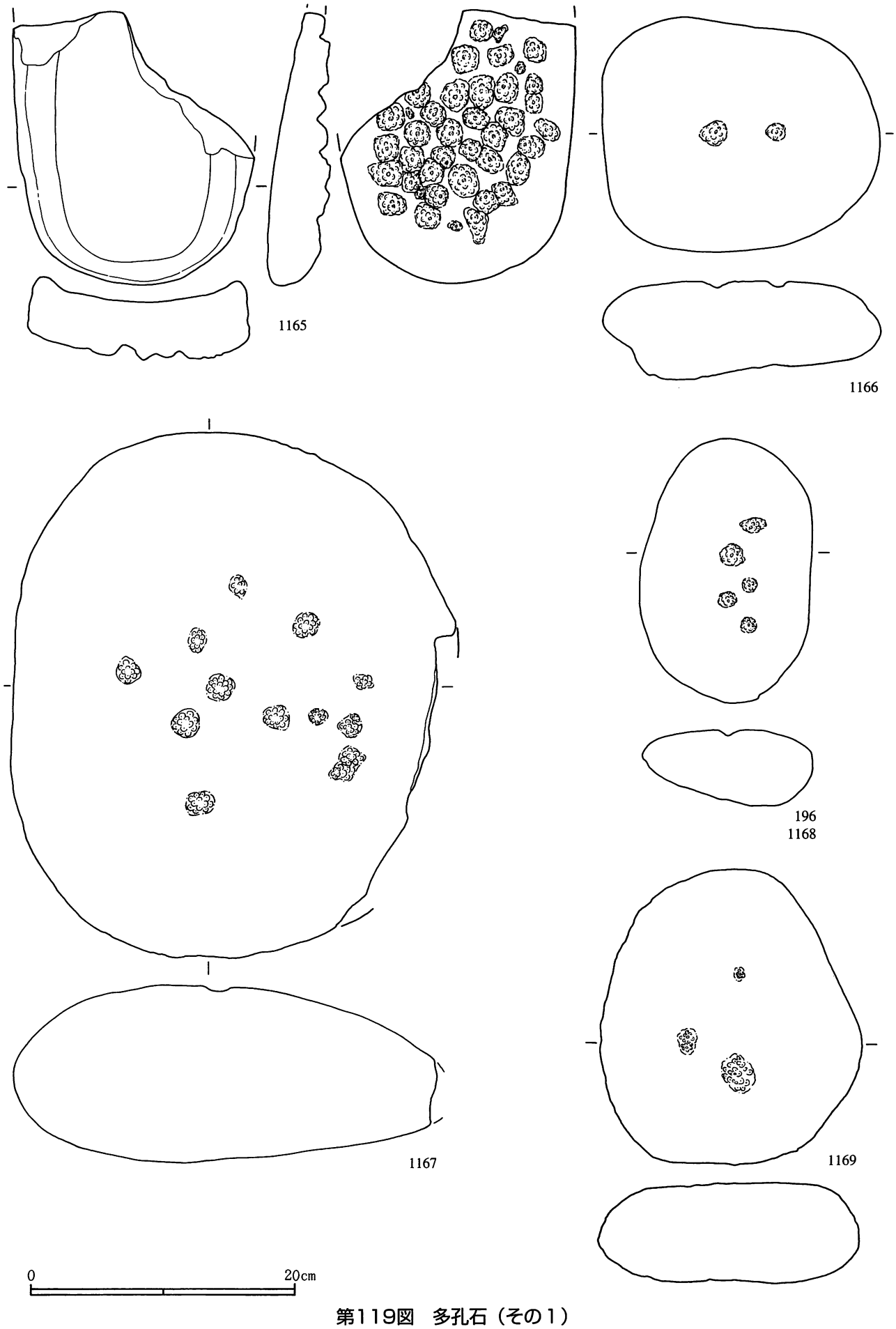
第116図　磨石・凹石・敲き石（その６）



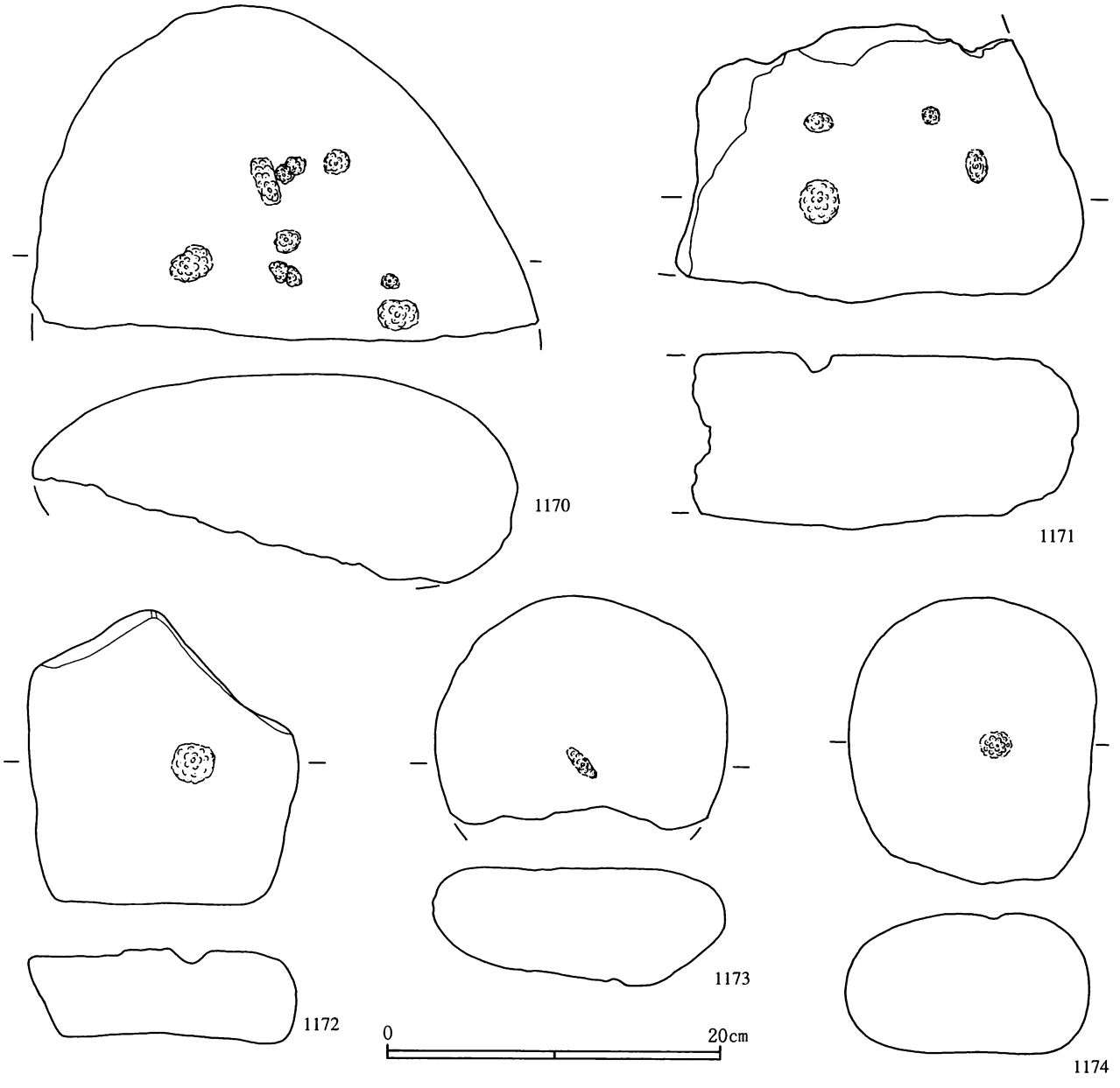
第117図　磨石・凹石・敲き石（その7）



第118図　磨石・凹石・敲き石（その８）

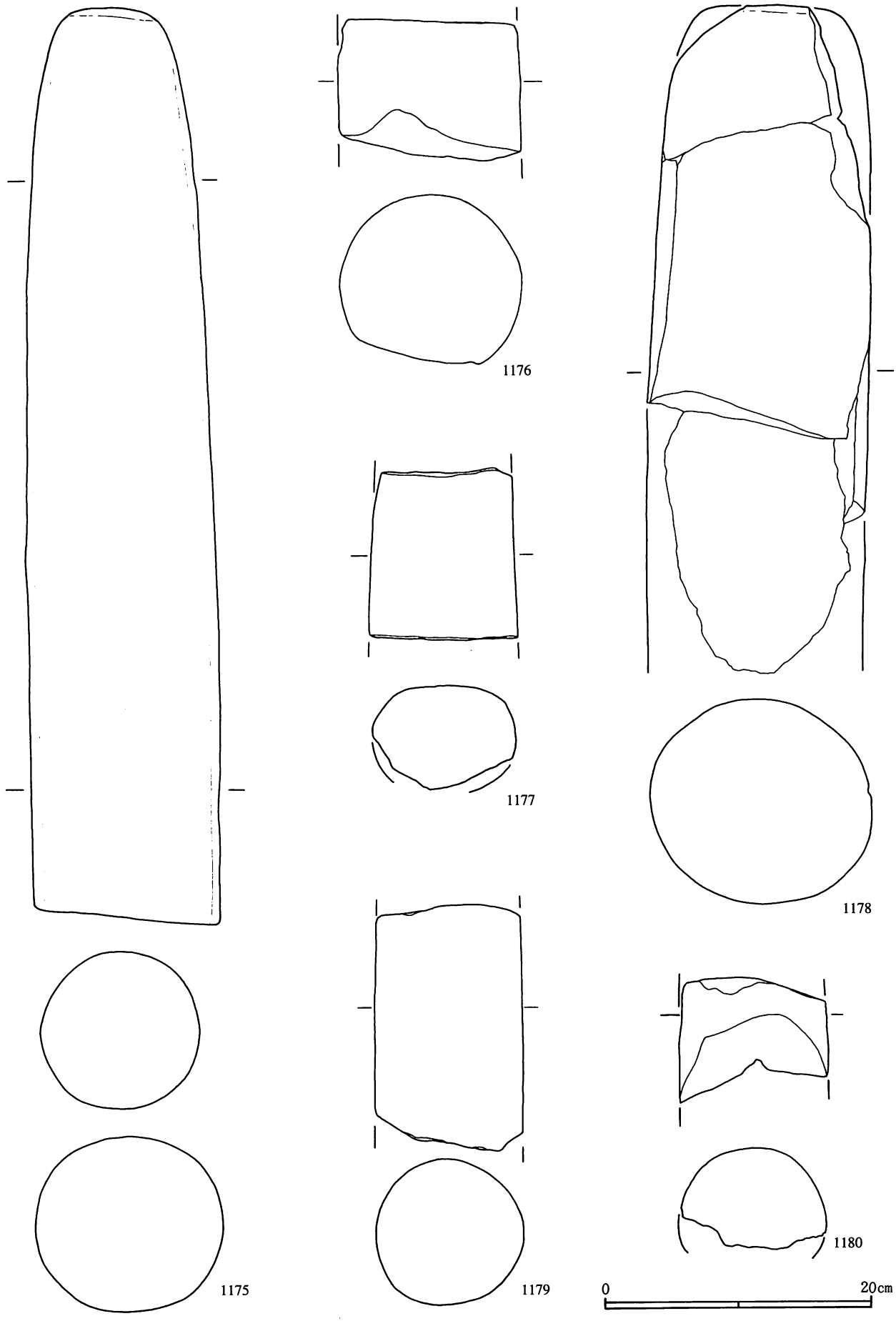


第119図　多孔石（その1）

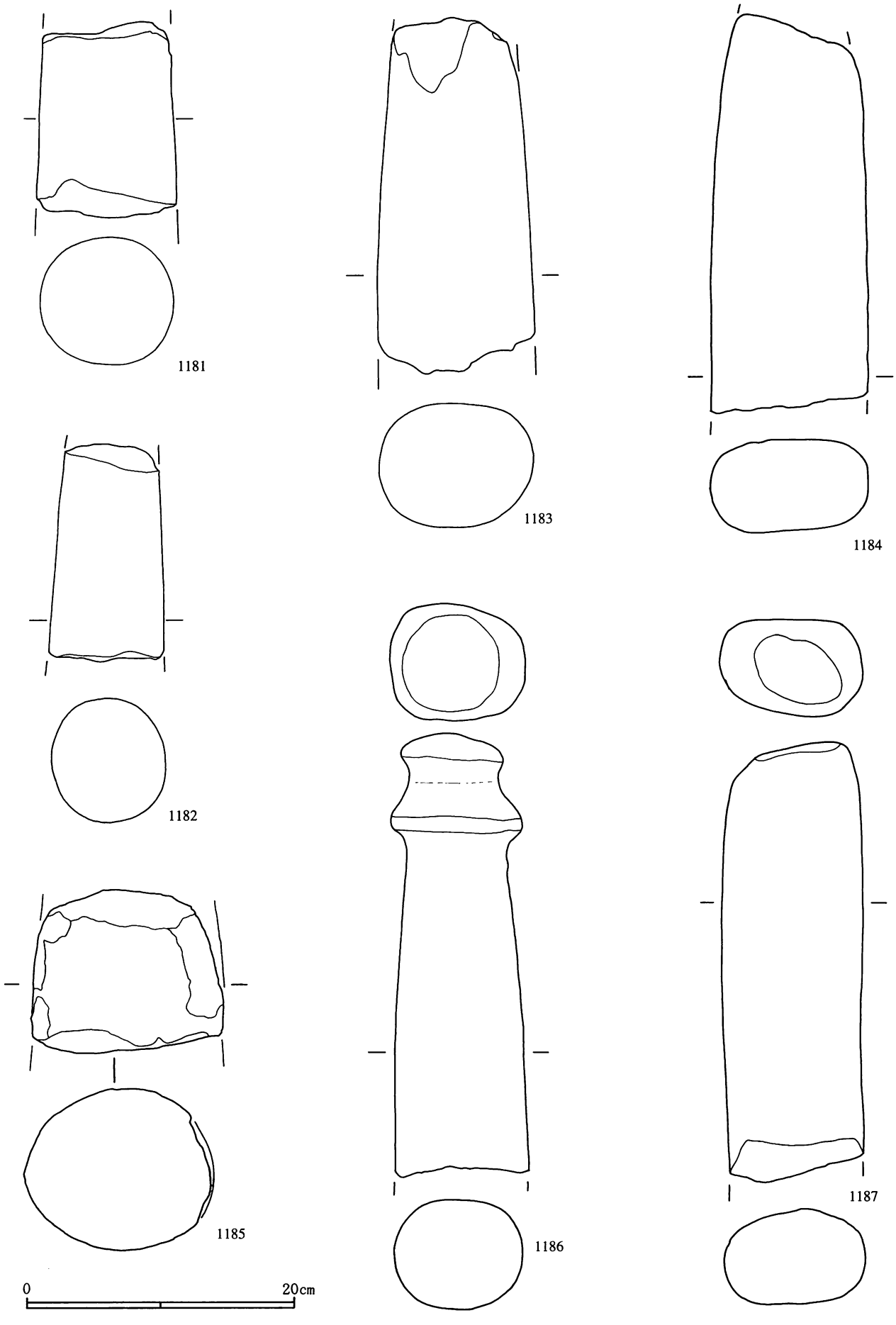


第120図　多孔石（その２）

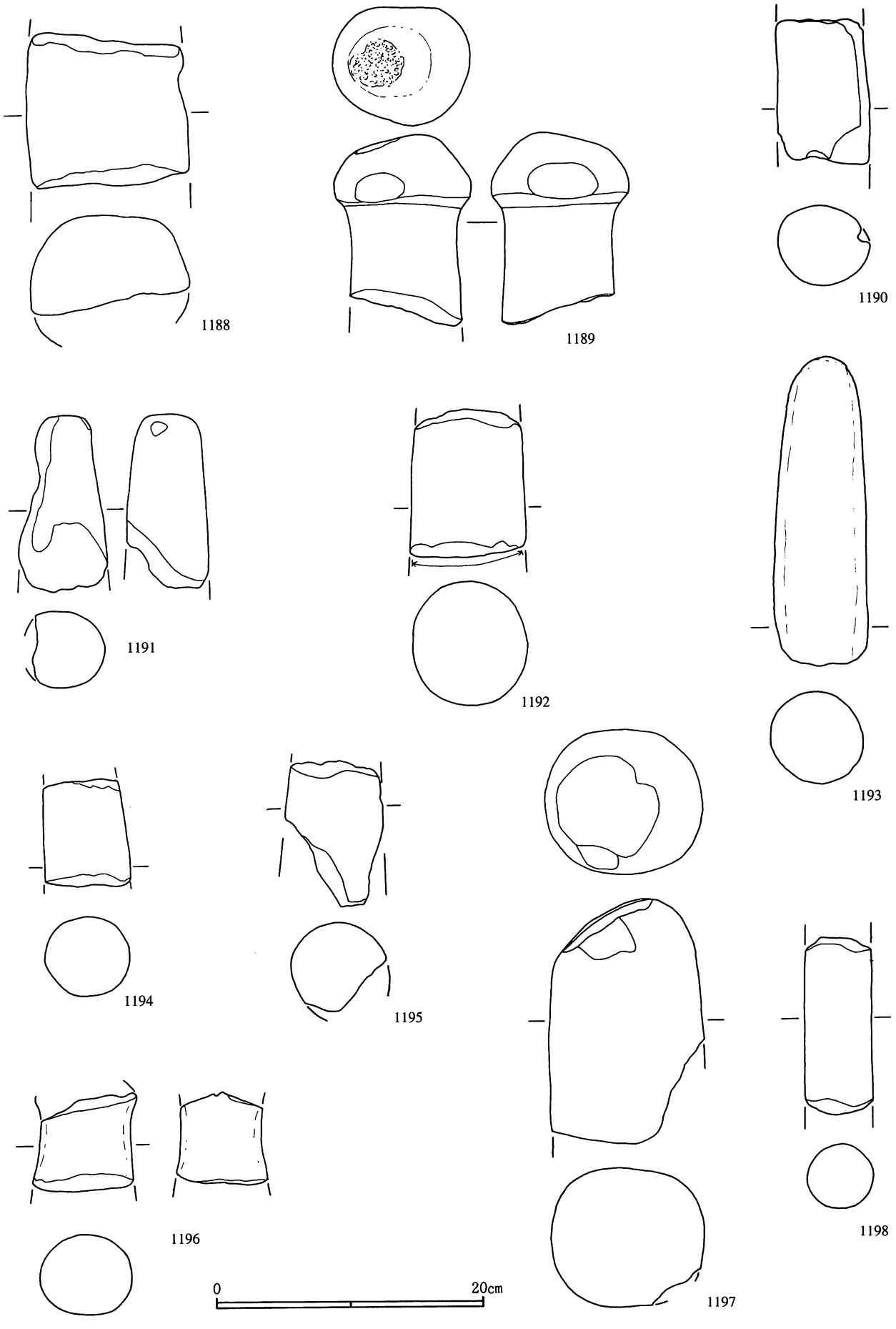
である。また完形品は小型のもの３点のみであった。磨石・凹石・たたき石の３種類は相互に機能を共有しており、それぞれ器種毎に分類・記述するのがかえって繁雑になるため、まとめて図示したものである。92点を報告するが、このほかに小破片や磨りの状況がはっきりしないため報告しないものなどもあり、それらを含めれば100点をはるかに超える数値となろう。1077は通常の円形磨石と明らかに違って三角柱状の形態で、三角柱状土製品を思わせる。３面とも磨り面であると同時に、両サイドをたたきあるいは磨りに使用している。1157～1164は小型円礫のサイドを磨りに使用したのものである。多孔石には孔面や裏面が平坦であるものがあり、これらは台石として使用された可能性もある。石棒は24点出土しており、遺構数に比べると多いと言えよう。このうち14点が住居内からの出土であり、改めて住居内の出土率の高さを示すこととなった。また、１号住居跡２点、２号住居跡４点、７号住居跡３点、13号住居跡２点など１軒の住居跡から複数出土するケースが目立つ。完形品は１点のみで、頭部や基部を欠損したものがほとんどである。当然頭部の確認できたものも少ないが、有頭３点、無頭６点である。また、遺構の項でも触れたが、1186は居住部と入り口部の仕切り部分に立てられていたもので、居住部に入るためにはそれを跨がざるを得ない状況が想定される。石棒祭式の形態を具体的に示す例である。石錘は22点である。これまでの本県の調査例からすれば多い数字である。礫石錘がほとん



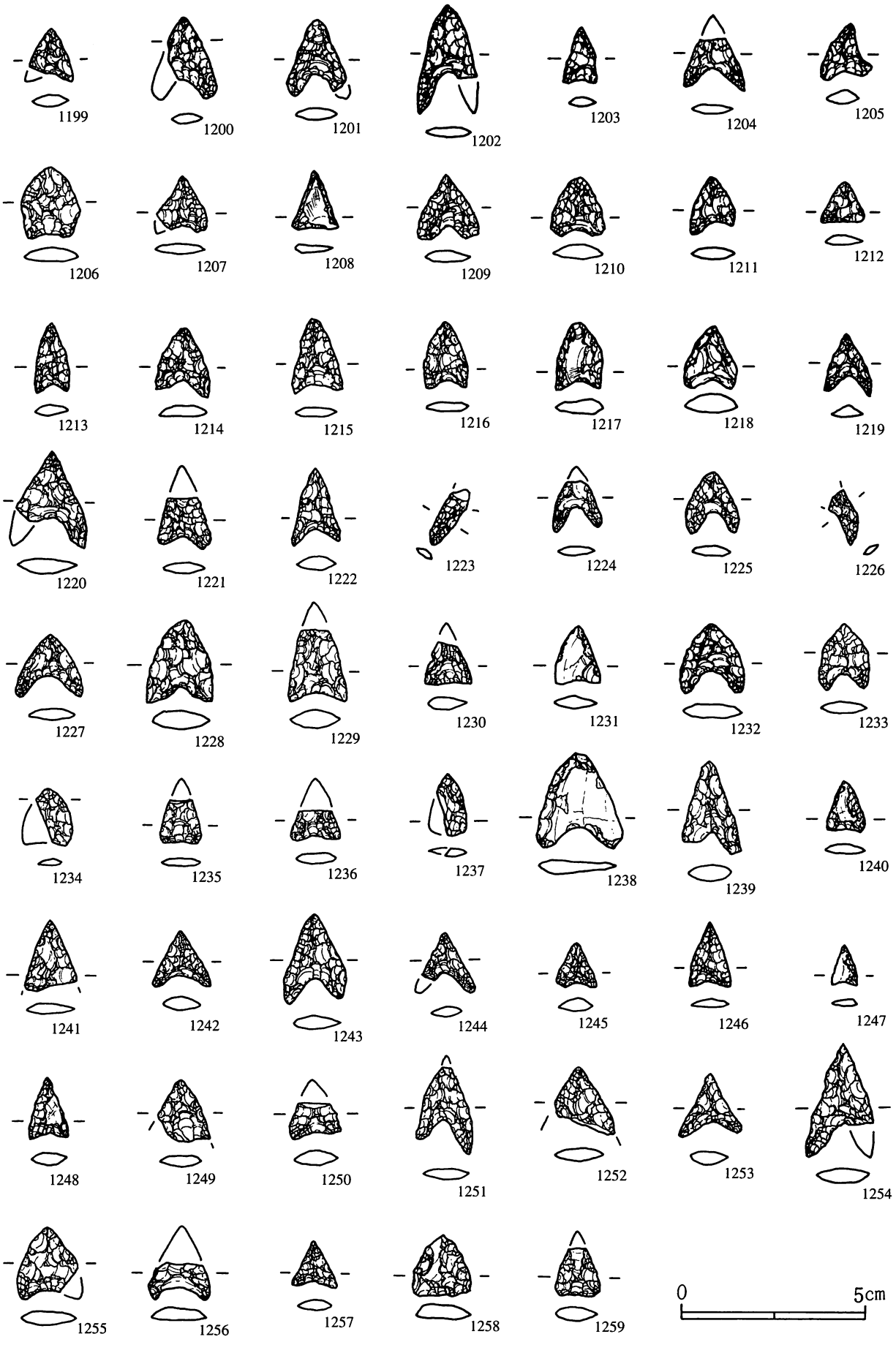
第121図　石棒（その1）



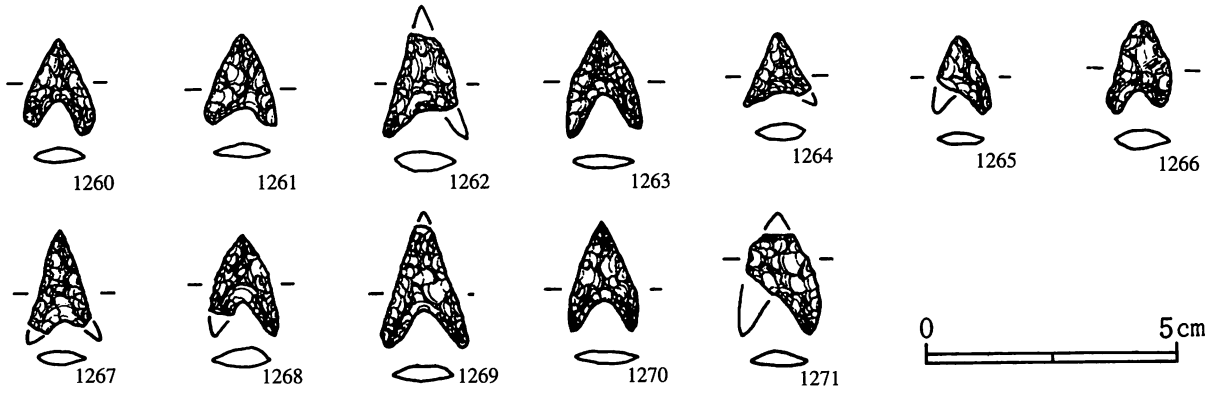
第122図　石棒（その２）



第123図　石棒（その３）

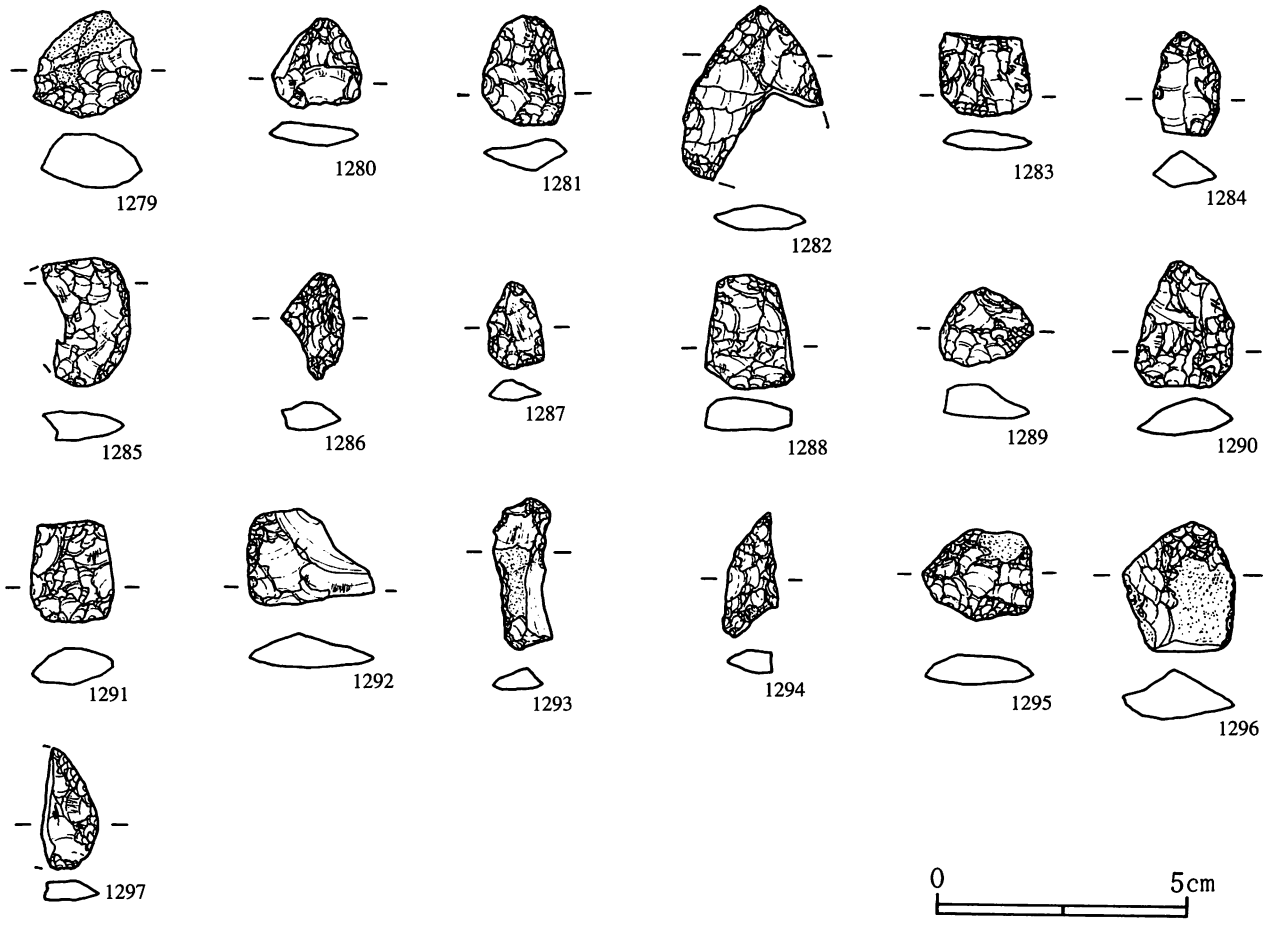

1199
1200
1201
1202
1203
1204
1205
1206
1207
1208
1209
1210
1211
1212
1213
1214
1215
1216
1217
1218
1219
1220
1221
1222
1223
1224
1225
1226
1227
1228
1229
1230
1231
1232
1233
1234
1235
1236
1237
1238
1239
1240
1241
1242
1243
1244
1245
1246
1247
1248
1249
1250
1251
1252
1253
1254
1255
1256
1257
1258
1259
0
5cm

第124図　石鏃（その１）

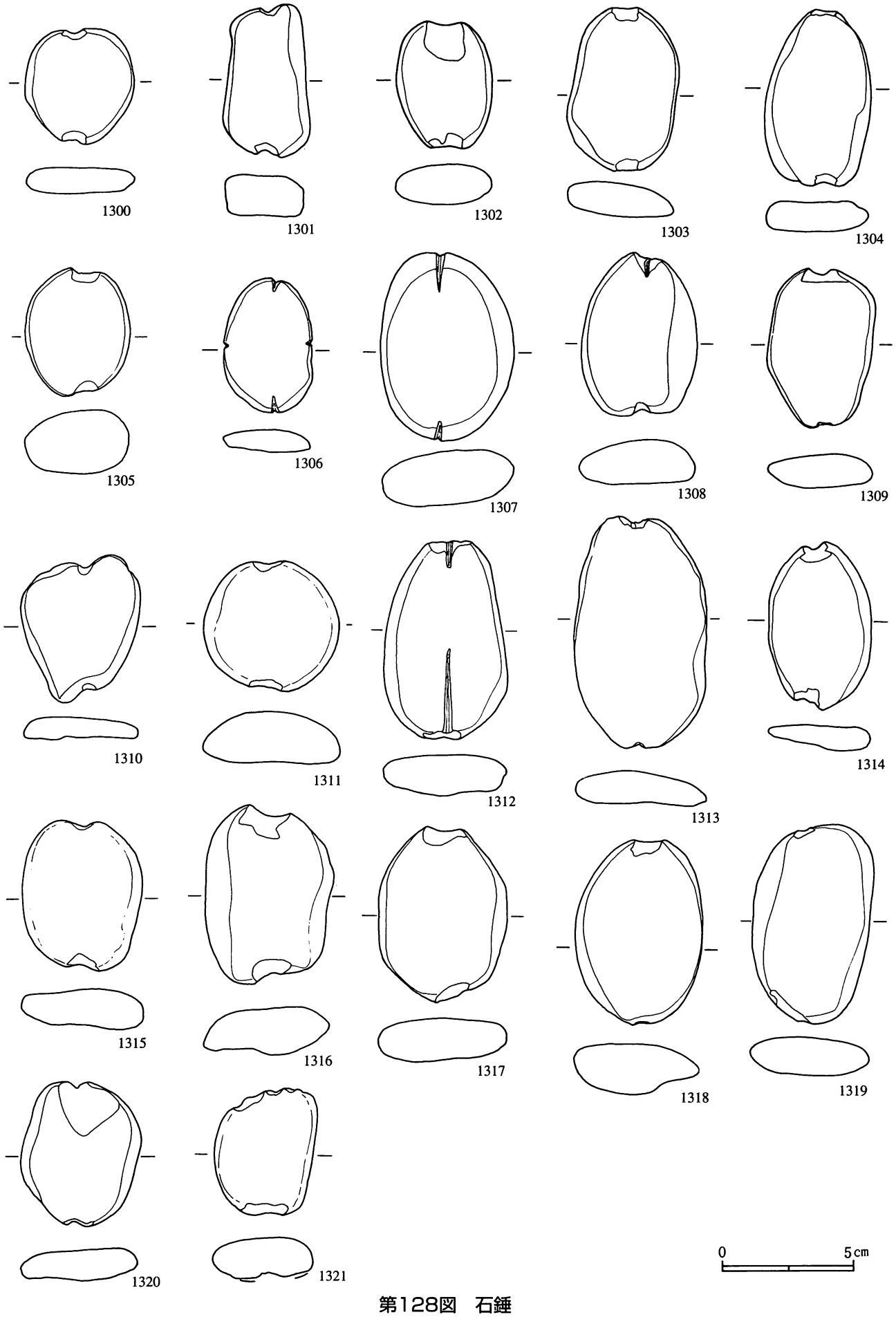


第125図　石鏃（その2）

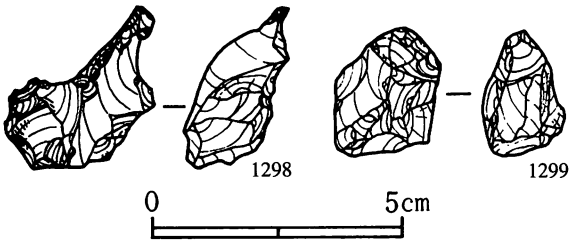
第126図　ドリル



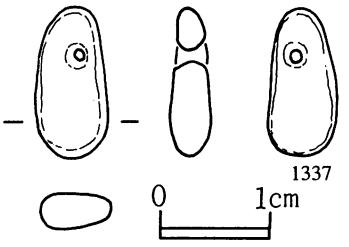
第127図　加工痕ある剥片


1300
1301
1302
1303
1304
1305
1306
1307
1308
1309
1310
1311
1312
1313
1314
1315
1316
1317
1318
1319
1320
1321
0
5cm

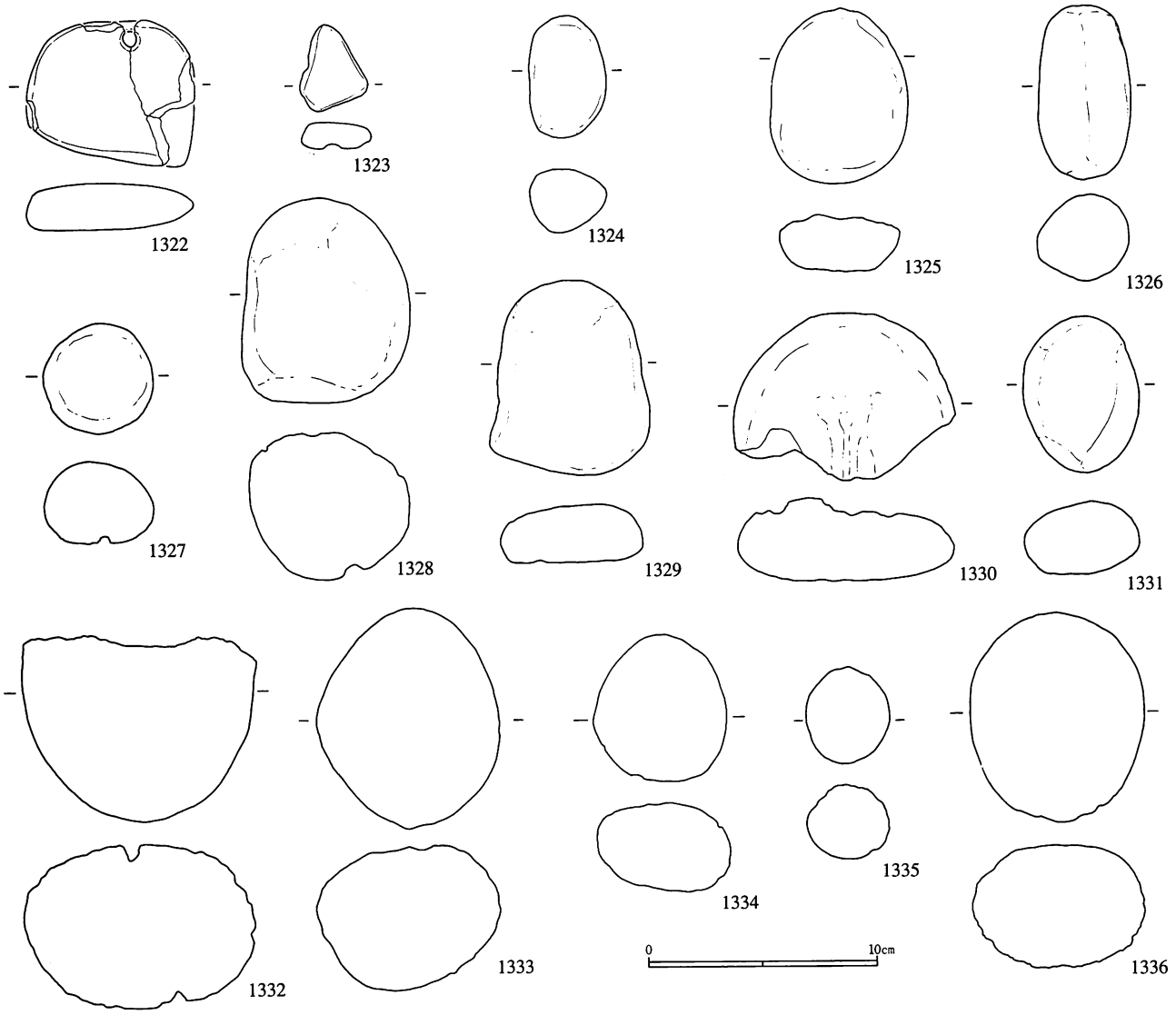
第128図　石錘



第129図　鉄石英



第130図　石製垂飾品



第131図　軽石・溶岩

どであるが、切り目石錘も４点確認されている。また、1313は礫石錘としておくが、打ち欠きの中心部にわずかながら擦りによる切り目の痕跡が確認される。

また、溶岩や軽石が遺構の内外から出土していることを付け加えておく。溶岩には加工の痕跡がある訳ではないが、炉石に用いており、利用は明らかである。採取場所も極めて近くであり、利用の条件からすれば、炉石以外の利用を考えた事も十分想定できる。また、軽石は1322や1323などは明らかに加工している。

表3　石器観察表

番号	出土位置	器　種	重量(g)	石材	番号	出土位置	器　種	重量(g)	石材
973	2住	打斧	58	粘板岩	1019	J-10	打斧	87	片　岩
974	4住	打斧	112	泥　岩	1020	J-10	打斧	181	片　岩
975	7住	打斧	95	頁　岩	1021	J-11	打斧	125	粘板岩
976	7住	打斧	531	頁　岩	1022	J-13	打斧	230	泥　岩
977	9住	打斧	79	片　岩	1023	J-14	打斧	41	粘板岩
978	11配	打斧	219	泥　岩	1024	K-14	打斧	221	片　岩
979	11配	打斧	191	頁　岩	1025	K-14	打斧	67	片　岩
980	11配	打斧	102	緑色岩	1026	K-15	打斧	52	粘板岩
981	13住	打斧	66	片　岩	1027	試掘ﾄﾚﾝﾁ	打斧	140	粘板岩
982	1配	打斧	67	粘板岩	1028	試掘ﾄﾚﾝﾁ	打斧	101	粘板岩
983	B-5	打斧	146	片　岩	1029	表採	打斧	41	粘板岩
984	B-5	打斧	71	頁　岩	1030	表採	打斧	315	頁　岩
985	B-13	打斧	107	粘板岩	1031	9住	石匙	19	粘板岩
986	B-18	打斧	280	片　岩	1032	特殊配石	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	121	頁　岩
987	C-7	打斧	174	安山岩	1033	G-14	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	107	粘板岩
988	C-12	打斧	80	粘板岩	1034	C-9	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	102	頁　岩
989	C-15	打斧	102	頁　岩	1035	9住	磨斧	514	緑色岩
990	D-8	打斧	92	片　岩	1036	11住	磨斧	304	緑色岩
991	D-12	打斧	111	泥　岩	1037	13住	磨斧	807	緑色岩
992	D-15	打斧	61	片　岩	1038	C-15	磨斧	548	安山岩
993	D-16	打斧	468	片　岩	1039	D-18	磨斧	364	緑色岩
994	D-16	打斧	197	泥　岩	1040	G-15	磨斧	401	——
995	D-17	打斧	516	頁　岩	1041	I-15	磨斧	198	——
996	D-17	打斧	124	粘板岩	1042	表採	磨斧	203	緑色岩
997	E-3	打斧	113	片　岩	1043	2住	磨斧	491	緑色岩
998	E-6	打斧	100	頁　岩	1044	11配	磨斧	58	緑色岩
999	E-7	打斧	33	粘板岩	1045	13住	磨斧	31.4	頁　岩
1000	E-12	打斧	52	頁　岩	1046	特殊配石	磨斧	264	緑色岩
1001	E-17	打斧	194	泥　岩	1047	B-5	磨斧	100	安山岩
1002	E-17	打斧	77	頁　岩	1048	D-3	磨斧	212	蛇紋岩
1003	F-5	打斧	91	片　岩	1049	E-12	磨斧	29	緑色岩
1004	F-13	打斧	117	頁　岩	1050	F-14	磨斧	56	蛇紋岩
1005	F-15	打斧	111	粘板岩	1051	G-16	磨斧	40	蛇紋岩
1006	F-15	打斧	158	泥　岩	1052	J-9	磨斧	964	緑色岩
1007	F-17	打斧	354	頁　岩	1053	J-11	磨斧	164	安山岩
1008	F-17	打斧	205	粘板岩	1054	4住	石皿	2900	安山岩
1009	G-14	打斧	355	頁　岩	1055	7住	石皿	6000	安山岩
1010	G-16	打斧	111	片　岩	1056	11配	石皿	980	安山岩
1011	G-16	打斧	42	片　岩	1057	13住	石皿	707	安山岩
1012	H-7	打斧	192	粘板岩	1058	2集土	石皿	8500	安山岩
1013	H-10	打斧	137	片　岩	1059	B-18	石皿	367	安山岩
1014	H-10	打斧	134	泥　岩	1060	D-7	石皿	2600	安山岩
1015	H-15	打斧	120	泥　岩	1061	D-15	石皿	251	安山岩
1016	I-15	打斧	353	片　岩	1062	D-16	石皿	2000	安山岩
1017	I-16	打斧	101	片　岩	1063	E-16	石皿	10000	安山岩
1018	I-16	打斧	84	粘板岩	1064	E-16	石皿	2700	安山岩

番号	出土位置	器　　種	重量(g)	石材	番号	出土位置	器　　種	重量(g)	石材
1065	E-17	石皿	821	安山岩	1111	F-8	磨・凹・敲石	762	花崗岩
1066	F-14	石皿	1000	——	1112	F-13	磨・凹・敲石	686	花崗岩
1067	F-14	石皿	516	熔　岩	1113	F-14	磨・凹・敲石	685	安山岩
1068	F-16	石皿	1217	安山岩	1114	F-17	磨・凹・敲石	409	——
1069	F-16	石皿	2100	安山岩	1115	J-10	磨・凹・敲石	734	安山岩
1070	J-9	石皿	4400	熔　岩	1116	J-10	磨・凹・敲石	643	安山岩
1071	J-13	石皿	905	安山岩	1117	試掘ﾄﾚﾝﾁ	磨・凹・敲石	358	安山岩
1072	J-13	石皿	3500	安山岩	1118	1住	磨・凹・敲石	1046	花崗岩
1073	11住	磨・凹・敲石	499	安山岩	1119	2住	磨・凹・敲石	731	安山岩
1074	特殊配石	磨・凹・敲石	1188	安山岩	1120	2住	磨・凹・敲石	1135	安山岩
1075	特殊配石	磨・凹・敲石	564	頁　岩	1121	2住	磨・凹・敲石	452	安山岩
1076	特殊配石	磨・凹・敲石	1276	頁　岩	1122	2住	磨・凹・敲石	747	安山岩
1077	特殊配石	磨・凹・敲石	372	花崗岩	1123	3住	磨・凹・敲石	1199	安山岩
1078	特殊配石	磨・凹・敲石	565	頁　岩	1124	3住	磨・凹・敲石	640	安山岩
1079	特殊配石	磨・凹・敲石	400	安山岩	1125	4住	磨・凹・敲石	835	花崗岩
1080	D-15	磨・凹・敲石	945	安山岩	1126	11住	磨・凹・敲石	1027	花崗岩
1081	D-16	磨・凹・敲石	442	安山岩	1127	13住	磨・凹・敲石	988	安山岩
1082	D-17	磨・凹・敲石	837	頁　岩	1128	特殊配石	磨・凹・敲石	365	安山岩
1083	E-16	磨・凹・敲石	340	熔　岩	1129	特殊配石	磨・凹・敲石	1681	頁　岩
1084	F-13	磨・凹・敲石	357	花崗岩	1130	特殊配石	磨・凹・敲石	754	安山岩
1085	F-15	磨・凹・敲石	218	安山岩	1131	特殊配石	磨・凹・敲石	544	安山岩
1086	G-12	磨・凹・敲石	1493	安山岩	1132	特殊配石	磨・凹・敲石	529	安山岩
1087	G-13	磨・凹・敲石	358	凝灰岩	1133	特殊配石	磨・凹・敲石	460	安山岩
1088	H-14	磨・凹・敲石	606	安山岩	1134	特殊配石	磨・凹・敲石	1533	安山岩
1089	H-16	磨・凹・敲石	383	頁　岩	1135	特殊配石	磨・凹・敲石	475	安山岩
1090	I-16	磨・凹・敲石	541	安山岩	1136	B-5	磨・凹・敲石	793	安山岩
1091	2住	磨・凹・敲石	389	凝灰岩	1137	B-17	磨・凹・敲石	635	安山岩
1092	2住	磨・凹・敲石	513	花崗岩	1138	C-15	磨・凹・敲石	506	花崗岩
1093	4住	磨・凹・敲石	373	安山岩	1139	D-16	磨・凹・敲石	937	安山岩
1094	9住	磨・凹・敲石	570	安山岩	1140	D-17	磨・凹・敲石	702	安山岩
1095	11配	磨・凹・敲石	403	安山岩	1141	E-12	磨・凹・敲石	561	安山岩
1096	11配	磨・凹・敲石	568	安山岩	1142	E-12	磨・凹・敲石	896	安山岩
1097	1配	磨・凹・敲石	663	花崗岩	1143	E-18	磨・凹・敲石	814	安山岩
1098	1配	磨・凹・敲石	554	片　岩	1144	F-5	磨・凹・敲石	442	安山岩
1099	6配	磨・凹・敲石	223	熔　岩	1145	F-14	磨・凹・敲石	1146	安山岩
1100	9配	磨・凹・敲石	469	頁　岩	1146	F-15	磨・凹・敲石	701	花崗岩
1101	特殊配石	磨・凹・敲石	410	熔　岩	1147	F-16	磨・凹・敲石	643	安山岩
1102	B-18	磨・凹・敲石	284	安山岩	1148	F-17	磨・凹・敲石	943	安山岩
1103	D-16	磨・凹・敲石	461	安山岩	1149	F-17	磨・凹・敲石	888	安山岩
1104	D-16	磨・凹・敲石	578	安山岩	1150	G-15	磨・凹・敲石	447	安山岩
1105	E-12	磨・凹・敲石	506	頁　岩	1151	H-12	磨・凹・敲石	422	安山岩
1106	E-13	磨・凹・敲石	562	花崗岩	1152	J-11	磨・凹・敲石	1025	安山岩
1107	E-15	磨・凹・敲石	395	安山岩	1153	7住	磨・凹・敲石	3900	安山岩
1108	E-16	磨・凹・敲石	372	安山岩	1154	7住	磨・凹・敲石	1944	片麻岩
1109	E-17	磨・凹・敲石	908	花崗岩	1155	特殊配石	磨・凹・敲石	1438	安山岩
1110	F-5	磨・凹・敲石	536	安山岩	1156	E-17	磨・凹・敲石	314	安山岩

番号	出土位置	器　　種	重量(g)	石材	番号	出土位置	器　　種	重量(g)	石材
1157	K-14	磨・凹・敲石	187	——	1203	2住	石鏃	0.26	黒曜石
1158	F-14	磨・凹・敲石	566	片　岩	1204	2住	石鏃	0.38	黒曜石
1159	4住	磨・凹・敲石	83	片　岩	1205	2住	石鏃	0.46	黒曜石
1160	7住	磨・凹・敲石	59	粘板岩	1206	3住	石鏃	1.38	黒曜石
1161	特殊配石	磨・凹・敲石	79	安山岩	1207	4住	石鏃	0.45	黒曜石
1162	特殊配石	磨・凹・敲石	95	安山岩	1208	7住	石鏃	0.24	黒曜石
1163	C-5	磨・凹・敲石	44	安山岩	1209	9住	石鏃	0.56	黒曜石
1164	G-15	磨・凹・敲石	89	安山岩	1210	8土	石鏃	0.96	黒曜石
1165	J-11	多孔石	1767	安山岩	1211	特殊配石	石鏃	0.30	黒曜石
1166	2住	多孔石	3900	安山岩	1212	5配	石鏃	0.23	黒曜石
1167	7住	多孔石	22500	安山岩	1213	B-5	石鏃	0.40	黒曜石
1168	9住	多孔石	5000	安山岩	1214	B-15	石鏃	0.53	黒曜石
1169	42土	多孔石	5000	安山岩	1215	B-15	石鏃	0.50	黒曜石
1170	1配	多孔石	7400	安山岩	1216	B-16	石鏃	0.44	黒曜石
1171	D-17	多孔石	6000	安山岩	1217	B-16	石鏃	0.85	黒曜石
1172	F-17	多孔石	2400	安山岩	1218	B-17	石鏃	0.98	黒曜石
1173	F-18	多孔石	2400	安山岩	1219	C-5	石鏃	0.33	黒曜石
1174	J-9	多孔石	3900	安山岩	1220	C-9	石鏃	0.84	黒曜石
1175	1住	石棒	21000	安山岩	1221	C-15	石鏃	0.51	黒曜石
1176	1住	石棒	2500	安山岩	1222	C-17	石鏃	0.62	黒曜石
1177	2住	石棒	1814	安山岩	1223	D-5	石鏃	0.21	チャート
1178	2住	石棒	14600	安山岩	1224	D-7	石鏃	0.33	黒曜石
1179	2住	石棒	4200	安山岩	1225	D-7	石鏃	0.45	黒曜石
1180	2住	石棒	765	安山岩	1226	D-8	石鏃	0.14	黒曜石
1181	3住	石棒	2400	安山岩	1227	D-8	石鏃	0.62	黒曜石
1182	4住	石棒	1900	安山岩	1228	D-12	石鏃	1.24	黒曜石
1183	7住	石棒	4400	安山岩	1229	D-13	石鏃	1.39	チャート
1184	7住	石棒	4500	安山岩	1230	D-18	石鏃	0.41	黒曜石
1185	7住	石棒	3500	安山岩	1231	D-18	石鏃	0.44	黒曜石
1186	10住	石棒	4400	安山岩	1232	E-6	石鏃	0.80	黒曜石
1187	13住	石棒	4800	安山岩	1233	E-15	石鏃	0.59	頁　岩
1188	13住	石棒	1565	花崗岩	1234	E-18	石鏃	0.31	黒曜石
1189	B-5	石棒	1700	安山岩	1235	E-18	石鏃	0.27	黒曜石
1190	F-7	石棒	830	安山岩	1236	E-18	石鏃	0.18	黒曜石
1191	F-16	石棒	626	安山岩	1237	E-18	石鏃	0.22	黒曜石
1192	G-7	石棒	1500	安山岩	1238	E-18	石鏃	2.11	黒曜石
1193	H-10	石棒	1908	緑色岩	1239	F-5	石鏃	0.94	黒曜石
1194	I-8	石棒	482	安山岩	1240	F-7	石鏃	0.25	黒曜石
1195	I-8	石棒	619	安山岩	1241	F-13	石鏃	0.58	黒曜石
1196	K-14	石棒	470	安山岩	1242	F-13	石鏃	0.49	黒曜石
1197	表採	石棒	3400	安山岩	1243	F-14	石鏃	0.87	黒曜石
1198	表採	石棒	548	安山岩	1244	F-14	石鏃	0.28	黒曜石
1199	1住	石鏃	0.39	黒曜石	1245	F-15	石鏃	0.28	黒曜石
1200	1住	石鏃	0.70	黒曜石	1246	F-17	石鏃	0.31	黒曜石
1201	1住	石鏃	0.65	黒曜石	1247	F-17	石鏃	0.13	黒曜石
1202	1住	石鏃	0.86	黒曜石	1248	F-17	石鏃	0.26	黒曜石

番号	出土位置	器　種	重量(g)	石材	番号	出土位置	器　種	重量(g)	石材
1249	F-18	石鏃	0.64	黒曜石	1293	H-9	加工痕ある剥片	1.38	黒曜石
1250	F-18	石鏃	0.37	黒曜石	1294	H-11	加工痕ある剥片	1.00	黒曜石
1251	G-7	石鏃	0.66	黒曜石	1295	I-6	加工痕ある剥片	2.29	黒曜石
1252	G-14	石鏃	0.71	黒曜石	1296	J-14	加工痕ある剥片	4.93	黒曜石
1253	G-14	石鏃	0.50	黒曜石	1297	試掘ﾄﾚﾝﾁ	加工痕ある剥片	1.10	黒曜石
1254	G-15	石鏃	1.35	黒曜石	1298	4住	鉄石英	9	
1255	G-15	石鏃	0.90	黒曜石	1299	8土	鉄石英	9	
1256	G-15	石鏃	0.35	黒曜石	1300	2住	石錘	27.78	粘板岩
1257	H-10	石鏃	0.20	黒曜石	1301	11配	石錘	48.79	頁　岩
1258	H-12	石鏃	1.07	黒曜石	1302	11配	石錘	39.54	粘板岩
1259	H-16	石鏃	0.48	黒曜石	1303	13住	石錘	47.85	粘板岩
1260	I-8	石鏃	0.47	黒曜石	1304	5配	石錘	50.82	粘板岩
1261	J-11	石鏃	0.48	黒曜石	1305	7配	石錘	65.71	安山岩
1262	J-16	石鏃	0.68	黒曜石	1306	C-15	石錘	21.39	——
1263	試掘ﾄﾚﾝﾁ	石鏃	0.40	黒曜石	1307	D-15	石錘	113.00	片　岩
1264	試掘ﾄﾚﾝﾁ	石鏃	0.27	黒曜石	1308	D-17	石錘	67.89	——
1265	試掘ﾄﾚﾝﾁ	石鏃	0.23	黒曜石	1309	E-17	石錘	43.10	粘板岩
1266	試掘ﾄﾚﾝﾁ	石鏃	0.60	黒曜石	1310	E-18	石錘	31.85	粘板岩
1267	試掘ﾄﾚﾝﾁ	石鏃	0.43	黒曜石	1311	F-15	石錘	71.92	片　岩
1268	試掘ﾄﾚﾝﾁ	石鏃	0.44	黒曜石	1312	F-18	石錘	96.00	粘板岩
1269	表採	石鏃	0.72	黒曜石	1313	G-16	石錘	73.92	片　岩
1270	表採	石鏃	0.44	黒曜石	1314	H-14	石錘	29.50	粘板岩
1271	表採	石鏃	0.58	黒曜石	1315	J-13	石錘	61.50	——
1272	2住	ドリル	0.45	黒曜石	1316	J-16	石錘	80.00	粘板岩
1273	11配	ドリル	0.72	黒曜石	1317	K-14	石錘	70.44	粘板岩
1274	D-16	ドリル	0.65	黒曜石	1318	表採	石錘	80.00	粘板岩
1275	G-14	ドリル	1.04	黒曜石	1319	表採	石錘	75	粘板岩
1276	G-16	ドリル	1.89	水　晶	1320	表採	石錘	42.21	粘板岩
1277	表採	ドリル	1.11	黒曜石	1321	試掘ﾄﾚﾝﾁ	石錘	44.94	粘板岩
1278	表採	ドリル	0.38	黒曜石	1322	試掘ﾄﾚﾝﾁ	軽石製品	15	軽　石
1279	4住	加工痕ある剥片	3.46	黒曜石	1323	E-5	軽石製品	1	軽　石
1280	11住	加工痕ある剥片	1.49	黒曜石	1324	1住		46	熔　岩
1281	27土	加工痕ある剥片	1.93	黒曜石	1325	D-8		103	熔　岩
1282	C-17	加工痕ある剥片	3.54	黒曜石	1326	E-12		75	熔　岩
1283	C-10	加工痕ある剥片	1.07	黒曜石	1327	D-16		60	熔　岩
1284	D-6	加工痕ある剥片	1.65	黒曜石	1328	D-17		337	熔　岩
1285	D-7	加工痕ある剥片	2.28	黒曜石	1331	H-16		101	熔　岩
1286	D-11	加工痕ある剥片	1.45	水　晶	1332	3配			熔　岩
1287	E-13	加工痕ある剥片	0.69	黒曜石	1333	D-4			熔　岩
1288	F-16	加工痕ある剥片	2.80	黒曜石	1334	D-6		122	熔　岩
1289	F-17	加工痕ある剥片	1.39	黒曜石	1335	D-12		60	熔　岩
1290	G-13	加工痕ある剥片	2.79	黒曜石	1336	I-10		420	熔　岩
1291	G-14	加工痕ある剥片	2.75	黒曜石	1337	42土	小玉	0.42	頁　岩
1292	G-16	加工痕ある剥片	2.91	黒曜石					

第Ⅳ章　自然遺物の検討

第１節　大月遺跡から出土した炭化植物について

松　谷　暁　子

縄文時代中期末－後期の住居址の覆土を中心として採取された炭化物について顕微鏡による観察を行った。

１．試　　料

試料は、10試料あるが、試料３を除いた９試料は、長さが５mmくらい、巾が３～４mmくらいで、外形が楕円形をしており、マメ種子に類似した炭化物である。二枚の子葉が合わさった状態と考えられるもの、半分以上に割れた状態のもの、さらに細かく４分の１くらいになったものなどがある。

２．方　　法

実体顕微鏡で観察後、一部の試料は、走査型電子顕微鏡（日立Ｓ2250Ｎ）による観察を行った。

３．観察結果

試料１（２号住居址覆土１）

外形がほぼ楕円形で、中央に割れ目様のものが認められ、子葉二枚が合わさった状態のマメ種子と考えられる（図版10・写真９）。種皮？断面の形態もマメと考えられる（図版10・写真10）。しかし、割れ目と思われる所で二分したところ、内部に幼根、胚軸、初生葉やその痕跡は認められなかった。二分した状態の大きさは、5.2mm×3.5mmである。

試料２（２号住居址覆土１）

4.2mm×3.5mmの大きさであるが、へそや割れ目なども認められず、マメの可能性はきわめて低い。

試料３（２号住居址覆土１）

内部が凹んでいる粗い網目があり、隆起した長いへそ状の構造が認められる。部分的に欠如しているが、ミカン科のサンショウの種子と考えられる（図版10・写真11）。近縁のカラスザンショウは、もっと大きな網目をしており、へその形も異なる。

試料４（２号住居址覆土４）

子葉が二枚合わさった状態のものが１粒と、二分した状態のものが５点に、４分の１くらいの破片になったものが１点ある。このうち、子葉が二枚合わさった状態のもの１粒、半分の粒、４分の１粒各１点、合計３点の内面を走査型電子顕微鏡で観察した。二枚の子葉が合わさっていた状態の粒（図版９・写真１）を二分した内面では、片方の面に、幼根、胚軸、初生葉が観察され（図版９・写真２）、もう片方の面にはそれに対応していると考えられる痕跡が認められた（図版９・写真３）。最初から半分になっていたもの（図版９・写真４）、４分の１になっていたもの（図版９・写真５）についても、痕跡を示す構造が観察された。

二分した状態の粒の大きさは、5.2×3.5mm、5.7×3.8mm、5.4×3.8mm、5.0×3.4mm、4.7×3.4mm、5.0×3.2mmである。

試料５（６号住居址）

６住から出土した、マメ子葉半分の状態のものが２点あり、大きさは、4.9×3.5mm。２点とも走査型電子顕微鏡で観察したところ、どちらにも幼根、胚軸、初生葉は残っていないが、痕跡と考えられる構造が観察された（図版９・写真８）。

試料６（２号住居址Ｃ－53）

実体顕微鏡の観察によりマメではないと判断されるが、何なのかは不明。他の試料よりやや大きく、長さ7.2mm、幅4.3mmくらいある。

試料７（２号住居址Ｃ－54）

やはり実体顕微鏡でマメではないと判断されるが、何なのかは不明。5.3mm×3.7mm。

試料８

マメの子葉半分の状態のものが２点あり、この内の１点について走査型電子顕微鏡での観察を行ったところ、幼根、胚軸、初生葉が観察された（図版９・写真６）。4.9mm×3.5mm、4.9mm×3.3mm。

試料９

二分した状態のものが３点。２点（4.0mm×3.0mm、4.5mm×3.0mm）についてははっきりしないが、１点（5.2mm×3.4mm）は幼根、胚軸、初生葉による痕跡と考えられるものが認められた（図版９・写真７）。

試料10

20個くらい存在しているが、実体顕微鏡でマメと考えられるものはない。

以上のように、試料４と試料８からは、幼根、胚軸、初生葉が観察され、試料５、試料９は、その痕跡によってマメと判断される。試料１は、マメの可能性が高いが、確認はできなかった。また、試料２、試料６、試料７、試料10は、一見マメに似ているがマメではなく、不明である。

従来、マメの種子の識別は、植物分類学上の識別点に従い、ヘソの形態を重視するのが常であった。しかし、出土炭化物ではへその部分が破壊されている場合が多い。そこで、「種子の外形やサイズに関係なく、幼根と初生葉の中に占める比率とそれらの形態、また幼根の立ち上がりの角度等に特徴」があることに注目して、ダイズ型、リョクトウ型、アズキ型に三分することが出来、その結果、これまで遺跡から出土したマメ類で内部の観察されたものは、「そのほとんどがアズキの仲間に分類した方がよさそうにみえる」と発表された（吉崎1992）。

大月遺跡の出土物でもヘソが残っている試料はない。しかし、試料４、試料８は、幼根、胚軸、初生葉が残っており、その形態は、アズキの子葉の内面の様子（図版10・写真13）によく似ている。すなわち、幼根と胚軸がへその終わりの部分から直ちに内部へ伸びており、へそに続く幼根と胚軸が、引き続き表面に沿って伸びたあと、初生葉が展開する、ヤブツルアズキ（図版10・写真14）、ササゲ（図版10・写真15）、リョクトウ（図版10・写真16）とは異なる。また、試料５、試料９では、痕跡だけであるが、やはりアズキと同じタイプのように思われる。外形もアズキの範囲に入りそうである。粒の大きさは、５mmくらいで、二分した状態の幅が３mm余、厚さ２mm余である。現在のアズキの大きさより小さいと言えそうである。今の所、種子内部の構造がアズキと同じ型を示すマメは、栽培種にも野生種にも知られていない。

作物学の書にはアズキ、ササゲ、リョクトウ、ダイズ、インゲン、エンドウなどマメ類の種子の説明図があり、幼根、胚軸、初生葉が描かれている（星川1980）。しかし、アズキと同じタイプのマメは見いだされない。野生種のマメにいたっては、植物分類学の図鑑などを調べても、種子内部の図は示されていないため、まだまだ情報が不足している。アズキの原種ともいわれる野生種のヤブツルアズキがアズキ型であれば簡単なのであろうが、前述の北大基準（吉崎1992）によれば、リョクトウタイプであるという。筆者には意外に思われ、以前に大阪府立大学農学部の山口裕文氏からいただいたヤブツルアズキの種子について、内部の様子を観察してみたところ、確かにアズキの子葉内面とは異なり、リョクトウ子葉内面に似ていた。縄文期のマメについて、何らかの解答を得るには、広範囲の野生種のマメについての内部の観察を行うことが、先決かも知れない。

４．考　　察

縄文時代に限らず、遺跡からの炭化したマメ類の出土例は、近年ますます増えている。

山梨県の縄文時代の遺跡でも、京原遺跡（長沢1989）や中谷遺跡（松谷1996）などで、マメ様の炭化物が出

土している。中谷遺跡から出土したマメについても子葉内面を観察したところ、やはりアズキ型の構造が観察された（図版10・写真12）。

このように、マメ類の種子内部の形態の観察は、今後もっと進める必要がある。しかしながら、どのような場合にも適用できるとは限らない。燃焼による強い炭化を受けている場合には、二分して、内部の様子を見ようとしても壊れてしまうことがある。大月遺跡の試料１の場合には、二分できたものの、内部の観察から確認することはできなかった。

大月遺跡からは、マメの他に、サンショウの種子（内果皮）と考えられるものが識別された。縄文時代の遺跡では、石川県米泉遺跡（松谷1989、南木1989）など、低湿地遺跡からの出土は珍しくないが、住居址の炭化物からの検出は、例が少ない。

引用文献

星川清親　1980　「新編食用作物」養賢堂。

松谷暁子　1989　米泉遺跡出土植物遺残。「金沢市米泉遺跡」297－304。

松谷暁子　1996　中谷遺跡出土炭化種子について。「中谷遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書116、177－179。

南木睦彦　1989　米泉遺跡の大型植物化石。「金沢市米泉遺跡」、279－296。

長沢宏昌　1989　京原遺跡出土の炭化物について。「京原遺跡」境川村教育委員会、31－33。

吉崎昌一　1992　古代雑穀の検出。考古学ジャーナル355、２－14。

第２節　大月遺跡出土の堅果類

渡　辺　　誠

１．出土状態

山梨県大月市大月遺跡出土の自然遺物は、1994年度に山梨埋蔵文化財センターによって発掘された植物の種子類である。送付された資料は次の７件である。

１．第２号住居址　Ｃ－32　　４．Ｊ－16　ドングリ類（長楕円形）
２．第２号住居址　Ｃ－46　　５．Ｊ－16　ドングリ類（円形）
３．第２号住居址　Ｃ－58　　６．Ｊ－16　堅果類
　　７．Ｊ－16　ドングリ類（円形・完形）

すなわち、これらは第２号住居址出土の１～３件と、Ｊ－16グリッドのドングリ類集中区出土の４～７件とに大別される。それぞれの時期は、前者は縄文中期末・加曽利ＥⅣ式期、後者は別に報告されているようにＣ14年代測定法により3500～3800B.P.と測定されていて、縄文後期前葉である。このドングリ類集中区は、第Ⅲ章第８節に詳しく記されているように、直径約１ｍの浅いピット２基が重なりあった状態のなかの堆積物である。

また１点のみであるが、すでに報告書の刊行されている都留市中谷遺跡出土のドングリ類についても、あわせて報告することとする（『中谷遺跡』、1996年）。

２．植物遺体の種名と数量（図版11）

検出された植物遺体は、次の３種である。

１．くるみ科オニグルミ　Juglans mandshurica subsp. Sieboldiana Maxim.
２．ぶな科クリ　Castanea crenata Sieb. et Zucc.
３．ぶな科コナラ属　Querqus. sp.

第２号住居址出土資料はクリのみであり、Ｊ－16グリッド・ドングリ類集中区出土資料は大部分はドングリ類であるが、ごく少量オニグルミとクリも混在している。

いずれも縄文時代の重要な食料資源であり、次にそれぞれの検討結果について記す。

２－１）オニグルミ（図版11－１）

オニグルミは川沿いや適湿の地に群生する落葉高木で、東北日本の落葉樹林帯の代表的な樹木である。その核内の種子は脂肪に富み美味であり、９月～10月に熟す。材も有用である。

炭化した核の破片が、Ｊ－16グリッド・ドングリ類集中区からのみより検出されている。その重量0.89ｇで、１個体に満たない量である。

２－２）クリ（図版11－２～５）

山野に普通にある落葉高木で、東北日本の落葉樹林帯の代表的な樹木である。その種子は甘く美味であり、９～10月に熟す。材も有用である。

炭化した種子の破片が、第２号住居址より３点（図版11－２～４）、Ｊ－16グリッド・ドングリ類集中区から小破片16.49ｇ（同５）が検出されている。それぞれ１個体に近い残存状態の前者の３点の重量を遺物番号にしたがって記せば、Ｃ－32・0.93ｇ（２）、Ｃ－46・0.80ｇ（３）、Ｃ－58・0.86ｇ（４）である。したがって後者は、10数個体が推定される。

２－３）ドングリ類（図版11－６～８）

俗にドングリ類と総称される堅果類は、ブナ科のコナラ属を主とするシイノキ属・マテバシイ属などの種子類である。これらにはアク抜きをせずにそのまま食べることのできる種類と、アク抜きをしないと食べられない種類とがある。そして種の違いや食べ方の違いなどによって、アク抜きの方法にも差異がある。これらに基

づいて、筆者はドングリ類をＡ～Ｄ類に４大別している。（表７）。

Ａ類は、ドングリまなこの語源となった、まんまるいクヌギなどの仲間である。これらは粒のまま食べる場合は加熱処理＋水さらし、粉食の場合は製粉＋水さらしのみによってアク抜きをし、加熱処理は伴っていない。

Ｂ類はナラ類で、楕円形を呈す。東北日本ではよく食べられていた種類であり、アク抜きの方法はＡ類と同じである。

Ｃ類は、Ａ・Ｂ類と異なり西南日本に多いカシ類である。側面形はＢ類と同様に楕円形を呈し、子葉だけになると区別は困難である。これらは粒食でも粉食でも水さらしのみでアク抜きはできる。

Ｄ類は、アク抜きのいらないシイの実の仲間であり、カシ類中例外的にイチイガシもこれに含められる。Ｃ類同様西南日本に多い。シイ仲間の形態は、ツブラジイは小型円形、スダジイは先の尖った水滴形、そしてマテバシイは太くて長いマテガイ形を呈している。

したがってアク抜き不要のＤ類は西南日本の照葉樹林帯に、加熱＋水さらしの方法も伴うＡ・Ｂ類は東北日本の落葉広葉樹林帯に分布するなどの地域差はあるが、製粉＋水さらしの方法は種の違いには影響されず全国同一なのである。従来ともすれば種の違い、しいては森林帯の違いによってのみアク抜きの方法の違いが言及されてきたが、近年ではそれ以上に食べ方の違いも重要であることが判明してきたのである。

上記の観点からドングリ類集中区出土資料をみると、円形と長楕円形の２種類がある。長幅示数（第132図）においても両者の違いは明確で、前者は平均0.88、後者は1.63である。そして前者はＡ類に、後者はＢ・Ｃ類とイチイガシの可能性がある。そしてＣ類とイチイガシとはある特徴から明かに区別できるのであるが、本遺跡資料にはイチイガシは含まれていない。

したがって本遺跡の場合は、Ａ～Ｃ類のドングリ類とみなされる。Ａ類はクヌギ・アベマキ・カシワなどである。Ｂ・Ｃ類についてはかなり長く、Ｃ類のカシ類よりＢ類のミズナラ・コナラなどのナラ類の可能性の方が高いと推定される。

それらの計測値は、表８に示すとおりである。表中の両・半の記号は、双子葉植物であるコナラ属の子葉の、双方があるものを双、片側のものものを半として記したものである。また平均値のうち厚さ・重さについては、完形品に換算して示した。送付された資料でみるかぎりＢ・Ｃ類が多く、Ａ類の倍以上である。

これを食べ方からみれば、すべてアク抜きをしなくては食べることのできない種類なのである。その場合水さらしのみでなく加熱処理が重要であった可能性が強い。そしてこれらの問題は、土器の器形や石皿などの製粉具をも含めてさらに総合的に検討を深めていかなければならないであろう。

３．ドングリ類集中区の性格

ドングリ類集中区からは、以上の他に堅果類の細かい果皮破片が少量（2.19ｇ）検出されている（図版11－６）。これはオニグルミとは無関係で、クリまたはドングリ類のものである。したがってそれらは皮のついたまま貯蔵されていたことを示唆している。

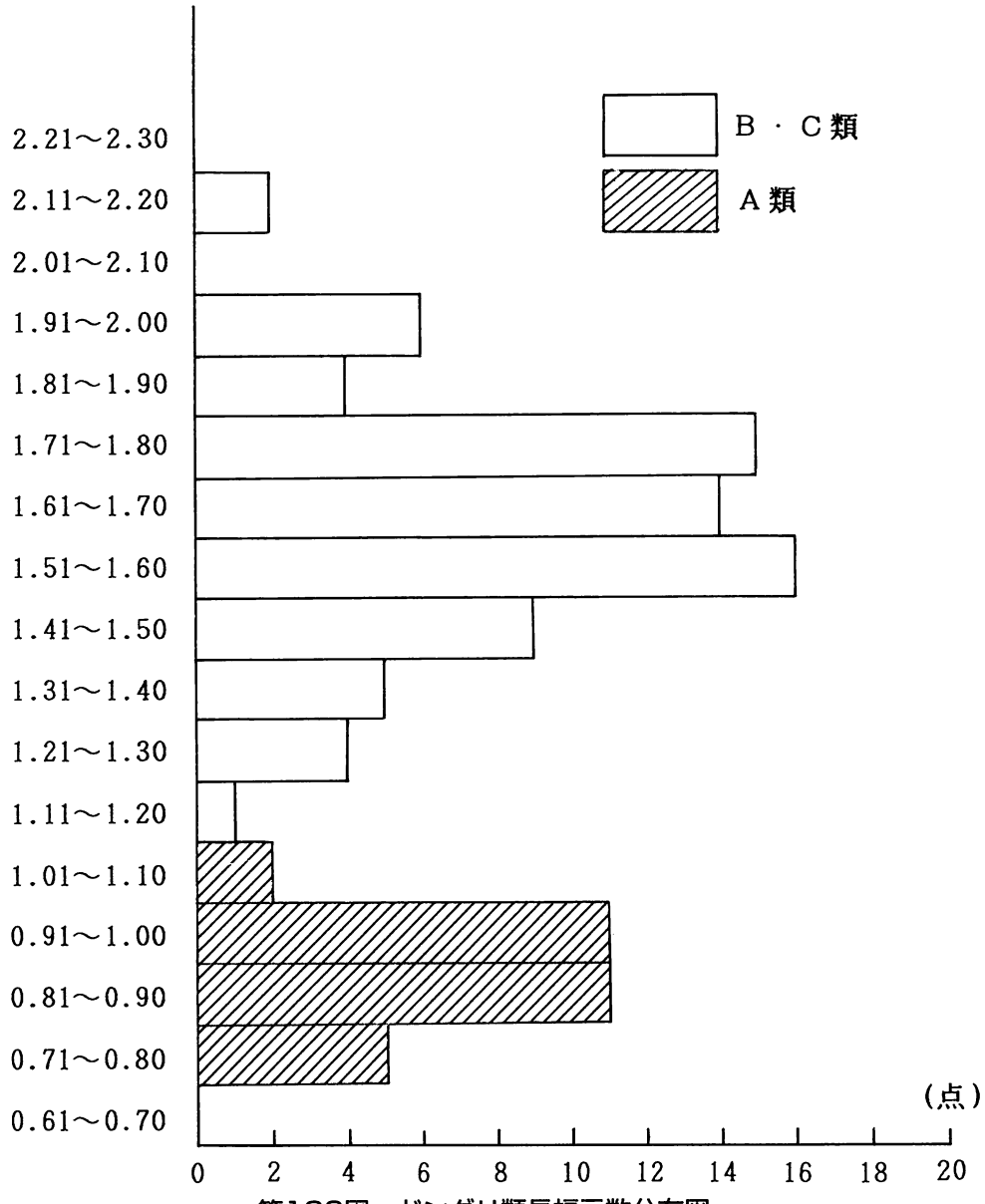
クリは冬の間甘みを増やすために、ドングリ類も穴を掘って冬期に短期貯蔵するのであり、深さ約40cmという浅さもそのことをよく示しているといえるのである。オニグルミについては、晩秋の収穫期に肉質の果皮を腐らせるために埋められていた可能性もある。そのような短期間の様々な使われ方が連続していたと推定される。２形態のドングリ類に若干時期差のみられるのは、こうしたことと関係があった可能性も考えられる。

４．中谷遺跡出土のドングリ類

すでに報告書の刊行されている都留市中谷遺跡の、第12号住居址よりドングリ類の完形品が１点出土している（図版11－７）。上記のＡ類に相当し、計測値は表８の最後に記した。時期は縄文中期末・曽利Ｖ式期である。

謝　辞

最後に、調査の機会を与えられ種々御教示下さった山梨県埋蔵文化財センターの長沢宏昌、資料整理に御協力下さった名古屋大学大学院研究生の川添和暁・長田友也氏に対し、衷心より謝意を表する次第である。



第132図　ドングリ類長幅示数分布図

表7　ドングリ類の分類

民俗分類	属		種（出土例のみ）	森林帯
A．クヌギ類 製粉または加熱処理＋水さらし	コナラ属	コナラ亜属	クヌギ カシワ	落葉広葉樹林帯 （東北日本） （韓　　国）
B．ナラ類 製粉または加熱処理＋水さらし			ミズナラ コナラ	
C．カシ類 水さらしのみ		アカガシ亜属	アカガシ アラカシ	照葉樹林帯 （西南日本） （韓国南海岸）
D．シイ類など			イチイガシ	
	シイノキ属		ツブラジイ・スダジイ	
	マテバシイ属		マテバシイ	

表8　ドングリ類計測値一覧（単位：cm、g）

鬱	形態	齋爛	長さ	幅	厚さ	髓/幅	重さ
1	A	両	1.28	1.50	1.50	0.85	1.41
2	〃	〃	1.24	1.36	1.47	0.91	1.00
3	〃	〃	1.08	1.19	1.34	0.91	0.74
4	〃	〃	1.00	1.26	1.25	0.79	0.50
5	〃	半	1.64	1.70	0.89	0.96	0.96
6	〃	〃	1.45	1.67	0.85	0.87	0.59
7	〃	〃	1.32	1.54	0.95	0.86	0.64
8	〃	〃	1.35	1.45	0.80	0.93	0.67
9	〃	〃	1.29	1.60	0.79	0.81	0.84
10	〃	〃	1.39	1.45	0.80	0.96	0.56
11	〃	〃	1.37	1.50	0.75	0.91	0.58
12	〃	〃	1.15	1.58	0.87	0.73	0.53
13	〃	〃	1.25	1.60	0.79	0.78	0.76
14	〃	〃	1.28	1.46	0.84	0.88	0.45
15	〃	〃	1.31	1.60	0.73	0.82	0.57
16	〃	〃	1.41	1.55	0.75	0.91	0.53
17	〃	〃	1.26	1.49	0.80	0.85	0.49
18	〃	〃	1.02	1.17	0.65	0.87	0.23
19	〃	〃	1.26	1.35	0.78	0.93	0.50
20	〃	〃	1.14	1.26	0.74	0.90	0.51
21	〃	〃	1.17	1.50	0.74	0.78	0.43
22	〃	〃	1.13	1.34	0.72	0.84	0.41
23	〃	〃	1.35	1.63	0.77	0.83	0.68
24	〃	〃	1.10	1.55	0.82	0.71	0.50
25	〃	〃	1.13	1.18	0.61	0.96	0.35
26	〃	〃	0.95	1.10	0.60	0.86	0.24
27	〃	〃	1.18	1.11	0.75	1.06	0.46
28	〃	〃	1.25	1.37	0.73	0.91	0.37
29	〃	〃	1.31	1.24	0.66	1.06	0.35
	平均		1.24	1.41	1.46	0.88	1.04
1	B	半	1.51	1.20	0.77	1.26	0.54
2	〃	〃	1.71	1.14	0.76	1.50	0.61
3	〃	〃	1.50	1.18	0.60	1.27	0.44
4	〃	〃	1.75	1.11	0.55	1.58	0.42
5	〃	〃	1.69	0.90	0.50	1.88	0.28
6	〃	〃	1.59	1.00	0.53	1.59	0.27
7	〃	〃	1.65	0.86	0.46	1.92	0.27
8	〃	〃	1.68	0.93	0.50	1.81	0.23
9	〃	〃	1.46	1.15	0.58	1.27	0.50
10	〃	〃	1.50	0.88	0.49	1.70	0.24
11	〃	〃	1.45	0.75	0.53	1.93	0.23
12	〃	〃	1.19	0.88	0.42	1.35	0.15
13	〃	〃	1.47	1.05	0.51	1.40	0.34
14	〃	〃	1.50	0.97	0.57	1.55	0.28
15	〃	〃	1.44	0.74	0.40	1.95	0.16
16	〃	〃	1.53	0.89	0.59	1.72	0.28
17	〃	〃	1.46	0.85	0.45	1.72	0.22
18	〃	〃	1.26	0.98	0.60	1.29	0.25
19	〃	〃	1.36	0.90	0.50	1.51	0.19
20	〃	〃	1.45	0.86	0.43	1.69	0.19
21	〃	〃	1.40	0.80	0.41	1.75	0.17
22	〃	〃	1.30	0.90	0.60	1.44	0.25
23	〃	〃	1.35	0.90	0.47	1.50	0.22
24	〃	〃	1.31	0.85	0.54	1.54	0.19
25	〃	〃	1.47	0.84	0.43	1.75	0.21
26	〃	〃	1.25	0.94	0.58	1.33	0.26

鬱	形態	齋爛	長さ	幅	厚さ	髓/幅	重さ
27	B	半	1.41	0.79	0.42	1.78	0.20
28	〃	〃	1.30	0.80	0.37	1.63	0.18
29	〃	〃	1.30	0.80	0.31	1.63	0.13
30	〃	〃	1.20	0.75	0.40	1.60	0.11
31	〃	〃	1.50	0.75	0.41	2.00	0.18
32	〃	〃	1.36	0.95	0.45	1.43	0.19
33	〃	〃	1.45	0.80	0.33	1.81	0.18
34	〃	〃	1.55	0.79	0.57	1.96	0.26
35	〃	〃	1.41	0.80	0.50	1.76	0.18
36	〃	〃	1.18	0.69	0.41	1.71	0.15
37	〃	〃	1.45	0.80	0.43	1.81	0.17
38	〃	〃	1.17	0.75	0.45	1.56	0.14
39	〃	〃	1.35	0.77	0.43	1.75	0.14
40	〃	〃	1.25	0.82	0.47	1.52	0.18
41	〃	〃	1.39	1.00	0.49	1.39	0.26
42	〃	〃	1.35	0.83	0.45	1.63	0.18
43	〃	〃	1.23	0.73	0.35	1.68	0.11
44	〃	〃	1.45	0.76	0.42	1.91	0.19
45	〃	〃	1.17	0.71	0.41	1.65	0.13
46	〃	〃	1.20	1.01	0.60	1.19	0.33
47	〃	〃	1.33	0.76	0.39	1.75	0.15
48	〃	〃	1.34	0.90	0.50	1.49	0.26
49	〃	〃	1.32	0.80	0.46	1.65	0.21
50	〃	〃	1.19	0.78	0.44	1.53	0.16
51	〃	〃	1.35	0.78	0.50	1.73	0.20
52	〃	〃	1.26	0.80	0.39	1.58	0.16
53	〃	〃	1.35	0.76	0.39	1.78	0.18
54	〃	〃	1.30	0.74	0.40	1.76	0.17
55	〃	〃	1.21	0.79	0.42	1.53	0.14
56	〃	〃	1.32	0.90	0.46	1.47	0.19
57	〃	〃	1.32	0.80	0.40	1.65	0.13
58	〃	〃	1.33	0.81	0.49	1.64	0.17
59	〃	〃	1.29	0.90	0.63	1.43	0.24
60	〃	〃	1.24	0.75	0.41	1.65	0.15
61	〃	〃	1.14	0.66	0.37	1.73	0.11
62	〃	〃	1.46	0.69	0.36	2.12	0.16
63	〃	〃	1.45	0.87	0.43	1.67	0.19
64	〃	〃	1.26	0.73	0.35	1.73	0.13
65	〃	〃	1.27	0.82	0.52	1.55	0.20
66	〃	〃	1.34	0.61	0.38	2.20	0.13
67	〃	〃	1.34	0.75	0.37	1.79	0.14
68	〃	〃	1.16	0.80	0.47	1.45	0.14
69	〃	〃	1.10	0.69	0.30	1.59	0.08
70	〃	〃	1.39	0.84	0.41	1.65	0.14
71	〃	〃	1.19	0.75	0.45	1.59	0.17
72	〃	〃	1.22	0.77	0.38	1.58	0.12
73	〃	〃	1.45	0.92	0.50	1.58	0.22
74	〃	〃	1.18	0.87	0.52	1.36	0.24
75	〃	〃	1.23	0.75	0.44	1.64	0.15
76	〃	〃	1.15	0.80	0.40	1.44	0.15
	平均		1.36	0.84	0.93	1.63	0.42
	A	破片					3.63
	B	〃					1.65
	?	〃					2.25
幹	A	両	1.80	1.54	1.44	1.17	0.97

第３節　大月遺跡出土堅果類の放射性炭素年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

大月遺跡の発掘調査では、曽利Ⅱ～Ⅲ式の９号住居跡西側に炭化した堅果類が２×３ｍの範囲で集中して分布している状況が確認された。炭化物が確認された層位は９号住居跡の掘り方より上層であり、土坑といえるはっきりした掘り込みも認められておられず、その性格についてはよく判っていない。そこで、今回の調査では、本遺構の性格を捉えるための情報を得るために、炭化した堅果類がいつ頃のものであるかを放射性炭素年代測定により検討する。

１　分析試料

出土した堅果類は、丸いタイプ、細長いタイプ、破片の３タイプに分けられる。年代測定は各タイプごとに実施し、各タイプ毎に10粒程度を選択し、測定用試料とした。

２　分析方法

（１）前処理

試料を乾燥、粉砕し、水に入れて、浮上してきたものを除去する。次に水酸化ナトリウム溶液で煮沸し、室温まで冷却した後、水酸化ナトリウム溶液を傾斜法で除去する。この作業を除去した水酸化ナトリウム溶液の色が薄い褐色になるまで繰返す。次に濃硝酸を加えて煮沸する。室温まで冷却した後、傾斜法により除去する。充分水で洗浄した後、乾燥して蒸し焼き（無酸素状態で400℃に加熱）にする。蒸し焼きにした試料は純酸素中で燃焼して二酸化炭素を発生させる。発生した二酸化炭素は捕集後、純粋な炭酸カルシウムとして回収する。

（２）測定試料の調整

前処理で得られた炭酸カルシウムから真空状態で二酸化炭素、アセチレン、ベンゼンの順に合成する。最終的に得られた合成ベンゼン３ml（足りない場合は、市販の特級ベンゼンを足して３mlとした）にシンチレイターを含むベンゼン２mlを加えたものを測定試料とする。

（３）測定

測定は、１回の測定時間50分間を20回繰り返す計1,000分間行う。未知試料の他に、値が知られているスタンダード試料と自然計数を測定するブランク試料を一緒に測定する。

（４）計算

放射性炭素の半減としてLIBBYの半減期5,570年を使用する。

３　分析結果

測定結果を表９に示す。

表９　放射性炭素年代測定結果

試料名	状態	年代値（年前）	誤差		Lab No.
			＋	－	
№１　まるいタイプ	炭化した堅果類	3,860	260	250	PAL－81
№２　細長いタイプ	炭化した堅果類	3,520	330	310	PAL－82
№３　破　　片	炭化した堅果類	3,620	250	240	PAL－83

（１）年代値：1,950年を基点とした値

（２）誤差：測定誤差２σ（測定値の95％が入る範囲）を年代値に換算した値

（３）PAL：パリノ・サーヴェイ（株）で測定

4　考察

３タイプの炭化物の年代値は、3,600年前後の値を示しており、誤差範囲内で一致していた。このことから、炭化物の測定年代値は、堅果類が利用された年代を示していると考えられる。

堅果類の出土層位は、上記したように縄文時代中期の曽利Ⅱ～Ⅲ式の住居跡の掘り方より上位にあたる。縄文時代中期の年代値は、遺物などの放射性炭素年代測定値から関東地方では約4,800～4,050年前に集中すると報告されている（キーリＣ．Ｔ．ほか、1982)。今回の結果は、この年代値に比較して新しい値となっている。このことから、炭化物の集中区は住居構築後に形成された可能性が高く、また、９号住居跡と関係がない遺構の可能性もある。このことについては、発掘調査の成果と合わせて評価していきたい。

〈参考文献〉

石河寛昭（1977）：『最新液体シンチレーション測定法』南山堂、189p。

キーリＣ．Ｔ．・武藤康弘（1982）縄文時代の年代、「縄文文化の研究１　縄文人とその環境」、(加藤晋平・小林達夫・藤本強　編集)、雄山閣、p246－275。

日本化学会編（1976）：同位体、年代測定『新実験化学講座10　宇宙地球科学』丸善、p337－353。

富樫茂子・松本英二（1983）：ベンゼン－液体シンチレーションによる14C年代測定法『地質調査所月報』34、p513－527。

第４節　大月遺跡における自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

大月遺跡では、縄文時代中期末～後期とされる柄鏡形敷石住居跡や土杭などが検出されている。当該期の住居については、近接する中谷遺跡において出土した住居構築材と考えられる炭化材の樹種同定が行われ、全点がクリであることが明らかとなっている。当時の住居跡では、木材のほかに、イネ科植物等を利用した壁や敷物等があったことも予想される。また、住居内の炉では、イネ科植物が燃料として利用されたことが予想される。これらの構築材や燃料材は、木材のように大型で堅い材質を有していれば、燃焼の際に炭化して残存することがある。しかし、イネ科植物では、燃焼すれば多くは灰化すると推定される。また、燃焼しなければ、どのような植物でもその後の埋積過程で腐食していくことが推定される。このような場合、肉眼では利用された植物の痕跡を捕えることは困難である。しかし、使用された植物がイネ科植物であった場合、灰や焼土等の中に微細な組織片として残存していることがある（例えば、佐瀬，1982；大越，1985；パリノサーヴェイ株式会社，1993)。同様のことは、土杭などに遺体が埋葬された場合でもある。遺体が埋葬され人骨などが姿を留めないほど腐食してしまった場合には、リン酸やカルシウムの富化が認められる可能性がある。本報告では、これらの点を踏まえて、縄文時代中期末～後期の柄鏡形敷石住居跡の床面上の覆土や炉の覆土を対象として植物珪酸体分析を実施し、住居跡で利用されたイネ科植物に関する情報を得る。また土杭内のリン分析を行い、遺体埋納の可能性を検証する。

１．植物珪酸体分析

（１）試料

調査対象は、１号住居跡の住居内覆土と13号住居跡の炉上の覆土である。１号住居跡では、Ｂ－１・Ｂ－２ベルト壁面より２ヶ所の試料採取地点（サンプルⅠ・Ⅱ）において、敷石直上から層位的に試料が採取された。サンプルⅠでは試料番号１～５、サンプルⅡでは試料番号１～６が採取された。分析の際は、この中から敷石直上の情報を得るためにサンプルⅠ試料番号５とサンプルⅡ試料番号６、そして対照試料として覆土中位のサンプルⅡ試料番号４の計３点を選択した。これらの試料はいずれも、暗褐色の砂混じりシルトであり、いわゆる黒ボク土に類似する。また、肉眼所見では特に植物遺体は認められない。

13号住居では、埋積過程観察用のA-A'ベルト壁面で炉直上の位置に試料採取場所が設定され、10点の層位試料が採取された。分析の際には、この中から炉直上のⅣ層、その上位のⅢ（２）層、Ⅲ（３）層の計３点を選択した。これらの資料も、暗褐色の砂混じりシルトであり、焼土粒子をわずかに含む。

（２）分析方法

今回は、組織片の産状および種類に注目するために、次のような方法を採った。

試料は、湿重約７ｇを秤量し、過酸化水素水・塩酸処理、沈定法の順に物理・化学処理を行い、珪化組織片を濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、400倍の光学顕微鏡下で全面を走査する。その間に出現する珪化組織片についてイネ科葉部（葉身と葉鞘）の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体の有無を観察する。これらの植物珪酸体が認められた場合に、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

（３）結果

１号住居跡のサンプルⅠ試料番号５とサンプルⅡ試料番号６およびサンプルⅡ試料番号４では、いずれも組織片は全く認められない。また、単体のタケ亜科やウシクサ族の植物珪酸体がわずかに認められる。

一方、13号住居跡のⅣ層、Ⅲ（２）層、Ⅲ（３）層の各層でも組織片は全く認められない。また、酸化した鉱物粒子に混じって、単体のタケ亜科やウシクサ族の植物珪酸体がわずかに認められる。

（４）考察

1号住居跡の敷石直上からは、タケ亜科やウシクサ族の植物珪酸体が検出され、これらの植物が利用されていた可能性もある。しかし、組織片が全く認められないことから、敷物や上屋材として利用されたことを積極的に支持する情報ではない。また、試料とした覆土は、いわゆる黒ボク土に類似していた。黒ボク土中には、タケ亜科やウシクサ族などのイネ科植物の植物珪酸体が包含されている（渡邊，1993)。このことを考慮すれば、単体の植物珪酸体は、覆土中に元々含まれていた可能性がある。

13号住居跡の炉直上やその上位の層からも組織片は全く認められず、タケ亜科やウシクサ族の単体の植物珪酸体がわずかに認められたのみであった。そのため、上記の敷物や上屋材と同様に、これらの植物が燃料材として利用されたと断定することはできない。また、単体の植物珪酸体は炉を埋積する土壌に本来包含されていた可能性がある。

2．リン分析

（1）試料

試料は、9号土坑Ⅰ層～Ⅲ層から採取された土壌試料3点である。

（2）方法

分析は、土壌標準分析・測定法委員会編（1986)、土壌養分測定法委員会編（1981)、京都大学農学部農芸化学教室編（1957)、農林水産省技術会議事務局監修（1967)、ペドロジスト懇談会（1984）などを参考にした。以下に、分析方法を示す。

試料を風乾後、軽く粉砕して2.0mmの篩を通過させる（風乾細土試料)。風乾細土試料の水分を加熱減量法(105℃、5時間）により測定する。風乾細土試料2.00 gをケルダールフラスコに秤とり、はじめに硝酸（HNO_3）5 mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（$HC10_4$）10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で、100mlに定容して、ろ過する。今回は、リン酸含量をリン酸（P_2O_5）濃度として測定する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸濃度を測定する。この測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P_2O_5mg/g）を求める。

（3）結果

リン酸の分析結果を表10に示す。試料のリン酸含量は、3.79～3.97P_2O_5mg/gで、いずれも同様の値を示し、層位による違いはほとんど認められない。

表10　大月遺跡のリン分析結果

遺　構	層名	リン酸含量 P205mg/g	土　　色	土性
9号土坑	Ⅰ層	3.97	10YR2/2黒褐	L
	Ⅱ層	3.95	10YR2/2黒褐	L
	Ⅲ層	3.79	10YR2/2黒褐	L

注.（1）土色：新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議，1967）による。
（2）土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会，1984）の野外土性の判定法による。
L…壌土（砂と粘土が同じぐらいに感じられる）

（4）考察

リン酸のいわゆる天然賦存量の報告例(Bowen，1983；Bolt・Bruggenwert，1980；川崎ほか，1991；天野ほか，1991）によれば、上限は約3.0P_2O_5mg/g程度と推定される。また、人為的な影響を受けた既耕地では5.5P_2O_5mg/g（黒ボク土の平均値）という報告例がある。(川崎ほか，1991)。これを著しく越える数値が得られた場合に、リン酸の富化を指摘できる。

今回の結果をみると、いずれの試料も天然賦存量の上限は越えているが、著しく越える値ではない。また、近接する中谷遺跡では、対照試料とした土壌で3.69～4.09P_2O_5mg/gという値が得られている。このことを考慮すれば、9号土坑においてリン酸の富化は認められず、遺体の埋納を積極的に支持することはできない。

〈引用文献〉

天野洋司・太田　健・草場　敬・中井　信（1991）中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量。農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」、p28-36。

Bowen,H.J.M.（1983）環境無機化学　―元素の循環と生化学―。浅見輝男・茅野充男訳、297p、博友社［H.J.M.Bowen（1979）*Environmental Chemistry* of Elements］

Bolt,H.G.・Bruggenwert,M.G.M.（1980）土壌の化学。岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽捷行訳、309p.、学会出版センター［H.G.Bolt and M.G.M.Bruggenwert（1976）SOIL *CHEMISTRY*］、p235-236。

土壌標準分析・測定法委員会編（1986）土壌標準分析・測定法。354p、博友社。

土壌養分測定法委員会編（1981）土壌養分分析法。440p、養賢堂。

藤貫　正（1979）カルシウム。地質調査所化学分析法、52：57-61、地質調査所。

川崎　弘・吉田　澪・井上恒久（1991）九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量。農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」、149p：p23-27。

近藤錬三・佐瀬　隆（1986）植物珪酸体分析、その特性と応用。第四紀研究、25、p31-64。

京都大学農学部農芸化学教室編（1957）農芸化学実験書　第１巻。411p、産業図書。

農林省農林水産技術会議事務局監修（1967）新版標準土色帖。

大越昌子（1985）プラント・オパール分析。「平賀遺跡群発掘調査報告書」、p803-815、平賀遺跡調査会。

パリノ・サーヴェイ株式会社（1993）自然科学分析からみた人々の生活（１）。慶應義塾藤沢校地埋蔵文化財調査室編「湘南藤沢キャンパス内遺跡　第１巻　総論」、p347-370、慶應義塾。

ペドロジスト懇談会（1984）野外土性の判定。ペドロジスト懇談会編「土壌調査ハンドブック」、156p。

佐瀬　隆（1982）古墳時代住居址の炉に関する焼土について　―植物起源粒子の植物珪酸体から見て―。東京都埋蔵文化財センター調査報告書第２集「多摩ニュータウン遺跡　―昭和58年度―（第３分冊）」、p303-307、（財）東京都埋蔵文化財センター。

渡邊眞起子（1933）黒ボク土の生成と気候・植生環境の空間的対応　―土壌の資源的価値に関する比較文化的考察（２）―。中央学院大学比較文化研究所「紀要」、７、p129-143。

第Ⅴ章　まとめ

本遺跡は、第Ⅱ章で述べたごとく、今回が６回目の調査である。これまでの調査成果からは縄文時代中期の曽利式期の集落、あるいは奈良・平安時代の集落の存在が確認されていた。桂川と菊花山に挟まれた、現在の都留高校敷地の全域とその周辺を含めた大規模な集落遺跡であることが予想され、郡内地方では最も著名な遺跡の一つとなっていた。しかし、その規模はともかく、これまで判明しているこれらの内容は本県内においては普遍的なものであった。また、調査区域は未調査のまま既にプールが建設されており、それによる遺跡破壊が予想されていた。これらの状況から、成果についてはそれほど期待もせず調査に入った訳であるが、事前の予想に反して得られた成果は大きいものであった。

まず、遺構では敷石住居跡群の確認が挙げられる。今回の調査で確認された住居跡は残骸も含めて11軒である。そのうち竪穴の形態がはっきり判るものが７軒で、うち６軒が敷石住居跡であった。とくに敷石住居跡の形態では円形を呈するもの１軒（11号）、柄鏡形を呈するもの５軒（１号・２号・７号・10号・13号）とに分けられる。これらの住居跡の時期はほぼ同時期であるが、埋甕あるいは炉内・床面直上など、遺構の時期を特定できる資料に限ってみると、大きく中部高地の曽利Ⅴ式系（11号）、関東の加曽利ＥⅣ式系（１号・２号・７号・10号）に分かれ、さらに時期がやや下って称名寺式系（13号）が分離されることになる。このように中期終末～後期初頭という時期に、中部高地系と関東系が混在する様子が確認できたのは、都留市中谷遺跡に次いで２例目である。また、加曽利ＥⅣ式や称名寺式古式を主体とする敷石住居跡も国中地方（甲府盆地）にごく稀に散見されるが、これらが集落を成すような状況は未だ知られていない。換言すれば、加曽利ＥⅣ式期の集落を構成する状況は笹子峠を越えてはいないことが浮き彫りになり、あらためて、山梨県東部域が関東と中部高地との接点であることが窺えるのである。

一方、曽利式文化圏の側からみるならば、曽利Ⅴ式期に敷石住居の集落が普遍的に存在する事が再び確認できたことも成果である。山梨県内では、甲府盆地～八ヶ岳山麓にかけて曽利Ⅴ式期の敷石住居跡が確認されつつあるが、前述したように曽利Ⅴ式期にまで溯る敷石住居の集落が形成されるような状況は確認されておらず、本遺跡や中谷遺跡の状況は敷石住居の集落として極めて示唆的である。また、敷石住居跡自体についても、曽利Ⅴ式期で全面に石敷きを施すものは類例が少ない。本県内で全面に石敷きが見られる住居跡のうち確実に中期に位置づけられる例は、西桂町宮の前遺跡１号住居跡（曽利Ⅳ式期）と上野原町狐原遺跡（中期終末）、中谷遺跡例および本遺跡例（ともに曽利Ⅴ式期）である。この時期は全面に石が敷かれる敷石住居跡の最も古い段階でもあり、この形態の敷石住居跡の確立について良好な資料となると同時に、いずれもが郡内地域である点もまた重要な問題を含んでいると言えよう。また、中谷遺跡例と本遺跡例はともに曽利式の全面敷石住居跡でありながら、前者は確認された４軒すべてが柄鏡形、後者は１軒だけであるが円形と形態を異にする点も興味深い。

当然これらの遺構やその周辺から多くの遺物が出土しているが、なかでも前述した中部高地と関東の土器の対比についての良好な資料が得られた事も大きな成果の一つである。遺構内の主体を成す土器については触れたが、ほとんどの遺構で曽利Ⅴ式と加曽利ＥⅣ式あるいは称名寺式が混在している。土器製作者はそれぞれ分かれるだろうが、本遺跡の出土状況からは別系統の土器を使用することにも違和感がないようにさえ感じられるほど、破片の混在が一般的である。中谷遺跡資料も加えたうえで周辺地域の同時期住居跡と再度対比を行う必要があろう。また、これらの土器のうち、称名寺式に伴出する「関沢類型」とされる一群がまとまって出土したことも成果である。紙面の関係上ごく一部を提示したに過ぎないが、波状口縁の波頂部に、のの字あるいは巴状の粘土帯張り付けを行った口縁資料だけを集めてみても相当量がこの遺跡内に持ち込まれている。これらの資料はこれまで県内ではほとんど確認されていない。甲府盆地では境川村水口遺跡で称名寺式や中津式類似の土器に伴って出土しているが、まとまった資料はおそらくそれが唯一であろう。埼玉県関沢遺跡を標識とする関沢類型ではあるが、むしろ分布の中心は北関東地方ではないかとも言われており、山梨県東部域に位置

する本遺跡で豊富に確認された事だけをみても予想される分布圏とは違っていることは明らかであり、今後明らかにすべき問題は多い。

10号住居跡にみられた石棒の出土状況はリアルである。明らかに生殖を意識しており、新たな生命の誕生やその再生が想起される。この住居跡には埋甕が確認されていないため、埋甕の代わりにこのような祭式が行われたとも考えられる。通常、埋甕についても同様の解釈が成されるが、両者とも“またぐ”行為が共通することになる。ただ、埋甕ならともかく、10号住居跡のケースでは、常にこの場所に石棒を立てているとなれば実際の出入りには非常に邪魔な存在となるはずであり、この状態が通常の生活の在り方であるとは考えにくい。その意味から、この石棒の出土状況こそ、まさに、石棒祭式の一面を示しているものと考えられるのである。また、第Ⅲ章第12節で述べたように、一軒の住居跡から複数の石棒が確認される例が目立つ。6軒の敷石住居跡の内の4軒で石棒が複数点出土しているが、これは中谷遺跡12号住居跡（曽利Ⅴ式期敷石住居跡）でも同じ状況が確認されており、祭式の様態を示すものであろう。

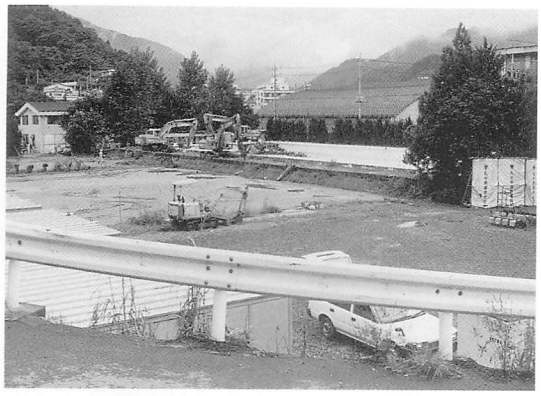
ドングリピットの確認は全くの予想外であった。第Ⅲ章第8節及び第Ⅳ章第2節で述べたように、これは遺構がはっきりしている訳ではなく、あくまで平面及び垂直分布からピットの存在を想定したものであるが、このようなドングリの集中はこれまで本県では未確認であったため、今後の調査の指標となろう。通常、ドングリやトチなど堅果類の長期保存は十分乾燥させたうえでの屋根裏貯蔵が予想され、このような土中に掘り込んだピットでの保存は短期貯蔵が考えられる。また、そのピットは低湿地に造られ水の影響を受けることが前提となっている場合が多い。しかし、今回確認されたものは、これまでのドングリピットと違い、極めて浅い皿状のピットが想定されることになり、短期であれ長期であれ“貯蔵”を想定しにくい状況ではある。貯蔵よりも一時的な集積あるいは保管という状況なのかもしれない。本遺跡は水捌けは良く、地下水位も高くはない。当然ドングリ確認部分も、この程度の掘り込みで水分の影響を受けることはなく、その点からも一時的な集積を想定した方が良いのかもしれない。

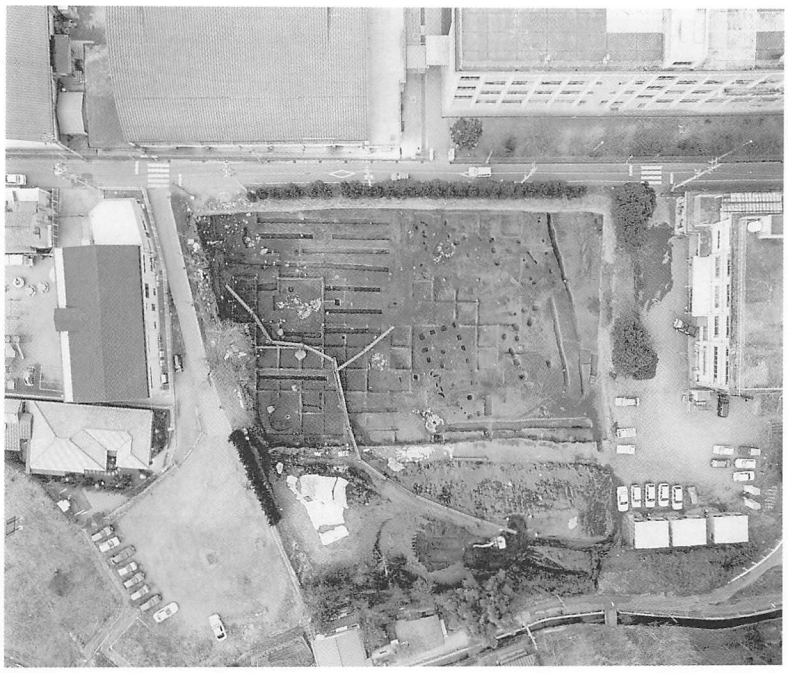
同じ食料という視点からは2号住居跡内で数点のマメ類が出土したことも特筆される。これらは調査段階から確認されていたが、調査終了後の土の水洗選別によりさらに数が増えたものである。これまで県内各地で確認されている縄文時代のマメ類は、境川村京原遺跡を除いてすべて約5㎜の長さであり、大きさからは同一種と思われていた。今回は状態のよい資料を半割して観察した結果、幸運にも内部の胚軸や初生葉が確認されアズキ仲間の可能性が指摘されたが、種の同定の一つの方法として注目されよう。他遺跡資料についても、機会があれば同様の方法での比較が望まれる。

平安時代の掘立柱建物跡および溝・柱穴列の存在も意外であった。冒頭述べたように奈良・平安時代の集落を予想していたのであるが、今回の調査では該期の集落は全く確認されず、鍵形の溝や柵と思われる柱穴列と共に掘立柱建物跡が確認されたのである。これらがすべてセットになるとすれば、通常の集落とは考えにくい。以前の調査ではこのような遺構群を予感させるような遺構・遺物は全く出土していない。また、今回の調査で出土した該期の遺物にもとくに郡衙的性格を示すものはない。しかし、今回の調査でこのようなセットが確認された事もまた事実である。本遺跡所在地は都留郡のうちの征茂郷が想定されている。現在の上野原町域には奈良・平安時代の遺跡が比較的濃く存在し、古郡郷が想定されているが、遺跡分布などからは、都留郡の郡衙は上野原町に想定するのが妥当であろう。とすれば、当地にはその存在を予想することはできないが、このようなセットからは郡衙に関連した何らかの公的施設を考えてみるべきであろう。

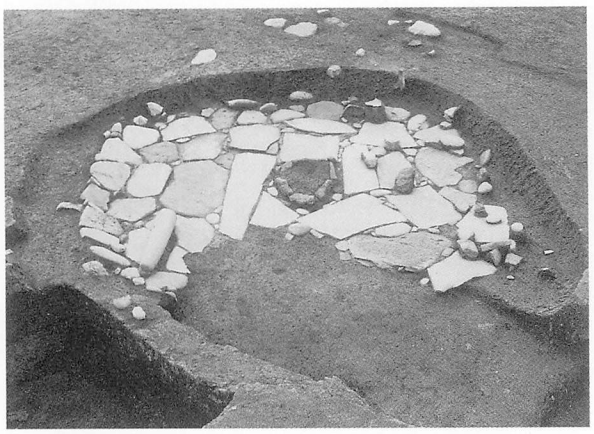
图　　版

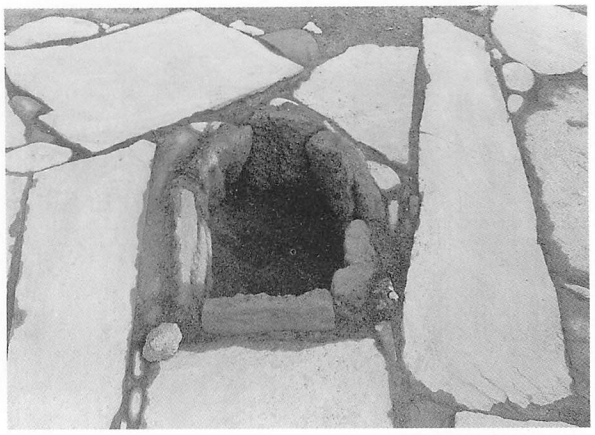
図版1　調査前風景　全景

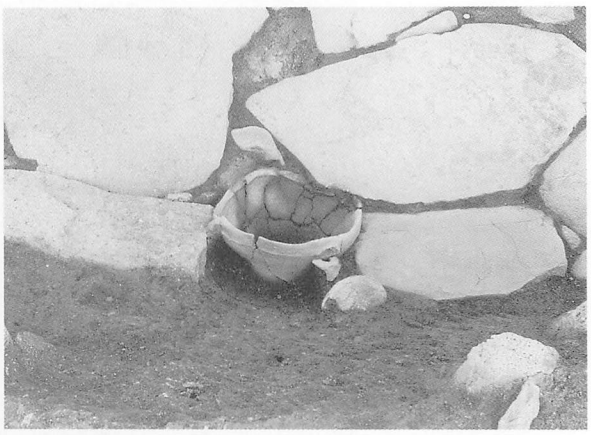


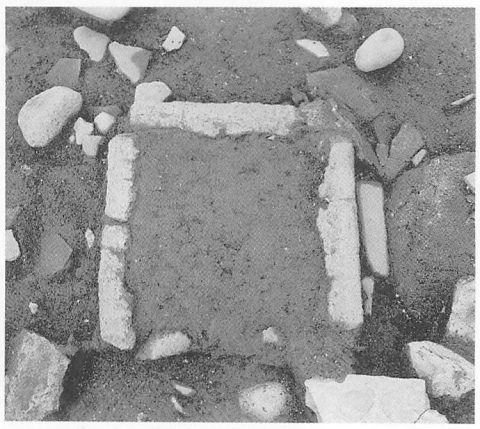


図版2　1号住居跡　2号住居跡

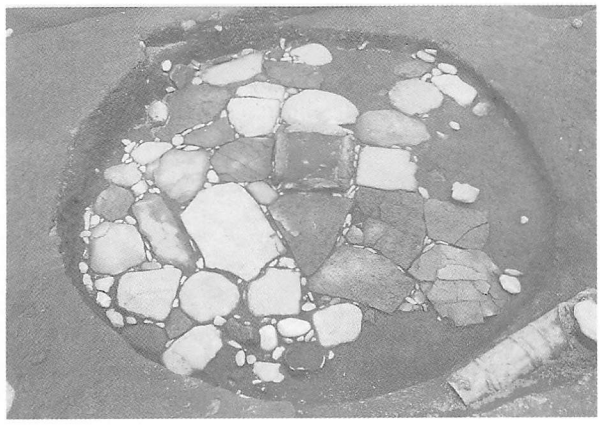


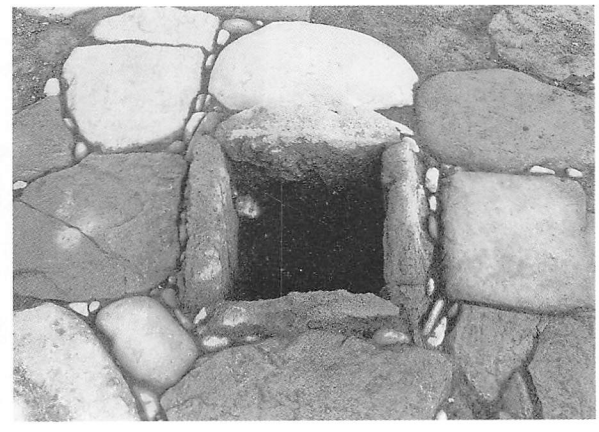




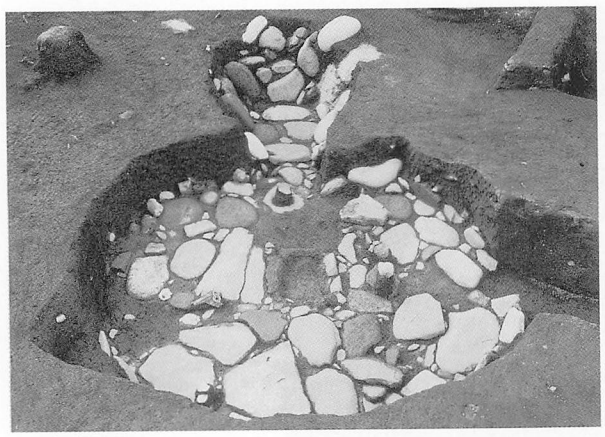


図版3　7号・10号住居跡　9号住居跡　11号住居跡

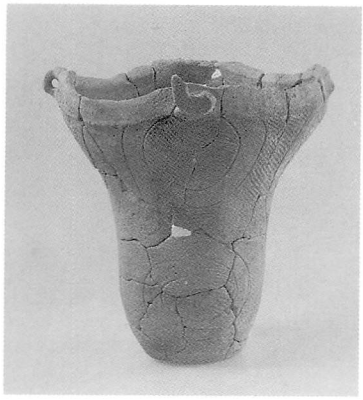
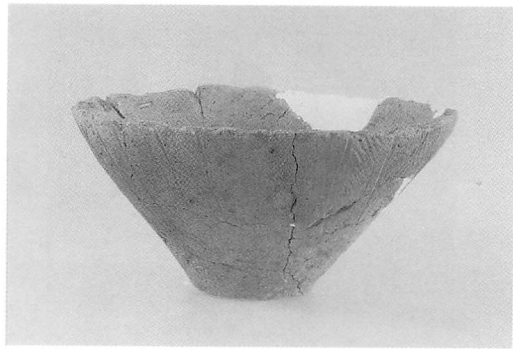


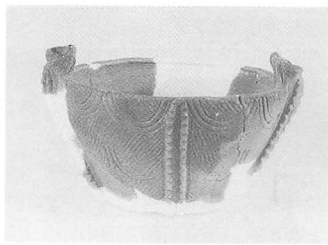


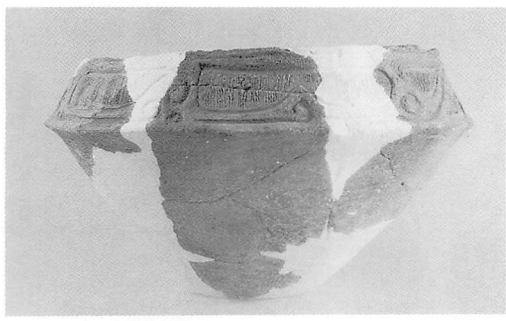
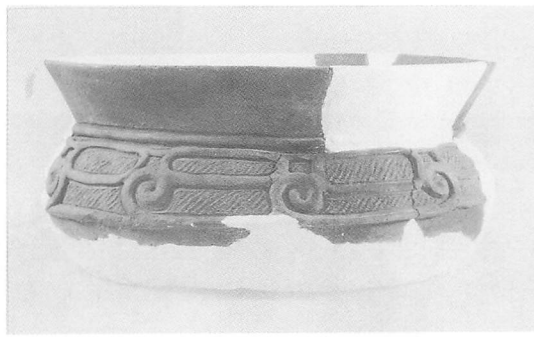
図版4　13号住居跡　特殊配石　土坑　掘立柱建物跡

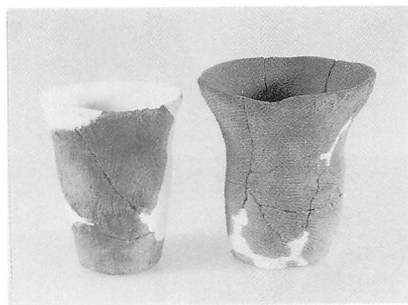


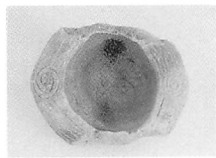
図版5　土器（1号・2号・4号・9号・11号住居跡）

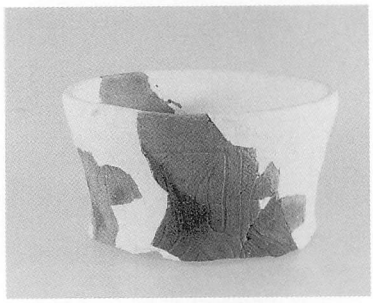
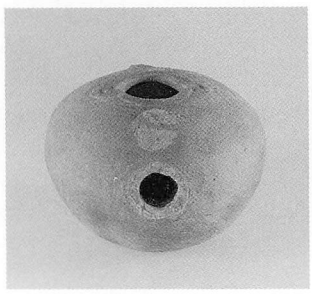
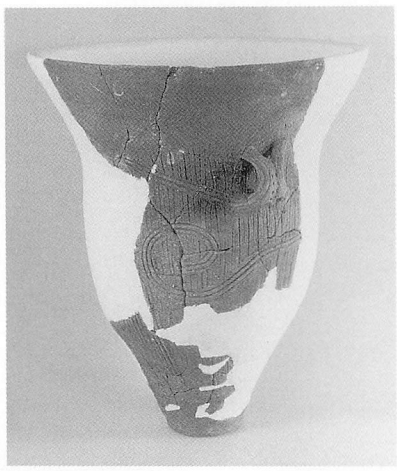
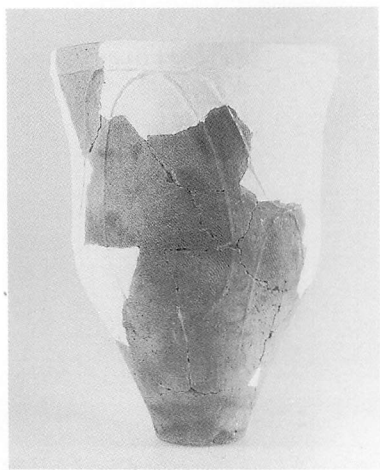


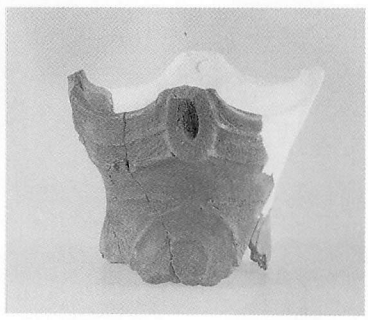



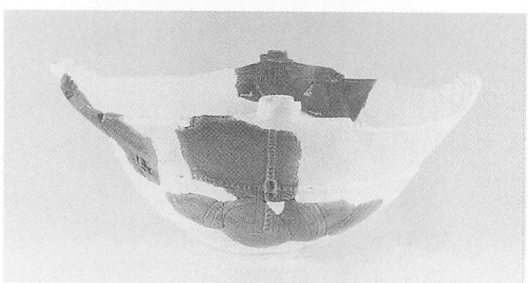




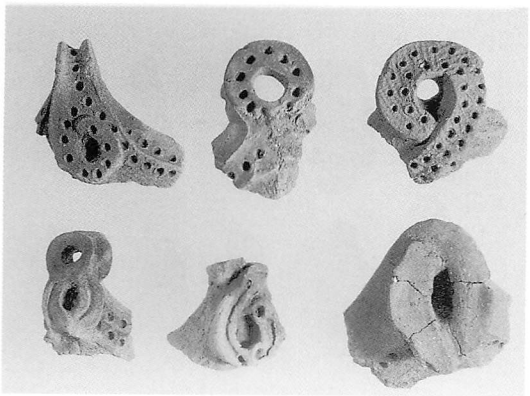
図版6　土器（単独埋甕・42号土坑・配石・グリッド）

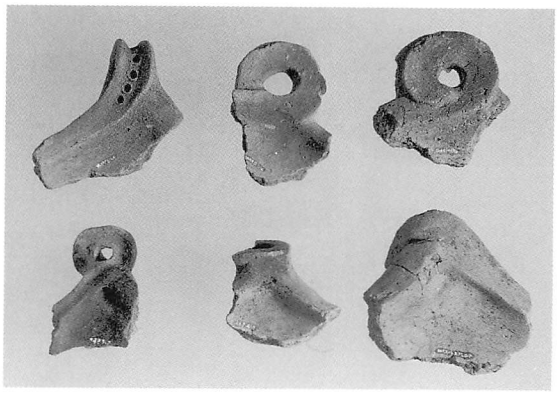





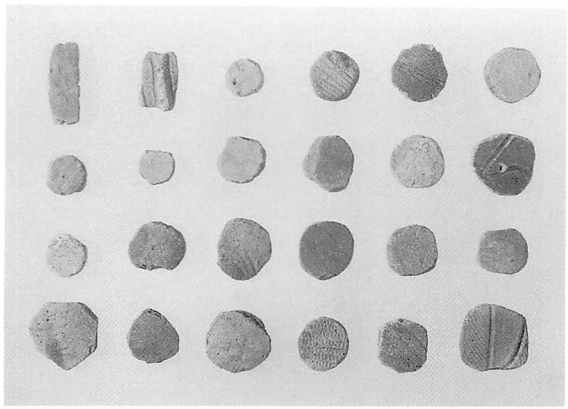


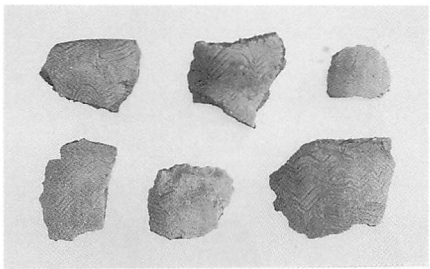


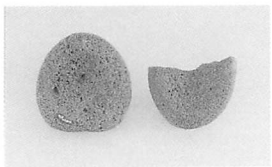
図版7　土器片　土製品　弥生土器　石器

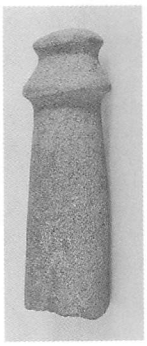


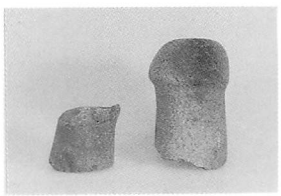


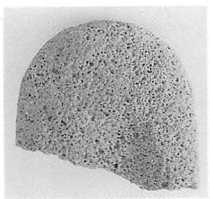


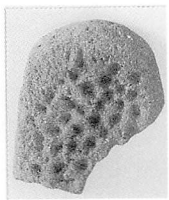


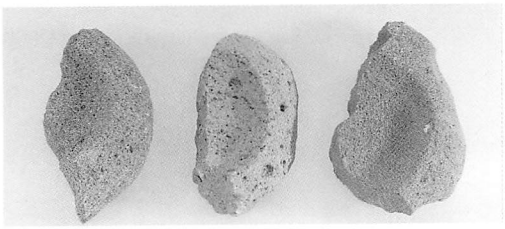


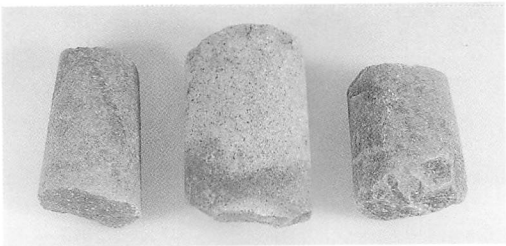




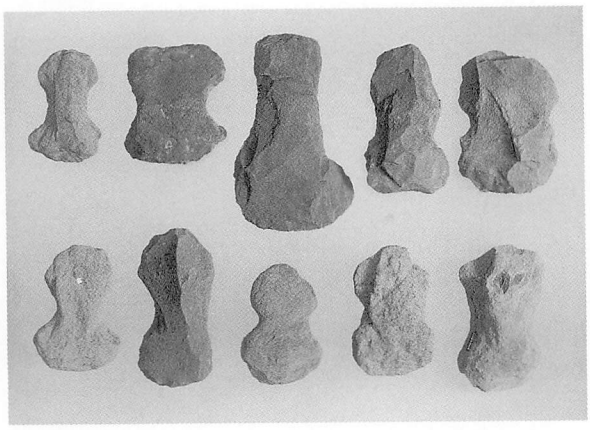


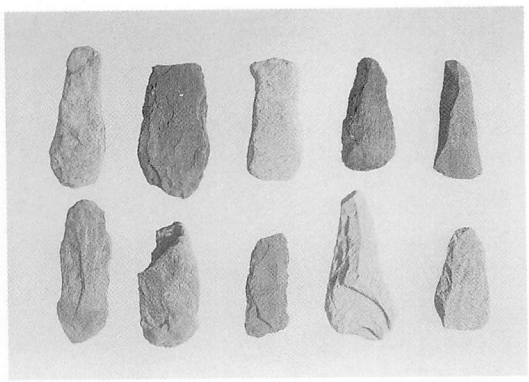


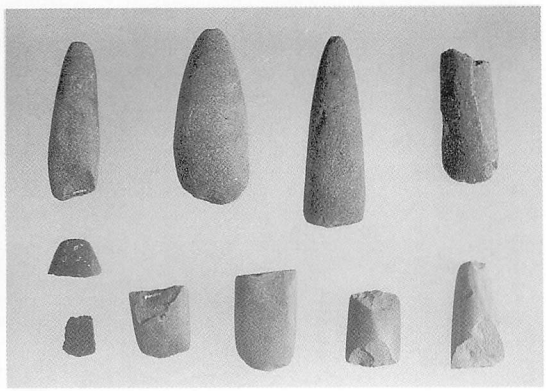


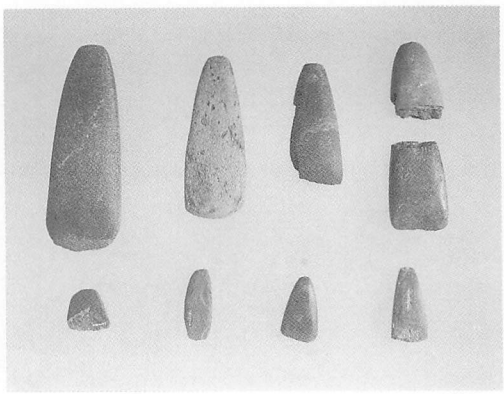


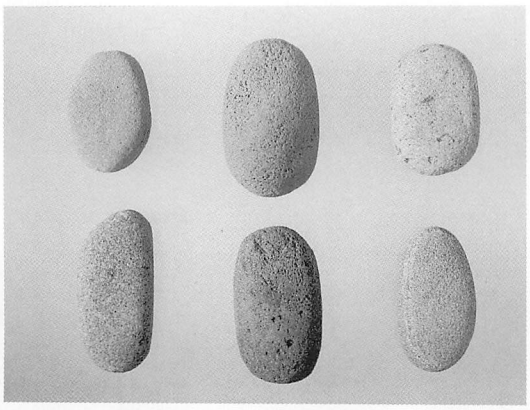
図版8　石器

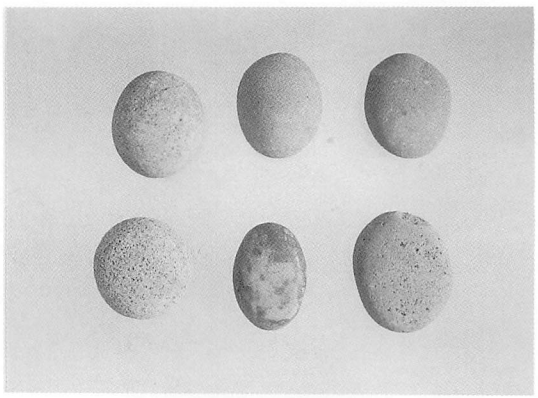


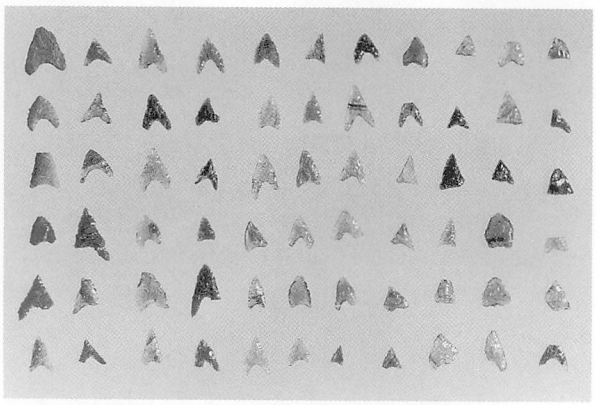


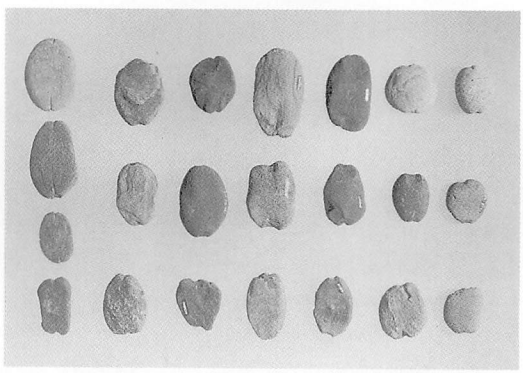












0　2 cm

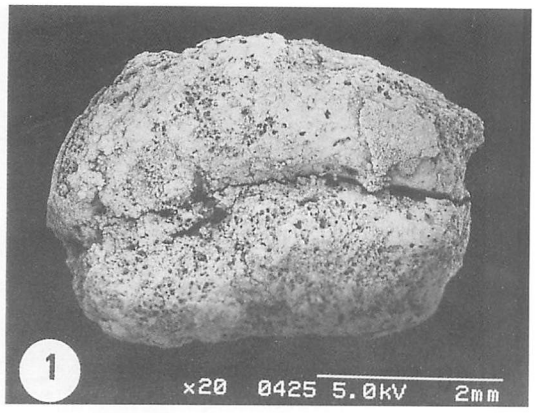


写真１　大月遺跡試料４の１粒

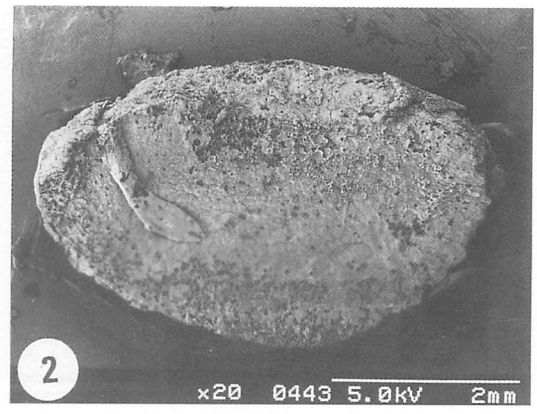


写真２　大月遺跡試料４の１粒を二分した片方の内面

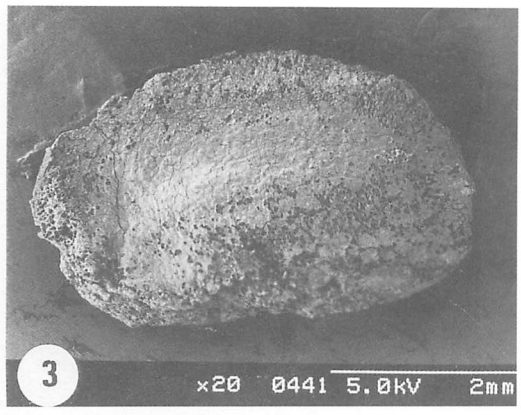


写真３　大月遺跡試料４の１粒を二分したもう片方の内面

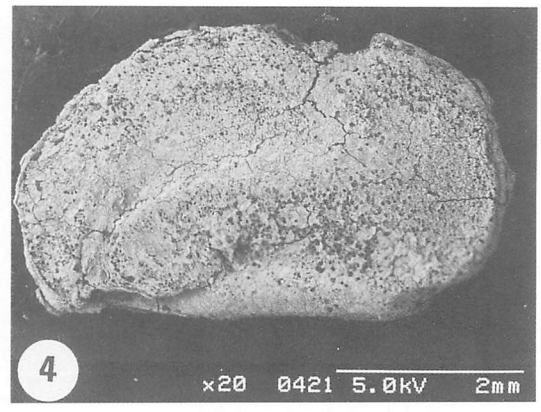


写真４　大月遺跡試料４の半分の粒内面

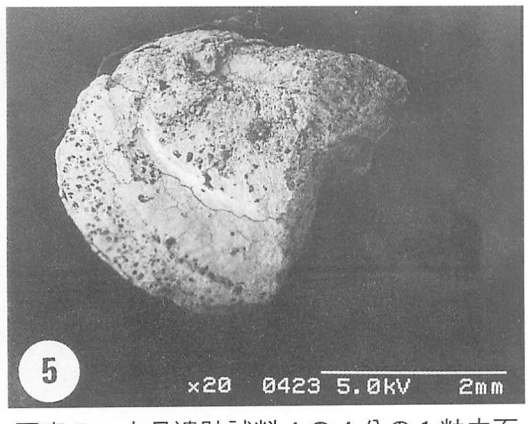


写真５　大月遺跡試料４の４分の１粒内面

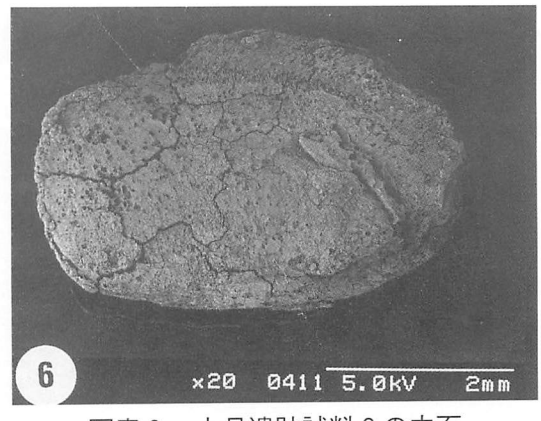


写真６　大月遺跡試料８の内面

写真７　大月遺跡試料９の内面

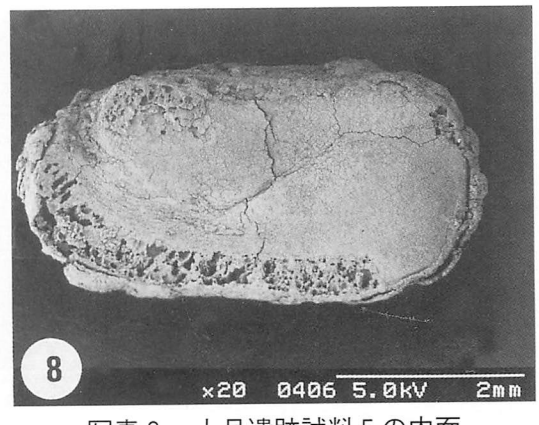


写真８　大月遺跡試料５の内面

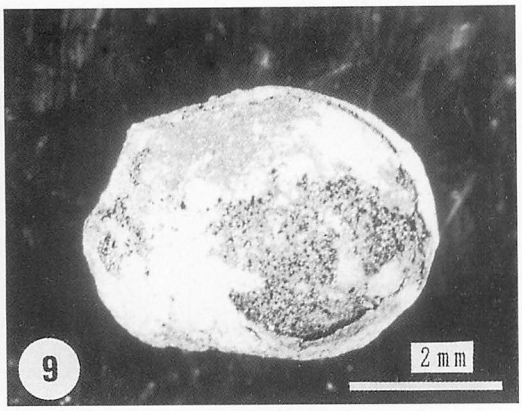


写真９　大月遺跡試料１の外形

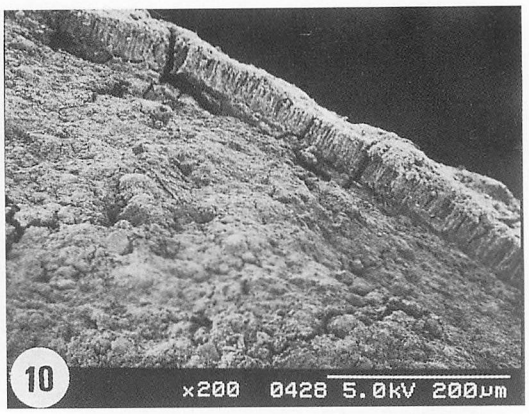


写真10　大月遺跡試料１の断面

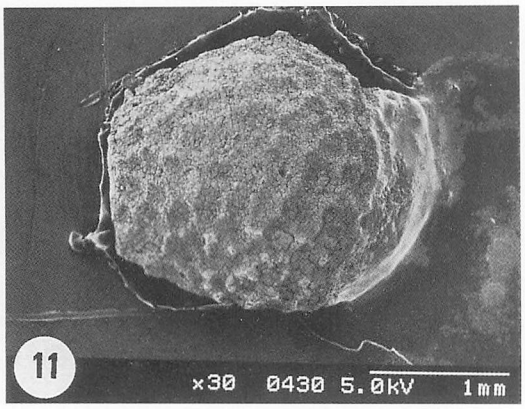


写真11　大月遺跡試料３

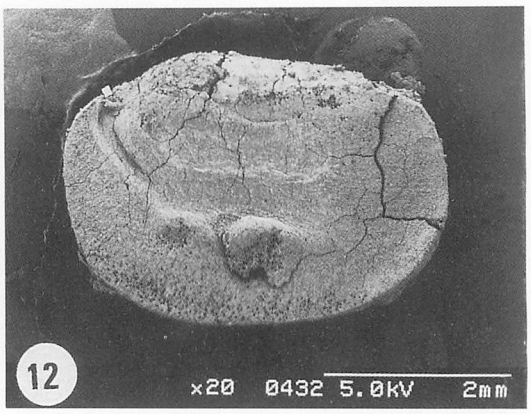


写真12　中谷遺跡試料24を半割した内面

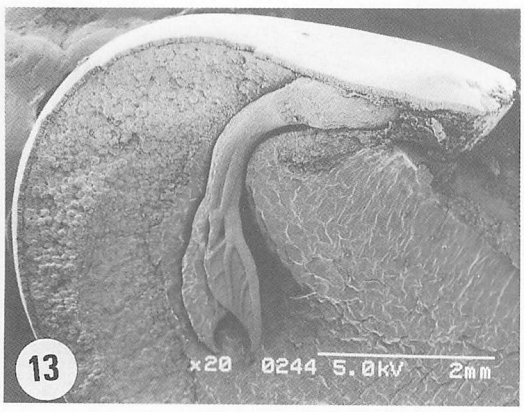


写真13　現生アズキ子葉の内面

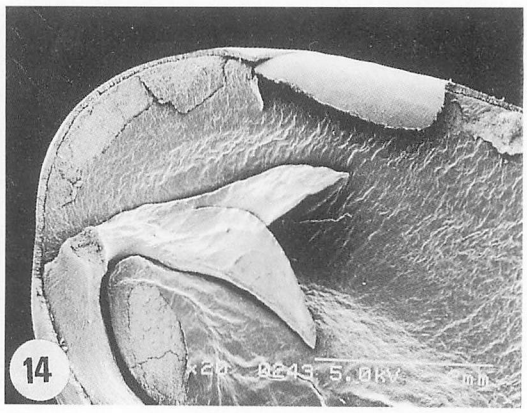


写真14　現生ヤブツルアズキ子葉の内面

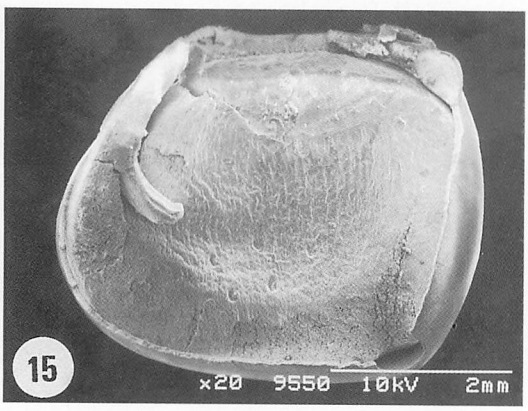


写真15　現生ササゲ子葉の内面

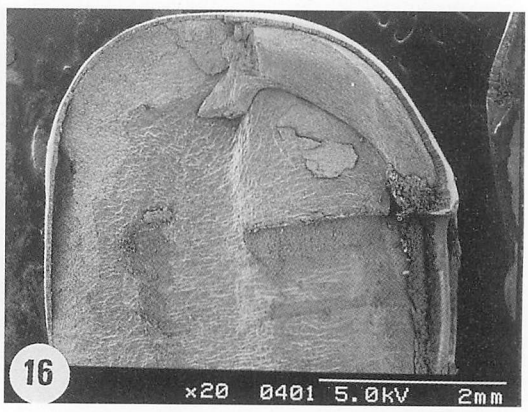
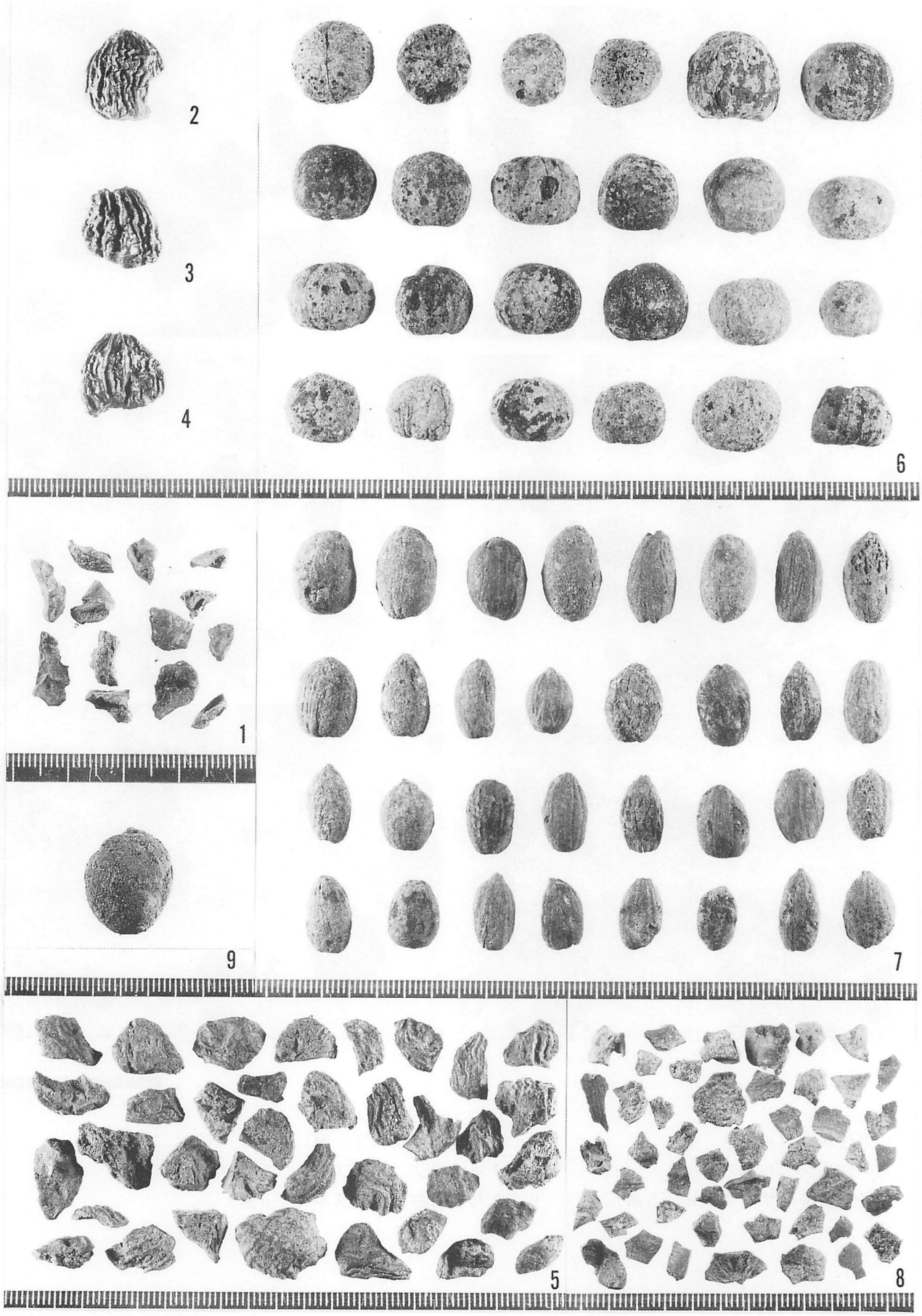


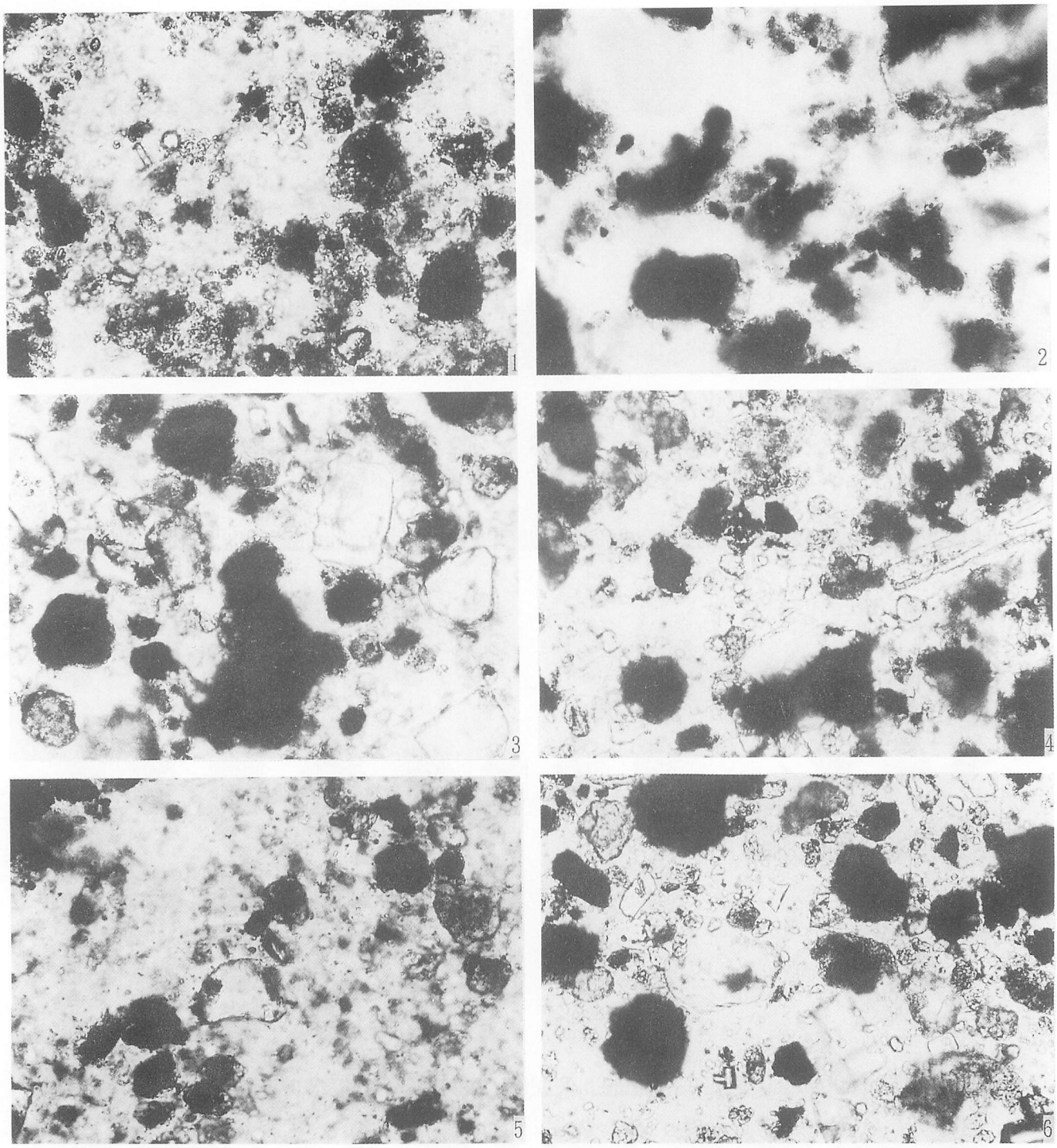
写真16　現生リョクトウ子葉の内面

図版11　種子類（縮尺・実大）



1：オニグルミ、2～5：クリ、6・9：ドングリ類A類、7：同B・C類、8：堅果類種皮（2～4：第2号住居跡、5～8：ドングリ類集中区、9：中谷遺跡出土）

図版12　植物珪酸体および灰像の状況



1．13号住居跡（Ⅲ（2）層）　　2．13号住居（Ⅲ（3）層）
3．13号住居跡（Ⅳ層）　　4．1号住居跡（サンプルⅠ　5層）
5．1号住居跡（サンプルⅡ　5層）　　6．1号住居跡（サンプルⅡ　6層）

報告書概要

フリガナ		オオツキイセキ
書名		大月遺跡
副書名		都留高校体育館建設に伴う事前調査
シリーズ名		山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第139集
著者名		長沢宏昌・笠原みゆき
発行者		山梨県教育委員会
編集機関		山梨県埋蔵文化財センター
住所・電話		山梨県東八代郡中道町下曽根923　TEL0552－66－3881
印刷所		㈱少国民社
発行日		1997年3月31日
遺跡所在地		山梨県大月市大月1－12－11他
25,000分の1地図名・位置・標高		大月　東経138°56′00″　北緯35°36′20″　標高365m
概要	主な時代	縄文時代中期～後期　平安時代
	主な遺構	縄文時代中期・後期住居跡11軒　土坑80基　配石12基　ドングリピット 平安時代掘立柱建物跡3棟・溝・柱穴列
	主な遺物	縄文時代中期～後期の土器・石器・炭化物・骨片等 平安時代土師器・須恵器・灰釉陶器等
	調査期間	1994年10月～1995年1月

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第139集

1997年3月31日　発行

大　月　遺　跡

編　集　山梨県埋蔵文化財センター
山梨県東八代郡中道町下曽根923
TEL　0552－66－3881
発　行　山梨県教育委員会
印　刷　株式会社　少国民社